

京都市内遺跡発掘調査報告

平成27年度

2016年3月

京都市文化市民局



根固め（壺掘地業）2（北から）



1 発掘調査地周辺空撮（西から）



2 調査区全景（空撮）

例 言

- 1 本書は、京都市が文化庁の国庫補助を得て実施した、平成27年度の京都市内発掘調査報告書である。本書では平成26・27年度に実施した発掘調査成果を報告する。
- 2 調査にあたっては、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が主体となり、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所の支援を受けた。
- 3 調査地・調査期間・調査面積・調査担当者は、下記のとおりである。
 - I 平安宮大極殿跡・聚楽遺跡（1）（受付番号 14K402）
京都市京都市上京区千本下立売下る小山町873
2014年12月8日～12月18日 33㎡ 熊谷舞子
 - II 平安宮大極殿跡・聚楽遺跡（2）（受付番号 14K379）
京都市中京区聚楽廻東町32-5
2015年2月9日～2月20日 27.5㎡ 熊谷舞子
 - III 平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡（受付番号 14A004）
京都市中京区聚楽廻東町25
2015年2月12日～3月20日 191㎡ 西森正晃
 - IV 平安宮豊楽殿跡・鳳瑞遺跡（受付番号 15A002）
京都市中京区聚楽廻西町86-3, 87
2015年9月1日～10月2日 117㎡ 西森正晃
 - V 平安京左京五条三坊十町跡・烏丸綾小路遺跡（受付番号 14H457）
京都市下京区綾小路通烏丸西入童侍者町160, 161
2015年7月15日～8月31日 90㎡ 赤松佳奈
 - VI 尊勝寺跡・岡崎遺跡（受付番号 14R464）
京都市左京区岡崎最勝寺町6-4, 6-5, 6-6
2015年6月15日～7月17日 72㎡ 熊谷舞子
 - VII 山科本願寺南殿跡（受付番号 14S401）
京都市山科区音羽伊勢宿町32-102
2015年1月26日～2月20日 49.5㎡ 赤松佳奈
 - VIII 鳥羽離宮跡（受付番号 13T611）
京都市伏見区中島前山町22
2015年2月23日～3月13日 73㎡ 熊井亮介
 - IX 伏見城跡（受付番号14F328）
京都市伏見区桃山筑前台町27-4ほか
2015年4月16日～6月19日 295㎡ 奥井智子

X 長岡京跡・淀城跡（受付番号15A001）

京都市伏見区淀木津町他

2015年8月24日～9月24日 2470㎡ 鈴木久史

XI 芝古墳（受付番号 15A003）

京都市西京区大原野岩見町632-3

2015年10月1日～11月20日 86㎡ 熊井亮介

- 4 本書の執筆分担は、本文の末尾に記している。
- 5 本書に使用した写真の撮影は、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託し、遺構の一部は調査担当者が行った。
- 6 本書で使用した遺物の名称及び形式・型式は、一部を除き、小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号、(財)京都市埋蔵文化財研究所、1996年に準拠する。
- 7 本書で使用した土壌名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に準じた。
- 8 本書中で使用した方位および座標の数値は、世界測地系 平面直角座標系VIによる（ただし、単位（m）を省略した）。また、標高はT.P.（東京湾平均海面高度）による。なお、調査における測量基準点の設置は、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託した。
- 9 本書で使用した地図は、京都市長の承認を得て同市発行の京都市都市計画基本図「聚楽廻」「壬生」「御所」「山科」「城南宮」「丹波橋」「神足」「岩見」「栗生」を調整したものである。
- 10 本書の編集は、鈴木久史・熊谷舞子が行った。
- 11 種子同定及び埋土分析については竜子正彦氏（公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所）に御協力頂いた。

本文目次

I 平安宮大極殿跡・聚楽遺跡（1）

1. 調査経過	1
2. 遺跡	2
(1) 位置と歴史的環境	2
(2) 周辺の調査	5
3. 遺構	5
(1) 基本層序	5
(2) 遺構	7
4. 遺物	7
5. まとめ	8

II 平安宮大極殿跡・聚楽遺跡（2）

1. 調査経過	10
2. 遺構・遺物	11
(1) 遺構	11
(2) 遺物	12
3. まとめ	14

III 平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡

1. 調査経過	16
2. 遺跡	17
(1) 位置と地理的環境	17
(2) 歴史的環境	17
(3) 周辺の調査	20
3. 遺構	21
(1) 基本層序	21
(2) 検出した遺構	21
4. 遺物	29
(1) 遺物の概要	29
(2) 土器類	29
(3) 瓦類	29
5. まとめ	36

(1) 延祿堂基壇規模	36
(2) 階 段	36
(3) 溝63について	37
(4) 延祿堂と西回廊間の距離	37
(5) 朝堂院南西部の景観について	37

IV 平安宮豊楽殿跡・鳳瑞遺跡

1. 調査経過	39
2. 遺 跡	41
(1) 位置と環境	41
(2) 周辺の調査	41
3. 遺 構	44
(1) 基本層序	44
(2) 遺 構	44
4. 遺 物	49
5. ま と め	50
(1) 基壇と礎石根固め工法	50
(2) 豊楽殿の規模	50
(3) 豊楽殿と平城宮第二次大極殿	52
6. 総 括	53
(1) 豊楽殿跡の調査成果	53
(2) 今後の展望と課題	55

V 平安京左京五条三坊十町跡・烏丸綾小路遺跡

1. 調査経過	57
2. 遺 跡	58
(1) 位置と環境	58
(2) 周辺の調査事例	59
3. 遺 構	60
(1) 基本層序と調査面	60
(2) 遺構の概要	60
(3) 第1期の遺構	63
(4) 第2期の遺構	63
(5) 第3期の遺構	65
(6) 第4期の遺構	67

(7) 第5期の遺構	68
(8) 第6期の遺構	70
(9) 第7期の遺構	71
4. 遺物	73
(1) 第1期の遺構	73
(2) 第2期の遺構	75
(3) 第3期の遺物	76
(4) 第4期の遺物	77
(5) 第5期の遺物	80
(6) 第6期の遺物	81
(7) 第7期の遺物	82
5. まとめ	82

VI 尊勝寺跡・岡崎遺跡

1. 調査経過	89
2. 遺跡	90
(1) 位置と歴史的環境	90
(2) 周辺の調査	91
3. 遺構	91
(1) 基本層序	91
(2) 遺構	92
4. 遺物	96
5. まとめ	100

VII 山科本願寺南殿跡

1. 調査経過	102
(1) 調査経過	102
(2) 位置と環境	103
2. 遺構	105
(1) 基本層序	105
(2) 遺構	105
3. 遺物	110
4. まとめ	111

VIII 鳥羽離宮跡

1. 調査の目的と経過	113
2. 位置と歴史的環境	114
3. 遺構	114
(1) 基本層序	114
(2) 遺構	117
4. 遺物	118
5. まとめ	119

IX 伏見城跡

1. 調査の経緯と経過	121
2. 遺跡	122
(1) 地理的環境と歴史的環境	122
(2) 周辺の調査	123
3. 遺構	125
(1) 基本層序	125
(2) 遺構の概要	125
4. 遺物	133
5. まとめ	136
(1) 造成土について	136
(2) 壺地業について	137

X 長岡京跡第583次・淀城跡

1. 調査経過	140
2. 遺跡	141
(1) 地理的環境と歴史的環境	141
(2) 周辺の調査	142
3. 遺構・遺物	145
(1) 基本層序	145
(2) 江戸時代の遺構	145
(3) 遺物	153
(4) 池埋土分析	153
4. まとめ	154

XI 芝古墳

1. 調査の目的と経過	159
2. 遺構	160
(1) 調査区の配置と経過	160
(2) 5区	162
(3) 6区	172
3. 遺物	175
4. まとめ	176
報告書抄録	178

図版目次

巻頭図版1	平安宮豊楽殿跡・鳳瑞遺跡	遺構	根固め2・壺掘地業2（北から）
巻頭図版2	長岡京跡第583次・淀城跡	遺構	1 発掘調査地周辺空撮（西から） 2 調査区全景（空撮）
図版1	平安宮大極殿跡・聚楽遺跡（1）	遺構	1 調査区全景（東から） 2 断割調査中央部北壁（南東から）
図版2	平安宮大極殿跡・聚楽遺跡（2）	遺構	1 調査区全景（南から） 2 断割調査区1東壁（西から）
図版3	平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡	遺構	1 東半全景（西から） 2 階段と延祿堂基壇（南西から）
図版4	平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡	遺構	1 階段全景（北西から） 2 延祿堂西縁（溝25）と階段（北から） 3 階段以南の溝25（北から）
図版5	平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡	遺構	1 再拡張区全景（北から） 2 溝63断面（北西から）
図版6	平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡	遺構	1 西半全景（東から） 2 瓦溜り34（東から） 3 溝38（北から）
図版7	平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡	遺物	出土瓦類

図版 8	平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡	遺物	出土瓦類
図版 9	平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡	遺物	出土土器類・瓦類
図版 10	平安宮豊楽殿跡・鳳瑞遺跡	遺構	1 東区全景（西から） 2 根固め2・5 検出状況（西から） 3 根固め3（南西から）
図版 11	平安宮豊楽殿跡・鳳瑞遺跡	遺構	1 根固め2 断面（南東から）
図版 12	平安宮豊楽殿跡・鳳瑞遺跡	遺構	1 根固め1（南東から） 2 攪乱3北壁・根固め4（南西から）
図版 13	平安宮豊楽殿跡・鳳瑞遺跡	遺構	1 西区全景（東から） 2 根固め（壺掘地業）6（南東から）
図版 14	平安宮豊楽殿跡・鳳瑞遺跡	遺構	1 根固め（壺掘地業）7（南から） 2 根固め（壺掘地業）9（南東から） 3 根固め8（壺掘地業）（南東から）
図版 15	平安京左京五条三坊十町跡・ 烏丸綾小路遺跡	遺構	1 第6面 全景（北東から） 2 竪穴建物1218 完掘状況（北東から） 3 土坑1220 遺物出土状況（東から）
図版 16	平安京左京五条三坊十町跡・ 烏丸綾小路遺跡	遺構	1 竪穴建物1218 検出状況（北東から） 2 井戸1200 断面（南から） 3 井戸1200 完掘状況（北東から） 4 井戸1200 断面（南から） 5 第5面 全景（北東から）
図版 17	平安京左京五条三坊十町跡・ 烏丸綾小路遺跡	遺構	1 土坑1081 遺物出土状況（北西から） 2 土坑1100 遺物出土状況（東から） 3 土坑1081 完掘状況（北西から） 4 土坑1100 断面（東から） 5 土坑1172 検出状況（南東から） 6 土坑1160 遺物出土状況（北西から）
図版 18	平安京左京五条三坊十町跡・ 烏丸綾小路遺跡	遺構	1 第4面 全景（北東から） 2 地業5 検出状況（北から） 3 土坑1072 断面（南東から） 4 路面3 近接風景（北東から）
図版 19	平安京左京五条三坊十町跡・ 烏丸綾小路遺跡	遺構	1 第3面 全景（南から） 2 第2面 全景（北東から） 3 土坑1062 断面（北東から） 4 第1面 全景（北東から）

図版20	平安京左京五条三坊十町跡・ 烏丸綾小路遺跡	遺物	1	出土遺物1
図版21	平安京左京五条三坊十町跡・ 烏丸綾小路遺跡	遺物	1	出土遺物2
図版22	平安京左京五条三坊十町跡・ 烏丸綾小路遺跡	遺物	1	出土遺物3
図版23	尊勝寺跡・岡崎遺跡	遺構	1 2	1区全景(北から) 2区全景(北から)
図版24	尊勝寺跡・岡崎遺跡	遺構	1 2 3	断割調査区1(西から) 断割調査区1木組遺構(北から) 2区溝1(東から)
図版25	山科本願寺南殿跡	遺構	1 2	1区第2面全景(北から) 1区溝1断面(北から)
図版26	山科本願寺南殿跡	遺構	1 2	2区第2面全景(西から) 2区瓦溜りA検出状況(南東から)
図版27	山科本願寺南殿跡	遺構	1 2 3 4	2区北壁トレンチ断面(南西から) 2区瓦溜りA検出状況(南から) 2区礎石4検出状況(南から) 試掘調査2Tr.全景(東から)
図版28	烏羽離宮跡	遺構	1 2	検出状況(南西から) 洲浜(南東から)
図版29	烏羽離宮跡	遺構	1 2	洲浜礫敷き(南西から) 景石抜き取り穴(北東から)
図版30	伏見城跡	遺構	1 2	北側調査区全景(北から) 南側調査区全景(西から)
図版31	伏見城跡	遺構	1 2 3 4 5 6 7 8	南側調査区東半検出(北西から) 壺地業81及び77検出(北から) 壺地業81抜き取り穴断面(西から) 壺地業81据付石検出(西から) 壺地業81断面(西から) 壺地業30断面(南東から) 壺地業10検出(南から) 壺地業10断面(北東から)
図版32	伏見城跡	遺構	1 2	壺地業80断面(南から) 壺地業76断面(南から)

			3 調査区西壁北半造成土断面（北東から）
			4 調査区西壁南半造成土断面（北東から）
			5 造成土断面（東から）
			6 壺地業10及び造成土断面（東から）
			7 土坑56（南西から）
			8 土坑56中層遺物出土状況（南西から）
図版33	伏見城跡	遺物	出土遺物
図版34	長岡京跡第583次・淀城跡	遺構	1 南区第2面全景（北西から）
			2 石垣全景（北東から）
図版35	長岡京跡第583次・淀城跡	遺構	1 断割り1（北西から）
			2 断割り1南面石垣（北から）
			3 断割り1北面石垣（南から）
			4 断割り3全景（南西から）
			5 断割り2全景（南東から）
			6 瓦組遺構（南から）
			7 瓦組遺構（南東から）
図版36	長岡京跡第583次・淀城跡	遺構	1 木樋1（南から）
			2 石組柵全景（東から）
			3 石組柵東側埋土（南から）
			4 石組柵と造成土（南から）
			5 石組柵中央支え石（東から）
			6 石組柵西側完掘（南西から）
図版37	長岡京跡第583次・淀城跡	絵図	1 『山州淀御城府内之圖』
			2 『山州淀御城府内之圖』発掘調査付近
図版38	芝古墳	遺構	1 5区全景（南東から）
図版39	芝古墳	遺構	1 5区遠景（北東から）
			2 石組み溝2（南西から）
図版40	芝古墳	遺構	1 横穴式石室（北から）
			2 羨道西側壁（東から）
図版41	芝古墳	遺構	1 横穴式石室出土須恵器（出土状況・北から）
			2 横穴式石室出土須恵器（配置復元・北から）
図版42	芝古墳	遺構	1 横穴式石室羨道延長部の埴輪群（南西から）
			2 6区全景（南西から）

挿 図 目 次

I 平安宮大極殿跡・聚楽遺跡（1）

図1	調査位置図（1：2,500）	1
図2	調査区配置図（1：250）	2
図3	調査前全景（南東から）	2
図4	作業風景（南東から）	2
図5	周辺調査区配置図（1：1,000）	3
図6	遺構平面図（1：100）	5
図7	調査区断面図（1：50）	6

II 平安宮大極殿跡・聚楽遺跡（2）

図1	調査位置図（1：2,500）	10
図2	調査区配置図（1：250）	11
図3	調査前全景（南から）	11
図4	作業風景（北東から）	11
図5	遺構平面図（1：100）	12
図6	遺物実測図（1：4）	12
図7	断割調査区1・2断面図（1：50）	13
図8	周辺調査位置図（1：1,000）	14
図9	周辺調査断面模式図（縦軸1：100,横軸1：1,000）	15

III 平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡

図1	調査位置図（1：2,500）	16
図2	調査前全景（西から）	17
図3	作業風景（東から）	17
図4	現地説明会風景	17
図5	埋め戻し状況（南東から）	17
図6	『大内裏図考証』「八省院図」における朝堂院南西部	18
図7	周辺調査配置図	19
図8	延祿堂東縁延石（調査1①地点）	19
図9	延祿堂東縁延石（調査1②地点）	19
図10	延祿堂西縁北端の階段（調査1③地点）	19
図11	調査区配置図（1：300）	20

図12	調査区平面図（1：150）	22
図13	調査区北壁断面図（1：50）	23
図14	延祿堂西縁・階段実測図（1：50）	24
図15	溝63平面図（1：100）・断面図（1：50）	25
図16	溝63縦断面図・横断面図（1：50）	26
図17	溝38実測図（1：50）	27
図18	土師器出土状況（南から）	28
図19	出土土器実測図1（1：4）	29
図20	出土土器実測図2（1：4）	29
図21	軒丸瓦拓影・実測図1（1：4）	30
図22	軒丸瓦拓影・実測図2（1：4）	31
図23	軒平瓦拓影・実測図1（1：4）	32
図24	軒平瓦拓影・実測図2（1：4）	33
図25	その他の瓦拓影・実測図（1：4）	34

Ⅳ 平安宮豊楽殿跡・鳳瑞遺跡

図1	調査地位置図（1：2,500）	39
図2	調査区配置図（1：400）	40
図3	西区調査前風景（東から）	40
図4	東区調査前風景（西から）	40
図5	作業風景	40
図6	土層剥ぎ取り状況	40
図7	埋戻し状況	40
図8	剥ぎ取り・写真パネル展示状況	40
図9	周辺調査位置図（1：1,500）	42
図10	西区北壁断面図（1：50）	45
図11	東区断割1・2，攪乱3北壁断面図（1：40）	46
図12	東区平面図（1：100）	47
図13	西区平面図（1：100）	48
図14	出土遺物実測図（1：4）	49
図15	豊楽殿復元図（1：250）	51
図16	豊楽院北部復元図（1：400）	54

Ⅴ 平安京左京五条三坊十町跡・烏丸綾小路遺跡

図1	調査地と周辺調査位置図（1：2,500）	57
----	----------------------	----

図2	調査区配置図 (1:500)	58
図3	調査前全景 (北から)	58
図4	作業風景 (南西から)	58
図5	北壁断面図 (1:50)	61
図6	西壁断面図 (1:50)	62
図7	土坑1220 平・断面図 (1:20)	63
図8	第1期・第2期 平面図 (1:100)	64
図9	柱列6・7 断面図 (1:20)	65
図10	井戸1200 平・断面図 (1:20)	65
図11	第3期・第4期 平面図 (1:100)	66
図12	土坑1081 平・断面図 (1:20)	67
図13	土坑1100 平・断面図 (1:20)	68
図14	第5期・第6期 平面図 (1:100)	69
図15	地業5 平・断面図 (1:50)	70
図16	第7期 (7-1a・7-1b・7-2) 平面図	72
図17	竪穴建物1218・土坑1220・第2期整地層出土遺物 実測図	74
図18	柱列7・土坑1204出土遺物 実測図	75
図19	井戸1200・土坑1128出土遺物 実測図	76
図20	土坑1100出土遺物 実測図	77
図21	土坑1157・1081出土遺物 実測図	78
図22	土坑1160出土遺物 実測図	79
図23	土坑1080・1104出土遺物実測図	79
図24	土坑1224出土遺物 実測図	80
図25	土坑1039出土遺物 実測図	81
図26	土坑1017出土遺物 実測図	83
図27	金属製品 実測図・銭貨拓本	84
図28	明治8年の地割り	86
図29	遺構変遷図1 (1:300)	87
図30	遺構変遷図2 (1:300)	88

VI 尊勝寺跡・岡崎遺跡

図1	調査位置および近隣関連調査位置図 (1:2,500)	89
図2	調査区配置図 (1:250)	90
図3	調査前全景 (南から)	90
図4	作業風景 (北から)	90

図5	調査区平面図（1：100）	93
図6	断割調査区1 A-A'間断面図（1：50）	94
図7	断割調査区2 B-B'間断面図（1：50）	95
図8	整地層1上層出土遺物実測図（1：4）	96
図9	整地層1下層～整地層2出土遺物実測図（1）（1：4，22のみ1：3）	97
図10	整地層1下層～整地層2出土遺物実測図（2）（1：4）	98
図11	出土木製品実測図（1：6）	99

VII 山科本願寺南殿跡

図1	調査地位置図（1：10,000）	102
図2	周辺の調査	103
図3	調査前風景	104
図4	調査風景	104
図5	調査区配置図（1：200）	104
図6	試掘調査1区全景（北から）	104
図7	南殿跡土塁復元図	104
図8	基本層序（柱状図）（1：20）	105
図9	第1・2面 遺構平面図（1：100）	106
図10	溝1断面図（1：50）	107
図11	溝1～3断面図（1区壁面断面図）（1：50）	108
図12	瓦溜りA 平面図（1：40）	109
図13	御在世山水御亭図（光照寺伝）	109
図14	出土遺物実測図（1）	110
図15	出土遺物実測図（2）	111
図16	山科南殿跡 復元推定図	112

VIII 鳥羽離宮跡

図1	調査地位置図（1：2,500）	113
図2	調査前風景（南東から）	113
図3	調査風景（南西から）	113
図4	基本層序（1：40）	114
図5	調査区平面図（1：60）	115
図6	調査区壁断面図（上：西壁，下：北壁 1：60）	116
図7	出土遺物実測図（12のみ1：2，それ以外は1：4）	118
図8	鳥羽離宮南殿跡付近の汀線想定復元図（1：1,000）	120

IX 伏見城跡

図1	調査地位置図（1：5,000）	121
図2	調査前全景（北西から）	121
図3	調査風景（北西から）	121
図4	遺構掘削風景（東から）	121
図5	現地説明会風景（北から）	121
図6	「伏見御城郭並武家屋敷取図」該当部分	122
図7	周辺調査区配置図（1：2,500）	124
図8	調査区西壁断面図（1：50）	126
図9	遺構平面図（1：200）	127
図10	調査区北東部断割1西壁断面図（1：100）	127
図11	SK56断面図（1：50）	128
図12	大型壺地業10・19・30・31平・断面図（1：50）	129
図13	大型壺地業58・81平・断面図（1：50）	130
図14	小型壺地業列1・2平・断面図，布掘地業90（1：100）	131
図15	出土遺物実測図・土器類（1：4）	134
図16	出土遺物実測図・瓦類（1：4）	135
図17	周辺調査及び大規模造成土想定範囲（1：5,000）	137
図18	「伏見御城郭並武家屋敷取之図」府立桃山高校付近	137

X 長岡京跡第583次・淀城跡

図1	調査区配置図（1：2,500）	140
図2	調査前全景（南西から）	141
図3	埋戻し後全景（南西から）	141
図4	調査地と周辺調査位置図（1：5,000）	142
図5	調査区南壁断面図（1：50）	146
図6	遺構平面図（1：500）	147
図7	池跡・木樋1・2平面図（1：200）	148
図8	池跡断割り1西壁断面図（1：50）	148
図9	池跡石垣立・平面図（1：40）	149
図10	石垣立・平面図（1：40）	150
図11	石組柵平・断面図（1：40）	151
図12	木樋1・池跡（1：80）	152
図13	石垣立面図（1：50）	152

XI 芝古墳

図1	調査位置図（1：15,000）	159
図2	調査風景（北西から）	160
図3	石材調査風景（西から）	160
図4	現地説明会風景（南西から）	160
図5	埋戻し作業風景（北から）	160
図6	調査区配置図（1：400）	161
図7	5区セクションおよび断割り実施位置図（1：200）	162
図8	5区平面図（1：100）	163
図9	c～c'セクション断面図（1：40）	164
図10	横穴式石室平面図（1：30）	165
図11	横穴式石室西壁見通し図（1：40）	166
図12	玄室出土須恵器群出土状況図（上：須恵器群1，下：須恵器群2）（1：10）	168
図13	羨道延長部埴輪群出土状況図（1：10）	169
図14	石組み溝1実測図（1：40）	170
図15	b～b'セクション断面図（1：40）	171
図16	石組み溝2実測図（1：40）	173
図17	a～a'セクション断面図（1：40）	173
図18	6区平面および北壁断面図（1：40）	174
図19	玄室出土須恵器実測図（1：4）	176
図20	墳丘復元図（1：300）	177

表 目 次

Ⅰ 平安宮大極殿跡・聚楽遺跡（1）	
表1 周辺調査一覧表	4
表2 遺構概要表	5
表3 遺物概要表	7
Ⅱ 平安宮大極殿跡・聚楽遺跡（2）	
表1 遺構概要表	11
表2 遺物概要表	12
Ⅲ 平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡	
表1 遺構概要表	21
表2 遺物概要表	29
Ⅳ 平安宮豊楽殿跡・鳳瑞遺跡	
表1 遺構概要表	44
表2 遺物概要表	49
Ⅴ 平安京左京五条三坊十町跡・烏丸綾小路遺跡	
表1 遺構概要表	63
表2 遺物概要表	83
Ⅵ 尊勝寺跡・岡崎遺跡	
表1 遺構概要表	92
表2 遺物概要表	97
Ⅶ 山科本願寺南殿跡	
表1 遺構概要表	105
表2 遺物概要表	110
Ⅷ 鳥羽離宮跡	
表1 遺構概要表	117
表2 遺物概要表	119

IX 伏見城跡

表1	調査一覧表	124
表2	遺構概要表	125
表3	遺物概要表	132

X 長岡京跡第583次・淀城跡

表1	周辺調査一覧	143
表2	遺構概要表	145
表3	遺物概要表	154
表4	淀城築城以前の遺構検出標高	154
表5	淀城築城後の遺構検出標高	155
表6	池埋土の分析表	158

XI 芝古墳

表1	遺構概要表	160
表2	遺物概要表	175

I 平安宮大極殿跡・聚楽遺跡（1）

1. 調査経過

今回の調査は、京都市上京区千本通下立売下る小山町873における発掘調査である。調査地は、平安宮大極殿跡及び聚楽遺跡に該当する。当該地に個人住宅の建設が計画されたため、平成26年11月10日に文化財保護法第93条第1項に基づく届出が行われた。これに対し、文化財保護課は、平安宮朝堂院の正殿である大極殿の遺存状況を確認するための発掘調査を指導した。

調査は平成26年12月8日から開始した。調査区は、敷地中央の南北3m、東西11mの範囲に設定した。調査面積は33㎡である。計画建物の基礎が及び現地表面から約0.3mまで機械掘削後、人力で調査を進め、写真撮影・図面作成の記録作成作業を行った。しかし、近代以前の遺構を確認できなかったことから、建築事業者と文化財保護課が再協議を行い、基礎に影響を与えない範囲で断割調査を実施した。断割調査は、大極殿の想定柱位置の計3ヶ所に調査区を設け実施した。現地表面から約0.5mまで掘削したところで、遺物のほとんど含まれない比較的締まった面を確認した。しかし、その下層では締まりの無い層序が続き、地山も確認できなかった。断割調査が完了した後、写真撮影・図面作成の記録作成作業を行った。調査終了後、地盤改良を行いつつ埋戻しを行い、現地での全ての作業は12月18日に終了した。



図1 調査位置図（1：2,500）

2. 遺 跡

(1) 位置と歴史的環境

平安宮大極殿は、旧地形では南に張り出す丘陵上に立地し、調査地周辺は北から南に向かって緩やかに傾斜する。調査地付近の標高は44.0mである。

平安宮の下層には、古墳時代の集落遺跡である聚楽遺跡が存在する。近隣の調査成果¹⁾から、朝堂院の南西側は、平安時代以前には幾筋もの流路が成立する谷地形であったことが判明している。

平安時代初頭には、平安宮の造営が始まり、少なくとも延暦15年(796)までには大極殿は完成していたと見られる。記録上では、大極殿は火事により三度焼亡している。第1次大極殿は、貞観18年(876)の火事により焼亡し、第2次大極殿が元慶3年(879)に再建される。第2次大極殿も、康平元年(1058)に焼失し、延久4年(1072)に再建されている(第3次大極殿)。その第3次大極殿も安元3年

(1177)のいわゆる太郎焼亡により焼亡し、以後再建されなかった。大極殿跡地付近は、中世を通じて「内野」と呼ばれる空閑地であったが、この地が再び開発されるのは桃山時代に入ってからである。豊臣秀吉により、平安宮北東部に聚楽第が造営され、その周辺に大名屋敷が立ち並んだ。江戸時代になると、平安宮南東部に京都所司代が造営される。17世紀前期の「洛中洛外地図屏風(京都図屏風)」や中井家本「洛中絵図」によると、今回の調査地は、空間地あるいは「畠」として描かれている。17世紀後期以降幕末までは、所司代与力屋敷あるいは空間地や畑として利用されていたようである。また、付近一帯は壁土用の良好な粘土(聚楽土)が得られることから、近世に盛んに土取りが行われた。近代以降は、次第に市街化し現在に至る。

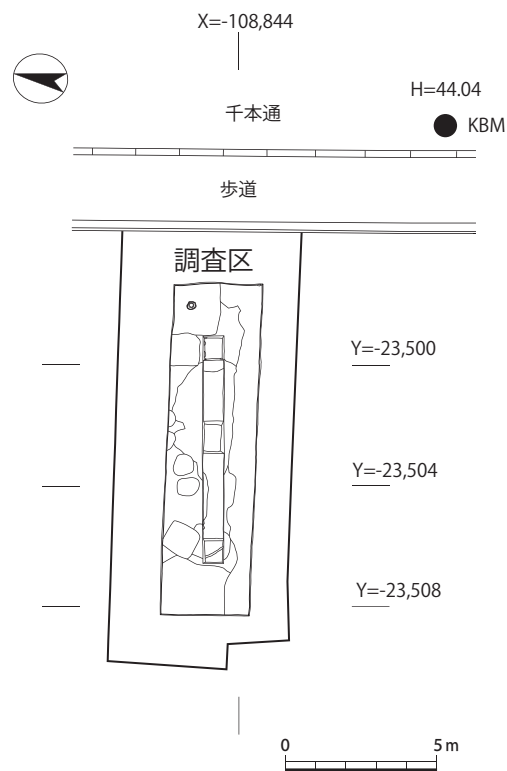


図2 調査区配置図(1:250)



図3 調査前全景(南東から)



図4 作業風景(南東から)

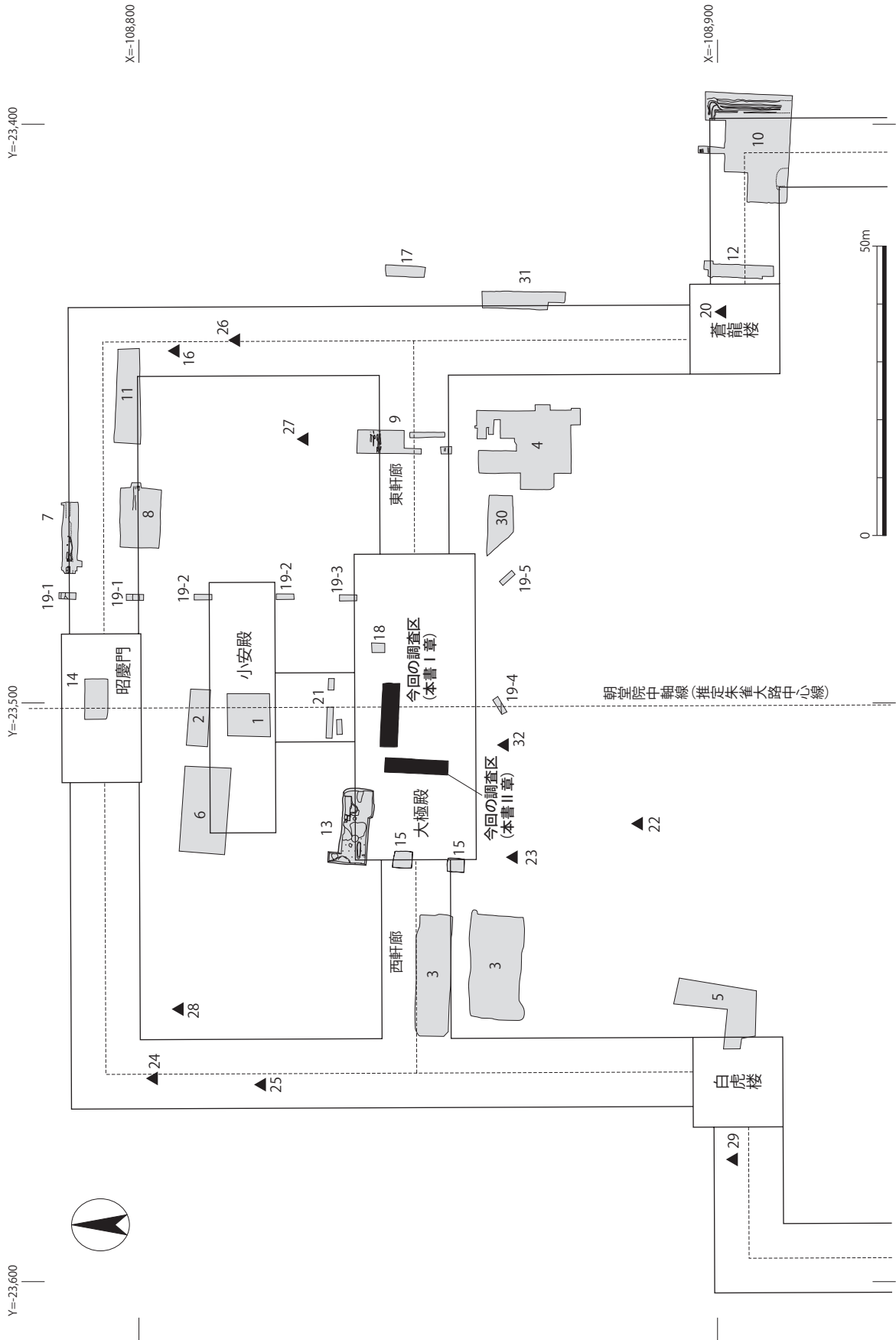


図5 周辺調査区配置図 (1 : 1,000)

表1 周辺調査一覧表

調査番号	調査位置	調査方法	調査年度	所在地（上：上京区 中：中京区）	調査概要	文献番号
1	小安殿	発掘	1975	上・小山町877-3	検出遺構なし。	1
2	小安殿北縁	発掘	1975	上・小山町887	近世以降の土取りにより検出遺構なし。	2
3	大極殿院西軒廊	発掘	1975	中・聚楽廻東町3	攪乱のみ。	3
4	大極殿南東側	発掘	1975	上・小山町908-893	江戸時代の溝状遺構。	4
5	朝堂院西面回廊	発掘	1977	中・聚楽廻東町3-1	近世以降の土取りにより検出遺構なし。	5
6	小安殿北西部	発掘	1978	上・小山町877	GL-4.6mまで地山も確認できず。大規模な濠状遺構が存在か。	6
7	大極殿院北面回廊	発掘	1983	上・小山町884	GL-0.2mにて回廊基壇北縁を検出。基壇は、延石・地覆石・羽目石・束石で化粧されていた。	7
8	大極殿院北面回廊	発掘	1985	上・小山町880	GL-0.4mにて回廊基壇南縁を検出。	8
9	大極殿院東軒廊	発掘	1985	上・小山町908-53	基壇北縁底部と凝灰岩延石採取痕跡を検出。基壇南縁については痕跡のみだが、その成果から東軒廊の基壇幅が約12mの4丈幅であることが判明。基壇心は大極殿南北心となる。	9
10	朝堂院回廊北東部	発掘 試掘	1990	上・中務町491-44他	東回廊と北回廊のコーナー部に関係する遺構を検出。	10
11	大極殿院北面回廊	発掘	1991	上・小山町908	近世以降の土取りにより検出遺構なし。	11
12	朝堂院北面回廊	発掘	2005	上・中務町491-55他	回廊基壇に伴うと考えられる溝状遺構を検出。	12
13	大極殿北西縁	発掘	2008	中・聚楽廻東町32-6・7・9	調査区全面で平安時代の建物掘込地業と考えられる遺構を検出。	13
14	昭慶門	発掘	2008	上・小山町879	GL-3m以上の大土坑により地山も確認できず。	14
15	大極殿西縁	試掘	1987	中・聚楽廻東町32	GL-1.6mまで近世以降の土取り穴。	15
16	大極殿院東面回廊	試掘	1988	上・小山町908-71	江戸時代の包含層。	16
17	大極殿院東面回廊東側	試掘	1988	上・小山町	GL-0.7mにて平安時代の瓦溜めを検出。	17
18	大極殿	試掘	1994	上・小山町地内	GL-0.3mで基壇を確認。	18
19-1	大極殿院北面回廊	試掘	1994	上・小山町地内	回廊基壇北縁の延石を原位置を保った状態で検出。回廊基壇南縁では、凝灰岩採取痕跡を確認。	19
19-2	小安殿南縁・北縁	試掘	1994	上・小山町地内	検出遺構なし。	
19-3	大極殿北縁	試掘	1994	上・小山町地内	攪乱のみ。	
19-4	大極殿南縁	試掘	1994	中・聚楽廻東町地内	GL-0.42mで、大極殿南縁の階段南端と考えられる版築状の基壇と、凝灰岩延石掘付痕跡を検出。	
19-5	大極殿南東側	試掘	1994	上・小山町地内	攪乱のみ。	
20	朝堂院蒼龍楼	試掘	1997	上・中務町491	検出遺構なし。	20
21	大極殿北廊	試掘	2007	上・小山町875-1	敷地東端で、GL-0.4mにて地山。調査区中央で南北方向に続く湿状堆積を確認。	21
22	龍尾壇北側	立会	1982	中・聚楽廻東町地内	江戸時代の土取り穴。	22
23	大極殿南西側	立会	1985	中・聚楽廻東町1	検出遺構なし。	23
24	大極殿院西面回廊	立会	1985	中・聚楽廻東町31-18	GL-1.1mにて江戸時代の土取り穴。	24
25	大極殿院西面回廊	立会	1988	中・聚楽廻東町31-4	GL-0.35mにて江戸時代の包含層。	25
26	大極殿院東面回廊	立会	1989	上・小山町908-71	検出遺構なし。	26
27	大極殿院東面回廊西側	立会	1989	上・小山町908-73	盛土のみ。	27
28	大極殿院東面回廊東側	立会	1990	中・聚楽廻東町31-28	検出遺構なし。	28
29	朝堂院北面回廊	立会	1996	中・聚楽廻中町41-9	GL-0.18mにて平安時代の土坑を確認。瓦多量。	29
30	大極殿南東側	立会	2006	上・小山町871-3	GL-0.2mにて平安時代の整地層。	30
31	大極殿院東面回廊東側	立会	2006	上・中務町491-72	平安時代中期頃の瓦溜、聚楽第関連と推察される掘跡を調査区中央で検出。	31
32	大極殿南側	立会	2008	上・聚楽町地内	GL-0.5mにて地山。	32

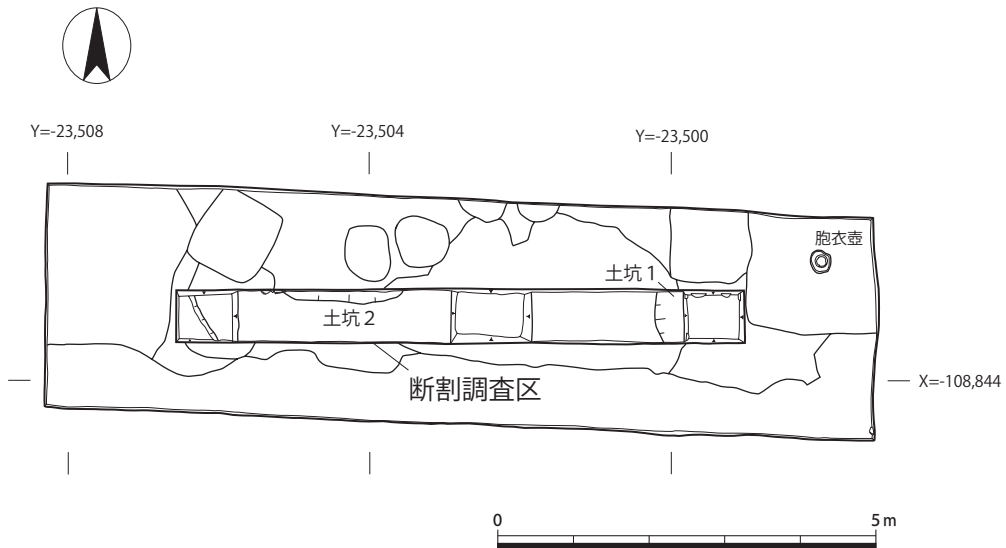


図6 遺構平面図（1：100）

（2）周辺の調査（図5・表1）

大極殿院跡ではこれまでに数多くの調査が実施されている。その中で、大極殿に関わる明瞭な遺構が検出された例は非常に少ない。主な成果としては、調査19-4で、基壇土と延石の抜き取り痕跡を確認しており、大極殿南縁の中央階段南縁と想定されている。また、調査18でも基壇土と考えられる土層を確認している。近年行なわれた調査13では、調査区全面で建物掘込地業を確認しており、第1次大極殿に関連する遺構と考えられている。以上のように、これまで大極殿では3箇所まで遺構を検出しているものの、建物・基壇の規模については不明な点が多く、その実態は未だ明らかではない。今回の調査は、大極殿の基壇中央部に位置することから、基壇の様相などを明らかにすることを目的として実施した。

3. 遺 構

（1）基本層序（図7）

基本層序は、表土以下、GL-0.15mで近世整地層（1層）、-0.52mで褐色シルト層（6層）、-1.18mでにぶい黄褐色シルト層（7・8層）、-1.56mで灰黄褐色シルト層（9層）となる。

6層は、遺物をほとんど含まない比較的締まった層である。7・8層は、地山の土（明黄褐色シルト・黒褐色シルト）をブロック状に多く含む。下層の8層はやや粘性を帯び、締まりがない。遺物はほとんど混じらないが、古墳時代のものと考えられる土師器片を確認した。9層は、粘性の強い灰黄褐色シルトで、粗砂・細砂を多く含む。遺物は未確認である。

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
近世か	土坑1・2	

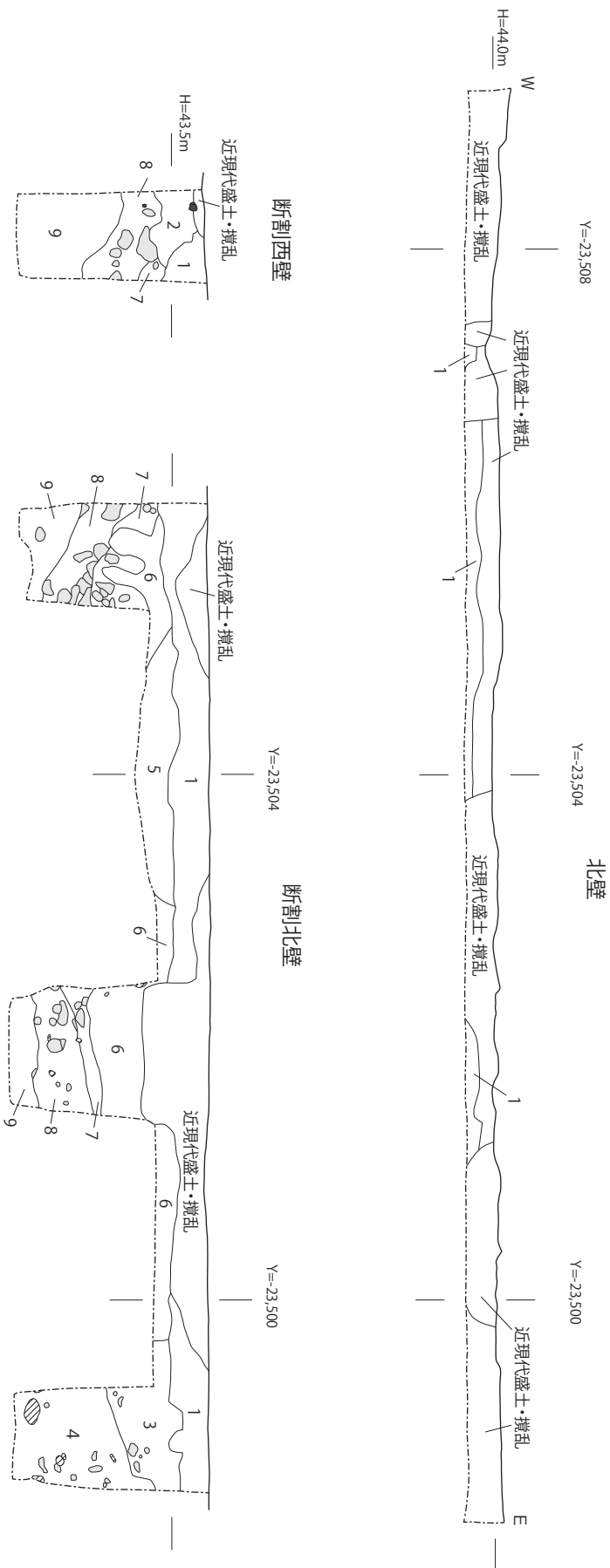


図7 調査区断面図 (1:50)

- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト (細砂・粗砂・細礫多く含む; φ1cm前後の礫や炭含む) 【近世整地層】
- 2 10YR4/2 灰黄褐色シルト (細砂・粗砂・細礫多く含む)
- 3 10YR4/4 褐色シルト (細砂・粗砂・細礫多く含む; φ1cm前後の礫まばらに含む)
- 4 10YR4/4 褐色シルト (細砂・粗砂・粗礫多く含む; φ1~20cm前後の礫まばらに含む) 【土坑1】
- 5 10YR3/4 暗褐色シルト (細砂・粗砂・細礫含む; 凝灰岩や瓦・土器・炭を含む) 【土坑2】
- 6 10YR4/4 褐色シルト (細砂・粗砂・細礫多く含む; φ1cm前後の礫まばらに含む)
- 7 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト (粗砂・細礫を多く含む; フロツク状に地山の土を含む)
- 8 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト (やや粘性帯びる; 粗砂・細礫を多く含む)
- 9 10YR4/2 灰黄褐色シルト (粘性帯びる; 粗砂・細礫を多く含む)

※トーンはフロツク状の地山を表す



(2) 遺構 (図6・図版1)

計画建物の基礎がおよぶ地表下0.3mまでは、近世以降の遺構のみであった。下層の遺存状況を確認するため、調査区中央で断割調査を行った。断割調査区では、地表下0.6mで褐色シルトの比較的安定した面(6層)を検出した。6層上面の標高は、断割調査区中央で43.5mである。6層上面で検出を行ったところ、土坑を2基検出した。土坑検出後、断割調査区内の3箇所です更に掘削を行ったが、基壇や、掘込地業の掘方などは全く確認できなかった。

なお、計画建物の構造上、断割調査の深度に限界があり、調査区東部の土坑1の底部および地山は確認できていない。以下、主要な遺構を報告する。

土坑1 断割調査区東部で西肩を検出した。東西1.14m以上、南北は不明で、深さは1.24m以上である。埋土は大きく2層に分かれ、下層に向かうほど拳大～人頭大の礫を多く含む。遺物は平安時代の瓦がほとんどだが、近世以降の土取穴である可能性が高い。

土坑2 断割調査区西部で検出した。北側は調査区外に続くため、掘削は部分的なものである。東西約2.1m、南北は不明で、深さは約0.3mである。埋土は暗褐色シルトで、土師器や凝灰岩片、被熱した瓦や焼土を含む。

4. 遺 物

出土した遺物は整理箱にして2箱である。内訳は、土器類と瓦類、凝灰岩片などで、平安時代の瓦類が大半を占める。瓦類は、丸瓦・平瓦が主で、軒瓦は1点も出土していないが、緑釉瓦片が1点のみ出土した。

表3 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ 箱数	Aランク点数	Bランク 箱数	Cランク 箱数
古墳時代	土師器				
平安時代	土師器, 瓦				
江戸時代	土師器, 磁器, 瓦, 銭貨				
合 計		2箱	0箱	1箱	1箱

5. まとめ

今回の調査では、標高43.5m付近で、遺物を含まない褐色シルトの比較的締まった面を検出したため、当初は地業構築土の可能性を想定した。しかし、層状に突き固めた様相を確認することができないこと、下層にむかうに従い、締まりの無い層序が続くことから、地業構築土とは考えにくい。断割調査の範囲が狭小であり、6層以下では遺物の量が非常に少ないことから、現時点ではその性格について断定はできないものの、7・8層ではブロック状に地山の土が含まれており、少なくとも一度掘り返した土で埋められた層と捉えることができる。

周辺の調査事例では、当該地の南西約25mで実施された調査15において、黒褐色泥砂に地山の黄褐色土がブロック状に混入した比較的締まった層が確認されているが、結果的には近世以降の土取りによるものであったことが分かっている。千本通の西側では、深さが3m以上もある大土坑が確認されており（調査14）、今回の調査も同様の大土坑に関連する可能性が高い。

一方、大極殿北面回廊の基壇下層では、古墳時代の溝を確認しており（調査7）、平安宮造営以前に存在した遺構の埋土である可能性も残される。今回は、複数の可能性を指摘するに留まるが、今後、資料の蓄積を待ってからの検討課題としたい。

（熊谷 舞子）

註

- 1) 鈴木久史「平安宮修式堂跡・聚楽遺跡 No.34」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成26年度』京都市文化市民局, 2015。

文献一覧（表1 周辺調査一覧表）

- 1 梶川敏夫ほか「平安宮小安殿跡推定地（Ⅱ）発掘調査概要」『京都市埋蔵文化財年次報告 1975』京都市文化観光局文化財保護課, 1976。
- 2 甲元真之ほか「平安宮小安殿跡推定地発掘調査報告」『京都市埋蔵文化財年次報告 1975』京都市文化観光局文化財保護課, 1976。
- 3 片岡 肇『平安宮大極殿跡の発掘調査 平安京跡発掘調査報告書 第1輯』（財）古代学協会, 1976。
- 4 鈴木忠司ほか『平安宮推定大極殿跡発掘調査報告書 平安京跡発掘調査報告書第1輯』（財）古代学協会, 1983。
- 5 平田 泰「平安宮大極殿跡」『平安京跡発掘調査概要 京都市埋蔵文化財研究所概要集1978 - Ⅱ』（財）京都市埋蔵文化財研究所, 1979。
- 6 平尾雅幸「平安宮 小安殿跡」『平安京跡発掘調査概要 京都市埋蔵文化財研究所概要集1978』京都市文化観光局・（財）京都市埋蔵文化財研究所, 1979。
- 7 木下保明「大極殿院」『昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所, 1985。
- 8 辻 純一「平安宮大極殿院（1）」『平安京跡発掘調査概報 昭和60年度』京都市文化観光局, 1986。
- 9 梅川光隆「平安宮大極殿院（2）」『平安京跡発掘調査概報 昭和60年度』京都市文化観光局, 1986。
- 10 百瀬正恒「平安宮朝堂院跡（HQ25）」『京都市内試掘立会調査概報 平成2年度』京都市文化観光局,

- 1991。
- 11 引原茂治「平安宮大極殿院跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第46冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター，1994。
 - 12 吉崎 伸「平安宮朝堂院跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成18年度』京都市文化市民局，2007。
 - 13 上村和直「平安宮朝堂院大極殿跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成22年度』京都市文化市民局，2011。
 - 14 網 伸也「平安宮朝堂院昭慶門跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成22年度』京都市文化市民局，2011。
 - 15 家崎孝治「平安宮大極殿跡（HQ49）」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局，1988。
 - 16 「88BBHQ077」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局，1989。
 - 17 家崎孝治「平安宮大極殿院跡（HQ12）」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局，1989。
 - 18 鈴木久男「付章41 朝堂院跡」『平安宮 I』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊，（財）京都市埋蔵文化財研究所，1995。
 - 19 伊藤 潔「付章45 朝堂院跡－内蔵寮跡」『平安宮 I』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊，（財）京都市埋蔵文化財研究所，1995。
 - 20 「28」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成9年度』京都市文化市民局，1998。
 - 21 「28」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成19年度』京都市文化市民局，2008。
 - 22 家崎孝治「朝堂院・豊楽院跡」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所，1984。
 - 23 「85BBHQ056」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度』京都市文化観光局，1986。
 - 24 「85BBHQ105」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局，1987。
 - 25 「88BBHQ063」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局，1989。
 - 26 「89BBHQ004」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』京都市文化観光局，1992。
 - 27 「89BBHQ007」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』京都市文化観光局，1992。
 - 28 「90BBHQ097」『京都市内遺跡立会調査概報 平成3年度』京都市文化観光局，1990。
 - 29 「96BBHQ454」『京都市内遺跡立会調査概報 平成8年度』京都市文化観光局，1997。
 - 30 吉崎 伸ほか「平安宮朝堂院跡，聚楽遺跡（06HQ185）」『京都市内遺跡立会調査報告 平成18年度』京都市文化市民局，2007。
 - 31 能芝 勉「平安宮朝堂院跡，聚楽遺跡（06HQ350）」『京都市内遺跡立会調査報告 平成18年度』京都市文化市民局，2007。
 - 32 吉本健吾「平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡（08HQ242）」『京都市内遺跡立会調査報告 平成21年度』京都市文化市民局，2010。

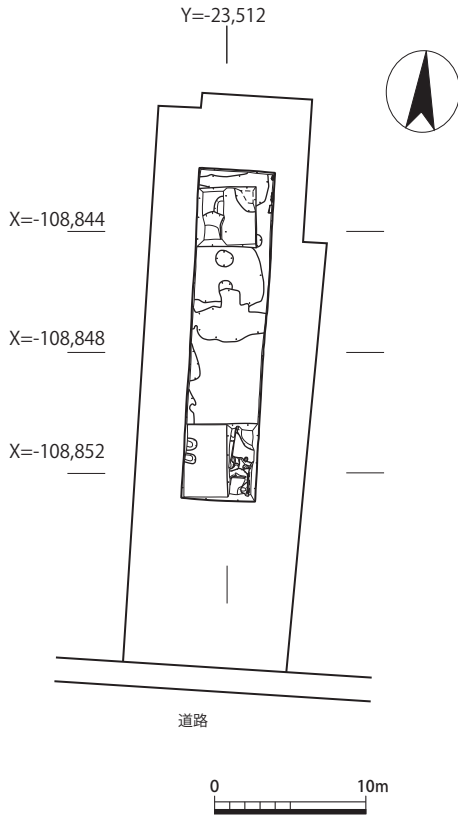


図2 調査区配置図 (1:250)



図3 調査前全景 (南から)



図4 作業風景 (北東から)

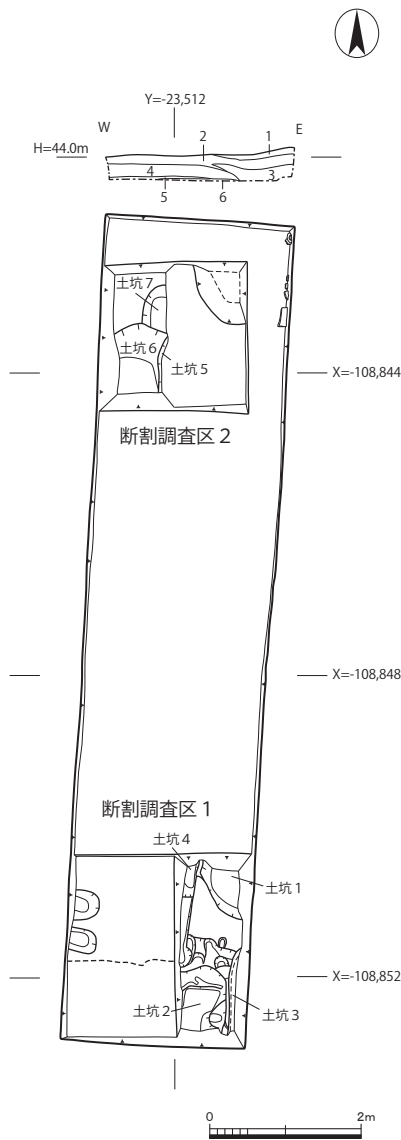
2. 遺構・遺物

(1) 遺構 (図5・7, 図版2)

基本層序は、地表面から-0.25mで現代盛土および近代整地層、-0.3mで黒褐色砂泥の近世整地層、-0.45mで暗褐色泥砂の近世耕土、-0.61mで暗褐色泥砂および褐色粘質土の近世整地層、-0.7mで黄褐色粘質土の、いわゆる聚楽土の地山となる。遺構は、断割調査区1・2で、地山を切って成立する江戸時代の土坑計7基を検出した。土坑からは、平安時代の瓦とともに江戸時代の染付が出土しており、江戸時代の土取り穴と考えられる。断割調査区1では、土取り穴を埋めた後に整地していることが確認でき、その整地面は、断割調査区1の南端から約1mの箇所を境に、堆積状況が全く異なる。北側では暗褐色泥砂に粗砂・細礫を多く含む硬く締まった層(8層)であるのに対し、南側では褐色粘質土を主体とする層(9層)である。江戸時代の絵図では、当該地近辺に所司代与力屋敷や畑地が確認できることから、土取り穴を埋めて整地した後に、こうした土地利用がなされたと考えられる。なお、地山は、断割調査区1において、標高43.23mで検出した。

表1 遺構概要表

時代	遺構	備考
江戸時代	土坑1～7	



- 1 現代盛土
- 2 10YR5/6 黄褐色粘質土
(一部炭層が幅1cm程堆積する)
- 3 10YR3/4 暗褐色泥砂に10YR4/6 褐色砂泥が混じる
(細礫多量に含む・底部に瓦)
- 4 10YR3/4 暗褐色泥砂
- 5 7.5YR2/1 黒色砂泥(炭多量含む)
- 6 10YR3/2 黒褐色砂泥(炭少量含む) 【近代整地層】

図5 遺構平面図 (1:100)

(2) 遺物 (図6)

遺物は整理箱に2箱出土した。いずれも江戸時代以降の土坑や耕土、表土から出土した。瓦類を中心に土器類、凝灰岩片などがある。瓦類はほとんどが平安時代のものである。丸・平瓦が中心だが1点のみ軒丸瓦が出土した(図6)。1は、平安時代後期の単弁蓮華文軒丸瓦である。近世整地層で出土した。下半部のみ残存する。色調は灰白色で、焼成は軟質である。中房は平坦で、幅広い間弁を持つ。外区内縁に蓮子が巡る。

緑釉瓦片も10点ほど出土したが、全て近世整地層や江戸時代の土取り穴から出土し、丸・平瓦のみである。素地が灰白色で焼きがやや軟質のものと、灰色で硬質のもの二種類を確認した。大極殿に隣接した地点の発掘調査では、大量の瓦が廃棄された土坑が確認されることが多いが、今回の調査では瓦の出土量は比較的少ない。

土器類は、ほとんどが江戸時代の施釉陶器や染付である。いずれも小片である。

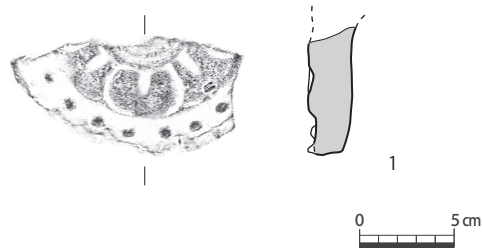


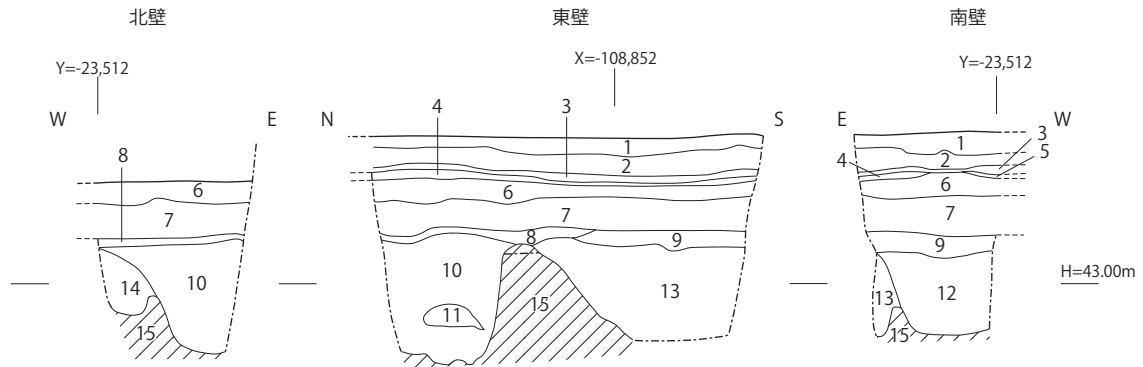
図6 遺物実測図 (1:4)

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	瓦, 凝灰岩片		軒丸瓦1点		
江戸時代 ~近代	土師器, 焼締陶器, 施釉陶器, 染付, 瓦				
合計		3箱	1点(1箱)	1箱	1箱

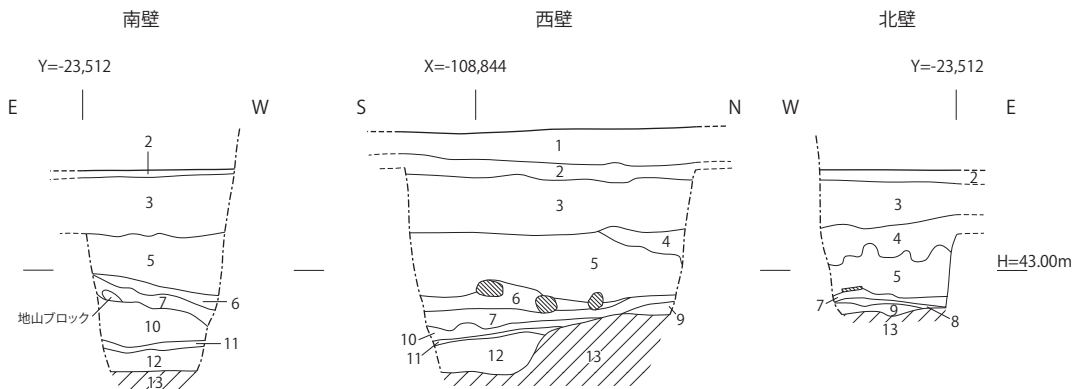
※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

断割調査区 1



- 1 現代盛土
- 2 10YR5/6 黄褐色粘質土 (一部炭層が幅1cmほど堆積する)
- 3 7.5YR2/1 黒色砂泥 (炭多量含む)
- 4 10YR3/2 黒褐色砂泥 (炭少量含む)
- 5 10YR4/6 褐色シルト 【貼りかえた床土か】
- 6 10YR3/2 黒褐色砂泥 (炭少量含む)
- 7 10YR3/3 暗褐色泥砂 【近世耕土】
- 8 10YR3/4 暗褐色泥砂 (径1cm前後の粗砂・細礫を多く含む。硬く締まる) 【近世整地層】
- 9 7.5YR4/6 褐色粘質土に7.5YR4/6 褐色泥砂が一部混じる 【近世整地層】
- 10 7.5YR3/4 暗褐色砂泥 10YR3/4 暗褐色粘質土と10YR5/8 黄褐色粘質土がまだらに混じる。細礫中量含む 【土坑 1】
- 11 10YR4/4 褐色シルト (15の剥離痕)
- 12 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 径3~5cmの礫中量含む 【土坑 2】
- 13 10YR3/3 暗褐色砂泥 径3~5cmの礫多量に含む 【土坑 3】
- 14 10YR4/4 褐色泥砂に10YR6/8 明黄褐色粘質土をブロック状に少量含む 【土坑 4】
- 15 10YR5/8 黄褐色粘質土 【地山】

断割調査区 2



- 1 現代盛土
- 2 10YR2/2 黒褐色砂泥 炭多量に含む 【近世~近代整地】
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 【近世耕土】
- 4 10YR3/4 暗褐色粘質土に10YR4/4 褐色砂泥がまだらに混じる (径1cm前後の礫中量含む)
- 5 10YR3/3 暗褐色泥砂に10YR3/2粘質土と10YR5/6粘質土がまだらに混じる (地山ブロック混じる)
- 6 7.5Y3/3 暗褐色砂泥に10YR3/4 暗褐色粘質土がまだらに混じる (径10~17cmの礫含む)
- 7 7.5YR3/2 黒褐色粘質土に7.5YR4/4 褐色粘質土と10YR4/4 褐色砂泥がまだらに混じる。
- 8 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥に10YR5/6 黄褐色粘質土がブロック状に少量混じる。
- 9 7.5Y3/4 暗褐色泥砂 (細礫多量に含む)
- 10 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (細礫中量含む)
- 11 7.5YR4/4 褐色砂泥に10YR5/6 黄褐色粘質土がまだらに混じる。
- 12 10YR4/4 褐色泥砂 (粗砂多量に含む)
- 13 10YR5/8 黄褐色粘質土 (径0.2~1cmの礫少量含む) 【地山】

図 7 断割調査区 1・2 断面図 (1:50)

3. まとめ

今回の調査では、近世以降の土取りによる掘削により、当該地には大極殿に関連する遺構が遺存していないことが判明した。周辺の調査事例でも、近世以降の土取りで遺構が削平されている事例が多く確認されており、付近一帯で大規模な土取りが行なわれたことが分かる。

一方、少ないながらも、大極殿および大極殿院の遺構が確認されている調査事例もあり、そうした事例から遺構が残存している可能性を探り、大極殿の復元を進める必要がある。近隣の主な発掘調査事例(図8)から、大極殿跡周辺の東西・南北軸上の高低差を整理すると、図9のようになる。

東西軸においては、第5地点で、大極殿に取り付く東軒廊の基壇北縁を検出している。既に延石などは抜き取られていたが、抜き取り痕跡が残っており、そこから延石の基底高が標高44.13mであったことが判明している。これは、基壇外の整地土層上面の高さとほぼ等しく、大極殿院北面回廊の基壇南縁の延石基底高ともほぼ等しい。以上のことから、大極殿院付近の旧地表面の標高は概ね44.1～44.2mであったことが分かる。

南北軸においては、第7・8地点で、北面回廊の基壇北縁・南縁が確認されている。いずれも延石などの基壇化粧が残存しており、延石上面の標高は概ね44.4mである。

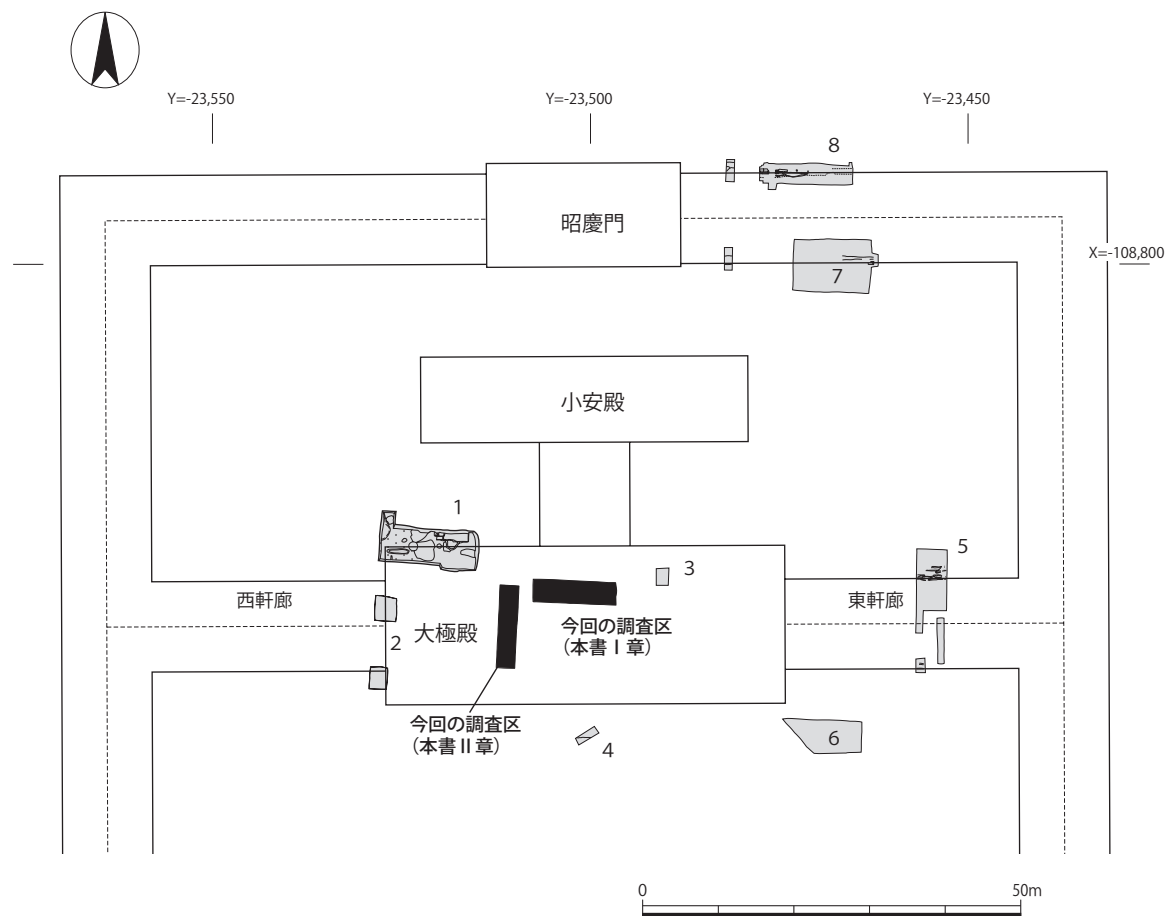
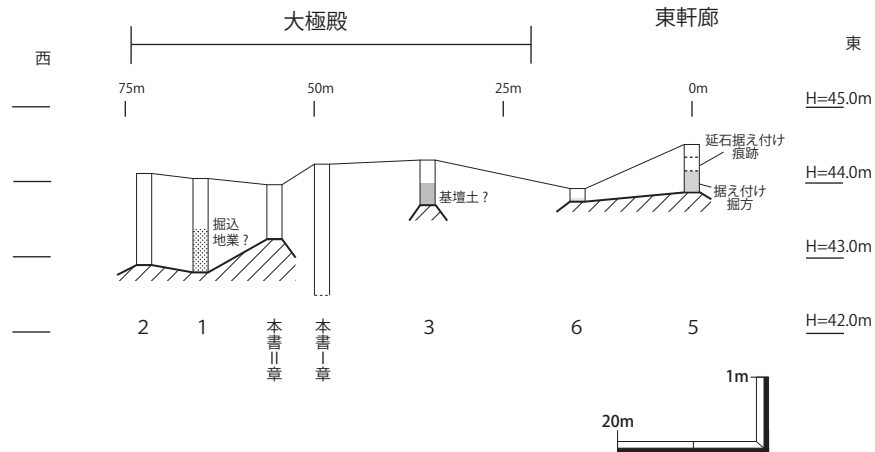


図8 周辺調査位置図 (1 : 1,000)

【大極殿院東西軸断面】



【大極殿院南北軸断面】

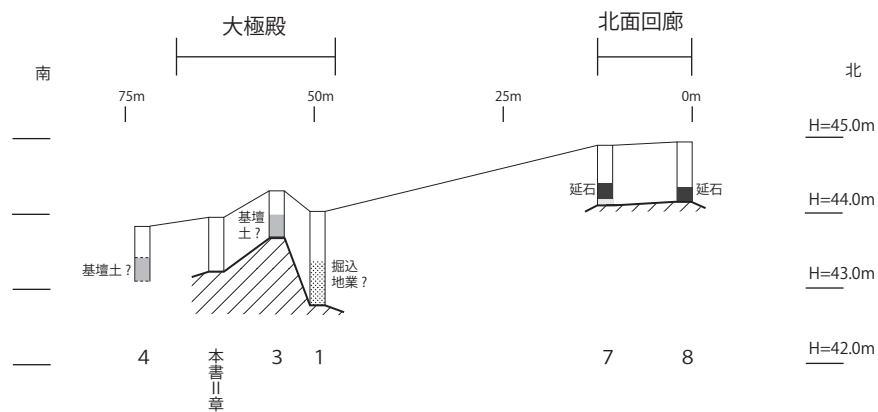


図9 周辺調査断面模式図（縦軸 1 : 100, 横軸 1 : 1,000）

大極殿内では、第1地点で建物掘込地業と考えられる遺構を検出している。検出した地業は、標高43.38m以下、約0.7mの厚さで残存していたが、地業上面・基壇部は近世以降に削平を受けたと考えられている。前述した通り、旧地表の標高は44.1～44.2mと考えられるため、本来の掘込地業の深さは約1.5mと推定されている。しかし、この調査では、掘込地業の掘方や、延石などの基壇化粧の据え付け痕跡、礎石を据えた根石の痕跡などは確認できていない。一方、今回の調査地（本書II章）は、江戸時代の土取り穴により削平を受けていたものの、標高43.23mで地山を検出した。第1地点で確認された建物掘込地業よりも地山が高く、建物掘込地業は確認できなかった。土取りによる削平を受けていることを考えると、本来の地山はより高い標高に残存した可能性が高い。ただし、調査地周辺では、地山が西に向かって下がる傾向にあり、場所により建物掘込地業が行なわれていた可能性も残る。いずれにせよ、調査事例の増加を待って再度検証する必要がある。

今回の調査では、明確に大極殿に関連する遺構を検出することはできなかった。しかし、削平を受けながらも地山を比較的浅い深度で確認し、近隣調査事例との比較材料を得ることができた。大極殿の建物や基壇の規模などは未だ明らかでない部分が多いため、今後も地道な調査の積み重ねが必要である。
（熊谷 舞子）

Ⅲ 平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡

1. 調査経過

調査地は中京区聚楽廻東町25に位置しており、平安宮朝堂院延祿堂及び西回廊跡・聚楽遺跡に該当している。当地は周辺よりも一段高くなっており、かねてより延祿堂の基壇痕跡と目されていた。ここで既存建物が解体されたため、土地所有者と協議を重ね、文化庁国庫補助事業による範囲確認調査を実施することとなった。

調査区の設定は、延祿堂基壇及び西縁、西縁に想定される階段、礎石根固め痕跡と西回廊東縁の検出を目的として南北31m、東西5mを設定した。調査は平成26年2月12日より開始し、掘削をすすめたところ、延祿堂基壇盛土、西縁及び階段の一部、西回廊の東雨落溝、瓦廃棄土坑等を確認するに至った。階段は調査区外に広がるため、2月27日に西半を埋め戻して南に3×10mの拡張区を設けた。拡張区において階段の全容が明らかになったため、3月7日には現地説明会を開催し成果の公表に努めた（参加者約450名）（図4）。また、延祿堂の基壇南縁を探るため、3月13日に2×3mの再拡張を行ったが、基壇はさらに南に続くことを確認した。なお、遺構は地中保存が前提のため掘削作業は最低限に留め、遺構面を土嚢と砂で養生を行い（図5）、3月20日に埋め戻しを完了した。調査面積は191㎡である。

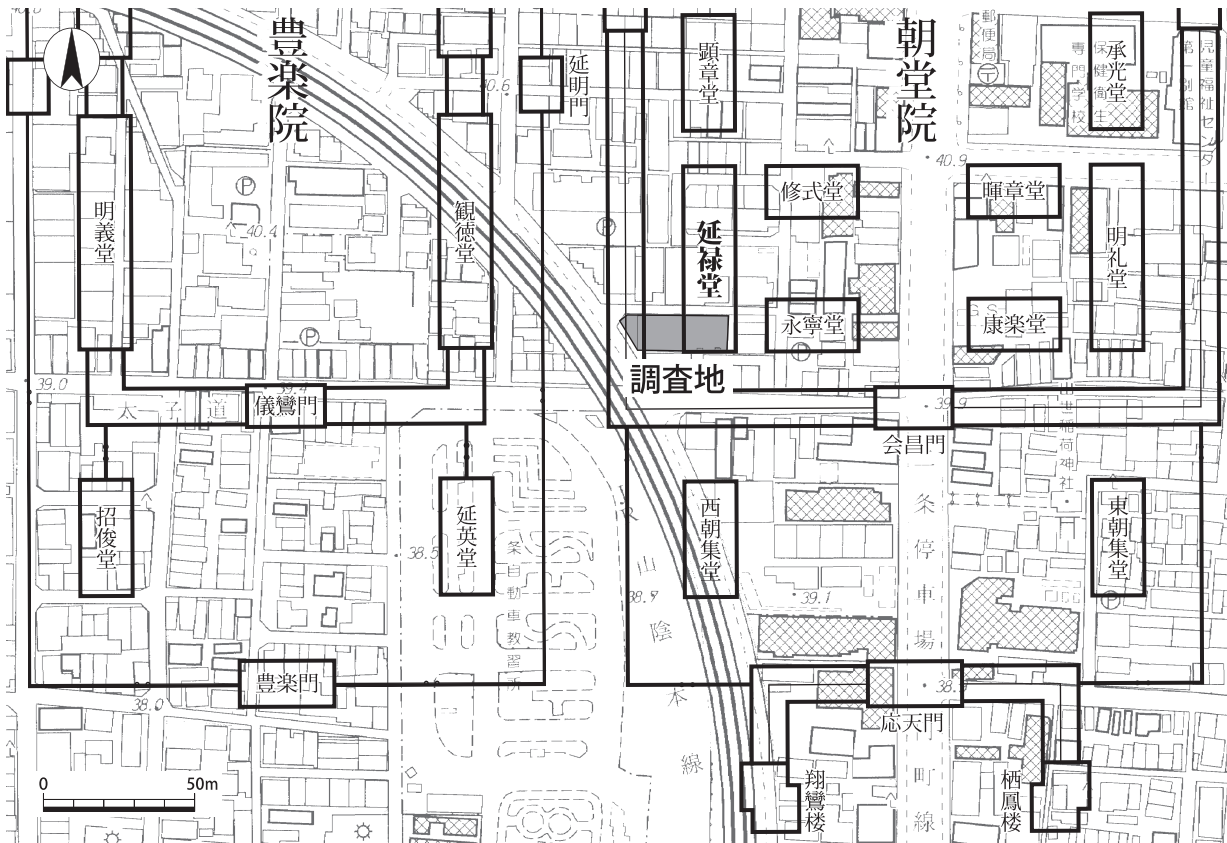


図1 調査位置図（1：2,500）



図2 調査前全景（西から）



図3 作業風景（東から）



図4 現地説明会風景



図5 埋め戻し状況（南東から）

2. 遺 跡

(1) 位置と地理的環境（図1）

平安京が位置する京都盆地は、河川による扇状地堆積によって形成されている。京域は、鴨川の扇状地が北東から南西方向へ大きく裾野を広げ、西側は紙屋川、御室川が小規模な扇状地を形成、南西部は桂川の氾濫源となる。宮域は南西部に紙屋川の、南東部に古堀川谷の影響を受けるものの、船岡山から派生する丘陵上にほぼ収まるように立地する。

丘陵上は洪水の恐れが少ない安定した場所であり、高い場所から低い場所に向けて平坦面を造り出す作業を行いやすいため、少ない労力で威厳を高める最も効果的な占地である。しかし、丘陵上は雨水による下刻作用の影響から逃れることが出来ず、幾筋かの谷や旧流路が存在したことが明らかになっている¹⁾。調査地周辺でも南側の太子道と西側の豊楽院との間には大きな段差が生じており、それぞれ南回廊と西回廊外側付近に該当することから、造営に必要な範囲を造成し平坦面が造り出されたと考えられる。

(2) 歴史的環境

延祿堂は左右対称に十二堂ある朝堂の中で西第四堂にあたる。『延喜式』には大蔵省、宮内省、正親司の座とされ、陽明文庫本『宮城図』の記載から東第四堂の明礼堂が十五間であることから、対になる延祿堂の柱間も同じであったことがわかる。また、『大内裏図考証』では、南北十五間の延祿堂には、基壇長辺に左右対称となる5つの階段が想定されている（図6）。

回廊は十二堂を囲み、北は大極殿院回廊、南は会昌門に繋がる。回廊は平安時代後期の姿を現した年中行事絵巻の「御齋会」に描かれており、凝灰岩の切石で積まれた基壇上に築地回廊で表現されている。基壇幅はこれまでの調査で幅40尺（約12m）であることが明らかになっている²⁾。

朝堂院の変遷 朝堂院は、即位の大礼をはじめ元日朝賀や大嘗祭、御齋会をはじめとする最も重要な儀式の場であったため、国家の正庁として特に重要視され、遷都の際には内裏に次いで造営が急がれた。大極殿は遷都翌年の延暦十四年（795）中には完成し、翌十五年正月には朝賀が執り行われている。朝堂院も同年七月に「造宮職の官位を中宮職に准ずる」ことが朝堂院の完成が契機と見られ³⁾、翌十六年正月十七日には射礼が執り行われている（第1次朝堂院）。

朝堂院はその後、修理、焼亡、再建を繰り返す。嵯峨天皇の弘仁六年（815）に早くも大規模な修理を行った朝堂院は、貞観十八年（876）に大極殿をはじめ延休堂及び東回廊の一部を焼亡する。元慶四年（880）に再建（第2次朝堂院）されるが、政務の場の変化によって朝堂院の使用頻度は減少していく。並行して朝堂院の顛倒^{てんとう}、修造の記事が急増し、寛和元年（985）の含嘉堂を初めとして、永祚元年（989）、長元元年（1034）、長久元年（1040）にも建物に被害が記録されている。寛仁四年（1020）には延祿堂及び東回廊が大風によって顛倒している。被害のある度に、修造し

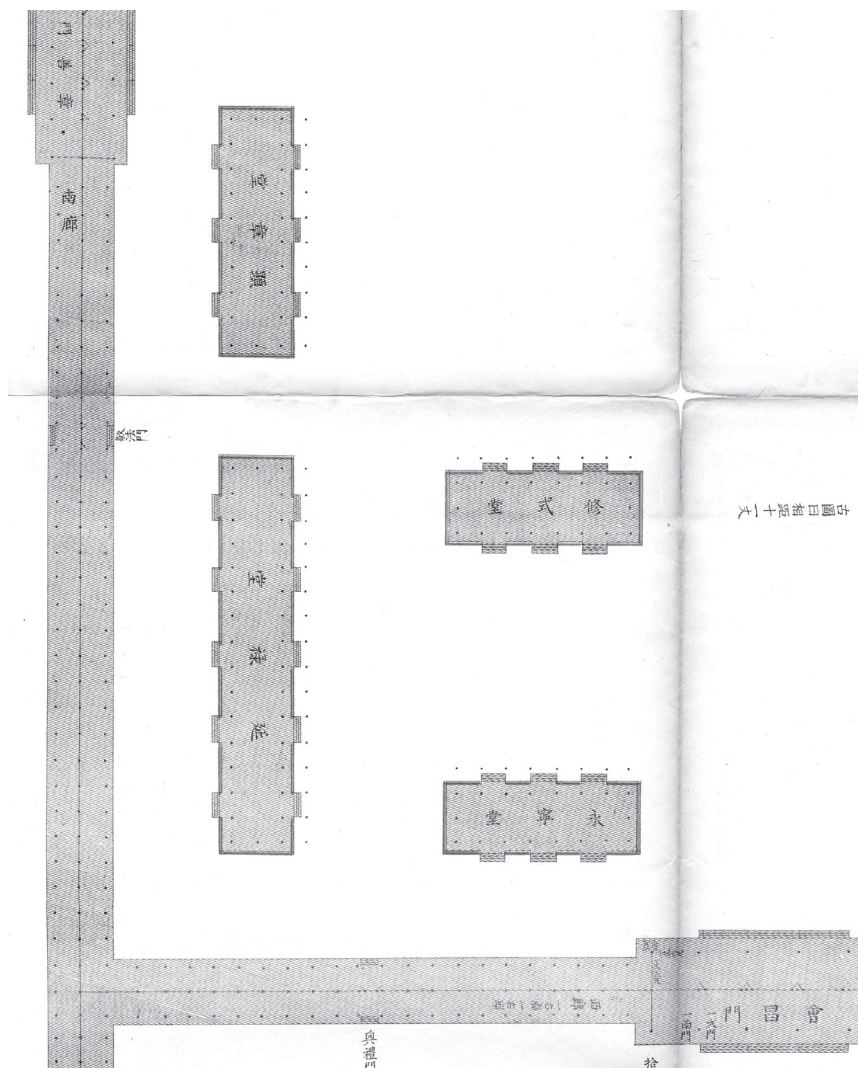


図6 『大内裏図考証』「八省院図」における朝堂院南西部

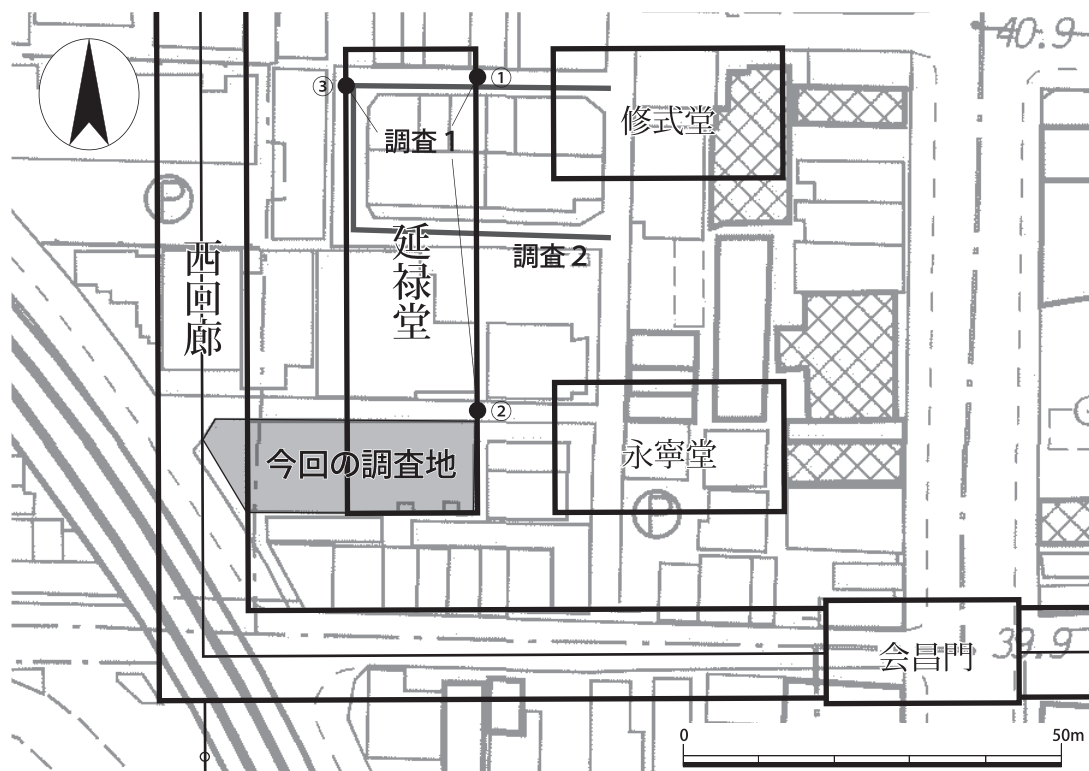


図7 周辺調査配置図 (1 : 1,000)



図8 延祿堂東縁延石 (調査1 ①地点)



図9 延祿堂東縁延石 (調査1 ②地点)



図10 延祿堂西縁北端の階段 (調査1 ③地点)

※図8～10 京都文化博物館所蔵

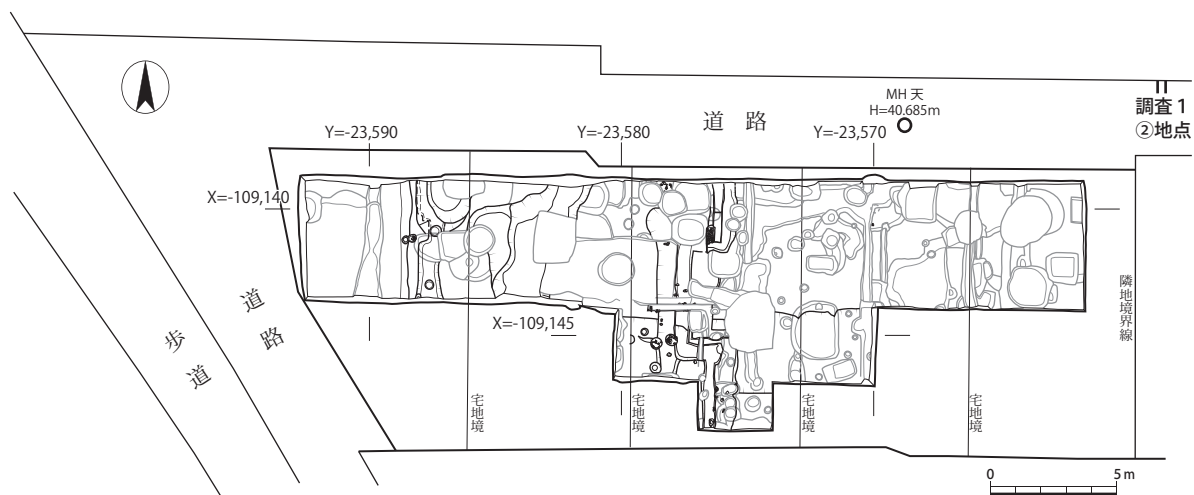


図11 調査区配置図(1:300)

形を保っていた朝堂院も康平元年(1058)に応天門と翔鸞楼、栖鳳楼を残し焼亡する。

後三条天皇の延久四年(1072)に再建された朝堂院(第3次朝堂院)も倒壊と修造を繰り返し、安元三年(1177)のいわゆる太郎焼亡によって焼失、以後再建されることはなかった。

(3) 周辺の調査(図7)

延祿堂については、これまで複数の立会調査を実施している(図8)。中でも1971年度に下水道工事に伴う立会調査で、基壇東縁の凝灰岩延石を2箇所、西縁北端の階段延石、地覆石を確認している⁴⁾(図8~10)。また、2012年度に実施されたガス低圧管入替に伴う立会調査でも、延祿堂の基壇版築土が確認されている⁵⁾。

西回廊については、数多くの調査を実施しているものの概して遺構の残りは悪い。僅かに2013年度に宅地造成に伴う試掘調査で、西縁基壇の凝灰岩延石抜き取り溝の一部を確認した程度である⁶⁾。

註

- 1) 高橋 潔「平安宮造営以前の遺跡」『平安宮Ⅰ』(財)京都市埋蔵文化財研究所, 1995。
- 2) 網 伸也「平安京の造営—古代都城の完成」吉村 武彦・山路 直充編『都城 古代日本のシンボリズム』青木書店、2007。
- 3) 梅川光隆『平安宮・平安京跡 ガス管布設替工事に伴う立会調査概要』昭和54年度,(財)京都市埋蔵文化財研究所, 1982。
- 4) 伊藤玄三「平安宮朝堂院の遺構-延祿堂・修式堂-」『古代文化』第24巻第8号, 1972。
- 5) 田中利律子「平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成24年度』京都市文化市民局, 2013。
- 6) 西森正晃「平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成25年度』京都市文化市民局, 2014。

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図13)

先述したとおり、調査地と西側、南側には比高約1.3mを測る段差が存在する。これは旧地形と平安宮造営に伴う造成作業の名残を留めているものと考えられる。調査地の現地表面の標高は40.6mである。

基本層序は延祿堂基壇の内外で異なる。内側では表土直下、GL-0.2mで延祿堂基壇盛土となり、外側では表土以下、GL-0.15mで近世整地層、-0.4mで瓦を多量に含む平安時代中期～後期の整地層(整地層Ⅱ)、-0.5mで朝堂院創建期の整地層(整地層Ⅰ)、-0.6mで灰黄褐色砂礫の地山となる。地山は北東から南西に向かって下がっており、低い場所には地山直上に古墳時代後期の遺物を含む黒色泥砂礫混じり層が堆積し、その上を黄色砂粒を多く含んだ黒褐色泥砂の整地層が覆う。整地層は、基壇内外に広がること、南に下がる場所ほど厚みを増すことから、平安宮造営に伴う造成土と捉えられる。なお、地山の標高は北端で40.05m、南西隅で39.7mとなる。

遺構は、近世の攪乱を除くと平安時代の延祿堂基壇盛土及び西縁基壇延石抜取溝、西縁南端の階段、朝堂院西回廊の東雨落溝と整地層、瓦溜め、ピット等を確認している(表1)。朝堂院廃絶後の中世には遺構、遺物は全く認められなかった。土地利用が再開されるのは当地に京都所司代与力屋敷が築かれるのを待たねばならない。

(2) 検出した遺構 (図12)

延祿堂 (図版1～3) 調査区東半で検出した。

基壇盛土 (図13～16) 盛土は最大約40cmが残る。造成土の上に版築で築かれており、版築の単位は10cm前後で、シルトと礫や砂が主体となる層を交互に積み上げている。盛土上に礎石据え付け痕跡は残っていなかったため、上面は後世に削平を受けていることがわかる。盛土内にはほとんど遺物を含んでおらず、基壇本体は創建期のものである。

溝25 (図14) 西縁基壇及び、階段部分の凝灰岩抜き取り溝である。溝はさらに調査区の南北に延びる。埋土は凝灰岩片と瓦片を多量に含むにぶい黄褐色泥砂で、幅0.5～1.0m、深さ0.25～0.3mを測る。溝の底面の標高は39.95m前後でほぼ平坦である。断面観察から地覆石の据え付け痕が残る部分も認められ、地覆石の底面の標高は40.1m前後であることがわかる。

遺物は大半が瓦類で、土師器、須恵器、凝灰岩が少量出土している。土師器皿では9世紀末～10

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代	溝25・36・38・62, 瓦溜り34・35	延祿堂基壇盛土・階段・西縁凝灰岩抜取溝, 西回廊東雨落溝
古墳時代	包含層, 土坑64	

世紀前半のものが少量含まれているが、12世紀以降に出現する巴文軒丸瓦も出土した。

溝36 (図14) 溝25の下層に残る凝灰岩の据え付け痕である。掘削していないため、平断面の観察に基づき報告する。幅は延石外側の押さえの土も含むため、溝25よりもやや広く1.4mを測る。延石外側の押さえの土は階段部分ではさらに広がる。底面には据えられていた延石の厚みによって底に土や凝灰岩屑、礫を入れている場所があり、延石の単位が痕跡として残る部分も認められる。埋土は階段南縁を境に異なっており、南側は瓦が多量に含まれることに対し、北側には凝灰岩屑のみで瓦はほとんど含まれていない。したがって、階段以南の基壇外装は修築されたことがわかる。修築時期については瓦以外の遺物の出土量が極めて少ないため明確な年代は不明であるが、溝25周辺から9世紀末～10世紀前半の土器が出土していることから、当該期に整備を行った可能性がある。

階段 (図14) 基壇西縁に5つ想定される階段のうち、南端の階段にあたる。先述した溝25が西側に凸状に張り出す範囲である。階段の凝灰岩は西縁基壇とともに全て抜き取られている。階段の出 (基壇辺に直交する張出部分) は1.3m、階段の幅 (基壇辺に並行する部分) は4.95mである。断面観察から復元した南北側面の地覆石外面間は4.15mを測る。なお、階段の盛土は基壇と共通しており、基壇の造成と一体の作業で行われたことを示す。

溝63 (図15・16・図版3-2) 拡張区及び再拡張区で検出した東西溝で基壇の内外を

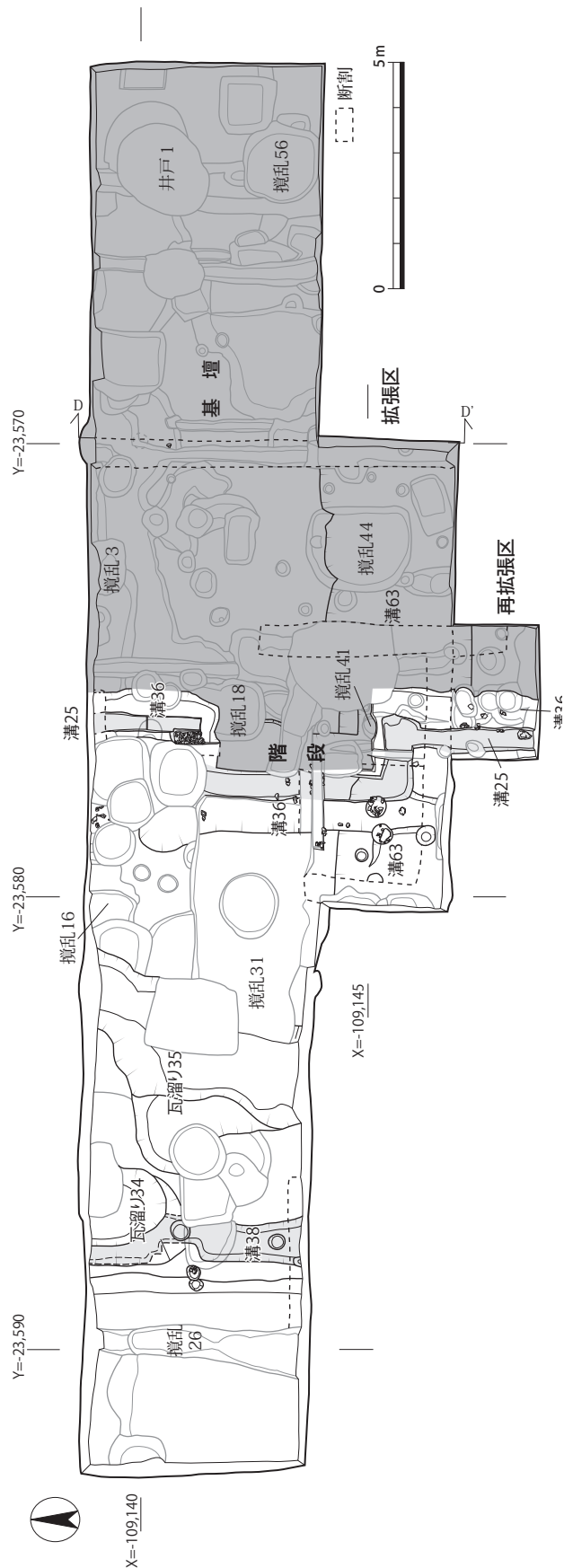
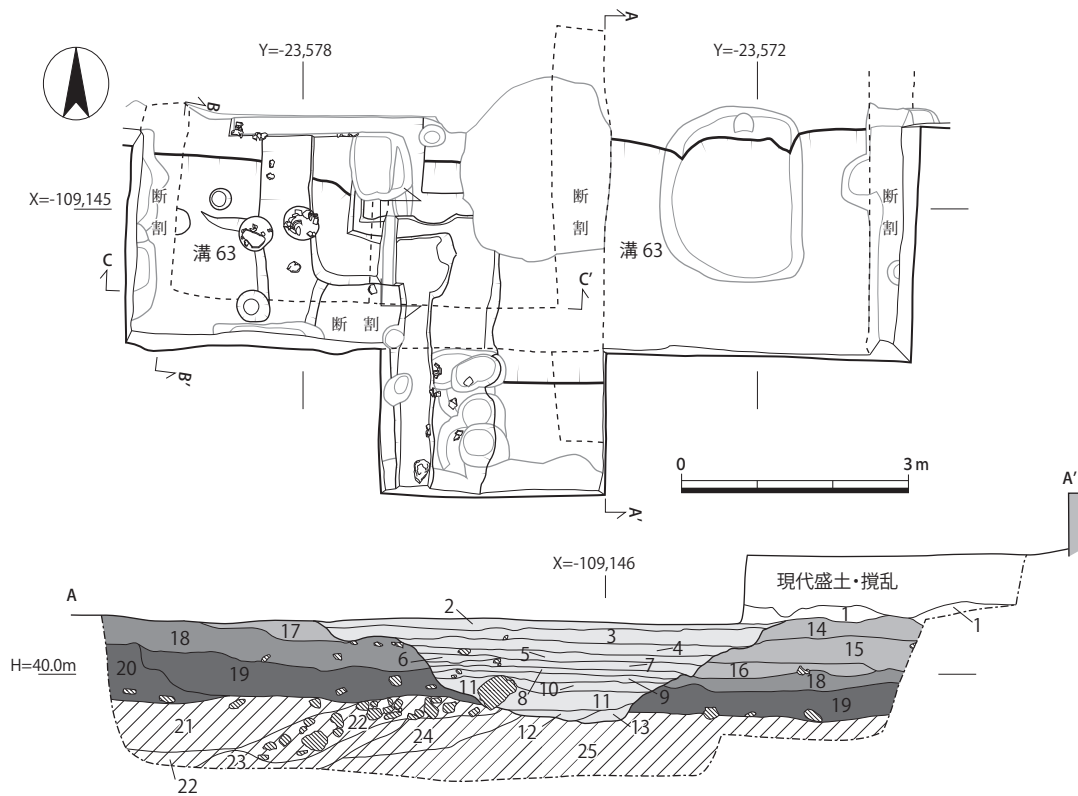
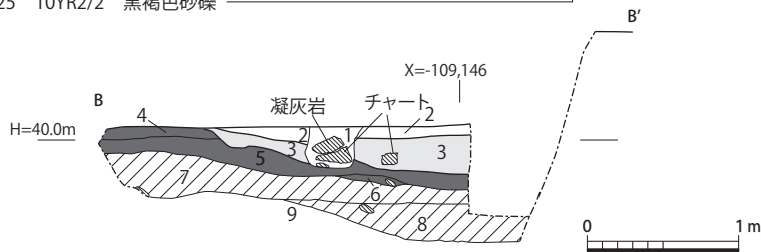


図12 調査区平面図 (1:150)

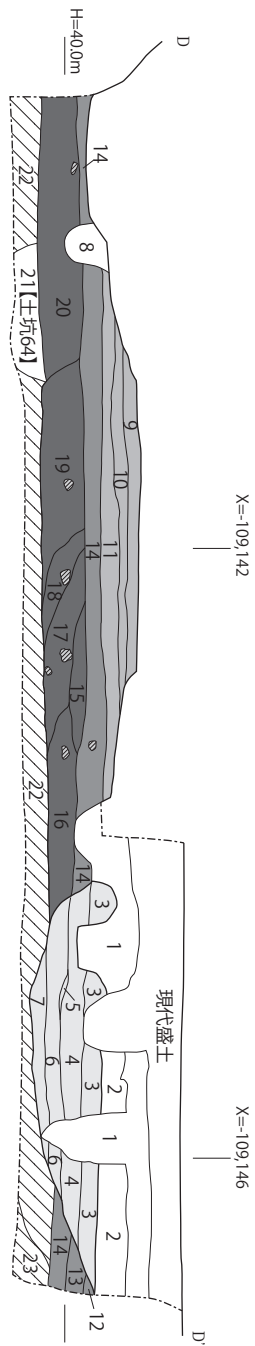


- | | | | |
|----|-----------|-----------------------------------|-------|
| 1 | 2.5Y4/3 | オリーブ褐色泥砂【近世整地層】 | |
| 2 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色砂泥(土機細片少量含む・非常に固く締まる) | 【溝63】 |
| 3 | 10YR3/3 | 暗褐色砂泥(1cm以下の礫少量含む・非常に固く締まる) | |
| 4 | 10YR3/1 | 黒褐色砂泥(非常に固く締まる) | |
| 5 | 10YR3/2 | 黒褐色砂泥(黄色砂粒少量含む・非常に固く締まる) | |
| 6 | 10YR2/2 | 黒褐色砂泥(明黄褐色シルトブロック状に少量含む・非常に固く締まる) | |
| 7 | 10YR4/2 | 灰黄褐色泥砂(非常に固く締まる) | |
| 8 | 10YR2/3 | 黒褐色砂泥(非常に固く締まる) | |
| 9 | 10YR2/2 | 黒褐色砂泥(黄色砂粒少量含む・非常に固く締まる) | |
| 10 | 10YR2/3 | 黒褐色シルト(黄色砂粒少量含む・非常に固く締まる) | |
| 11 | 10YR3/3 | 暗褐色砂泥～シルト(非常に固く締まる) | |
| 12 | 10YR3/3 | 暗褐色シルト(非常に固く締まる) | |
| 13 | 10YR3/1 | 黒褐色粗砂(非常に固く締まる) | |
| 14 | 10YR3/2 | 黒褐色泥砂(凝灰岩片少量含む) | |
| 15 | 10YR2/2 | 黒褐色泥砂(礫混) | |
| 16 | 10YR3/1 | 黒褐色砂泥(礫混) | |
| 17 | 10YR6/4 | にぶい黄橙色砂泥 | 【造成土】 |
| 18 | 10YR2/2 | 黒褐色泥砂(5~10cmの礫混じる・黄色砂粒多量に含む) | |
| 19 | 10YR2/1 | 黒色砂泥(礫混・明黄褐色シルトブロック状に含む) | |
| 20 | 10YR1.7/1 | 黒色泥砂(礫混) | |
| 21 | 10YR4/1 | 褐灰色砂礫 | |
| 22 | 2.5Y3/1 | 黒褐色砂礫(10~15cmの礫多量に含む) | 【地山】 |
| 23 | 10YR6/6 | 明黄褐色粗砂 | |
| 24 | 10YR4/2 | 灰黄褐色砂礫 | |
| 25 | 10YR2/2 | 黒褐色砂礫 | |



- | | | |
|---|---------|-------------------------------|
| 1 | 10YR2/2 | 黒褐色砂泥(浅黄色シルトブロック状に含む)【Pit61】 |
| 2 | 10YR4/2 | 灰黄褐色砂泥(固く締まる)【平安時代整地層】(整地層II) |
| 3 | 2.5Y3/2 | 黒褐色泥砂(黄色砂粒少量含む)【溝63】 |
| 4 | 10YR2/1 | 黒色砂礫 |
| 5 | 10YR2/2 | 黒褐色砂礫 |
| 6 | 10YR3/3 | 暗褐色泥砂 |
| 7 | 10YR4/2 | 灰黄褐色砂礫 |
| 8 | 2.5Y2/2 | 黒褐色砂礫 |
| 9 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色極細砂礫混じり |

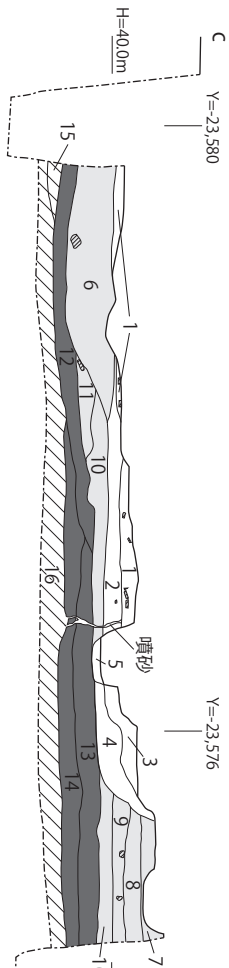
図15 溝63平面図(1:100)・断面図(1:50)



- 1 2.5Y4/1 黄灰色泥砂【近世整地層】
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
- 3 10YR4/2 灰黄褐色砂泥
- 4 10YR4/2 黒褐色シルト(礫混)
- 5 10YR5/2 灰黄褐色泥砂(非常に固く締まる)
- 6 10YR3/2 黒褐色泥砂(非常に固く締まる)
- 7 2.5Y4/1 黄灰色泥砂(非常に固く締まる)
- 8 2.5Y3/1 黒褐色シルト(固く締まる)【Pit】
- 9 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
- 10 10YR2/2 黒褐色シルト(礫混)
- 11 10YR3/3 暗褐色シルト

- 12 10YR3/1 黒褐色粗砂(礫混)
- 13 7.5YR3/2 黒褐色粗砂(礫混・黄色砂粒少量を含む)
- 14 10YR3/2 黒褐色粗砂(礫混・黄色砂粒少量を含む)
- 15 7.5YR2/2 黒褐色粗砂
- 16 10YR3/2 黒褐色粗砂(5~10cmの礫中量含む)
- 17 10YR2/3 黒褐色泥砂(礫混)
- 18 10YR2/3 黒褐色泥砂(礫混)
- 19 10YR3/1 黒褐色泥土(礫混)
- 20 10YR3/1 黒褐色泥土(礫混)
- 21 2.5Y5/2 暗灰黄色泥土【土坑64】
- 22 7.5YR3/2 黒褐色砂礫
- 23 10YR2/1 黒色砂礫

- 1 10YR4/2 灰黄褐色砂泥(瓦片・凝灰岩片多量を含む・固く締まる)【平安時代整地層(整地層II)】
- 2 10YR3/2 黒褐色砂泥(凝灰岩片中量含む)【溝36(延石押さえ)】
- 3 10YR4/2 灰黄褐色砂泥(瓦片・凝灰岩片多量を含む)【溝36(修復時裏込め)】
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥(凝灰岩片中量含む)【溝36(創建期裏込め)】
- 5 10YR2/1 黒色砂泥(凝灰岩片少量含む)【礎石裏込め】
- 6 2.5Y3/2 黒褐色砂泥(黄色砂粒少量含む)
- 7 2.5Y3/1 黒褐色砂泥(土師器細片・黄色砂粒少量含む)
- 8 10YR3/2 黒褐色砂泥(さらに分層可能・非常に固く締まる)
- 9 10YR4/2 灰黄褐色砂泥(さらに分層可能・非常に固く締まる)
- 10 10YR3/3 暗褐色砂泥(さらに細分可能・非常に固く締まる)
- 11 10YR1.7/1 黒色泥砂(φ~5cmの礫少量含む)
- 12 10YR3/1 黒褐色砂礫
- 13 2.5Y3/2 黒褐色砂礫
- 14 10YR2/1 黒色泥砂(礫混)【土坑・炭化物少量含む】
- 15 10YR4/2 灰黄褐色砂礫
- 16 2.5Y2/2 黒褐色砂礫



- 1 10YR4/2 灰黄褐色砂泥(瓦片・凝灰岩片多量を含む・固く締まる)【平安時代整地層(整地層II)】
- 2 10YR3/2 黒褐色砂泥(凝灰岩片中量含む)【溝36(延石押さえ)】
- 3 10YR4/2 灰黄褐色砂泥(瓦片・凝灰岩片多量を含む)【溝36(修復時裏込め)】
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥(凝灰岩片中量含む)【溝36(創建期裏込め)】
- 5 10YR2/1 黒色砂泥(凝灰岩片少量含む)【礎石裏込め】
- 6 2.5Y3/2 黒褐色砂泥(黄色砂粒少量含む)
- 7 2.5Y3/1 黒褐色砂泥(土師器細片・黄色砂粒少量含む)
- 8 10YR3/2 黒褐色砂泥(さらに分層可能・非常に固く締まる)
- 9 10YR4/2 灰黄褐色砂泥(さらに分層可能・非常に固く締まる)
- 10 10YR3/3 暗褐色砂泥(さらに細分可能・非常に固く締まる)
- 11 10YR1.7/1 黒色泥砂(φ~5cmの礫少量含む)
- 12 10YR3/1 黒褐色砂礫
- 13 2.5Y3/2 黒褐色砂礫
- 14 10YR2/1 黒色泥砂(礫混)【土坑・炭化物少量含む】
- 15 10YR4/2 灰黄褐色砂礫
- 16 2.5Y2/2 黒褐色砂礫

図16 横断面図・縦断面図(1:50)

貫く。基壇盛土を掘り込み、創建期の凝灰岩据え付け痕に切られていることから、基壇盛土後、基壇化粧を行う前に掘削されていると判断できる。規模は幅3.1m、深さは最大で0.65mを測る。底面は東から西へやや低くなっている。埋土は基壇内外で大きく異なり、内側では厚さ約5cm単位の版築で埋め戻されていることに対し、外側は単一層で一気に埋め戻されている。部分的に人頭大の石を含む。遺物は土師器の極細片が出土するのみである。

朝堂院西回廊（図版4） 調査区西半にて検出した。後世の改変により基壇は削平を受けているものの、東雨落溝を確認した。

溝38（図17・図版4-3） 地山上面で成立する南北溝で、平安時代の整地層に覆われる。北半の東肩は瓦溜り34に削平されている。幅1.0m、深さ0.2mを測り、底面はレンズ状を呈す。埋土はオリーブ黒色砂泥で、瓦を少量含むのみで遺物は少ない。杭や石組みの痕跡は認められず、素掘りである。想定される朝堂院西回廊東縁に近接すること、凝灰岩片をほとんど含まないことから、基壇外装の抜取溝ではなく、東雨落溝と考えるのが妥当であろう。平安時代の整地層に覆われていることから、創建期のものと考えられる。

瓦溜り34（図17・図版4-2） 調査区西半で検出した平安時代の瓦溜りである。平安時代の整地層上面で成立し、西回廊東雨落溝である溝38を切る。楕円形を呈し、東西1.7m、南北1.7m以上で、深さ0.5mを測る。瓦以外では土師器皿、甕、凝灰岩片などが出土している。

瓦溜り35（図12） 調査区西半で検出した平安時代の瓦溜りである。地山上面で成立する。南北

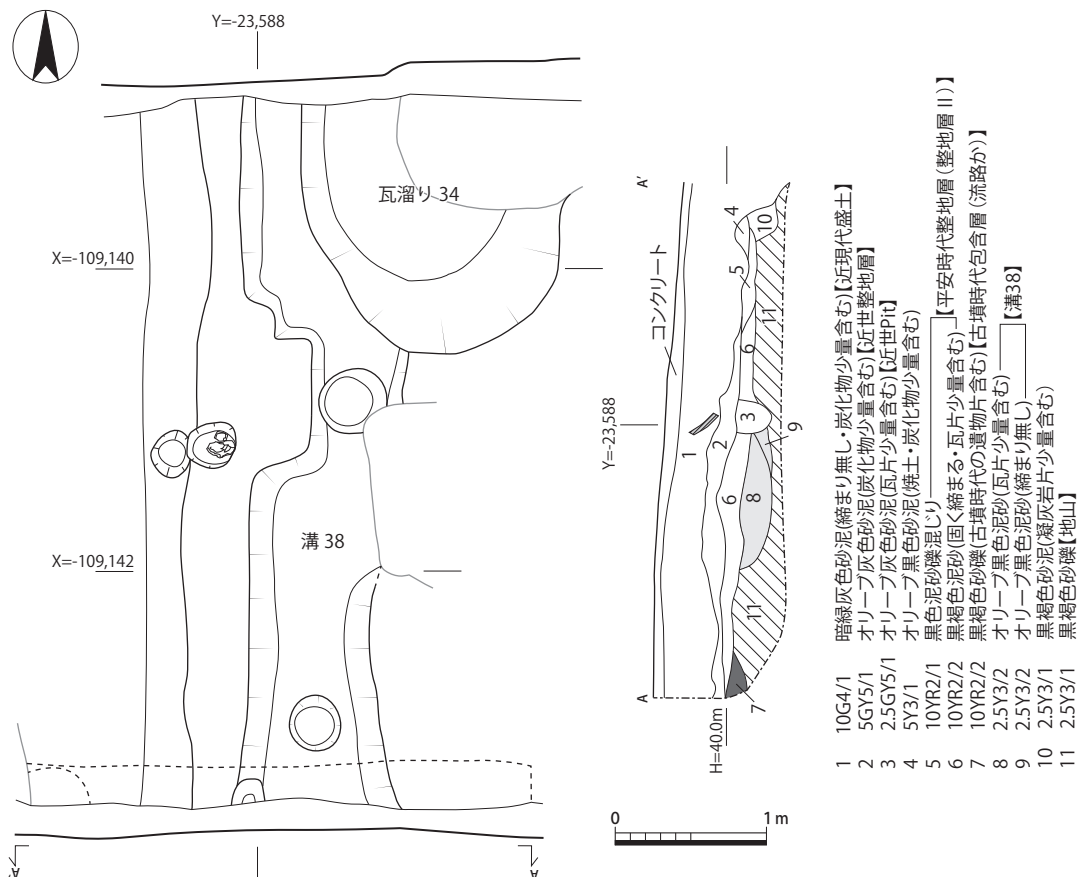


図17 溝38実測図 (1:50)

方向の溝状を呈するが、近世の攪乱に上部は削平されており、幅2.1～4.0m、深さ0.3mが残る。多量の瓦とともに土師器、須恵器、凝灰岩片が出土しているが少量である。

整地層（図13） 延祿堂基壇西側に広がる整地層である。本来は延祿堂、西回廊間に全面に敷かれていたと考えられるが、後世の削平により部分的に残るのみである。整地層は大きく2層認められる。下層は凝灰岩片を多く含み、瓦片をほとんど含まないことから、創建期の整地層と考える（整地層Ⅰ）。一方で上層は埋土に多量



図18 土師器出土状況（南から）

の瓦を含んでおり、西回廊東雨落溝である溝38を覆うことから、朝堂院内で大規模な修造を契機とした造成作業と考えられる（整地層Ⅱ）。ただし、造成時期を示す明確な遺物は出土していない。

土坑64（図16・18） 調査区東半の南北方向の断割底面で確認した土坑で、地山上面で成立する。楕円形を呈し、直径0.9m、深さ0.2m以上ある。高坏の脚部が出土した。古墳時代後期に属するものである。

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代	土師器		土師器1点		
平安時代	土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦類・石製品ほか		土師器7点, 須恵器4点, 緑釉陶器1点, 瓦類59点		
合計		74箱	72点(5箱)	1箱	68箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より8箱多くなっている。

4. 遺物

(1) 遺物の概要 (表2)

出土した遺物は整理箱にして67箱である。内訳は古墳時代の土師器、平安時代の土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦類、石製品や江戸時代の土師器、焼締陶器、輸入陶磁器、国産施釉陶器、瓦類、石製品、土製品等であるが、大半は朝堂院が造営された平安時代前期の瓦類である。

(2) 土器類 (図19・20, 図版7)

1は土坑64から出土した古墳時代の高坏である。脚部外面は縦方向のミガキを施す。

2～9は土師器皿である。いずれも細片のため口径は不明である。薄手で口縁はやや外反し、端部は上方につまみ上げて突起している。2・7は溝25, 3～6は階段中央断割から出土している。8は瓦溜り34から出土した土師器甕で、口縁端部を上方やや内側につまみ上げる。口縁部は内外面ともにヨコナデ、体部は外面タタキ、内面上半ヨコハケを施す。9は須恵器質の緑釉陶器の碗もしくは皿で、底部は削り出しの平高台である。山城産。近世整地層出土。10は奈良時代の須恵器壺底部で、平安宮造営時の造成土出土。11は須恵器壺の頸部で、瓦溜り35出土。12は須恵器杯蓋で、溝25から出土した。13は須恵器の蹄脚円面硯の脚台部と脚部である。溝25出土。

(3) 瓦類 (図21～25, 図版5～7)

瓦類は、軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦、鴟尾、塼、緑釉瓦、丸瓦、平瓦が出土している。平安時代の瓦溜りや延祿堂基壇凝灰岩抜取溝、整地層から出土しているが、後世の遺構や盛土からも多量に出土している。瓦の年代は平

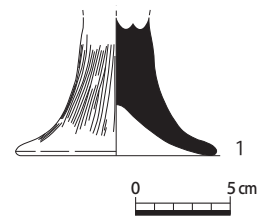


図19 出土土器実測図1 (1:4)

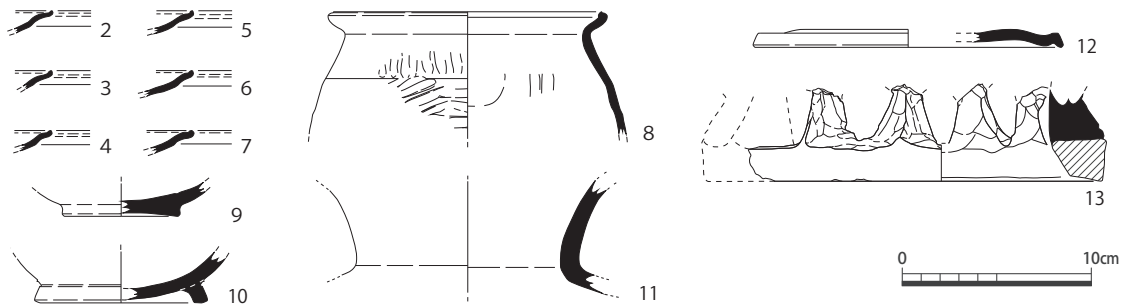


図20 出土土器実測図2 (1:4)

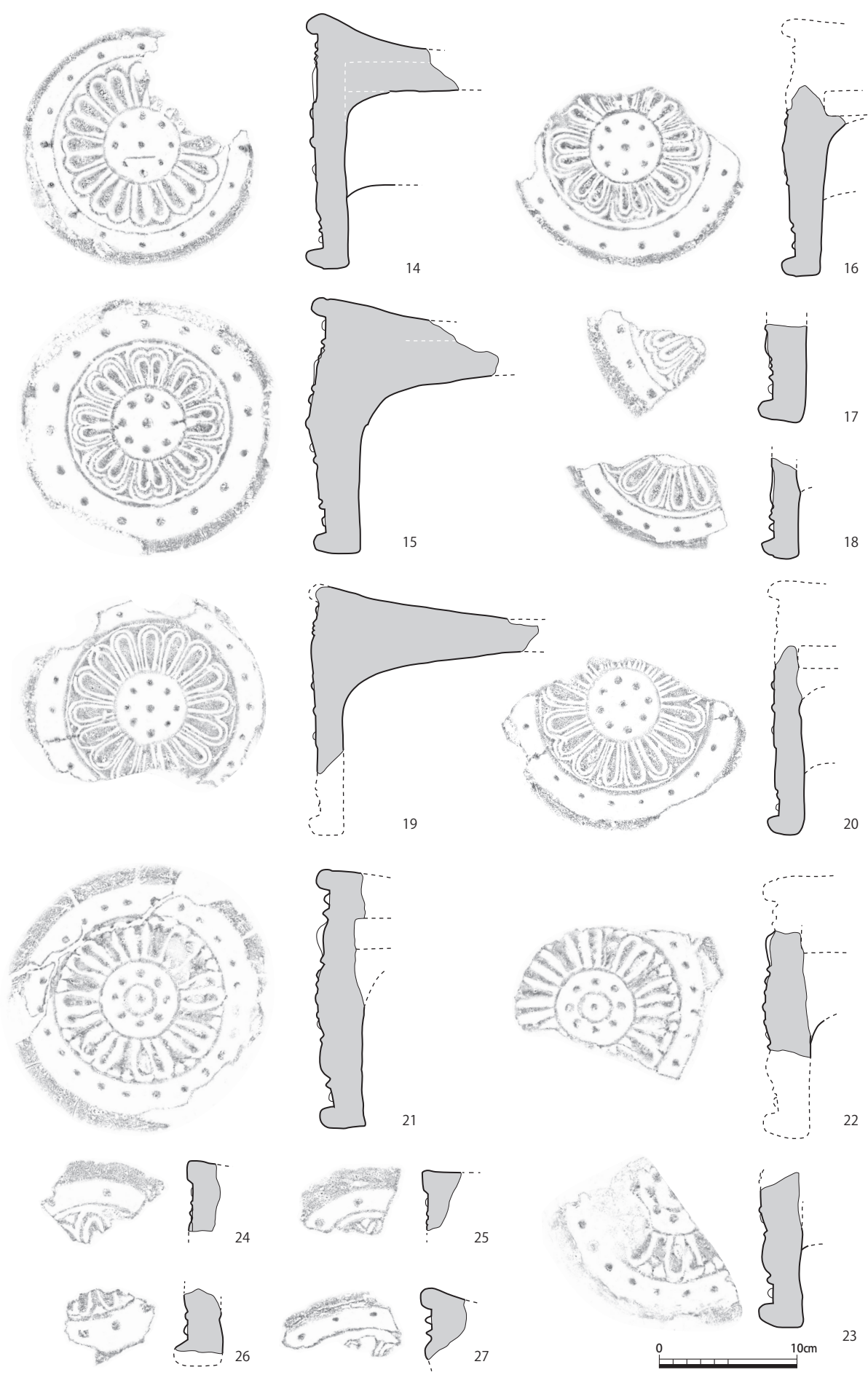


图21 軒丸瓦拓影・実測図1 (1:4)

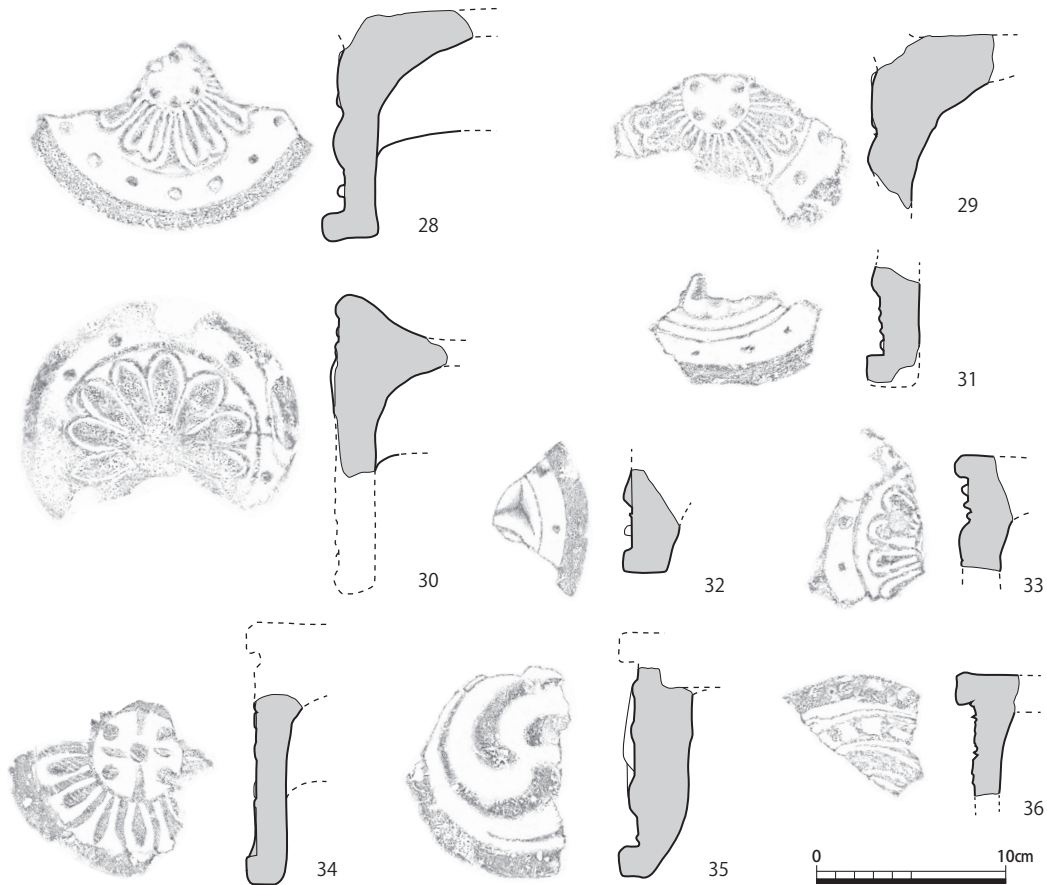


図22 軒丸瓦拓影・実測図2 (1:4)

安時代前期に属するものが大半で、中期、後期は少量である。

軒丸瓦 (図21・22, 図版5)

平安時代前期 (図21) 14は複弁八葉蓮華文である。間弁風の子葉が3葉配される。瓦当部成形は瓦当貼り付け。瓦当部側面には枷の痕跡と思われる木目痕が残る。調整は、瓦当部裏面ユビオサエ、丸瓦凸面タテケズリ、凹面布目跡をナデ消している。中房と珠文に範傷が残る。攪乱31出土。大山崎瓦窯産。15～17は複弁八葉蓮華文である。中房の中央の蓮子を圈線が僅かに巡る。子葉は盛り上がり、撥形の間弁が中房まで至る。また、全体として内区から中房にかけて次第に膨らみ、中房は周縁よりも盛り上がる。瓦当部成形は接合技法。調整は瓦当部側面ヨコナデ、裏面ユビオサエ。西賀茂角社瓦窯産で15がNS152B?, 16がNS152C, 17がNS152である。15は瓦溜り34, 16は溝25, 17は攪乱3出土。18～20は単弁十六葉蓮華文である。蓮弁は一箇所のみ複弁風を呈す。4箇所にも撥形に間弁状の表現が見られる。瓦当部成形は瓦当貼り付け。調整は瓦当部裏面ユビオサエ。20は珠文に範傷が残る。18は瓦溜り35, 19は近世井戸1, 20は平安時代中期整地層出土。西賀茂瓦窯跡産 (NS107)。21～23は複弁八葉蓮華文である。蓮弁風の間弁が認められることから複弁である。瓦当部成形は瓦当貼り付け。調整は瓦当部裏面ユビオサエ後ヨコナデ。21は溝36, 22は瓦溜り35, 23は遺構検出中に出土。西賀茂角社窯産 (NS156)。24は蓮華文軒丸瓦である。間弁はV字状を呈す。調整は瓦当部側面タテケズリ。近世井戸1から出土。平安時代前期か。25は蓮華文である。調整は瓦当部側面タテケズリ。近世整地層から出土。山城洛北産。26は

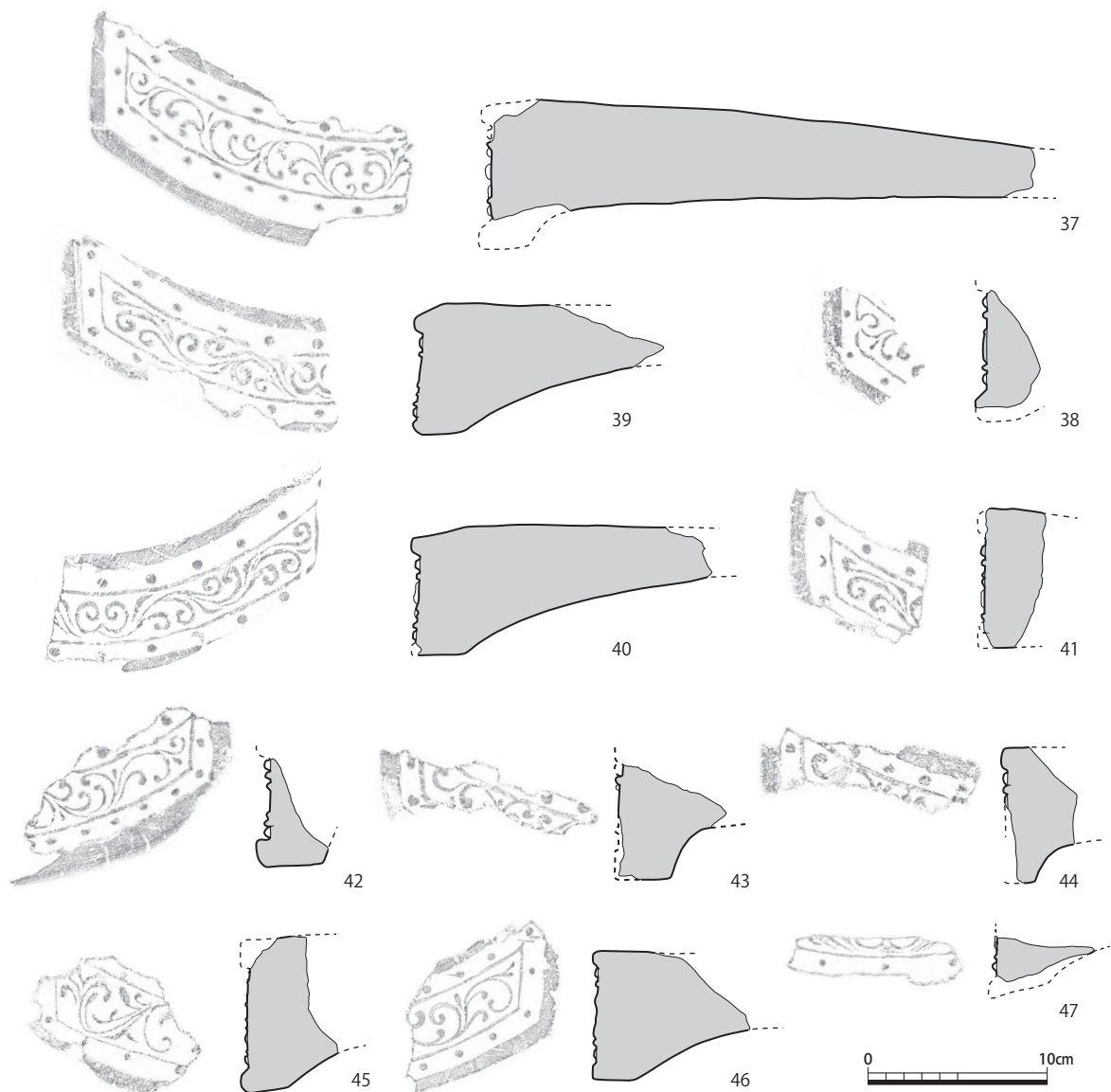


図23 軒平瓦拓影・実測図1 (1:4)

蓮華文である。間弁は撥状を呈す。調整は瓦当部側面，裏面ナデ。近世整地層から出土。平安時代前期か。27は蓮華文である。珠文は高く盛り上がる。調整は瓦当部側面タテケズリ。瓦溜り34出土。山城洛北産。

平安時代中期以降 (図22・図版5)

28・29は複弁八葉蓮華文である。蓮弁は強く盛り上がり，1つおきに撥形の間弁を配す。瓦当部成形は接合技法。調整は瓦当部側面ヨコナデ，裏面ユビオサエ。28は近世整地層，29は遺構検出中に出土。栗栖野瓦窯産。中期。30は単弁十二葉蓮華文である。中房の蓮子は摩耗が進み不明瞭。子葉が僅かに盛り上がり，周縁は低い。瓦当部成形は瓦当貼り付け。調整は瓦当部裏面に強いナデを施す。外区から内区にかけて範傷が残る。攪乱18出土。森ヶ東瓦窯産。中期。31は複弁蓮華文である。圏線は二重線で，珠文は不鮮明である。調整は瓦当部側面ヨコナデ，裏面ユビオサエ。近世整地層から出。中期か。32は複弁四葉蓮華文軒丸瓦である。間弁は盛り上がりT字状を呈す。調整は瓦当部側面ヨコケズリ，裏面ナデ。近世整地層から出土。安井西裏瓦窯産。中期。33は小

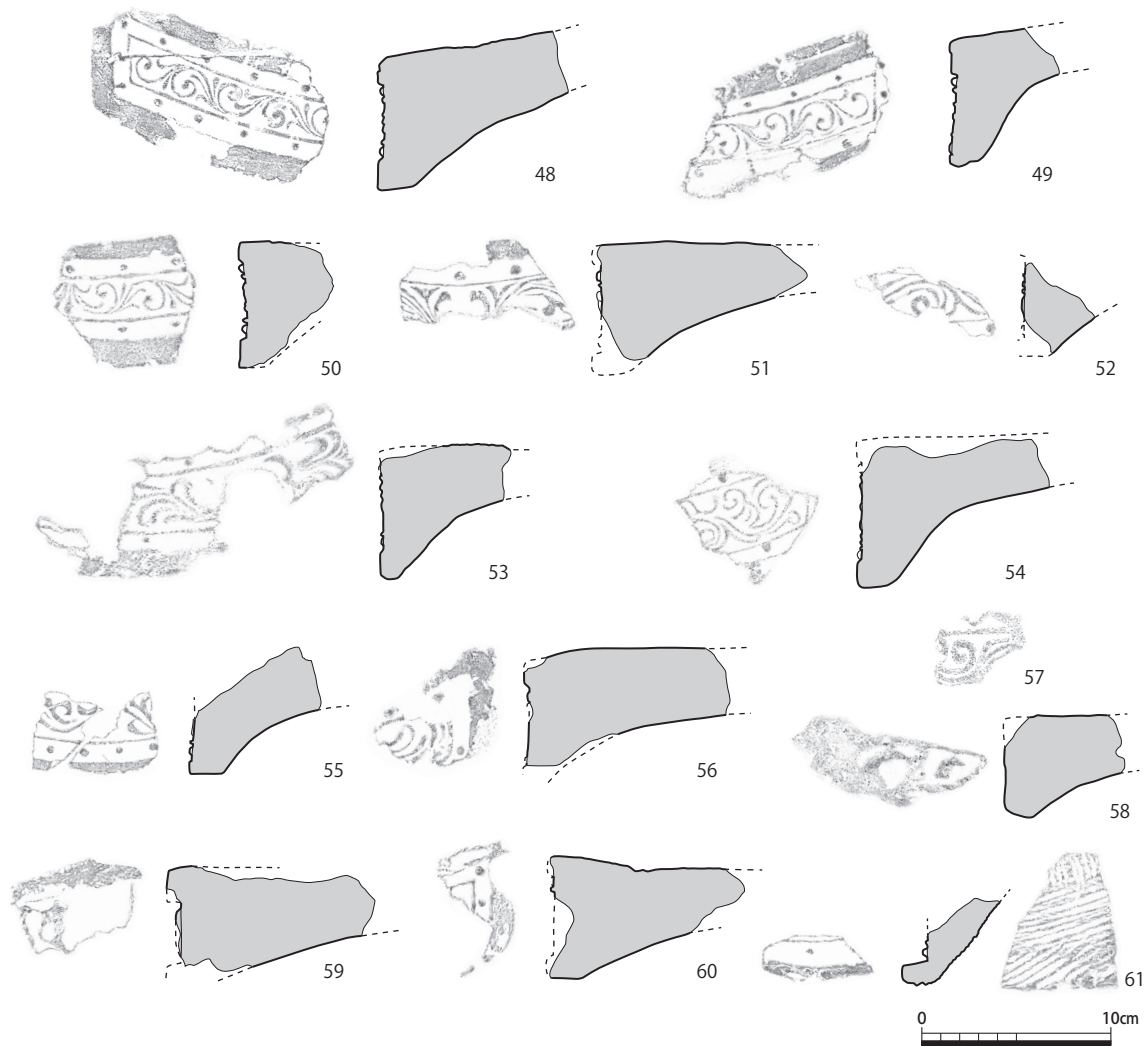


図24 軒平瓦拓影・実測図2（1：4）

型の単弁十六葉？蓮華文である。子葉は盛り上がる。瓦当部成形は瓦当貼り付け。調整は瓦当部側面はナデ、裏面はコビオサエ。近世整地層から出土。中期か。34は小型の複弁蓮華文である。中房の蓮子間に蕊を4弁配す。間弁や子葉は太い隆線で表現し、先端は周縁に接する。周縁の幅は一定では無い。瓦当部成形は瓦当貼り付け。調整は瓦当部側面、裏面ともにナデ。近世整地層出土。後期。35は三巴文である。巴は左巻きで、頭は肉厚で尾は半円を描く程度である。瓦当部成形は瓦当貼り付け。調整は瓦当部裏面はコビオサエ。溝25から出土。後期。36は巴文である。巴は右巻きである。珠文外側にも圈線が廻る。瓦当部成形は不明。調整は瓦当部裏面ナデ、側面ヨコナデ。遺構検出中に出土。後期。

軒平瓦（図23・24，図版6・7）

平安時代前期（図23・図版6） 37・38は均整唐草文である。中心飾りは対向C字形で、上に対葉花文を配する。唐草は左右非対称で、支葉の先端は水滴状になる。曲線顎で、瓦当部凹面ヨコケズリ、顎部凸面から顎部裏面ヨコナデ、37は瓦当部裏面に朱が付着。37は瓦溜り34，38は近世整地層から出土。西賀茂角社窯産（NS207）。39～41は均整唐草文である。中心飾りはC字形であるが、上端は強く巻き込み、下端は互いに接している。曲線顎で、瓦当部凹面ヨコケズリ、顎

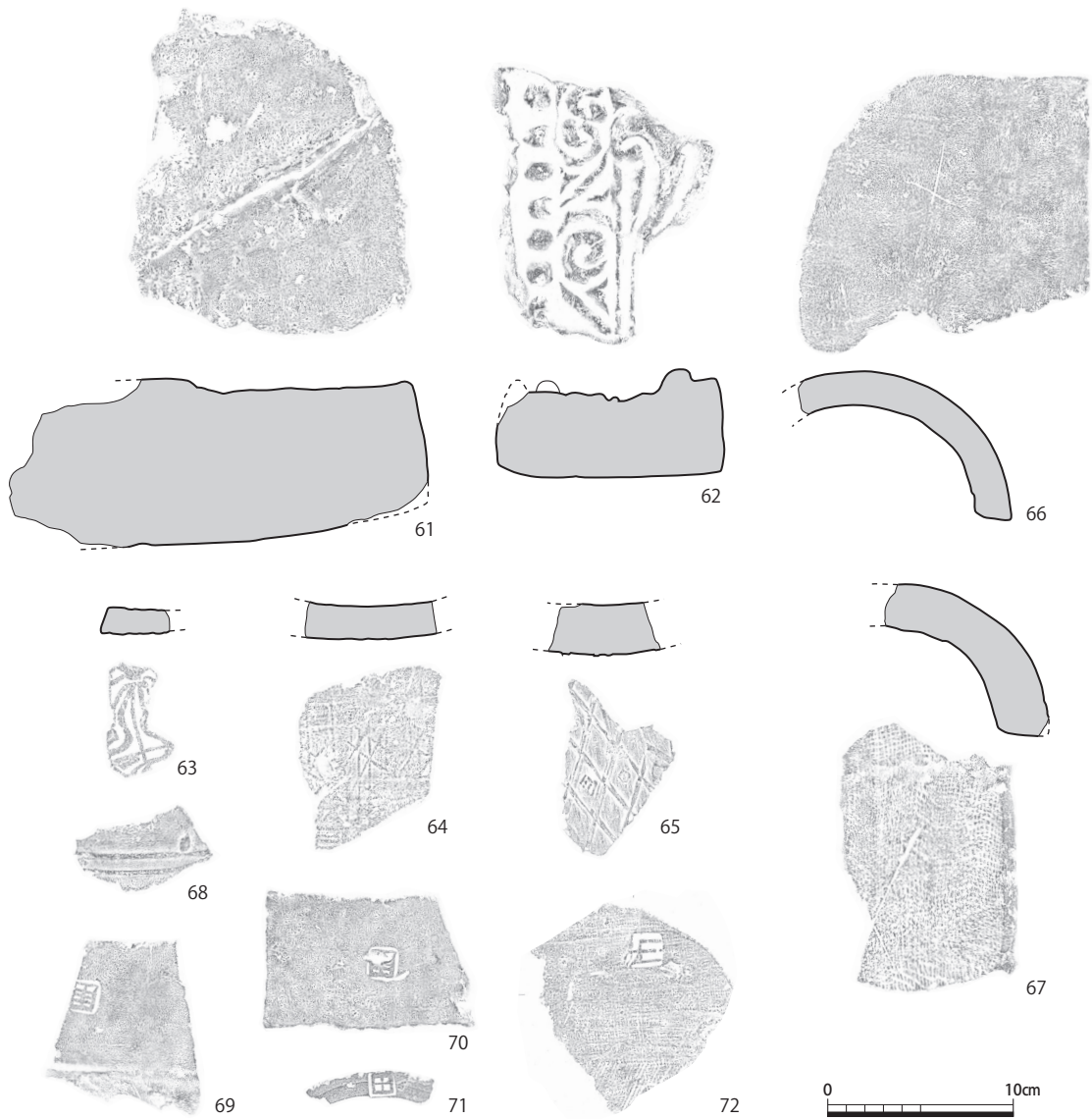


図25 その他の瓦拓影・実測図（1：4）

部凸面ヨコナデ，側面はタテケズリ。39・40は表土剥ぎ中に，41は近世井戸1出土。西賀茂角社産（NS209）。42～44は均整唐草文である。唐草は左右対称である。曲線顎で，瓦当部凹面，顎部凸面，顎部裏面ヨコナデ。42・43は近世整地層，44は攪乱31出土。西賀茂角社産（NS206B）。45は均整唐草文である。曲線顎で，瓦当部凹面，顎部凸面，裏面ヨコナデ，側面ナデ。攪乱44から出土。吉志部瓦窯産（Kb6）。46は均整唐草文である。曲線顎で，瓦当部凹面，顎部凸面ヨコケズリ，顎部裏面タテケズリ，側面ケズリ。近世井戸1出土。西賀茂瓦窯産（NS206B）。47は均整唐草文である。中心飾りは対向C字形である。曲線顎で調整は不明瞭。表土剥ぎ中に出土。西賀茂角社窯産（NS210か）。

平安時代中期以降（図24，図版6・7）48～50は均整唐草文である。中心飾りは水滴状である。瓦当面に対して範が偏っている。48は範の一部が割れ，文様にズレが生じる。曲線顎で瓦当部凹面，顎部凸面，裏面はヨコケズリ。48は瓦溜り35，49は攪乱31，50は攪乱16出土。中期。51は均整唐草文である。中心飾りは対向C字形である。曲線顎で，調整は瓦当部凹面ヨコケズリ，

顎部凸面，裏面ナデ。顎部裏面に朱が残る。攪乱56出土。小野・栗栖野・池田瓦窯産か。中期。52は唐草文である。主葉は大きく巻き込む。曲線顎で，顎部裏面タテケズリ。近世整地層出土。平安京近郊産。中期。53は唐草文である。主葉は緩やかに反転し，子葉は上下に広がる。曲線顎で，顎部凸面，顎部裏面から平瓦部凸面にかけてヨコナデ。顎部裏面に朱付着。攪乱16から出土。山城産。中期か。瓦54は均整唐草文である。曲線顎で瓦当部凹面ヨコケズリ，顎部凸面から裏面ヨコケズリ，顎部裏面に朱が残る。近世整地層から出土。小野瓦窯産か。中期。55は均整唐草文である。顎部凸面はヨコナデ，裏面から平瓦部凸面にかけてタテナデ。瓦溜り35から出土。平安京近郊産。中期。56は唐草文である。子葉は上に広がる。曲線顎で，瓦当部凹面ヨコケズリ，顎部裏面から平瓦部凸面タテケズリ。近世整地層から出土。中期。57は均整唐草文である。主葉は大きく巻き込む。近世整地層から出土。平安京近郊産。中期。58は唐草文？である。曲線顎。調整は摩耗が進み不明瞭である。攪乱26から出土。山城産か。後期か。59は梵字文である。曲線顎で瓦当部凹面から平瓦部凹面にかけて布目，顎部凸面から平瓦部凸面にかけて調整不明，側面ナデ。近世整地層から出土。後期。60は均整唐草文であろう。界線と珠文の一部が残る。曲線顎で瓦当部凹面ヨコケズリ，顎部凸面ヨコケズリ，顎部裏面から平瓦部凸面タテケズリ，側面タテケズリ。胎土は48～50に似る。瓦溜り35から出土。中期か。61は唐草文であろう。外区のみ残る。曲線顎で，顎部凸面から裏面にかけてタタキ。近世整地層出土。丹波産。後期。

その他の瓦(図25, 図版7) 61は鴟尾の鱗部である。外面正段型，内面逆段型である。鱗部の厚さは約8cmを測る。段成形はケズリ出ししか。調整は不明瞭。近世整地層出土。平安時代前期。62は鬼瓦の右下半分である。豊楽殿，朝堂院，西寺等で同範のものが出土している。側面，剝部タテケズリ，裏面の端部はタテケズリを施し，それ以外は板状工具の痕跡が認められる。攪乱41から出土。西賀茂瓦窯群跡産か。平安時代前期。63は平瓦の細片である。凸面に幾何学文様のタタキを施す。側面ナデ，凹面布目が残る。近世整地層から出土。64は平瓦である。凸面に「×」状のタタキが重複して残る。凹面には糸切痕が明瞭に残る。溝25から出土。65は平瓦である。凸面に斜格子状のタタキを施す。格子の中には一部に「□」や隅丸方形の文様が入る。近世整地層出土。平安時代後期か。66は丸瓦で凹面に「×」状のヘラ記号がある。瓦溜り35から出土。67は丸瓦で凸面に「×」状のヘラ記号がある。平安時代中期整地層から出土。68は丸瓦の玉縁部である。凸面に3条の隆線が巡る。色調は灰白色。焼成はやや硬質。胎土は密，3mm以下の小礫少量含む。近世整地層から出土。69・70は丸瓦で玉縁部に「田」の刻印を施す。印の大きさは1.7cm角。瓦溜り34から出土。71は丸瓦玉縁端面に「田」の刻印を施す。印の大きさは1.4cm角。平城宮跡からの出土例が多く，搬入瓦である。瓦溜り34から出土。72は平瓦で凹面に「E」？状の刻印を施す。印の大きさは1.8×1.4～2.1cm。近世整地層から出土。

5. まとめ

今回の調査では、朝堂院延祿堂の基壇西縁及び階段、西回廊の東雨落溝を確認することができた。ここでは、調査成果を踏まえて新たに得られた知見を整理し、まとめとしたい。

(1) 延祿堂基壇規模

先述したように、延祿堂基壇の東西縁については過去の調査で確認されており、東西幅は延石内側でおおよそ5.9丈であることが明らかになっている。調査地北側に接する東西道路上においても基壇東縁の延石が確認されており、延石内側の座標値は $X=-109,135.322$ 、 $Y=-23,558.843$ となる。今回の調査では凝灰岩は全て抜き取られていたが、断面及び平面観察から延石の位置を特定できる。調査区北壁の西縁延石内側の座標値は、 $X=-109,139.0$ 、 $Y=-23,576.1$ となり、平安京の造営尺を1尺 \approx 29.847cmとすると58尺となる。過去の調査成果と1尺の誤差があるが、施行誤差の範囲としても問題ない。

南北幅については、これまで南北縁ともに確認されていないが、復元案では213尺⁷⁾、207尺⁸⁾が提示されている。しかし、『宮城図』の描写から朝堂は左右対称であり、西第四堂である延祿堂の北縁は西第五堂修式堂、東第五堂暉章堂、東第四堂明礼堂北縁と一直線上になると捉えられる。このうち、修式堂及び暉章堂北縁は確認されており、修式堂北縁の座標値は $X=-109,087.07$ である。一方、延祿堂の南縁については今回の調査範囲では確認できなかったが、西辺南端階段の全容を把握したことで一つの手懸かりが得られた。これは、延祿堂と同じ十五間堂である明礼堂において西辺北端階段北辺が見つかっており、暉章堂北縁との位置関係から階段と北縁間の距離が推測可能となるため、明礼堂北端階段の北辺延石内側と北縁延石内側の距離間は4.8mとなる。延祿堂南端階段南辺の延石内側を $X=-109,145.52$ とすると、基壇南縁は $X=-109,150.32$ となり、修式堂北縁の数値を延祿堂北縁に当て嵌めて考えると、南北幅は63.25m(211.9尺 \approx 212尺)となる。

(2) 階段

見つかった階段は、平安宮朝堂院の中では全容が把握できた初めての事例である。改めて規模を示すと、階段の出(基壇辺に直交する張出部分)は1.3m、階段の幅(基壇辺に並行する部分)は4.95mである。断面観察から復元した南北側面の地覆石外面間は4.2mを測る。一般的に壇上積基壇の階段と柱位置の関係は、「登葛石の中央線または外即変を建物の柱の中心線の延長線上にのるように据えるのが一般的である」⁹⁾とされる。登葛石は階段側面の地覆石の上に乗る耳石を指す。朝堂院で確認されている階段に用いられた凝灰岩幅は40cm弱であり、南北側面の地覆石芯間は3.8m強となる。したがって、朝堂院桁行の柱間は地覆石外側であれば14尺、石芯であれば13尺となる。ただし、15間である延祿堂の柱間を14尺とし、建物が長岡宮と同じく切妻造の等間とすると、建物桁行の全長は210尺となる。基壇南北長は212尺であることから、基壇の出がほとんど無くなり成立しがたい。柱間を13尺とすると、桁行全長は195尺となり、基壇の出を8.5尺と

なることから、延祿堂の桁行柱間は13尺とするのが妥当であろう。

なお、壇上積基壇の階段勾配は45度かそれに近い勾配となることから、階段の出が1.3mとすると、基壇高は1.3m前後と推定できる。

(3) 溝63について

基壇盛土を掘り込み、基壇外部まで続く東西方向の溝63は用途を理解することが困難な遺構である。基壇は上部が後世に削平されているため、基壇構築過程のどの時点で成立したのかは明らかではないが、少なくとも調査で確認した基壇盛土の最上層から掘り込まれている。断面観察から、埋土は版築によって埋められており、当初は建物の想定される柱位置に近接するため、布掘地業と理解しようとした。しかし、一列しか確認できないこと、断面形状が緩いU字形を呈すること、基壇外にも広がることから布掘地業とは理解できない。ただし埋土については、基壇内側は版築で固められていることに対し、外側は一挙に埋め戻されており、埋め戻しに際して基壇内外を強く意識している。底面のレベルは基壇外の西側に向かってやや低くなっていることから、何らかの理由で基壇構築途中、又は構築後に水を流すことを目的として掘削されたと考えたい。ただし、現在でも調査地西側は地表面が大きく下がっており、平安宮造営当初も同様の地形であったと捉えられることから、溝を運河として用いることは困難であり排水が目的であったといえよう。

(4) 延祿堂と西回廊間の距離

西回廊については遺構の残りが悪く、今回の調査で東縁に関連する遺構を確認した意義は大きい。溝38は想定される西回廊東縁に近接し、埋土に凝灰岩片をほとんど含んでいないことから基壇外装とは考えにくい。年中行事絵巻に描かれる回廊には雨落溝は描かれていないものの、朝堂院東回廊の北東隅の発掘調査で複数の雨落溝が確認されている。溝には杭跡が残るが部分的であり、全体に護岸が施された痕跡は認められなかった。溝38についても素掘りであるため、雨落溝と判断できる。

朝堂と回廊間の距離については、これまでの調査で東第三堂である承光堂東縁と宣政門西縁が確認されており¹⁰、13.08mという実測値が導き出されている。宣政門西縁は東回廊西縁と直線上に並ぶことから、朝堂と回廊間の距離は44尺となる。この数値を今回の調査に当て嵌めると、回廊東縁はY=-23589.17となる。ただし、溝38の西肩の数値はY=-23588.1であり、雨落溝西肩と基壇東縁はほぼ同じと考えるのであれば、その距離は12mとなり、40尺となる。朝堂院の東西で朝堂と回廊間の距離が4尺異なる理由については、測量と施工の誤差と解釈すべきかどうか事例の増加を待ちたい。

(5) 朝堂院南西部の景観について

先述したように、調査地東南側は大きな段差が存在する。今回の調査でも地山は北東から南西に向かって下がり、古墳時代の流路と考える包含層も同じ向きを持つことから、平安宮造営当時から

の景観を今に残していると考えられる。大きな地形変換点に朝堂院回廊が巡ることは偶然ではなく、外側からの景観を強く意識したものと捉えられよう。今後は、造営当初の旧地形と建物配置にも留意し、調査を進める必要がある。

(西森 正晃)

註

- 7) 辻純一「平安宮の復原」『平安宮 I』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊, (財)京都市埋蔵文化財研究所, 1995。
- 8) 寺升初代「平安宮の復元」『平安京提要』角川書店, 1994。
- 9) 宮本長二郎「階段」『日本考古学事典』三省堂, 2002。
- 10) 梅川光隆『平安宮・平安京跡』ガス管布設工事に伴う立会調査概要 昭和54年度, (財)京都市埋蔵文化財研究所, 1982。

IV 平安宮豊楽殿跡・鳳瑞遺跡

1. 調査経過

今回の調査地は中京区聚楽廻西町86-3, 87で、史跡平安宮跡豊楽院跡に隣接している。史跡範囲は1988年度の発掘調査で確認された豊楽院の正殿である豊楽殿の北西部にあたり、調査地が豊楽殿身舎部分に該当することは確認視されていた。また、周辺では道路よりも一段高まりとして残っている場所もあり、基壇盛土が良好に遺存するものと想定された(図4)。ここで既存建物が解体されたことが契機となり、土地所有所と協議を重ね、文化庁国庫補助事業による遺構範囲確認のための発掘調査を実施することとなった。

調査区は、想定される身舎柱筋の礎石根固めが含まれるよう留意し、道路を挟んで2箇所を設定した(東区・西区)(図2)。調査は平成27年9月1日より開始した。調査の結果、豊楽殿の基壇盛土及び礎石根固めを合計9基確認した。遺構は地中保存されるため検出作業のみを行い、掘削は攪乱を利用した最低限の断割に留めた。途中、根固めと基壇盛土の版築状況が良好に観察できたため、一部の断面剥ぎ取りをおこなった(図6)。遺構面は土嚢と真砂土で養生を行ったうえで埋戻し(図7)、10月2日に全ての作業を終了した。調査面積は計117㎡(東区54㎡・西区63㎡)である。

調査終了後には成果発表を行い(12月1日)、京都市考古資料館にて礎石根固め断面剥ぎ取りと写真パネルを展示し(12月1日～13日)、成果の公表に努めた(図8)。

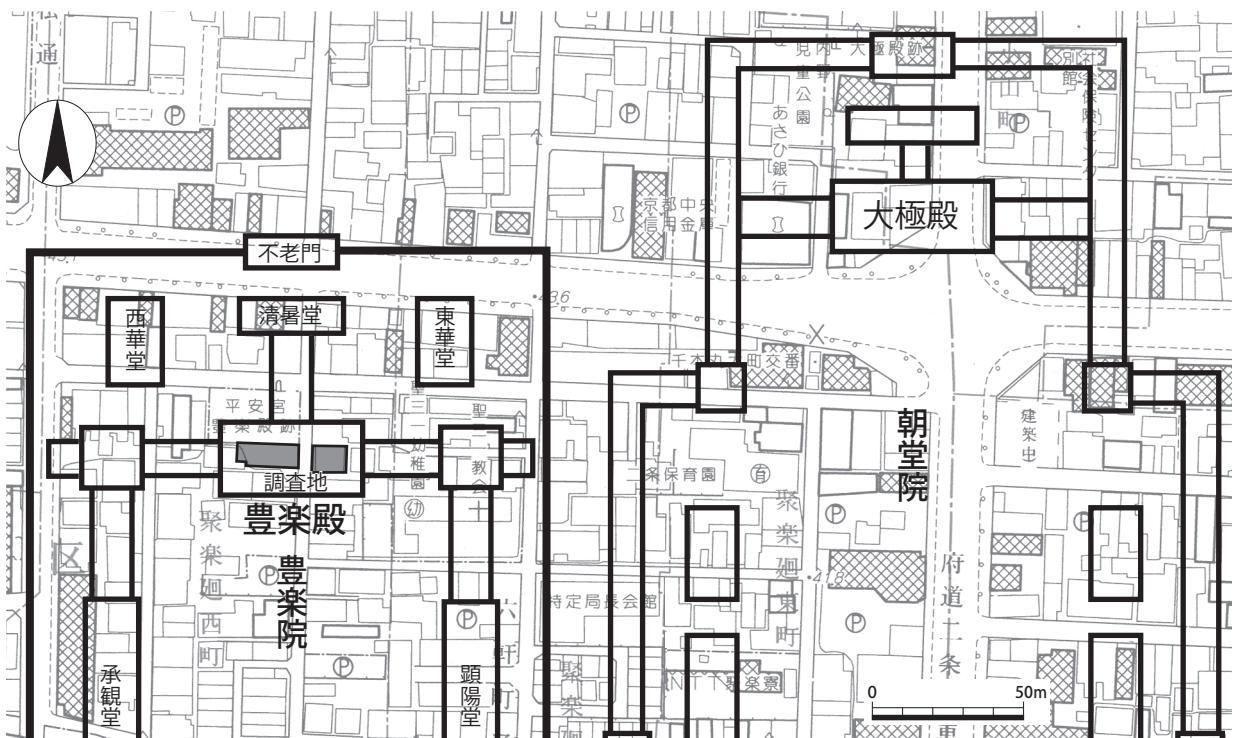


図1 調査位置図(1:2,500)

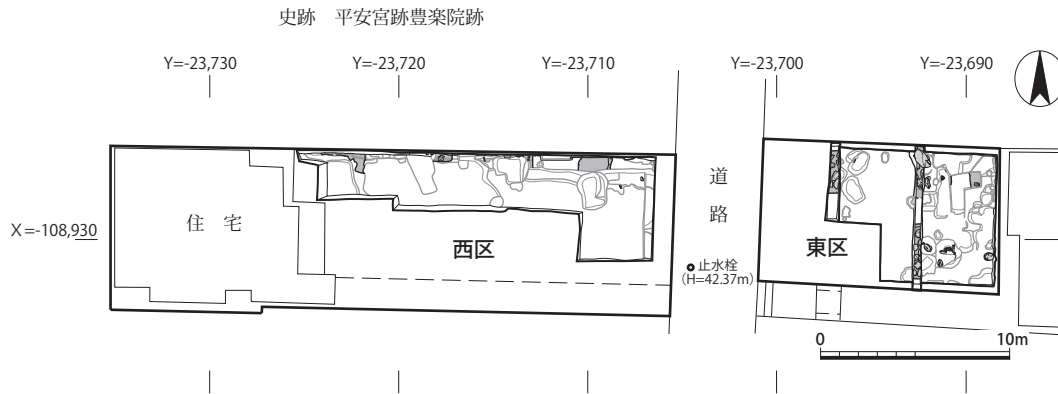


図2 調査区配置図 (1:400)



図3 西区調査前風景 (東から)



図4 東区調査前風景 (西から)



図5 作業風景



図6 土層剥ぎ取り状況



図7 埋戻し状況

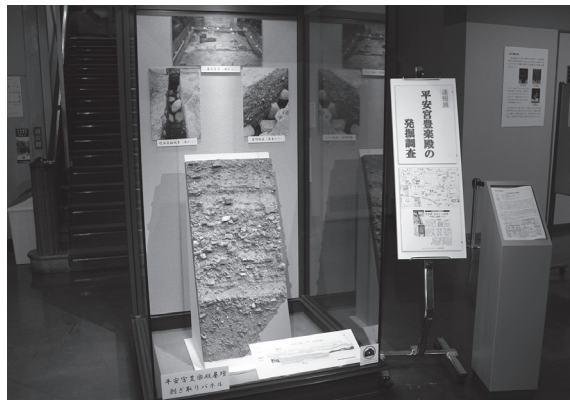


図8 剥ぎ取り・写真パネル展示状況

2. 遺 跡

(1) 位置と環境

平安京が位置する京都盆地は、河川による扇状地堆積によって形成されている。京域は、賀茂川と高野川が合流してできた鴨川の扇状地が北東から南西方向へ大きく裾野を広げ、西側は紙屋川、御室川が小規模な扇状地を形成、南西部は桂川の氾濫源となる。その中で宮域は南西部で紙屋川の扇状地が食い込んでくるが、船岡山から派生する丘陵上にほぼ収まるように立地する。

丘陵の裾は、東側から南東側にかけて神泉苑や冷然院の園地の元となった古堀川と推定される幅70mに及ぶ大規模な流路が検出されており、西側から南西部にかけては天神川が形成する谷とその影響を受けている。宮域の設定にあたり、両河川が刻む谷に挟まれた舌状に張り出す丘陵部を占地していることがわかる。丘陵部は洪水の恐れがほとんど無く、造成を行う上でも平坦面を確保しやすいことから、効果的な占地であるといえる。

豊楽院 豊楽殿を正殿とする豊楽院は、朝堂院の西に隣接し、南北134丈、東西57丈の規模を持つ。平安時代前期の儀式書である『内裏式』や『儀式』によると、天皇が出御する正月の元日、七日白馬^{あおうま}、十六日踏歌^{とうか}、十七日射礼^{じやらい}の各節会^{せちえ}のほか、大嘗祭や新嘗祭の場とされ、『西宮記』には「天子宴会之処^{てんしえんかいのどころ}」と記されるなど、国家的な饗宴の場としての捉えられていることがわかる。

豊楽院の造営は遷都よりもやや遅れ、延暦十八年（799）に渤海使を迎えた正月七日の白馬節会の際、「豊楽殿未成功^{ぶらくでんいまだこうならず}」のため龍尾壇に借殿を設けたとあり、未完成であったことがわかる（『日本後紀』）。大同三年（808）には平城天皇の大嘗会が豊楽院で執り行われていることから（『日本紀略』）、その頃までに完成していたことがわかる。豊楽院は、次の嵯峨天皇の代に最も使用頻度が高まるものの、9世紀後半以降、大嘗会を除く各節会は内裏など別の場所で催されるようになる。10世紀後半になると豊楽院の顛倒や大風による倒壊などの記事が散見され、藤原道長が自身が建立した法成寺の緑釉瓦生産の銅不足を補うために、豊楽殿の鴟尾を取らしめたのは万寿二年（1025）のことである。その後、康平六年（1063）に全焼し、以後再建されることはなかった。

(2) 周辺の調査（図9）

調査地周辺の主要な調査成果について述べる。

調査1 昭和3年、市電敷設工事に伴う丸太町通改修工事に伴う調査で、多量の瓦とともに基壇外装に用いられた凝灰岩を複数地点で検出している。凝灰岩は3か所で確認され、北側の一箇所では延石と地覆石が組み合わさった状態で基壇の南東隅部を形成し、さらに南に10m隔てた場所でも東西方向の延石2石が原位置を保った状態で出土している。上記の基壇は、後に豊楽院北門である不老門南東隅および清暑堂北縁であることが明らかにされている。

調査2 個人住宅建設に伴い緊急に実施された発掘調査で、厚い焼土層と多量の瓦片、土器片等が出土している。また、地山直上に凝灰岩の破片や屑を多量に含む整地層が面的に広がることが確

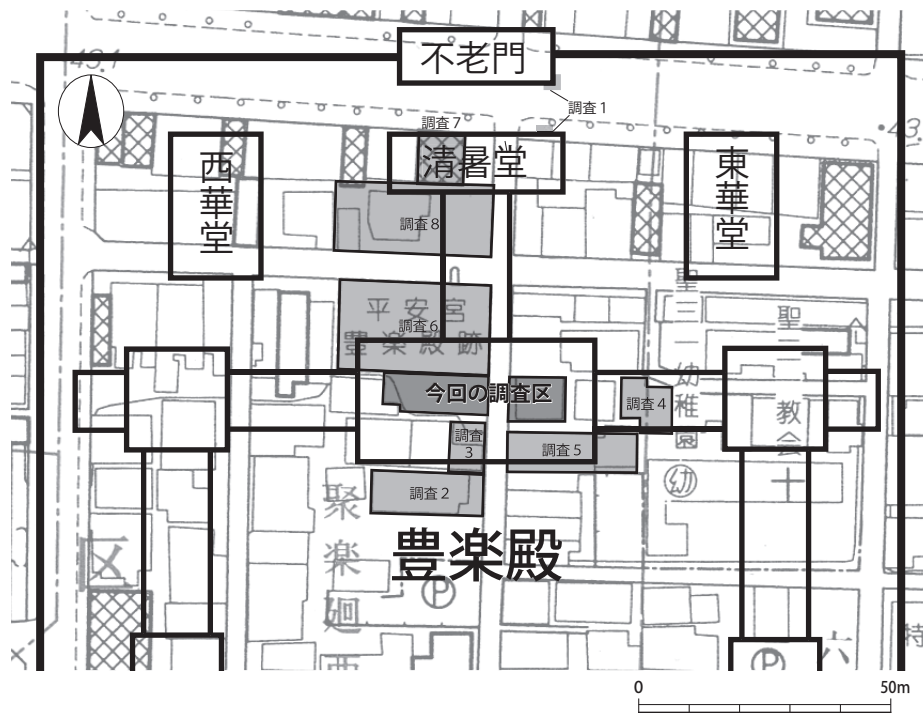


図9 周辺調査位置図（1：1,500）

認められ、北側に豊楽殿の存在が推定されている。

調査3 個人住宅建設に伴う発掘調査で、版築で構築された盛土と、1基の礎石据え付け穴を確認している。これは、豊楽殿の基壇盛土と礎石下根固めの壺掘地業である。基壇は16層以上の版築で築かれた約1.5m分を確認したとされ、壺掘地業は一辺2.2×2.3mの方形で深さは約50cmが残り、中に約30cm前後の河原石（花崗岩、砂岩、チャート）が並べられ、砂礫を含む粘質土で積み重ねられていた。

調査4 個人住宅建設に伴う発掘調査である。掘削深度の制限があり、下層の掘り下げは行っていないが、凝灰岩片を含む平安時代の整地層を確認した

調査5 個人住宅建設に伴う発掘調査で、2箇所の調査区を設けた。後世の削平を受けて遺構の残りは悪かったものの、北東隅で版築で築かれた盛土を約50cm分確認した。

調査6 昭和63年、共同住宅建設計画に伴う発掘調査で、豊楽殿基壇北西縁と北面西階段、中央階段及び基壇上面にて礎石根固めの壺掘地業を4基確認している。調査3の成果と合わせると、地業は豊楽殿の北庇側柱筋に相当し、桁行9間、梁行4間の四面庇付東西棟礎石建物で、柱間が身舎桁行15尺、梁行14尺、庇の出13尺、基壇の出11尺に復原されている。さらに柱位置を復原できたことから、豊楽院の中軸が朝堂院中軸線から69.5丈に想定でき、豊楽院の東西幅が57丈で、朝堂院の東に位置する中務省、太政官、民部省の東西幅と同一であることを明らかにしている。また、豊楽殿と北側の清暑堂を繋ぐ北廊を検出し、北廊が北面中央階段を壊して構築されていることから、北廊は豊楽殿完成後に付け加えられたことが明らかになっている。（豊楽院の正殿である豊楽殿の遺構が良好に残ること、平安宮内の施設に変遷があったことを発掘調査成果で裏付けた重要な成果であることから、対象地は平成2年2月22日付で「史跡平安宮豊楽殿跡」として国史跡として指定さ

れた。)

調査7 昭和63年、共同住宅建設に伴う発掘調査で、清暑堂跡の基壇盛土及び礎石根固め痕を確認した。根固めの位置が豊楽殿の柱筋の北延長線上にあたることから、清暑堂身舎桁行の柱間は、豊楽殿と同様に15尺であると復原された。(ただし、調査8の成果から、清暑堂の桁行柱間は14尺に訂正されている。)

調査8 平成19年、範囲確認のための発掘調査で清暑堂基壇南縁と南面西階段及び豊楽殿北廊の基壇盛土を確認した。階段の幅から清暑堂の身舎桁行7間の柱間14尺であること、清暑堂南面中央には階段は無く、北廊と清暑堂が同時期に造営されていること、北廊は創建以降、2度にわたる拡幅が行われていることが明らかとなっている。(調査地は、遺構残存状況が良好であり、清暑堂の規模及び豊楽殿北廊の変遷が明らかになったことは、調査面積が狭い平安宮跡の調査において重要な成果であることから、平成20年7月28日付けで史跡に追加指定されるに伴い、名称は「史跡平安宮豊楽殿跡」から「史跡平安宮跡豊楽院跡」に名称変更された。)

文献一覧(調査番号と下記の番号は対応する)

- 1) 佐藤虎雄「平安宮豊楽院の遺物」『古代学』第6巻第4号、(財)古代学協会、1958。
家崎孝治「平安宮の復元について」第11回京都市考古資料館文化財講座資料、1987。
- 2) 寺島孝一「平安宮推定豊楽院跡の調査」『古代文化』第26巻第4号、1974。
- 3) 梶川敏夫「平安宮豊楽殿跡緊急発掘調査概要」『平安宮跡』京都市埋蔵文化財年次報告1976-I、京都市文化観光局文化財保護課、1977。
- 4) 「付章I-10豊楽院跡」『平安宮I』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1995。
- 5) 吉崎伸「平安宮豊楽院跡」『平安京跡発掘調査報告 昭和55年度』京都市埋蔵文化財調査センター、1981。
- 6) 鈴木久男「平安宮豊楽院(1)」『平安京跡発掘調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局、1989。
- 7) 鈴木久男・網伸也「平安宮豊楽院(2)」『平安京跡発掘調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局、1989。
- 8) 西森正晃「平安宮豊楽院跡・鳳瑞遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成19年度』京都市文化市民局、2008。

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図10・11)

調査地の現地表面の標高は、西区が42.5mで、東区は道路面よりも一段高く43.1mである。

東区は遺構の残りが良く、表土直下のGL-5cmにて基壇盛土となる。基壇盛土は最大で70cm分を確認し、GL-0.7mで黒色粘質土の土壤化層、-1.05mで地山の硬く締まった黄褐色シルトとなる。豊楽殿造営前の旧地表面である土壤化層上面の標高は42.5m、地山上面では42.35mとなる。

一方で、西区は近代以降に基壇盛土を含め大きく削平を受けている。基本層序は、現代盛土、近現代整地層、包含層と続き、浅いところではGL-5cmで礫を少量含む黒色シルトの土壤化層、-10cmで暗褐色砂礫の地山となる。地山の標高は42.4mである。砂礫層は西に向かって下がり、西半では砂礫層の上層に黄褐色シルトが堆積する。

(2) 遺構

遺構は、近世～現代の攪乱以外は全て豊楽殿に伴うものである。東区では遺構残存状況が良好で、豊楽殿身舎北東部の礎石根固め3基と東面庇の根固め2基、版築で構築された基壇盛土を確認した。西区では近代以降に前面の道路高に合わせるために造成され、基壇は大きく削平され盛土は残っておらず、僅かに残された身舎北側桁行の根固め下層の壺掘地業を4基確認した。

なお、成果発表時に「壺掘地業」と表現したものは、礎石根固めの一工程を指すものであることから、ここでは根固め下層の地業を示す表現として「壺掘地業」を用いる。

東区 (図11・12, 巻頭図版1, 図版1～3)

基壇・礎石根固め (図11・12) 豊楽殿の基壇は版築で構築されている。基壇土は最大で約0.7mが残り、基壇外装を確認した昭和63年度の調査5の延石上面 (H=42.50m) から0.5mを測る。検出した基壇上面には礎石は残存しないものの、礎石の据付位置を示す根固めを5基確認した。豊楽殿身舎北東隅 (根固め2) と身舎桁行 (根固め1)、梁行 (根固め3)、東面庇の2基 (根固め4・5) である。

豊楽殿の基壇と礎石根固めの構築工程は不可分であるため、合わせて報告する。基壇の2箇所断面からその工程は以下のように復元できる。

①北から南に下がる旧地形の緩斜面に基壇を構築するため、地山を削平することなく土壤化層上に黒褐色粘質土を積み上げる。この工程を盛土と称する。盛土には、旧地表面に存在したと考えられる土壤化層の黒褐色粘質土を用いており、黄褐色シルトをブロック状に含み、土師器細片が僅か

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代	根固め1～9	豊楽殿基壇盛土・ 根固め9箇所

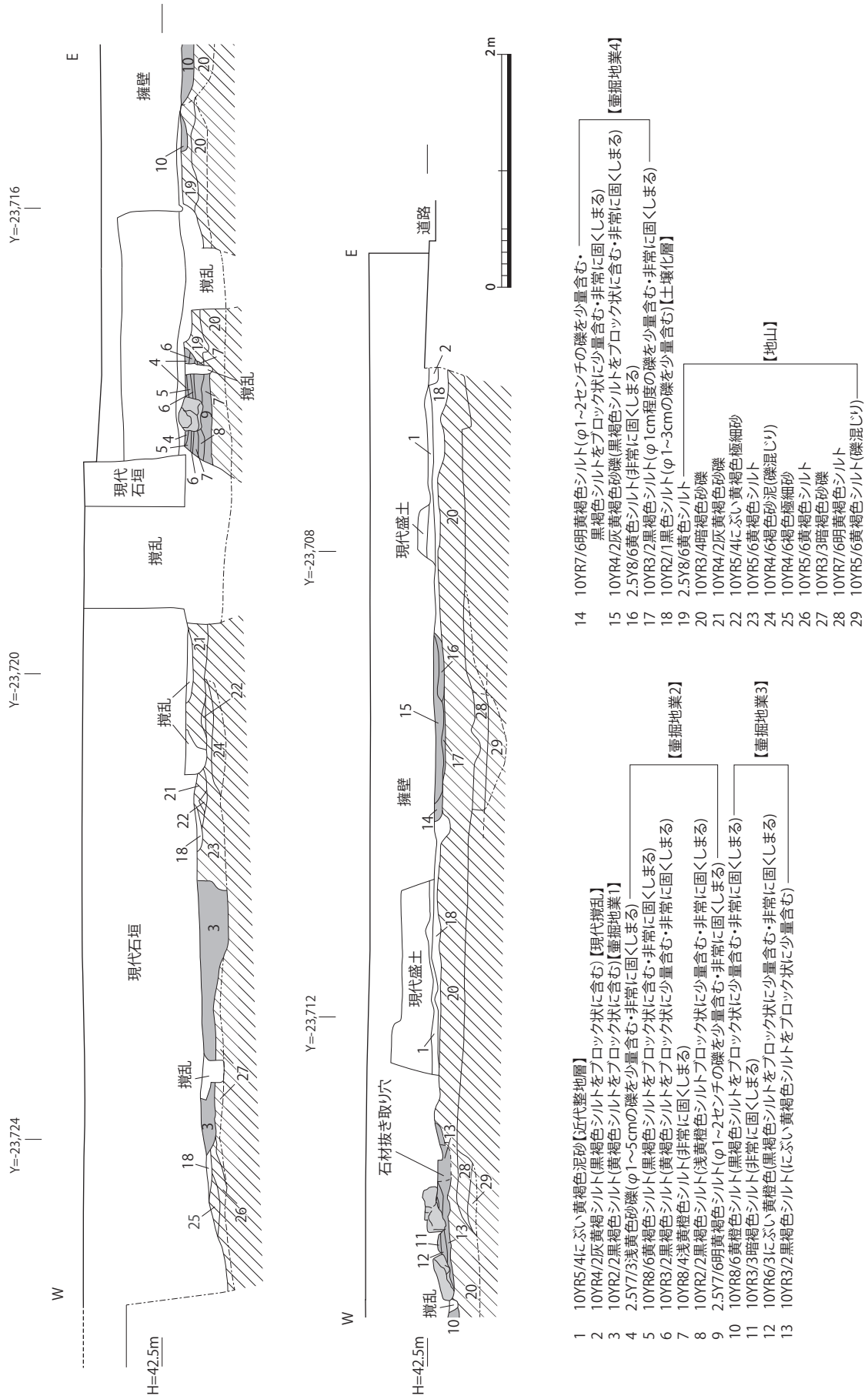


図10 西区北壁断面図 (1:50)

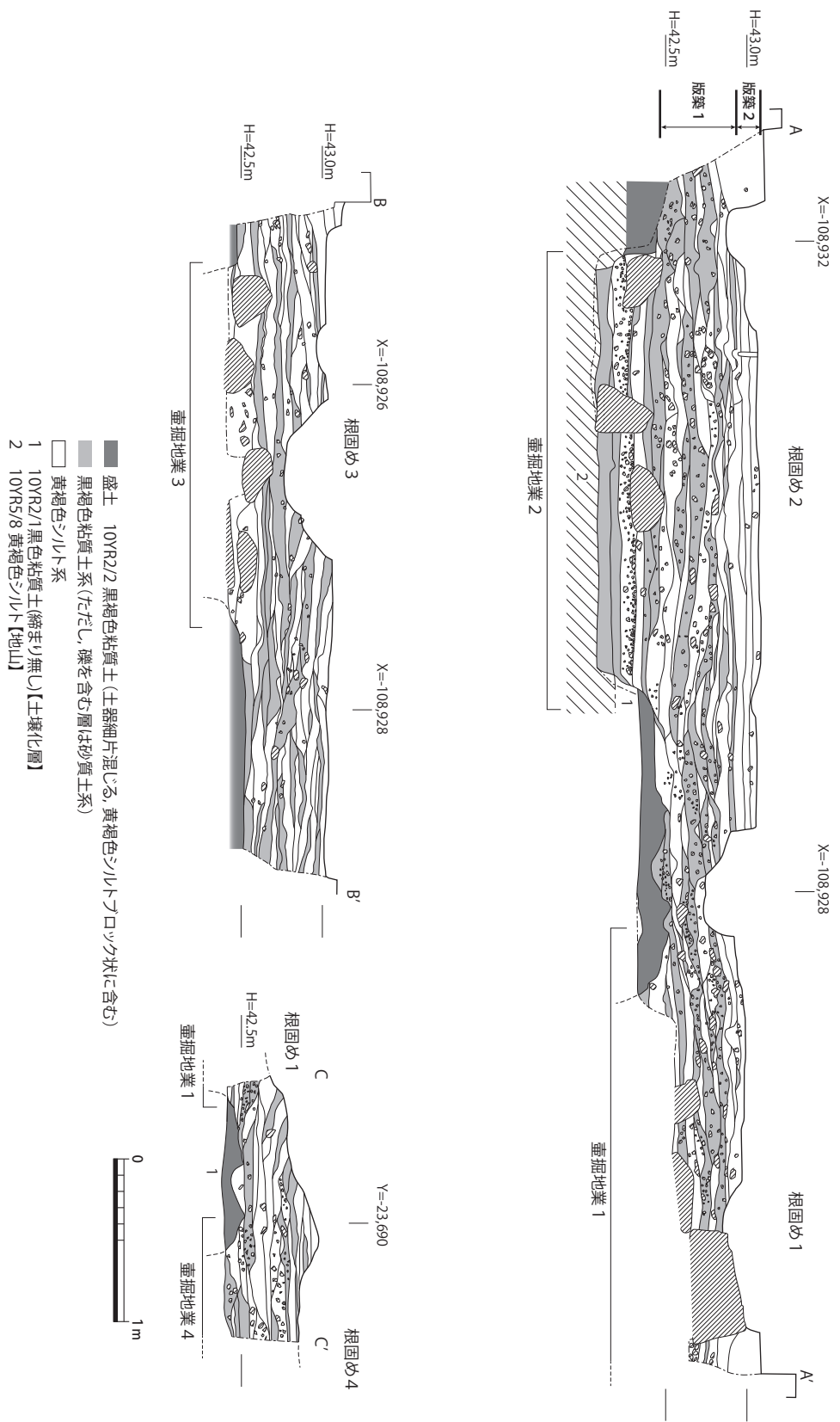


図 11 東区断割 1・2, 攪乱 3 北壁断面図 (1:40)

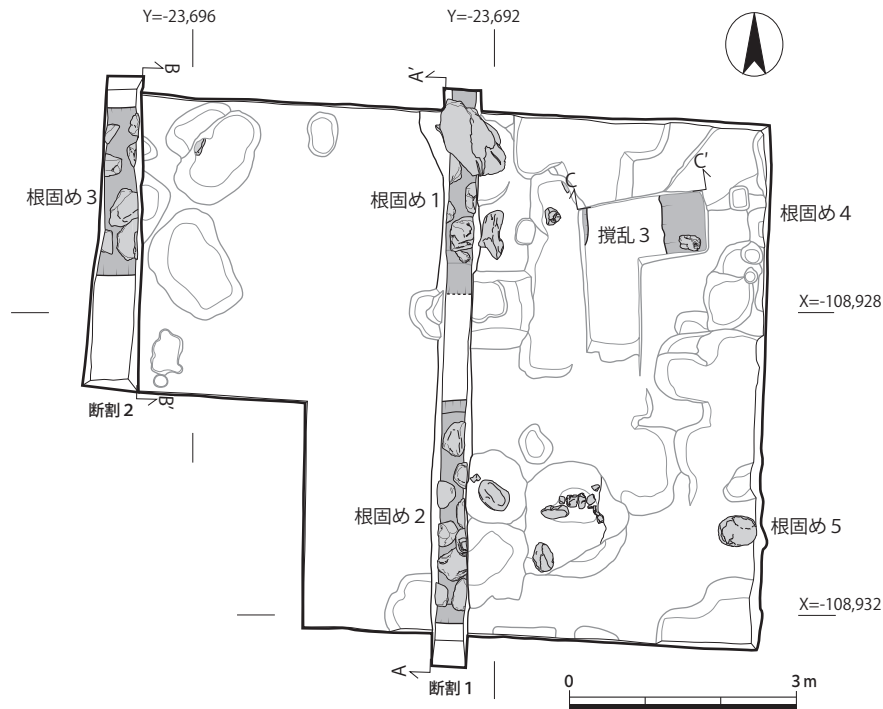


図12 東区平面図（1：100）

に含まれている。締まってはいるが、版築で築かれたような固く叩き締められた痕跡は認められない。

②盛土構築後、礎石の据付位置を中心に、盛土上面から平面形が隅丸方形の壺掘地業を構築する。地業の規模は、一辺が2.2～3.0mで、過去の調査成果から平面形は隅丸方形を呈す。壺掘地業の観察については、断割を行った根固め2（壺掘地業2）について述べる。地業は、固く締まった黄褐色シルトの地山まで掘り下げ、深さは0.4mを測る。底面は平坦である。地業の内部には、直径30～50cmを測る砂岩やチャートの巨礫を重ならないように並べ、その隙間を版築で積み上げていく。版築は、底部から黒褐色系粘質土、小礫を多量に含み極めて固く締まる灰黄褐色シルト、礫を少量含む黄褐色シルト、礫をほとんど含まない黒褐色シルトと続く。版築の単位は2～10cmで、合計7層確認できる。層の上面には直径約10cmの搗き棒の痕跡が認められる場所もある。各壺掘地業の一辺の規模は、1が2.7m以上、2が3.0m、3が2.2mである。4は攪乱底で一部を確認したのみで、5は壺掘地業を検出しておらず、巨礫の分布から位置を同定している。

③続いて、盛土及び壺掘地業の上部に版築で土を積み上げていく。地業上部の版築は、地業内の巨礫が頭を出しているため、この礫を覆うように構築され、断面は凸面レンズ状を呈す。凸面レンズ状の範囲は地業よりも一回り大きい。さらに地業上面には、40～120cmの巨大な礫を配置し、隙間を埋め、礫を覆うように土を積み上げていくが、並行して基壇本体の版築も行っている。版築に用いる土は、地業上部も基壇本体も共通しており、小礫を多く含む黄褐色シルトや黒褐色粘質土、砂質土を互層に積み上げており、非常に固く叩き締めている。版築の単位は2～5cmと細かく各層内はさらに数mm単位で細分できる。この非常に固く締まった版築と地業上部のレンズ状版築は、盛土上面から高さ40～50cmまで積み上げられている。この工程を版築1とする。

なお、地業上部に配される巨礫は、身舎北東隅である根固め1と他の根固めとでは大きさが一回

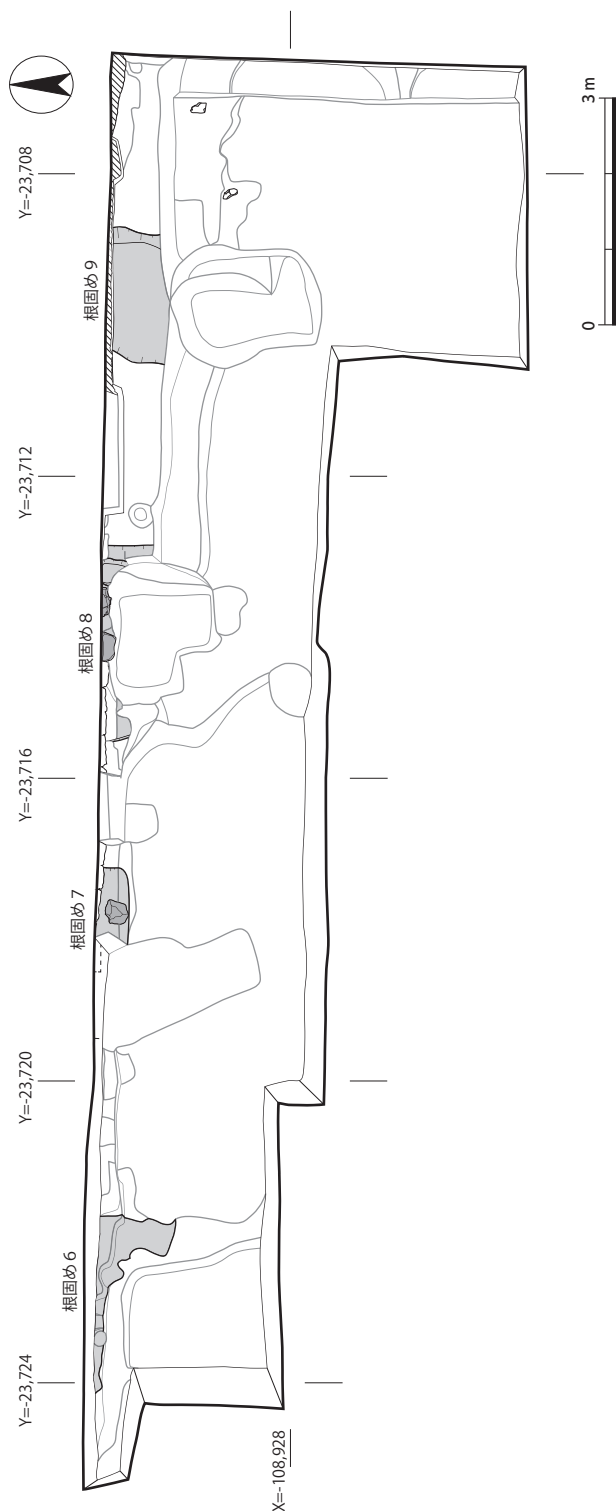


図13 西区平面図 (1 : 100)

り異なることから、建物隅部のみ、巨礫を選択して用いられたことが指摘できよう。

④版築1の上部に、主に礫をほとんど含まない明黄褐色シルト系の土で版築を行う。版築の単位は6～10cmで、最大で約30cm残るが、版築1ほど固く叩き締められていない。これを版築2とする。

なお、検出した基壇盛土上面には、礎石が据えられた痕跡も、抜き取られた痕跡もなく、本来の基壇高はさらに高いものと想定される。正殿クラスの礎石規模から鑑みると、基壇高は2mを下ることはない。

西区 (図10・13, 図版4・5)

礎石根固め 豊楽殿身舎北側柱列の礎石根固めを4基確認した。根固め6が身舎北西隅にあたる。しかし、西区では後世の削平が著しく、基壇盛土は全く残っておらず、根固めは下層の壺掘地業の部分的な検出に留まる。地業はいずれも南肩は削平を受け、北肩は調査区外である。地業の底は固く締まった砂礫層の地山まで掘下げられているため、砂礫層のレベルに応じて異なる。埋土には河原石を入れ、黒褐色シルトと黄褐色系シルトの互層を主体とする版築によって構築されているが、根固め6、10には河原石は残っていない。なお、根固め6の埋土は、地業最下層しか残っておらず、黄褐色シルトをブロック状に含む固く締まった黒褐色シルトである。

検出面での各地業の規模は、6が東西2.35m、南北1m、深さ0.25m、7が東西1.0m、南北0.7m、深さ0.25m、8が東西2.5m、南北0.6m、深さ0.25m、9が東西1.7m、南北0.7m、深さ0.07mを測る。

4. 遺物 (図14)

今回の調査では、両調査区は全て基壇内部に位置するため、遺物の出土は少量で、全て攪乱から出土したものである。遺物の種類は、土師器、須恵器、緑釉陶器、陶磁器、瓦類、石製品等である。

1は唐草文軒平瓦である。主葉は連続して緩やかに反転し、支葉は巻き込む。瓦当部成形は貼り付け技法。焼成はやや軟質。小野瓦窯産。平安時代中期。2は瓦製の塼である。長辺14cm以上、短辺11cm、厚さ6.2cmである。1・2ともに西区攪乱出土。

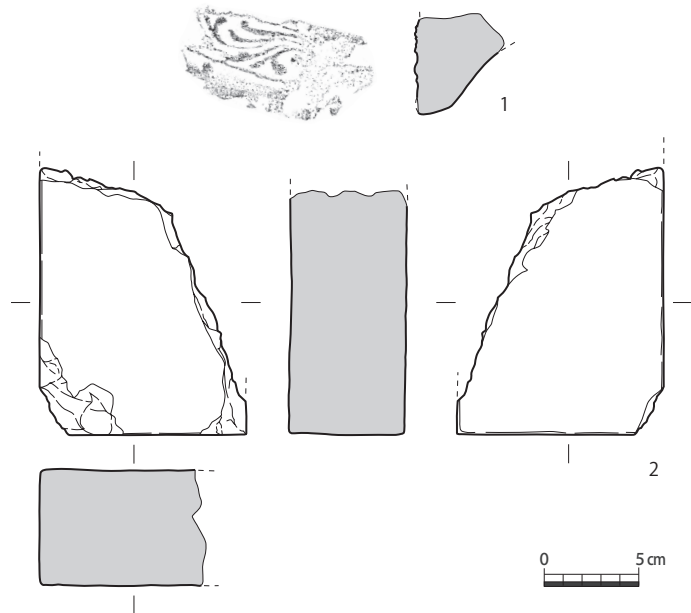


図14 出土遺物実測図(1:4)

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	土師器, 須恵器, 緑釉陶器, 陶磁器, 瓦類, 石製品		瓦類2点		
合計		2箱	1点(1箱)	0箱	1箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

5. まとめ

今回の調査では、当初目されていた通り、東区で豊楽殿の基壇盛土が良好に残っていたことから、礎石根固めを5基検出し、西区でも残りは悪いものの根固め下層の壺掘地業を4基検出することができた。中でも、基壇の構築過程及び豊楽殿身舎の礎石根固めを確認した意義は大きい。ここでは、過去の調査成果を踏まえ、今回検出した遺構の評価を行いたい。

(1) 基壇と礎石根固め工法

今回検出した基壇と礎石根固め工法は特異であり、これまで平安宮では豊楽殿で確認されているのみである。また、基壇盛土が良好に残るため、新たな知見を得ることができた。改めて過程を示すと以下の通りである。詳細は遺構の説明で述べているため、簡潔に示す。

- ① 地山を削平せず盛土を行う【盛土】
- ② 盛土構築後、礎石据付位置を中心に隅丸方形に掘削し、壺掘地業を行う。地業内には直径30～50cmの巨礫を並べている。【壺掘地業】
- ③ 盛土上面及び、壺掘地業上部に念入りな版築を積み上げる。地業上部の版築は、地業内に含まれる巨礫の上面が露出すること、上部にも同様の巨礫を据えることから、断面は凸面レンズ状を呈す。ただし、レンズ状の版築と並行して基壇本体の版築も行う。【版築1】
- ④ 版築1上面に、明黄褐色系シルトで版築を行う。【版築2】

このような工法に類似するものとしては、これまで恭仁宮大極殿、平城宮第二次大極殿の正殿クラスを始めとして、長岡宮では朝堂院西第三堂のほか、宮内で数例知られており、都城固有の地業の可能性が指摘されている¹⁾。ただし、豊楽殿で用いられた工法は、これまでの事例と異なる点も多い。基壇盛土途中で壺掘地業を構築するのは、恭仁宮大極殿の四隅以外の地業に類するが、地業内に礫はほとんど含まれていない。巨礫は壺掘地業上部にも配されており、基壇内にこれほどの巨礫を多用する例は他に見られない。また、壺掘地業上部を覆う凸面レンズ状の版築は、他の事例では円丘を構築した上で基壇本体の版築を行っているが、豊楽殿では二つの版築を並行して積み上げている。工法の違いは、地山の状態や上部の建物構造によって使い分けていることも十分考えられる。しかし、版築の作業工程において、先に円丘を積み上げるよりも、基壇本体と並行して行うほうが、搗き棒で突く力が分散することを防いでいる可能性を指摘したい。また、基壇構築にかかる時間も最短であり、最も合理的な当時最先端の工法といえるだろう。

(2) 豊楽殿の規模 (図13)

昭和63年度(調査6)の調査において、礎石根固め跡が5基検出され、基壇北西縁を確認したことによって、根固めは建物の底にあたることが明らかとなった。この成果から、昭和51年度調査(調査3)で検出された根固めも底を構成する柱位置の一つであることがわかり、豊楽殿は、建物が桁行9間、梁行4間の四面庇付東西棟礎石建物で、柱間寸法は身舎桁行15尺等間、梁行14尺、庇

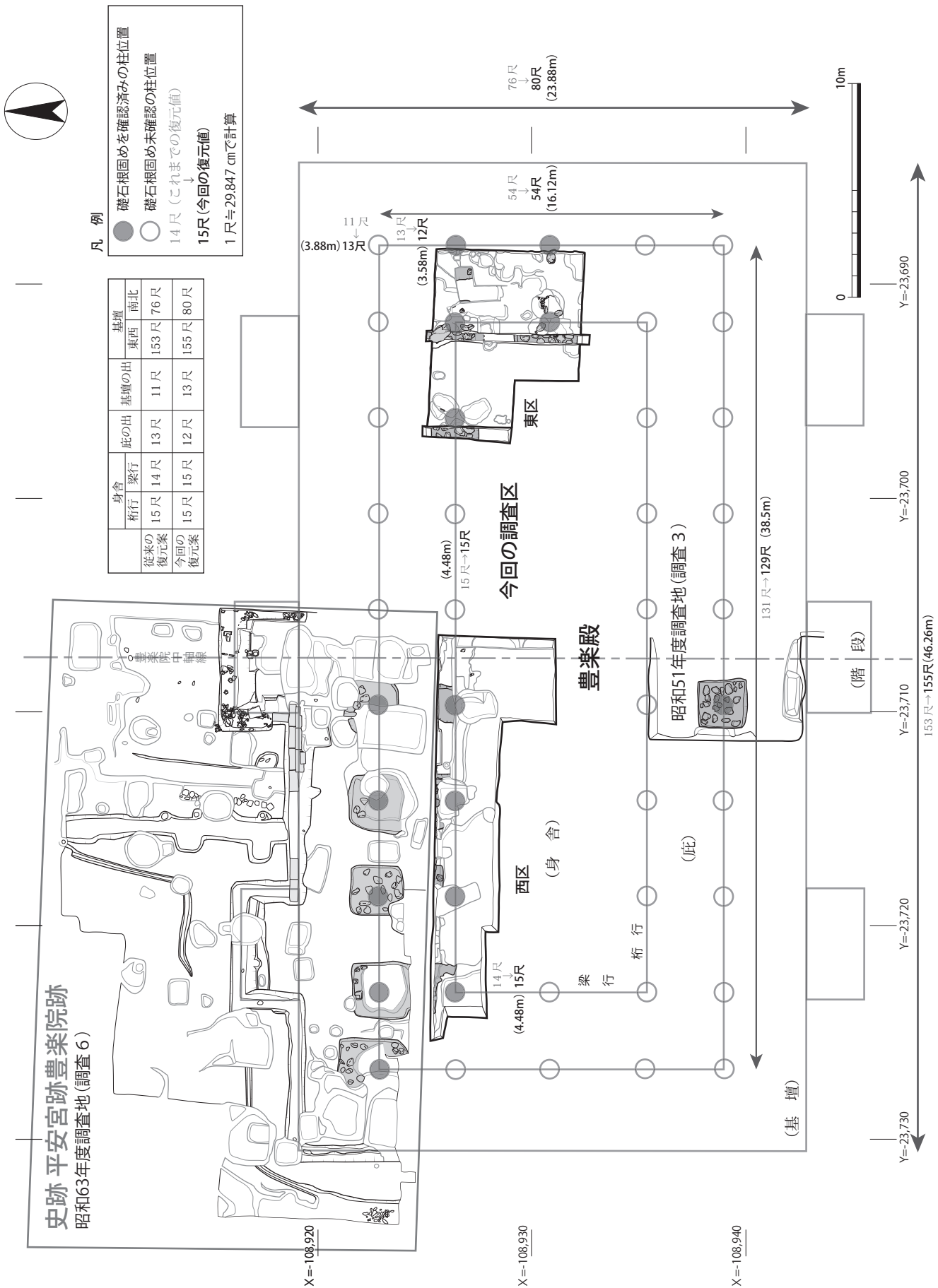


図15 豊楽殿復元図 (1:250)

の出13尺、基壇の出11尺、基壇規模は東西153尺、南北76尺とする復元案が示された²⁾。

今回、この復元案を基に調査を進め、ほぼ想定された位置で身舎部分の礎石根固めを検出することができた。しかし、従来の復元案での想定と検出位置に若干の齟齬が生じ、身舎梁行14尺の想定位置よりも、実際の検出位置はやや北に寄ることがわかった。この成果を踏まえ、豊楽殿の柱間寸法を捉え直すと、身舎は梁行、桁行ともに15尺等間、庇の出を12尺となり、桁行総長が129尺、梁行が54尺となる。また、基壇規模についても見直しを行い、基壇端を地覆石外側で捉えると、基壇の出は13尺となり、基壇規模は東西155尺、南北80尺となろう。

(3) 豊楽殿と平城宮第二次大極殿

今回の調査で明らかになった豊楽殿の規模は、平城宮第二次大極殿SB9150とほぼ同じ規模を持つ。これまでの発掘調査で明らかにされた第2次大極殿は、桁行9間、梁行4間の四面庇付東西棟礎石建物で、柱間寸法が梁行、桁行ともに15尺等間、庇の出12尺、基壇の出13尺、桁行総長が129尺、梁行54尺となる³⁾。この大極殿は、恭仁宮に存在した大極殿とは規模が異なり、聖武天皇が平城京に還都した天平十七年(745)以降の数年間に新たに造営されている。発掘調査では、大極殿を解体する際に組まれた足場穴SB9147を確認していることから、移築に伴う解体が行われたことがわかる。しかし、桓武天皇による長岡京遷都の際には、後期難波宮の資材を移築して造営されたことが明らかになっており⁴⁾、この時点での第二次大極殿の解体は行われていない。その後、大同四年(809)には平城上皇が平城宮に居を構え、大極殿の基壇上には掘立柱建物SB9152が築かれていることから、この時期までに解体されたことがわかる。延暦十年(791)の平城宮諸門の解体と長岡宮への移築の記載があるものの(『続日本紀』延暦十年九月十六日条)、長岡宮において、未だ確実な豊楽院相当施設が確認されていない現状では、豊楽殿が平城宮第二次大極殿の移築先として最有力の候補として挙げられよう⁵⁾。大極殿は天皇が出御する国家の正庁として、建物の格、規模ともに隔絶しており、重要視される。藤原京の大極殿は、平城宮、恭仁宮へと移築されたことがわかっており⁶⁾、第二次大極殿についても、相応の格式のある建物へと移築したと考えるのが妥当である。豊楽殿は、平安宮の中でも大極殿と並び天皇が出御する豊楽院の正殿であり、天皇の権威の象徴ともいえる大極殿の移築先として相応しいといえるだろう。

先述したように、豊楽殿は延暦十八年(799)の段階で未完成であり、その初現は平城天皇の大嘗会で用いられた大同三年(808)まで待たねばならない。発掘調査によって、屋根には搬入瓦は無く、緑釉の鳳凰文鴟尾や軒瓦、三彩鬼瓦などの新造瓦で葺かれ、基壇外装は新たに切り出された凝灰岩を用いるなど、壮麗な建物であったことが明らかになっており、移築されたとしても装いを一新するために十分な時間をかけて造営されたのである。国家の饗宴の場である豊楽殿の性格を考えると、天皇と臣下が一体となる求心力が必要であり、それを平城宮大極殿を移築することで応えようとしたのではないだろうか。

今回の調査によって、豊楽殿の建物規模がほぼ確定したことにより、平城宮第二次大極殿との比較が可能となったことは、天皇が出御する正殿クラスの建物系譜を考える上で極めて重要である。

6. 総括

(1) 豊楽殿跡の調査成果

今回の調査を含め、これまで実施された豊楽殿跡及び周辺の調査によって、豊楽院北部の様相が具体的に明らかになりつつある。ここでは調査から判明した成果と意義を整理する。

①豊楽殿の規模

豊楽殿については、今回の調査で身舎の礎石根固めを7基、東庇2基、昭和51年度調査（調査3）で南庇の根固め1基、昭和63年度調査（調査6）で北庇5基を確認したことにより、桁行9間、梁行4間の四面庇付東西棟礎石建物となり、柱間寸法は、身舎15尺等間、庇の出12尺、桁行総長129尺、梁行総長54尺となる。また、基壇北縁及び西縁を確認したことから、基壇の出13尺、基壇の東西155尺、南北80尺に復元することができた。

上記の成果から、豊楽殿の規模は平城宮第二次大極殿の規模と非常に近似しており、大極殿が長岡宮に移築されていない事実と、解体の下限、天皇が出御する格式の高い建物という共通性から、平城宮第二次大極殿の豊楽殿への移築の可能性を提示した。

②清暑堂の規模

清暑堂については、平成19年度調査（調査8）において、基壇南縁と南面西階段及び豊楽殿北廊を確認した。北廊が取り付く中央間と階段の位置関係、幅から、身舎桁行7間で柱間14尺と考えられる。調査では、基壇西縁を明らかにし得なかったが、凝灰岩抜取溝と地山レベルとの関係から基壇の東西幅は34～45mに、南北幅については、調査1から10.5～12mに復元可能である。また、南面中央には階段は存在せず北廊が取り付くことから、同時に造営されたことが判明している。

③豊楽院北廊の規模と変遷

北廊は豊楽殿と清暑堂を繋ぐ廊下である。調査6の豊楽殿北縁と調査8の清暑堂南縁の位置関係から、北廊の長さは30mと非常に長く、幅についても、当初6.4mで造営された後、12.0m、13.4mへと2度にわたる拡幅が行われるなど特殊な構造を呈す。さらに、調査6では、北廊が取り付いていた豊楽殿北縁中央間の下層から階段の存在が確認されており、北廊は豊楽殿創建当初には存在していなかったことが明らかとなった。『宮城図』などの史料および、正殿である豊楽殿と天皇控えの場としての清暑堂の性格からみても、豊楽殿と時を同じくして北廊が造営されたと捉えられてきたが、造営の時期差を発掘調査成果から提示できた貴重な成果といえる。北廊の拡幅の契機についても、清暑堂を御座として行われる大嘗祭の節会（清暑堂神楽）との関係が注目され、建物構造における儀式的の影響を伺わせる成果として注目される。

④旧地形と造成関係

調査8では北廊下層から、幅6m以上、深さ1.8m以上ある東西方向の大規模な谷状地形を確認した。谷は平安宮造営に伴い、丁寧に埋め戻され整地されており、平安宮造営に伴う造成の具体的な様相が示された。

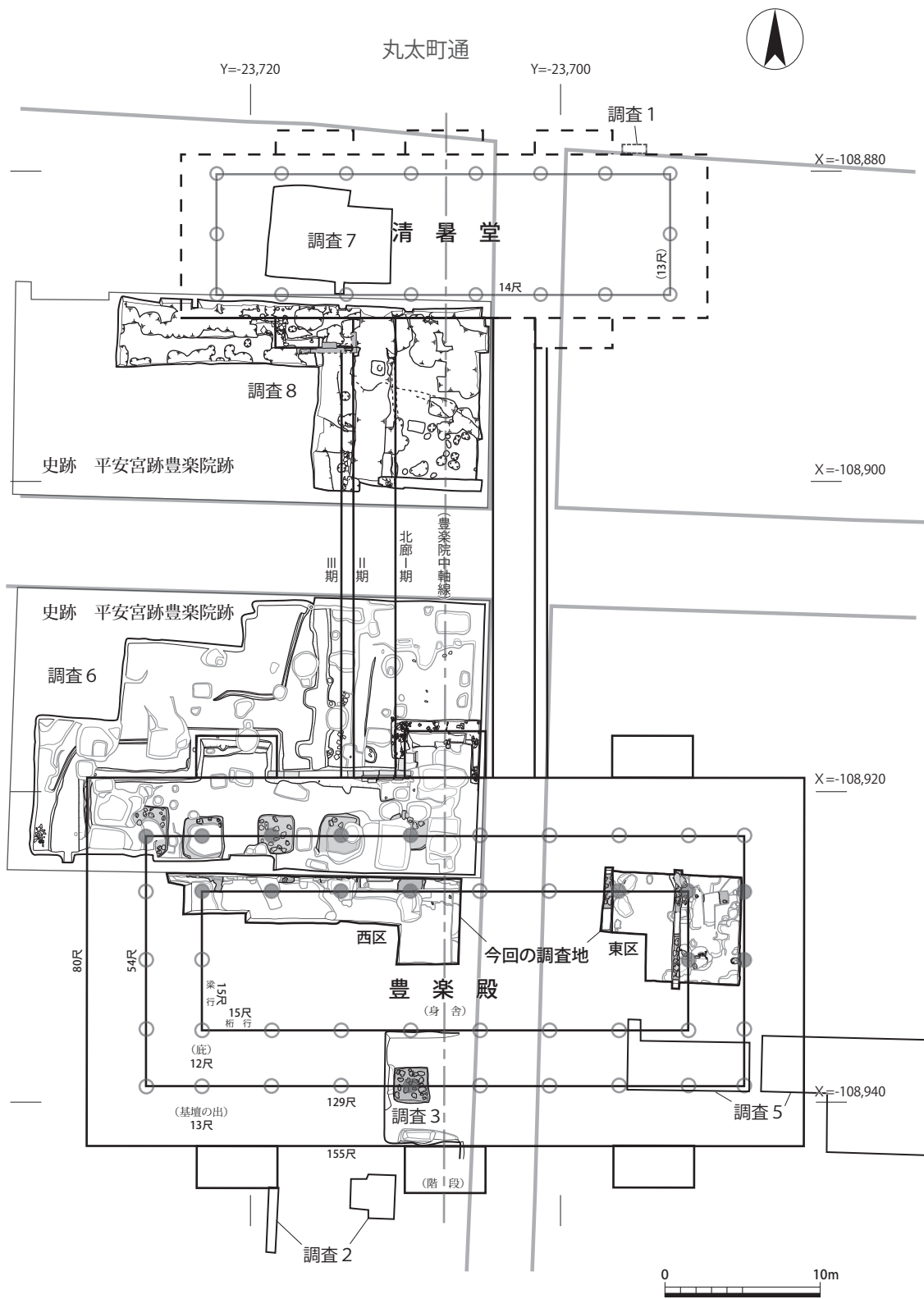


図16 豊楽院北部復元図 (1:400)

⑤基壇構築技法

基壇構築にあたっては、大規模な建物ではあるが掘込地業は行っていない。調査6における竪穴住居の検出、今回の調査での基壇盛土直下の土壌化層の存在から、地山の上に直接盛土を行っていることが明らかとなった。これは、豊楽殿の立地する基盤が固く締まった砂礫やシルトであることに関わるものと想定される。構築の工程については、今回の報告で詳細を述べているため、改めて記載しないが、礎石根固めの作業工程において、基壇本体の版築と並行して実施することで、円丘そのものを先行して構築するよりも、搗き棒で突く力が分散することを防いでいる可能性が考えられよう。根固め工法は地山や建物規模によって使い分けされていることも想定されるが、この工法は奈良時代以降、試行錯誤を繰り返した上で選択された、当時最先端の工法であろう。基壇盛土と根固めを同時に進めることで、時間的にも最も短縮できる合理的な工法ともいえる。

⑥緑釉瓦の出土

調査6において、豊楽殿の周囲から多量の瓦が出土している。瓦は重量があるため、周囲から出土した瓦は大半が豊楽殿に葺かれていたと考えて差し支えない。調査では、前期から後期に至るまでの瓦が出土しており、創建から廃絶までに豊楽殿で用いられた瓦を提示することが可能となる。旧都からの搬入瓦が少ないことは、豊楽殿の造営が遅れることにも対応しており、出土資料からも文献上の記載を裏付けられた。中でも、豊楽殿の造営後、9世紀前葉には存在する北廊Ⅰ期の盛土中から緑釉瓦が出土したことは、創建時の豊楽殿には緑釉瓦が葺かれていたことを証明したのである。

①～⑥の成果からは、豊楽院北部の様相を明らかにするだけでなく、遷都に伴う造成作業から、造営の順序、土木技術、建物変遷の実態を示すものとして、平安宮を理解するうえで欠くことの出来ない資料である。当時の国家にとって、都城の中核である宮域は、政治体制や思想を具現化するものであり、律令国家最後の都城である平安宮の姿の一端を明らかにした上記の成果は、我が国の歴史にとっても非常に重要な成果と判断できる。

(2) 今後の展望と課題

豊楽院北半は、平安宮跡の中で遺構残存状況が良好である。中でも今回の調査地である東区北側、東側や、調査3の西側、南側は、現状でも道路面よりも一段高まりとして残っており、良好な遺構残存状況が想定される。

平安宮大極殿跡は、東半が道路下に埋もれ、西半についても近世土取穴によって大きく破壊を受けて遺構の残存状況は芳しくなく、未だ具体的な様相を示せていない。大極殿同様に天皇が出御する豊楽殿の実態は、大極殿の実態を捉えるためにも全容を明らかにする必要がある。また、現状では豊楽殿は単層の寄棟造で復元されているが、当初「乾臨閣」と称されていた伝承もあり⁸⁾、柱位置や基壇構築方法から重層とする余地は十分にある。今後はさらなる調査によって上屋構造の復元にも取り組んでいくことも必要である。

(西森 正晃)

註

- 1) 國下多美樹「基礎構造からみた古代都城の礎石建物」『長岡京古文化論叢Ⅱ』長岡京跡発掘調査研究所，1992。
長岡宮跡においても，基壇は削平を受けていることが多く，壺掘地業のみが確認される事例も多い（小安殿など）。そのため上部の地業が不明であり，本来は同様の地業を行っている可能性がある。
- 2) 『平安宮Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊，(財)京都市埋蔵文化財研究所，1995。
- 3) 『平城宮発掘調査報告XIV 第二次大極殿院の調査』奈良国立文化財研究所，1993。
- 4) 小林清「長岡宮跡の出土瓦」『長岡京の新研究』2，1965。
- 5) 豊楽殿が平城宮第二次大極殿移築先の候補とすることは，既に網伸也氏が提唱されている。
網伸也「長岡・平安京への道」『季刊考古学』第112号，雄山閣，2010。
- 6) 小澤毅「平城宮中央区大極殿地域の建築平面について」『考古論集—潮見浩先生退官記念論文集—』潮見浩先生退官記念事業会編，1993。
平城宮第一次大極殿と藤原宮大極殿の平面プランの検討から，藤原宮から平城宮へ大極殿の移築が行われたとされる。恭仁宮大極殿についても，「始めて平城の大極殿ならびに歩廊を壊ちて，恭仁宮に遷し造ること茲に四年」（『続日本紀』天平十五年十二月二十六日条）とあり，平城宮第一次大極殿が恭仁宮へ移築されたとされ，両宮の発掘調査成果においても矛盾はない。
『平城宮発掘調査報告XI 第一次大極殿地域の調査』奈良国立文化財研究所，1982。
「恭仁宮跡昭和52年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報1978』京都府教育委員会，1978。
- 7) 歴代都城において，新都に移築された建物であっても，主殿については新造瓦で葺かれ，搬入瓦は門や垣などに用いられることが多い。ただし，長岡宮については，大極殿などの主殿クラスであっても，難波宮からの搬入瓦を用いている。
- 8) 『拾芥抄』宮城部の記載による。

V 平安京左京五条三坊十町跡・烏丸綾小路遺跡

1. 調査経過 (図1・2)

本件は、下京区綾小路通烏丸西入童侍者町における個人住宅兼店舗建築に伴う発掘調査である。周知の埋蔵文化財包蔵地「平安京跡・烏丸綾小路遺跡」に該当するため、平成26年12月19日付で文化財保護法に則って届出が行われ、平成27年3月23日に試掘調査を行った。この結果、中世以前の遺構面が良好に残っていることが確認され、地中保存ができないため発掘調査が必要となった。調査は、平成27年7月15日から8月31日まで行った。対象面積は90㎡である。

なお、本調査地では利益を伴う事業を一部含んでいた事から、原因者負担でも調査が行われており、安全面に関する部分は、事業を担当した(公財)京都市埋蔵文化財研究所(以下、埋文研)と協力した。調査区は、便宜上、埋文研調査区を1区、本件を2区とした。本件は、1区の埋め戻しが終了した平成27年7月15日から調査を開始し、まず重機で近現代の地層を掘削した。以下の地層は人力で掘削し、写真・図面などの記録を取りながら、各遺構・地層を掘り下げ、同年8月31日に現地でのすべての作業を終了した。この結果、弥生時代から江戸時代までの大きく6面を調査し、部分的にはさらに2面を確認した。とくに室町時代の遺構面は複数面確認され、中世下京の発展と土地利用に対する知見を得た。

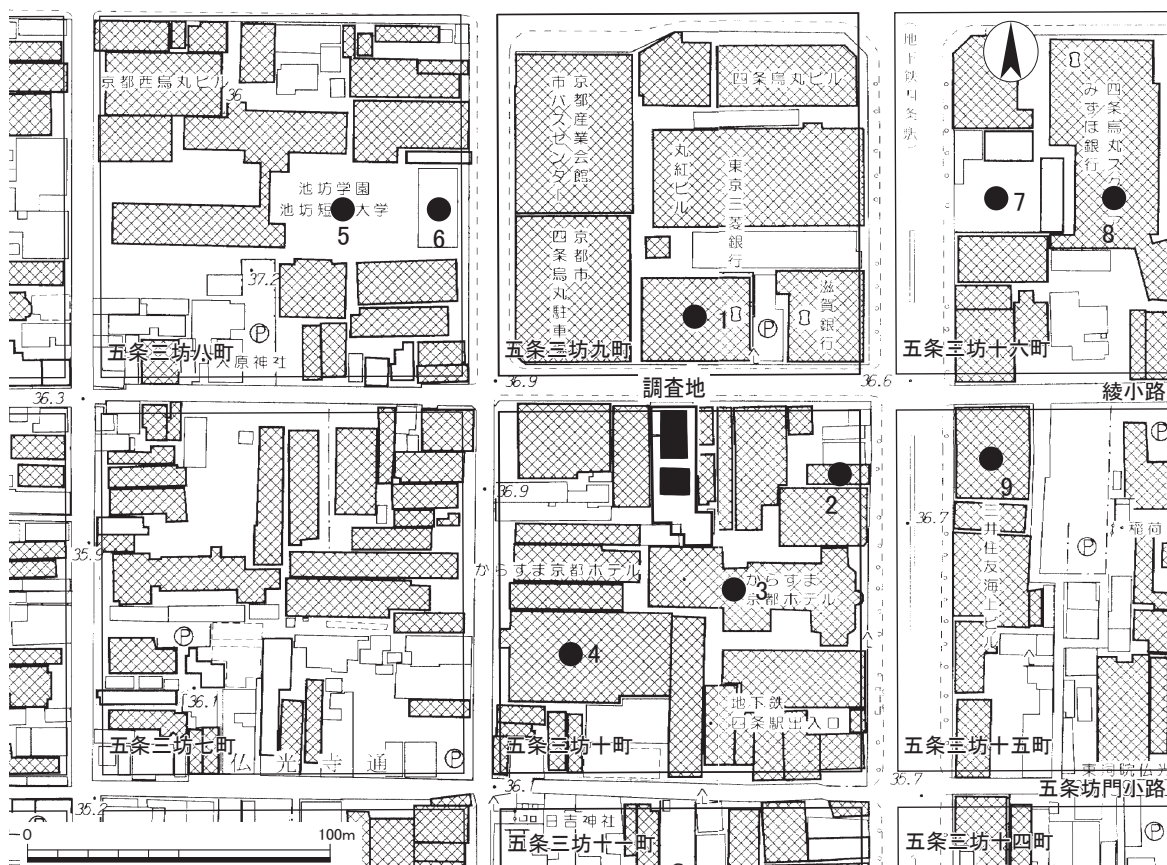


図1 調査地と周辺調査位置図 (1 : 2,500)

2. 遺 跡

(1) 位置と環境

下京区童侍者町は、町名起源は詳らかではないが、慶長以来「足駄屋町」と呼んでいたものを元禄年間に「童侍者町」に改められたことがわかっている（『京都坊目誌』）。周辺は祇園祭の山鉦町にあたり、中世以来栄えた下京中心地の一角に属す。

地勢は、鴨川扇状地上の安定した基盤層の上であり、四条烏丸の交差点から五条堀川にむけて、烏丸綾小路遺跡と呼称される弥生時代から古墳時代の集落跡が展開していた。過去の調査で、竪穴建物のほかに環濠の可能性のある大溝や方形周溝墓などが見つかった。

平安京の条坊復元では左京五条三坊十町に該当し、平安時代後期には平某女の所有地があったと伝わる。本町に関する他の記録は知られていないが、周辺の調査事例では、平安時代後期の遺構が比較的多く検出されている。

中世になると、室町通が京の中心な通りとなり、四条室町界隈は下京の中心地として栄えた。周辺には、酒屋・土倉が軒を連ねており、町々の自治的結束の象徴ともいえる祇園会山鉦が多く出された。また、綾小路通沿いには矢田寺、善長寺などの堂があったが、天正年間、豊臣秀吉の命によって寺町に移転した。ほかに童侍者町の南隣接地である二帖半敷町は、町名伝承によれば（『京都坊目誌』）昔、五条寺という真言宗の寺があり、二人の弟子に寺地を二分割したため、「五条」を分けて二帖（条）半敷と俗に呼んだ事がはじまりという。綾小路通周辺には下京の地域住民に支えられた小規模な寺院が点在していたと考えられる。下京は応仁・文

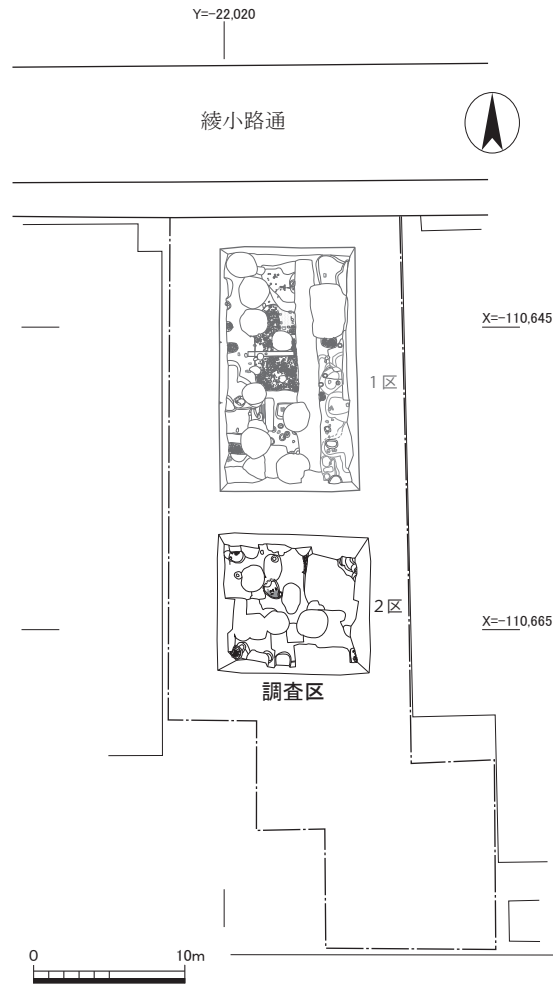


図2 調査区配置図（1：500）



図3 調査前全景（北から）



図4 作業風景（南西から）

明の乱や天文法華の乱で荒廃したことが知られ、『京都坊目誌』によれば、応仁後荒廃し「天正年中道路狭小す」という状況であった。

近世前半は不明だが、寛政元年になると当該地には田中長奈良漬店が店を構えた。当代・田中長兵衛氏の家伝と、御好意で見せていただいた明治八年の地籍図によれば、西隣接地に居を構えていた永野物集女家明治初期に東京に移った際、屋敷地の一部を譲り受けて店舗を拡げたという。

(2) 周辺の調査事例 (図1)

本調査地周辺は、比較的多くの調査がされている。各調査地で遺構面を複数確認しており、活発な土地利用があったことが知られる。綾小路の北側に位置する調査1では、弥生時代中期の溝、平安時代の建物・井戸・土坑などを確認したほか、室町時代の埋甕群・地下式倉庫・土坑墓などを検出しており、弥生時代以来継続的な人の利用があったことがわかった。特に、室町時代の土地利用は活発で、埋甕群や地下式倉庫から酒屋があったと推測されている¹⁾。

調査2では古墳時代初頭の竪穴建物ほか平安時代の柱穴・土坑、鎌倉~室町時代の柱穴・土坑、江戸時代の柱穴・土坑などが検出された²⁾。

調査3は南隣接地にあたる。古墳時代の竪穴建物ほか平安時代のピット・土坑・井戸、鎌倉~室町時代の土坑・井戸・ピット・柵列・墓・溝、桃山~江戸時代の井戸・土坑・溝などが検出された。調査担当者によれば、銅製品や鋳型などが多数出土しており、中世から近世に通じて鋳造関係の職人が住んでいたと推測される³⁾。

調査4では、弥生時代末~古墳時代初頭の竪穴建物や平安時代後期の庭園遺構、鎌倉~室町時代の建物跡や土坑などが確認された⁴⁾。

註・参考文献

- 1)：調査1 『平安京左京五条三坊九町跡・烏丸綾小路遺跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-10』
(財)京都市埋蔵文化財研究所，2008。
- 2)：調査2 『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会，1982。
- 3)：調査3 『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所，1983。
- 4)：調査4 『京都市内遺跡試掘・立会調査報告』京都市文化観光局文化財保護課，1980。
鈴木久男『史料京都の歴史』第二巻考古，平凡社，1983。
- 5)：調査5 『平安京跡研究調査報告第19輯 平安京左京五条三坊八町』(財)古代学協会，1997。
- 6)：調査6 『平成2年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所，1994。
- 7)：調査7 『平安京跡研究調査報告第22輯 平安京左京5遺跡』(財)古代学協会，2008。
- 8)：調査8 『平安京左京五条三坊発掘調査報告』関西文化財調査会，1998。
- 9)：調査9 『平安京跡研究調査報告第5輯 平安京左京五条三坊十五町』(財)古代学協会，1981。

3. 遺 構

(1) 基本層序と調査面

本調査地では、地表面から地山である黄褐色～灰黄褐色シルトまでの約2.3mが、人為的な盛土であった。小規模な土地改良を含めると、この間の遺構面数は十数面に及ぶが、その全てを調査することは困難であった。遺跡の性格を理解する上で、重要になる大きな土地改良を優先し、基本的には1区との整合性がとれた6面を調査した。ただし、調査過程で必要と判断した面については全面あるいは部分的に調査面を増やした。ここでは、基本的な遺構面と地層の関係について整理する。

第1面はGL-0.6mで検出した灰色シルト混中～粗砂(図6西壁層1<以下「図○壁層」を略す>)の上面である。なお、当該地の地層はそのほとんどが人為的な盛土のため、地層の質が数メートルの範囲で変わる場合がある。報告では、煩雑さを避けるため主な地層を紹介するに留める。とくに断らない限りは、中心とした地層上面と高さを揃えて検出を行っている(以下も同じ)。この面で、倉・路面状の遺構・土坑などを検出した。

第2面はGL-0.7mで検出したオリーブ黒色シルト混中～粗砂(西6)の上面である。土坑・溝などを検出した。

第3面はGL-1.1～1.2mで検出した暗オリーブ褐色シルト質中砂(西15)の上面からなる。焼土処理土坑、集石土坑などを検出した。これらの遺構から16世紀後半の遺物が出土した。

第4面はa・bの2面にわかれる。a面は黒褐色シルト質中～粗砂からなる亀腹状の地業(図5北26)の上面である。本来は、その上位に盛られた、同じ性格の地業と推定される暗灰黄色シルト質細砂+オリーブ褐色極細砂～細砂層(北18)の上面を遺構面にすべきであったが、検出時には認識できず、北26層上面を第4面として遺構を検出した。地業のほかに土坑などを検出した。

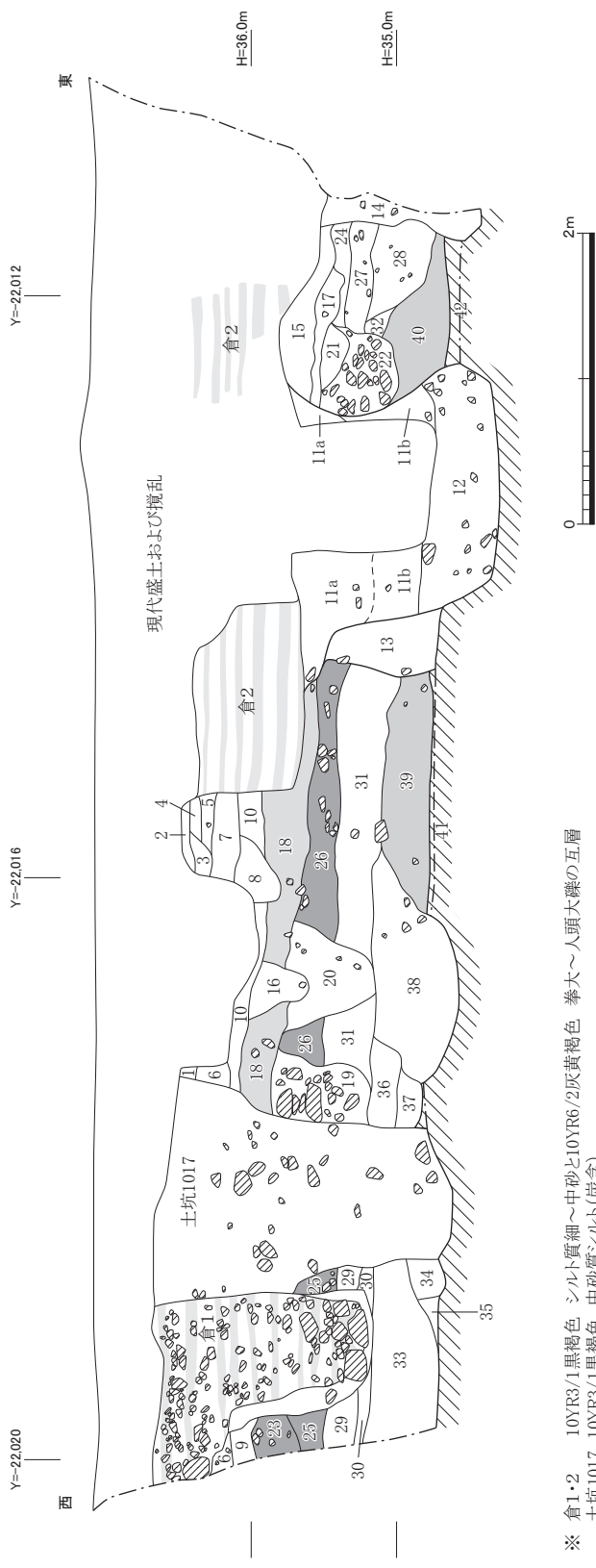
b層は黒褐色粗砂混シルト(西22)で、この上面を第4b面として遺構を検出した。a面よりも時期の遡る埋嚢・土坑・溝を検出した。石鍋などが出土している。

第5面はオリーブ褐色極細砂～細砂(北39)上面である。いわゆるウグイス色の整地層で平安時代の整地層である。多数の柱穴・土坑を検出した。

第6面は黄褐色シルト(北41)からなる地山上面である。この面で、弥生時代後期の竪穴建物・平安時代の柱穴を検出した。また部分的に平安時代の整地層を確認した。本面の遺構は弥生～古墳時代に遡る遺構と土地の凹みを整地して、その上に成立する平安時代の遺構に大きく分かれた。

(2) 遺構の概要

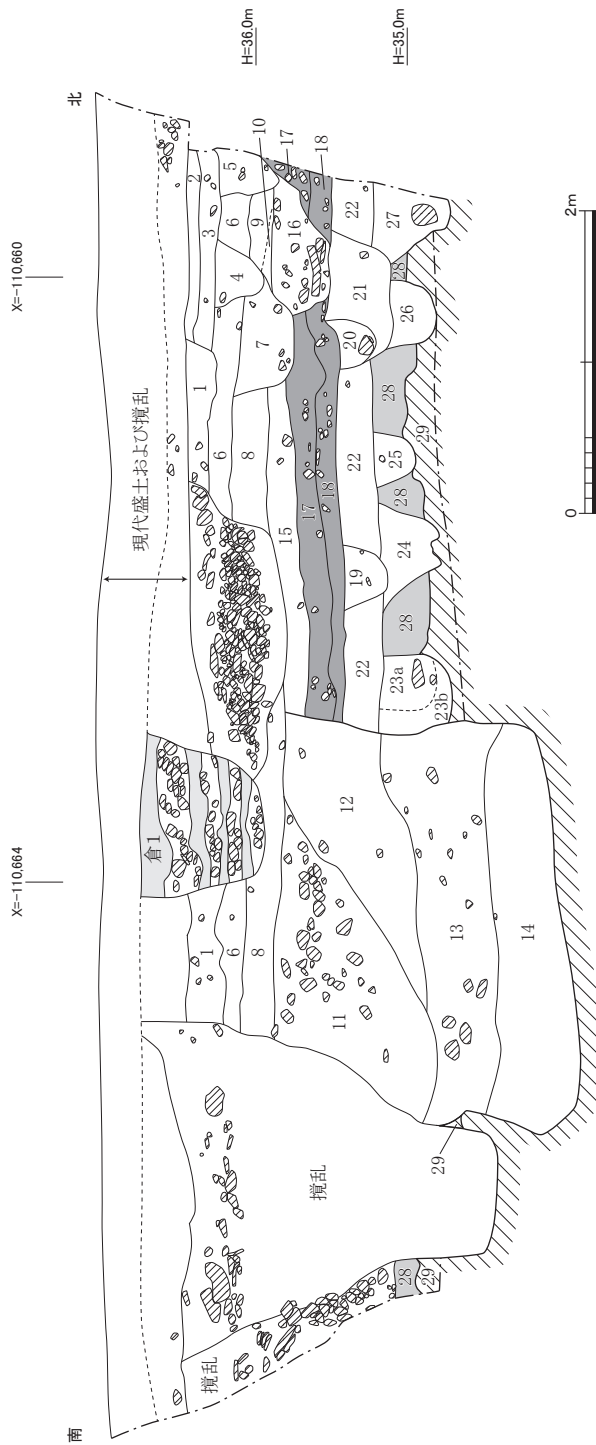
今回の調査では弥生時代後期から江戸時代までの遺構を226基検出した。その種類は、竪穴建物・井戸・柱列・柱穴・土坑・埋嚢・地業・土取穴・路面状遺構・倉と多岐にわたる。層序は複雑で、遺構面は部分的な整地層の集まりである上に、近世以降の土坑などで大きく攪乱を受けており、調査中もその把握には苦慮した。このため、必ずしも同一面で単一時期の遺構の広がりをつかえきれたわけではない。ここでは検出した遺構群を、出土遺物や成立の前後関係をもとに整理し、主



※ 倉1・2 10YR3/1黒褐色 シルト質細～中砂と10YR6/2灰黄褐色 拳大～人頭大礫の互層
土坑1017 10YR3/1黒褐色 中砂質シルト(炭含)

- 1 5Y5/1灰色 シルト混 中～粗砂 (φ5cm大礫含)
- 2 2.5Y5/3黄褐色 極細～粗砂 上部はφ1～2cm大礫 固くしまる
- 3 2.5Y4/2暗灰黄色 シルト含粗砂(粘土ブロック含)
- 4 2.5Y4/4オリーブ褐色 極細～粗砂 上部は1～2cm大礫
- 5 2.5Y4/2暗灰黄色 シルト混中～粗砂
- 6 5Y3/2 オリーブ黒色 シルト混 中～粗砂
- 7 2.5Y4/2灰黄褐色 シルト質細砂(小礫含)
- 8 10YR3/2暗褐色 シルト質細砂(炭・焼土片少量含)
- 9 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 シルト質中砂(粗砂～φ3cm大礫含)
- 10 10YR4/2暗灰黄色 シルト含細～中砂
- 11a 10YR3/3暗褐色 シルト含中～粗砂(焼土・炭多量含) ウグイスブロック含
- 11b 10YR3/2暗褐色 シルト混中～粗砂(焼土・炭多量含)
- 12 5Y4/1灰色 シルト～細砂(炭片・φ5～10cm大礫含)
- 13 10YR3/3暗褐色 シルト含中～粗砂(焼土・炭多量含)
- 14 10YR3/2暗褐色 シルト質シルト(炭・焼土多量含)
- 15 2.5Y3/2黒褐色 シルト質中砂(細礫・炭片含)
- 16 2.5Y3/2黒褐色 細砂質シルト(上部は2.5Y4/3オリーブ褐色 細～中砂多く含)
- 17 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 シルト質中砂
- 18 2.5Y4/2暗灰黄色 シルト質細砂+2.5Y4/6オリーブ褐色 極細～細砂ブロック(φ5～10cm大礫含)
- 19 10YR4/2暗灰黄色 中砂質シルト
- 20 2.5Y4/2暗灰黄色 シルト質細砂+2.5Y4/6オリーブ褐色 極細～細砂ブロック・φ1～2cm大礫含
- 21 10YR3/1黒褐色 シルト質中～粗砂(細礫含)
- 22 10YR4/1褐灰色 極細～中砂+φ5～15cm拳大礫で埋まる
- 23 10YR3/1黒褐色 シルト含中～粗砂(φ5～10cm大礫含)
- 24 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 シルト質中砂+2.5Y4/4オリーブ褐色 細砂ブロック多量含
- 25 10YR3/2黒褐色 細砂質シルト+2.5Y5/4黄褐色 細砂～シルトブロック
- 26 2.5Y3/2黒褐色 シルト混中～粗砂(φ5～10cm大礫含・粘土ブロック少量含)
- 27 2.5Y3/2黒褐色 シルト混中～粗砂 (φ2～3cm大礫・2.5Y4/3オリーブ褐色 極細～細砂ブロック・地山ブロック含)
- 28 2.5Y3/1黒褐色 シルト混中～粗砂(φ2～3cm大礫含)
- 29 10YR3/1黒褐色 細砂～シルト(中～粗砂含)
- 30 2.5Y3/2黒褐色 シルト混中～粗砂
- 31 5Y3/1オリーブ褐色 シルト含中～粗砂
- 32 2.5Y4/1黄灰色 シルト～極細砂(炭・土師器片少量含)
- 33 2.5Y3/1黒褐色 シルト(炭片含)
- 34 2.5Y3/2黒褐色 細砂～シルト
- 35 2.5Y3/1黒褐色 中砂質シルト
- 36 2.5Y3/2黒褐色 中砂混シルト(地山ブロック含)
- 37 2.5Y3/1黒褐色 細砂混シルト(粗砂含)
- 38 2.5Y3/1黒褐色 シルト含中～粗砂(炭・粗砂・土師器片含)
- 39 2.5Y4/3オリーブ褐色 極細～細砂
- 40 2.5Y4/3オリーブ褐色 極細～細砂
- 41 2.5Y5/3黄褐色 シルト(炭片含)
- 42 2.5Y6/6明黄褐色 極細～細砂

図5 北壁断面図 (1:50)



- | | | | |
|-----|----------------|----------|-------------------------|
| 1 | 5Y5/1灰色 | シルト混 | 中～粗砂 (φ5cm大礫含) |
| 2 | 2.5Y3/2黒褐色 | 細砂質シルト | (焼土片含) |
| 3 | 10YR4/1褐灰色 | 中砂質シルト | |
| 4 | 10YR4/1灰褐色 | 細砂(焼土含) | |
| 5 | 2.5Y3/2黒褐色 | 中砂～シルト | (粗砂多量含) |
| 6 | 5Y3/2オリーブ黒色 | シルト混 | 中～粗砂 |
| 7 | 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 | 細砂質シルト | (粗砂・土器・礫・炭含) |
| 8 | 2.5Y4/2暗灰黄色 | シルト質中～粗砂 | (焼土含) |
| 9 | 10YR4/2灰黄褐色 | シルト含中砂 | |
| 10 | 2.5Y4/2暗灰黄色 | シルト | |
| 11 | 10YR4/2灰黄褐色 | 中～粗砂質シルト | |
| 12 | 7.5YR4/2灰褐色 | 中～粗砂質シルト | (炭・焼土多量含) |
| 13 | 10YR4/1褐灰色 | 細砂質シルト | (炭・焼土含 粗砂・粘土ブロック含) |
| 14 | 2.5Y3/1黒褐色 | 細砂～シルト | (炭含) |
| 15 | 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 | シルト質中砂 | (粗砂～φ3cm大礫含) |
| 16 | 2.5Y3/4黒褐色 | シルト混 | 中砂 (φ5～10cm大礫多量含) |
| 17 | 10YR3/1黒褐色 | シルト含中～粗砂 | (φ5～10cm大礫含) |
| 18 | 10YR3/2黒褐色 | 細砂質シルト | + 2.5Y5/4黄褐色 細砂～シルトブロック |
| 19 | 10YR3/1黒褐色 | 細砂～シルト | (中砂・炭・少量含) |
| 20 | 10YR3/1黒褐色 | 細砂～シルト | (中～粗砂含) |
| 21 | 10YR3/2黒褐色 | シルト | (粗砂・炭・焼土・少量含) |
| 22 | 10YR3/1黒褐色 | 粗砂混シルト | (φ1～2cm大礫含) |
| 23a | 2.5Y3/2黒褐色 | シルト | |
| 23b | 2.5Y3/2黒褐色 | シルト | (地山ブロック含) |
| 24 | 2.5Y4/2暗灰黄色 | 中砂質シルト | (炭片少量含) |
| 25 | 2.5Y3/2黒褐色 | 中砂質シルト | (地山ブロック少量含) |
| 26 | 2.5Y5/3黄褐色 | シルト | (粗砂少量含) |
| 27 | 2.5Y3/4黒褐色 | シルト | (炭片含) |
| 28 | 2.5Y4/3オリーブ褐色 | 中砂混シルト | (炭・土器器細片含) |
| 29 | 10YR4/2灰黄褐色 | シルト | |

図6 西壁断面図 (1 : 50)

要な遺構について、第1期から第7期の7段階に区分して報告する。この区分は、1区成果と整合させた。あわせて参照願いたい(埋文研2015-7)。なお、遺構番号は調査時のものを用いており、番号は不連続である。

表1 遺構概要表

時代	遺構	備考
平安時代以前	竪穴建物1218, 土坑1220	
平安時代	落込み, 柱列1・2, 土坑1204, 井戸1200	
鎌倉時代～室町時代	土坑1128, 土坑1100, 埋甕土坑1081 土坑1104, 土坑1039, 土坑1062, 地業5	
江戸時代以降	溝1060, 土坑1017, 溝1027, 路面4, 倉	

(3) 第1期の遺構 (図8, 図版15)

弥生時代後期の竪穴建物・古墳時代前期の土坑を検出した。

竪穴建物1218(図版15・16) 調査地の南東部で検出した竪穴建物で、北西角部分のみが遺存していた。全体の規模は不明である。平面形は隅丸方形で、残存する一辺の長さは約3.1mである。方位は北で東に約50°傾いている。部分的に焼土や炭化物を確認したことから検出面が床面であったと思われるが、貼床は確認できなかった。壁溝の幅は約0.3m, 検出面からの深さは約0.1mであった。甕1～5, 高杯6などが出土した。弥生時代後期前半の建物と考えられる。

土坑1220(図7・8, 図版15) 調査区の北側中央部で検出した土坑で、南北約0.7m, 東西0.5m以上, 検出面からの深さは0.4mであった。埋土は灰黄褐色シルトからなり、中央に古式土師器の甕7が口縁部を南西にむけて据えられていた。甕は山陰系の搬入品で古墳時代前期のものである。

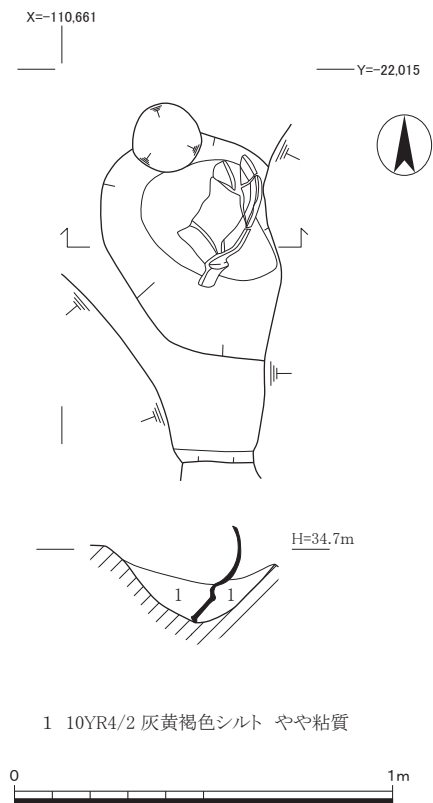


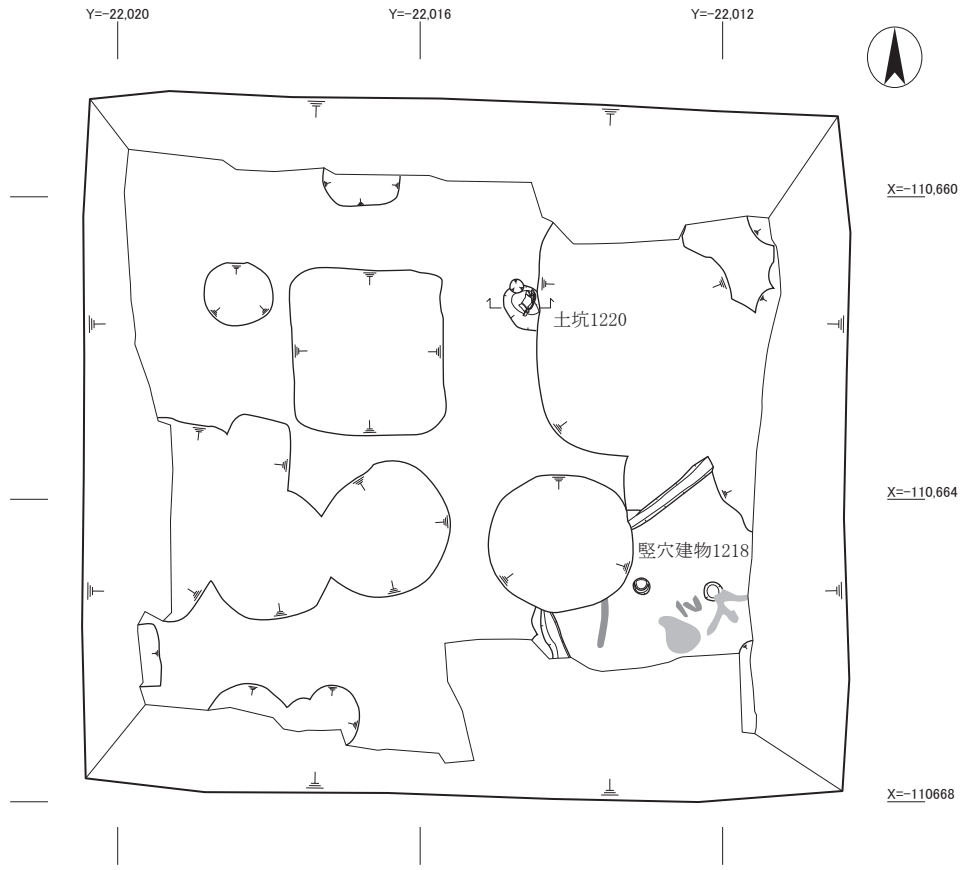
図7 土坑1220 平・断面図(1:20)

(4) 第2期の遺構 (図8, 図版15)

平安時代前～後期の遺物を含む整地層および後期前半の遺構を検出した。整地層に含まれる遺物は客土に含まれた混入品で、当該地で確実な土地利用が始まるのは後期からと推測される。

落込み1190 調査地の南東で検出した不定形の落ちで、1207の南端に重なっているが、本来は1206・1207と一連のものだと考えられる。検出面からの深さは0.1～0.2mで埋土は灰黄褐色シルトであった。平安時代に整地された窪みと推定される。

第1期



第2期

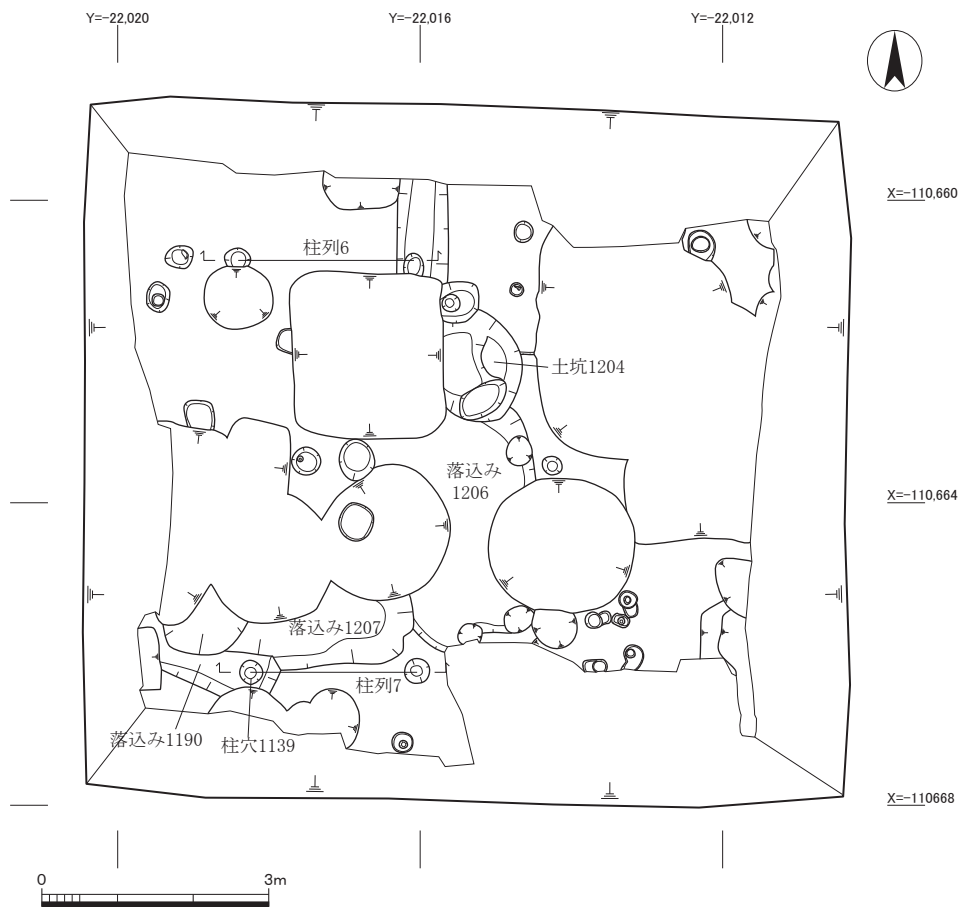
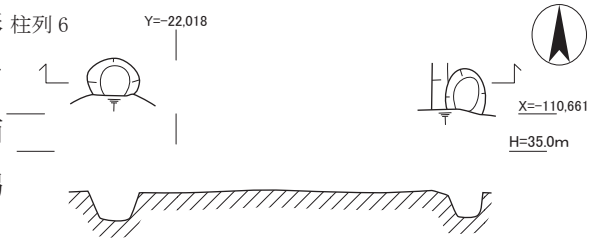
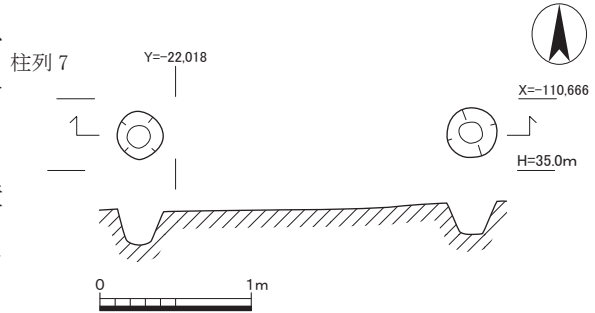


图8 第1期·第2期 平面图 (1:100)

落込み1206 調査地の中央で検出した楕円形柱列6の落ちで西肩は攪乱やピット1196に切られている。南北3.1m以上、東西2.1m以上、検出面からの深さは0.1～0.2mであった。埋土は黒褐色シルトであった。



落込み1207 1206の南西で検出した落込みで、検出面からの深さ0.3mで、埋土は暗オリーブ褐色シルトであった。

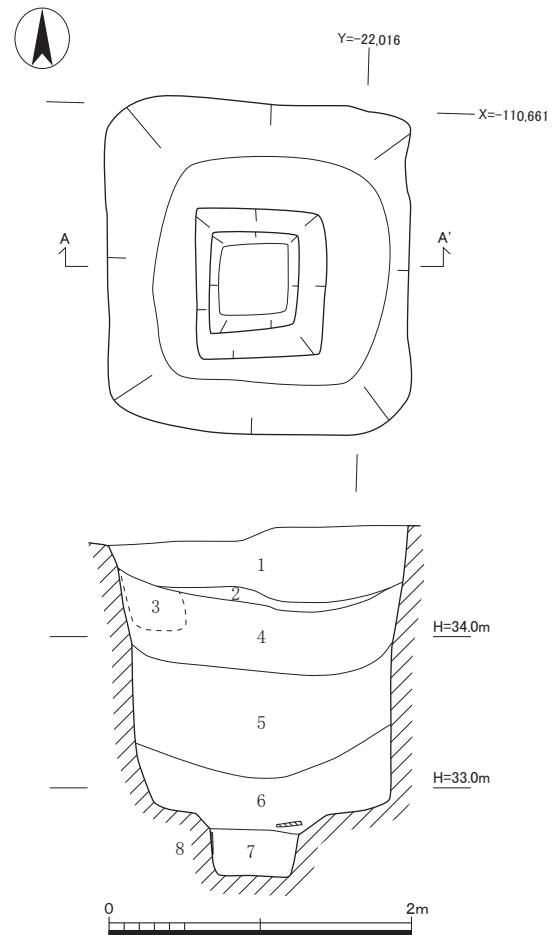


上述の落ち込みからは、土師器皿・越州窯産青磁などの平安時代前期のものに、京都IV期に属する土師器が含まれていた。

柱列6（図9） 調査区の北東部で検出した柱列である。東西1間を検出した。柱間は2.3m、柱穴の直径約0.3m、検出面からの深さ約0.2mであった。埋土は黄灰シルトであった。後述柱列7は、この柱列1の南5.4mに位置し、柱穴の規模も近似していることから同一建物の可能性がある。

図9 柱列6・7 断面図（1：50）

柱列7（図9） 調査区の南東部で検出した柱列である。東西1間を検出した。柱間は2.4m、柱穴の直径約0.3m、検出面からの深さ約0.2mであった。埋土は暗灰黄色シルトであった。柱穴1139から11世紀代の遺物が少量出土した。



土坑1204 調査区の北中央部で検出した土坑である。南北1.5m以上、東西1.0m以上、検出面からの深さ0.3mである。埋土は暗灰黄色シルトで、底には凹凸があり不定形を呈している。10世紀後半から11世紀前半の土器が出土した。

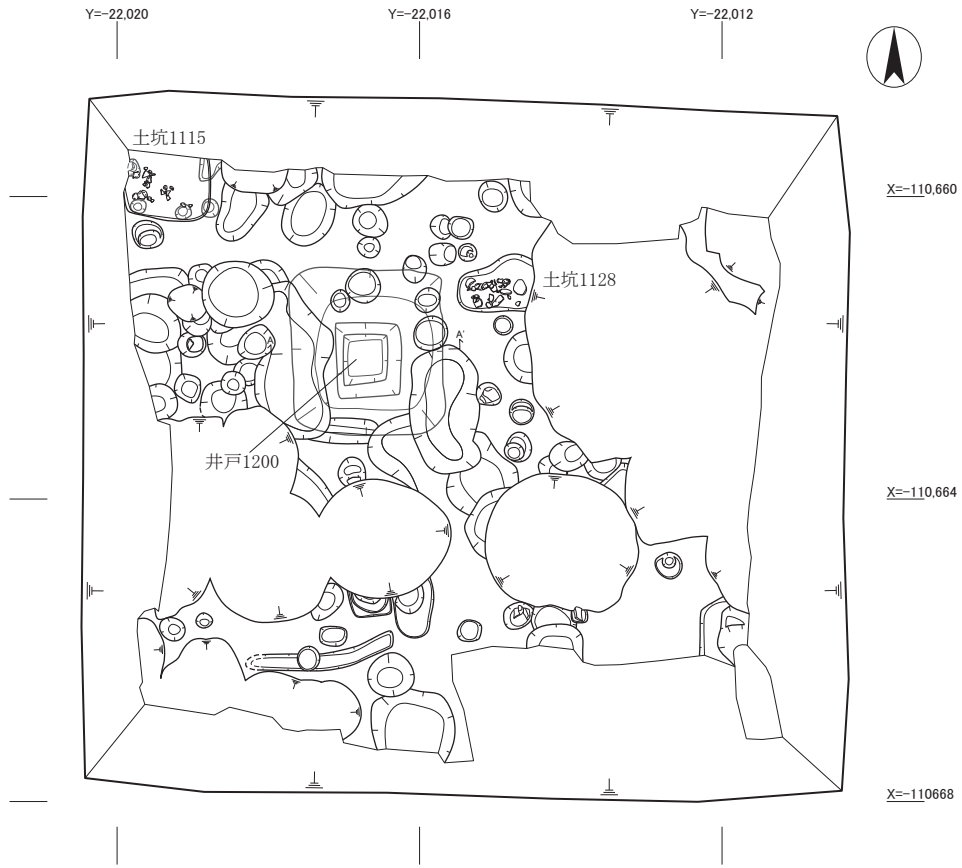
（5）第3期の遺構（図11）

平安時代の整地層より上で成立した平安時代後期から鎌倉時代の遺構である。上面遺構の攪乱で建物を復元することは出来なかったが、多数検出された小穴・柱穴から活発な土地利用が推測される。井戸・土坑などを確認した。

- 1 2.5Y4/1 黄灰色シルト質中～粗砂 炭・土器片含む
- 2 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト中含～粗砂 礫・砂のブロック含む
- 3 2.5Y5/4 黄褐色シルト質細砂
- 4 2.5Y3/2 黒褐色細砂～シルト 粗砂ブロック・炭含む
- 5 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂～シルト 小礫含む
- 6 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト 粗砂多量含む
- 7 2.5Y4/1 黄灰色シルト～粘土
- 8 2.5Y5/4 黄褐色中～粗砂 礫含む

図10 井戸1200 平・断面図（1：50）

第3期



第4期

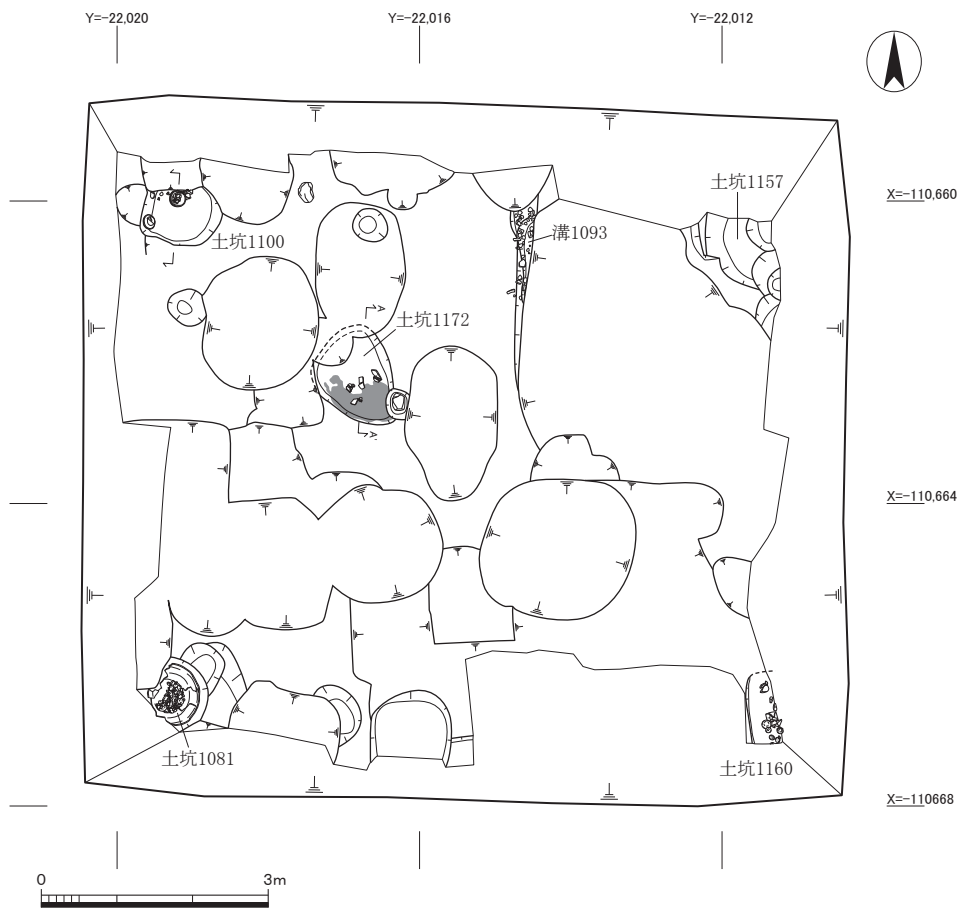


图11 第3期·第4期 平面图 (1:100)

井戸1200(図10, 図版16) 調査区の北側中央で検出した方形堀形をもつ井戸で, 土坑・柱穴に切られていた。一辺の長さは2.0~2.1mで, 検出面からの深さは2.2mであった。底部中央はさらに方形に掘りこまれており, 最下段方形掘方の一辺は0.5~0.6mであった。この西壁には木皮が残存していた。木枠があったと推測される。最下段よりも上部は大きく2つに別れる。埋土からは短期的に埋められたことが推定される。京都IV期中段階の遺物が出土した。

土坑1128 調査器北側中央で検出した不定形の土坑で, 東辺が攪乱されている。東西0.5m以上, 南北約0.4m検出面からの深さは0.1mであった。埋土は黄灰色粗砂混細砂である。京都VI期中段階の遺物が出土した。

(6) 第4期の遺構(図11)

整地層の上面で成立した遺構である。小穴が少なくなり, 中型の土坑が数基検出された。石鍋を埋納した土坑や埋甕土坑が確認された。遺構はおもに14世紀~15世紀前半のもので, 中世に入りそれまでとは土地利用が変わった印象を受ける。

溝1093 調査区北側中央で検出した溝で, 大部分が攪乱されている。確認できた幅約0.3m, 検出面からの深さ0.2mで, 埋土は小礫混黒褐色細砂で, 拳大の礫を多量に含んでいた。

埋甕土坑1081(図12, 図版17) 調査区の南西端で検出した土坑で, 備前焼の甕が据えられていた。南西側は調査区外に続くため, 規模は不明だが, 掘方の推定直径は約1mである。埋土は炭を多量に含む黒褐色シルト~細砂で, 甕内部には, 土師器皿が収められていた。土師器皿とともに甕口縁部が入っていたこと, 整理作業時に接合を試みたところ甕の肩部から頸部にかけて欠失していたことから, 埋められたまま放棄されたもので, 破棄の過程で口縁部が割られた可能性がある。京都VIII期古段階と考えられる。

土坑1100(図13, 図版17) 調査区の北西部で検出した土坑である。北端が攪乱で壊されていた。南北0.7m以上, 東西1.1mで検出面からの深さは0.3mであった。埋土は2層にわかれた。土坑にはほぼ完形の石鍋が2个体埋納されていた。西側の1个体は口縁部を下に, 東側の个体は口縁部を上に向けて座っていた。東側石鍋の中には土師器皿が2枚埋納されていた。VII期中段階のものと考えられる。

土坑1157 調査区の北東端で検出した土坑である。北・東辺が調査区外, 南・西辺は攪乱

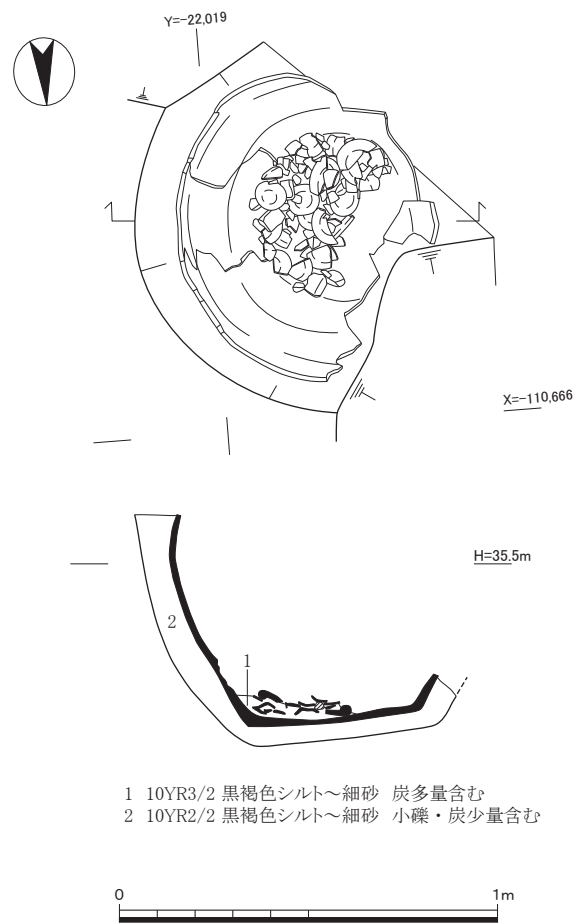


図12 土坑1081平・断面図(1:20)

を受けており規模は不明である。土取り穴と思われる、底部は複数の土坑が重複したようになっている。14世紀中頃～後半のものと考えられる。

土坑1160 (図版17) 調査区の南東端で検出した土坑である。南および東半分は調査区外であった。検出面からの深さは約0.1m、埋土は黄灰色シルトであった。完形の土師器皿が複数個体埋納されていた。1区(埋文研調査)に同時期の土壙墓が確認されていることから、墓の可能性もある。京都Ⅷ期古～中段階。

土坑1172 調査区の中央で検出した土坑である。北肩は攪乱の底で検出した。南東端は小穴に切られている。南北約1.3m、東西約1.1m、検出面からの深さは約0.3mであった。黄灰色シルトの埋土の上に、層厚2～5cmの炭層が広がっていた。遺物は土師器皿、瓦器羽釜、東播系須恵器鉢、焼締陶器甕、青磁椀、白磁皿、硯などが出土したがいずれも細片である。

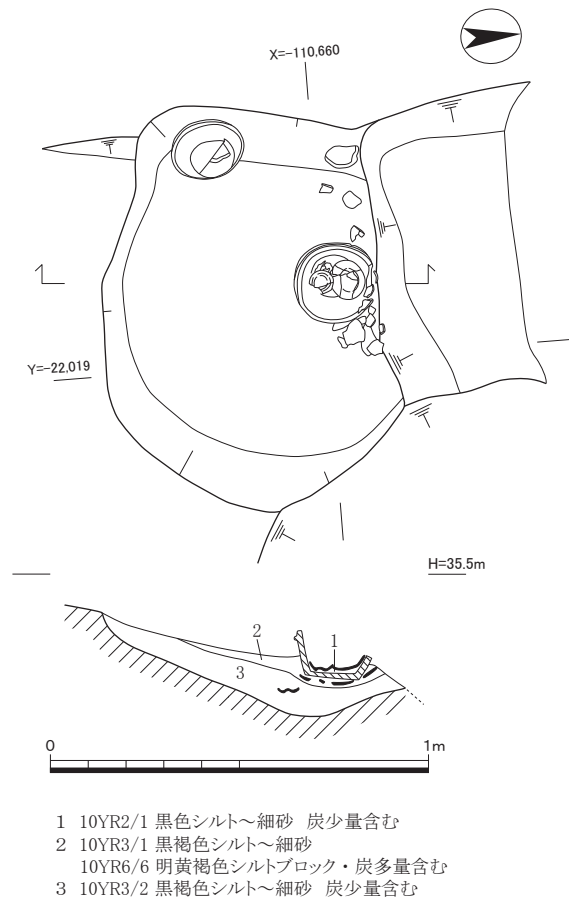


図13 土坑1100 平・断面図(1:20)

(7) 第5期の遺構(図14)

15世紀後半の遺構を中心とする。特筆される遺構は、調査区の北西半で検出した亀腹状盛土(地業5)である。建物プランは復元できなかったが、ある程度の規模の建物があったと考えられる。また、亀腹状盛土の前後にも15世紀代の遺物を含む土坑が掘られていた。第4期から第5期にかけて活発な土地利用があったと推測される。

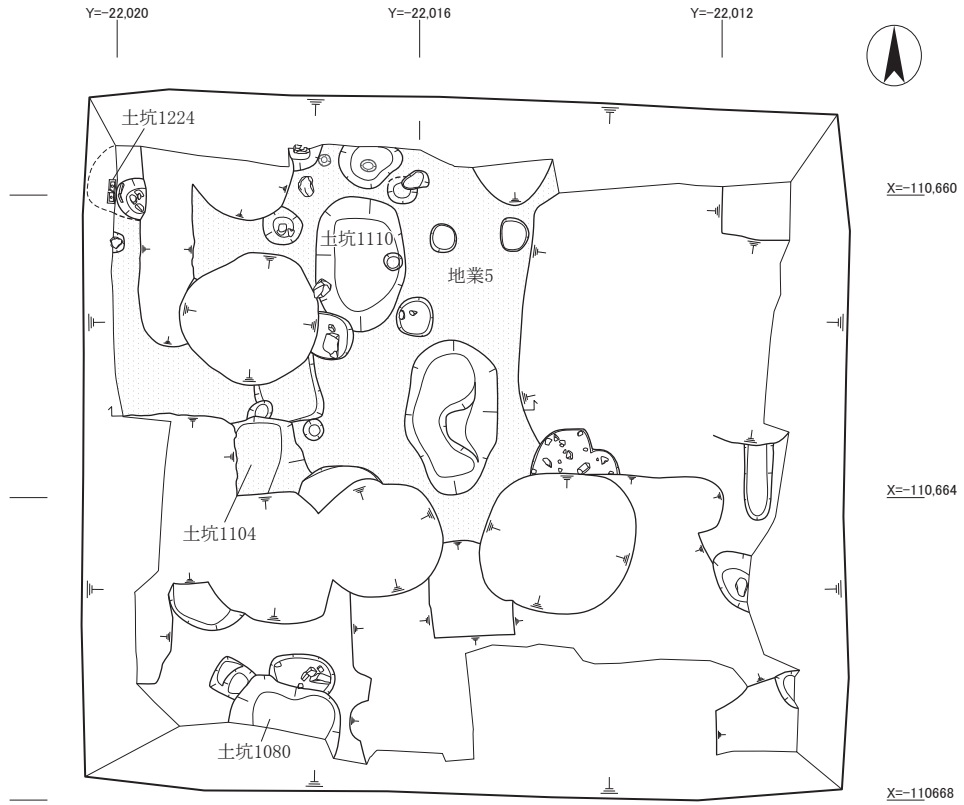
土坑1080 調査区の南西端で検出した土坑である。南半分が調査区外に延びており規模は不明である。東西約1.5m、南北0.7mを確認した。埋土は炭片を含む黒褐色細砂であった。

土坑1104 地業5の下層で検出した土坑で、調査区の中央西寄りで確認した。南・西辺を攪乱に切られており、規模は不明である。南北1.0m以上、東西0.9m以上、検出面からの深さは1.1mであった。埋土は黒褐色シルト質細砂である。少量だが15世紀中頃の遺物が出土した。

地業5(図15, 図版18) 調査区の北西半に広がる地業である。北・西部は調査区外、その他の端は攪乱に切られており、規模は不明である。断面の観察から水平に積んだ土の上に、拳大の礫を敷き、さらにその上に盛土を施す施工をしていると推定される。礫敷きは、明瞭では無いものの、幅0.5～0.6mの南北方向を指向しており、ある程度計画的に配置されていた可能性がある。

土坑1224 調査区の北壁で確認した土坑である。検出した直径は1.0mで埋土は黒褐色シルト混中砂であった。地業5を切っている。

第5期



第6期

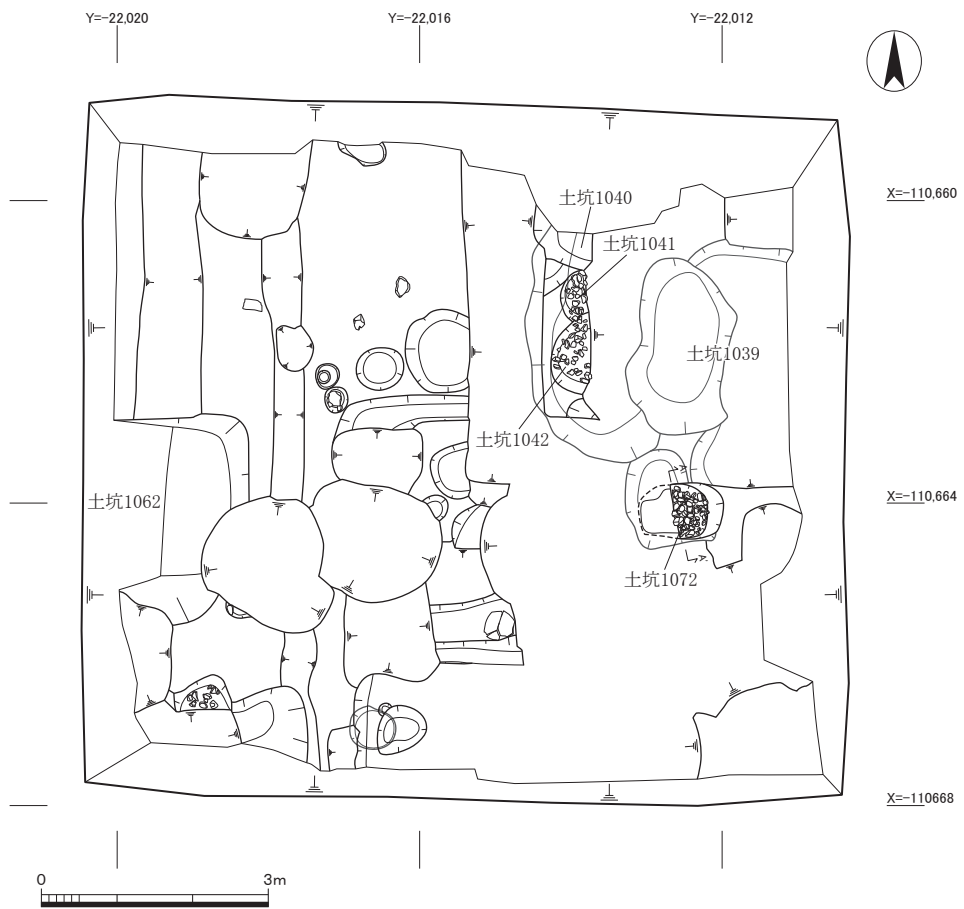


图14 第5期·第6期 平面图 (1:100)

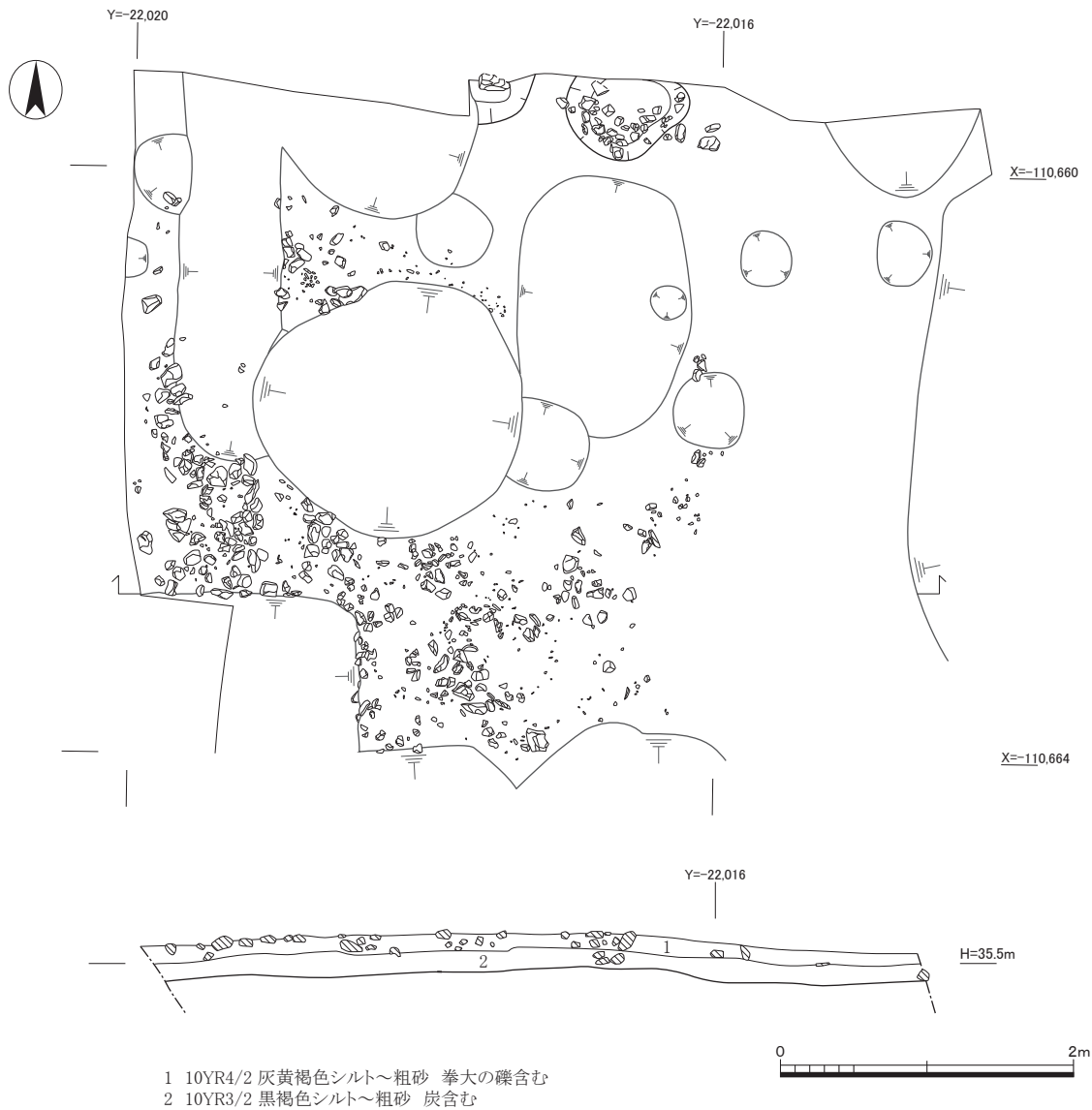


図15 地業5 平・断面図 (1:50)

(8) 第6期の遺構 (図14, 図版19)

おもに16世紀代に属する遺構面で、第5期以前と変わって大規模な土坑が検出された。土取り穴と考えられる土坑1039や焼土処理土坑のほかそれを切る土坑1041・1042・1072などが検出された。16世紀代で利用の変遷があったと考えられる。

土坑1039 調査区北東部で検出した土坑である。不定形の土坑が3基重なっているが、埋土が近似していることと、出土遺物の年代観から一つの土坑だと考えた。黄褐色シルトからなるいわゆる地山を掘りぬき、底に砂層が露出していること、不定形の土坑が重複したような掘方などの特徴から土取り穴の可能性が高い。南北約3.5m、東西約3.2m検出面からの深さは1.7mであった。埋土は炭・焼土を含む灰黄褐色シルト質中砂である。土坑1040~1042に切られている。上部は近世攪乱で大きく削られていた。

土坑1062 (図版19) 調査区南西部で検出した土坑で西半分は調査区外にのびている。南北約

2.6m, 東西 1.5m以上で方形を呈していたと考えられる。埋土は4層に分かれる。細上層は灰黄褐色中砂～粗砂, 上層は炭・焼土を多量に含む灰褐色中砂～粗砂である。

土坑1041 調査区北側で検出した土坑で, 東半分は近世土坑によって攪乱されている。土坑1039が埋まった後に成立しており, 土坑1042に南肩を切られていた。直径約0.7mの円形に復元できる。検出面からの深さは約0.2m, 拳大の礫を多量に含む黒褐色細砂および暗灰黄色シルトで埋まっていた。小片のため図化していないが, 土師器皿・古瀬戸灰釉丸皿・焼締陶器甕・青磁皿など16世紀後半の遺物が出土した。

土坑1042 土坑1041の南で検出した土坑で, 東半分は攪乱されている。直径約1.0mの円形を呈すると推測される。検出面からの深さは約0.2mで拳大の礫を多量に含む灰黄褐色細砂で埋まっていた。細片だが, 方形の瓦器火鉢, 青磁椀などが出土した。

土坑1072(図版18) 土坑1039の南で検出した土坑で, 西半分は近代攪乱で壊されていた。直径約0.7mの円形に復元され, 埋土には拳大の礫を多量に含む。検出面からの深さは0.4mである。底まで密に礫が入っており, 土坑1041・1042とは性格を異にすると推測される。細片のため図化していないが土師器皿, 青磁椀・盤, 焼締陶器播鉢・甕, 鉄釘など16世紀後半の遺物が出土した。

(9) 第7期の遺構(図16, 図版19)

近世の遺構面である。遺構が重複し煩瑣であるため7-1a・7-1b, 7-2に細分して報告する。近世の当該地は綾小路通に間口を開く町屋の裏手側にあたり, 近世から近代までのゴミ穴が多数掘られていた。本地に建っていた田中長奈良漬店は寛政元年創業であり, 近世から近代初頭の遺構も本地においては重要な意味を持つ。このため, 7-2期は18世紀から近代初頭までの遺構を報告する。

7-1a期の遺構

溝1060 調査区西側で検出した南北溝である。幅約0.4m, 検出面からの深さ0.1mで埋土は灰黄褐色細砂質シルトである。上層で検出した溝1027と同じ位置で検出された。区画溝の可能性が高い。細片のため図化しなかったが, 土師器皿, 瓦器鍋・火鉢, 明染付小杯, 焼締陶器播鉢など17世紀代の遺物が出土した。

土坑1022 調査区の北東部で検出した土坑で西端は攪乱され, 東端は調査区外にのびている。南北約1.4m, 東西1.0m以上, 埋土は炭・焼土を含む黒褐色細砂である。図示しなかったが, 土師器皿, 瓦器火鉢, 瀬戸焼大皿, 銅滓など17世紀代の遺物が出土した。

ほかに, 土坑1024・1025・1031などから17世紀代の土器が出土した。

7-1b期の遺構

溝1027 調査地の西側で検出した南北溝で, 北側は攪乱されている。幅0.4～0.6m検出面からの深さ0.1mで, 埋土は炭わずかに含む灰黄褐色細砂であった。上述溝1060を踏襲した区画溝だと考えられる。遺物はいずれも細片だが焼締陶器播鉢や国産の磁器が出土した。

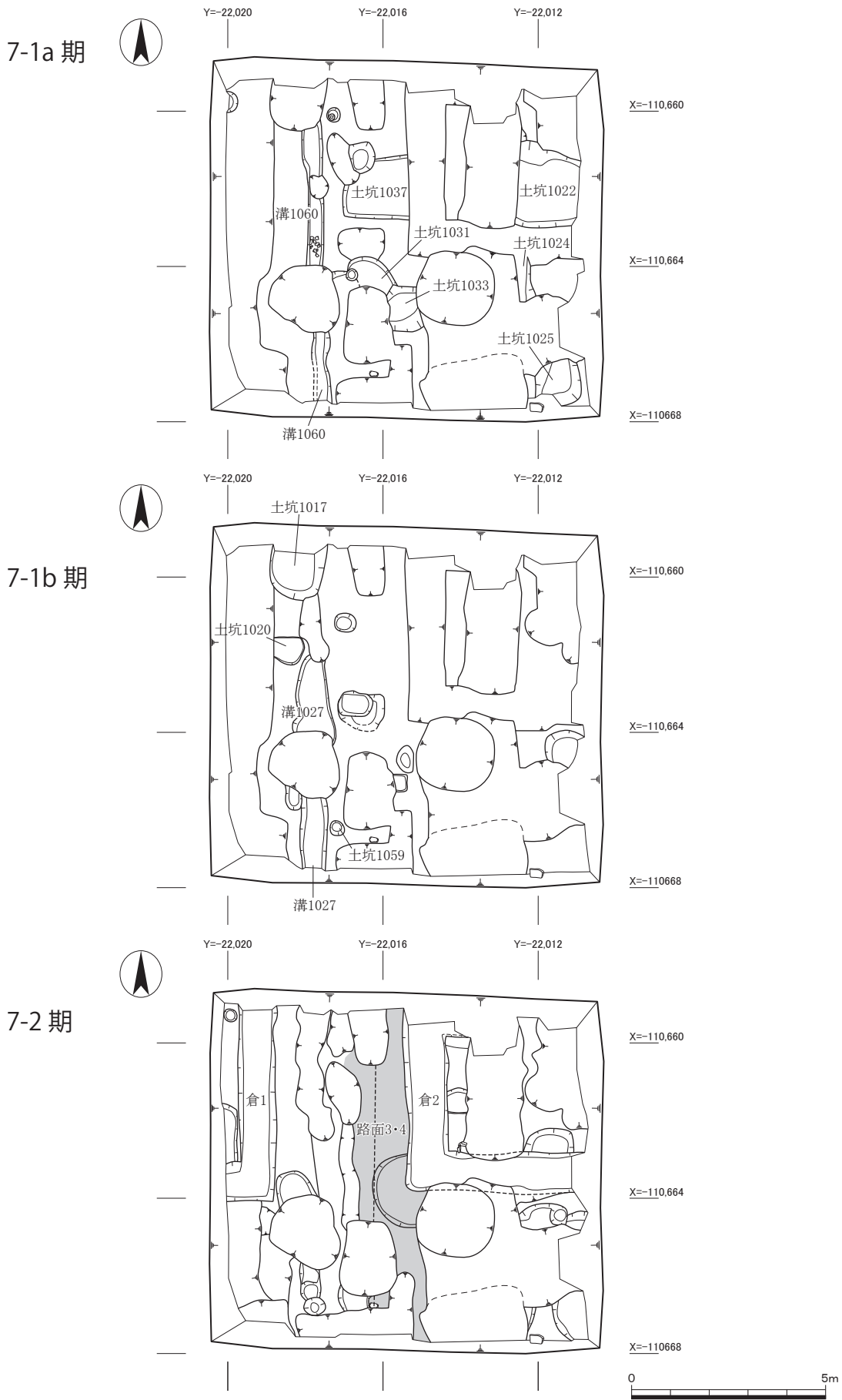


图16 第7期(7-1a·7-1b·7-2)平面图

土坑1017 調査地の北西端で検出した土坑である。直径1.4mの不定な円形を呈し、検出面からの深さは約2.0m、埋土は炭を含むオリーブ褐色シルト質中砂である。本調査地で検出した井戸はいずれもさらに深い湧水層まで達していたため、遺構の性格はゴミ穴と考えている。多量の完形の土師器や京焼をはじめとする京都XⅡ期の遺物が出土した。

7-2期の遺構

路面2面と明治期の倉2棟を検出した。

路面3・4(図版18) 調査区の中央西寄りで検出した路面で、確認できた幅は約1.8mである。小石を敷き詰めてあり、上面は固くしまる。礫層の層厚は5cmであった。同じ位置で固く締まる礫層が2層確認されたことから一度補修が行われたと考えられる。上述の区画溝の東隣にあたる。

倉1・2 調査地の北半で確認した倉で、幅1.0m、検出面からの深さは1.4mであった。いずれも調査区外にのびているが口の字状に巡ると推定される。埋土は礫層と泥砂層の互層からなり、前述の路面を切っていることより、明治初頭の田中長漬物店の倉の可能性はある。

4. 遺物

本調査では、整理コンテナにして53箱の遺物が出土した。出土遺物には、土器・陶磁器、瓦類、銅製品、鑄造関係遺物、石製品がある。時期は弥生時代・古墳時代・平安時代・鎌倉時代・室町時代・江戸時代の各時代に及ぶ。ここでは、各期の理解を助ける主要な遺物を取りあげ報告する。

(1) 第1期の遺物

弥生時代の遺物が竪穴建物1218から、古墳時代の遺物が土坑1220から出土した。

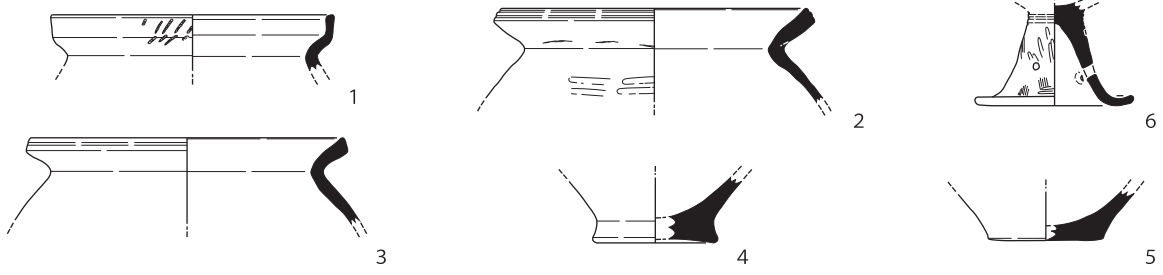
竪穴建物1218(図17, 図版20) 弥生土器甕, 高杯などが出土した。弥生時代後期前葉に属する。1は近江系甕で口縁部に櫛描列点文が施される。2・3は瀬戸内系甕で口縁部端面に凹線が施される。線は浅く表現は弱い。2は2条, 3は1条確認できる。器表面が磨滅しており調整は不明

表2 遺物概要表

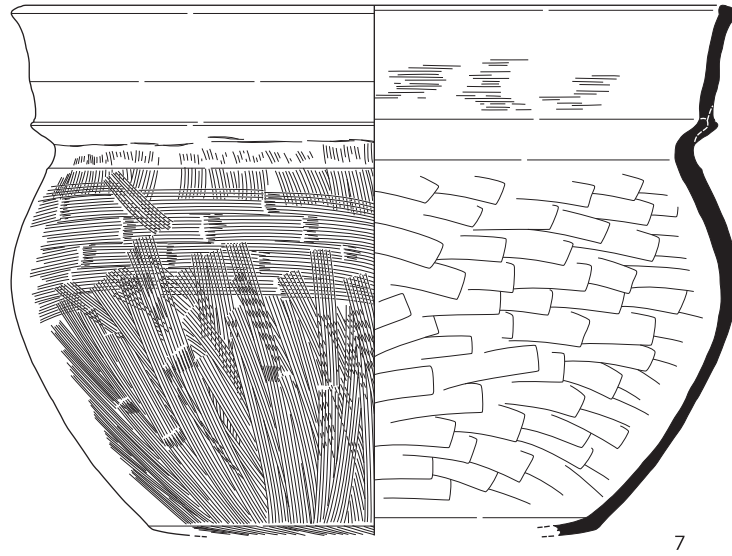
時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	弥生土器		甕5点, 高杯1点		
古墳時代	古式土師器		甕1点		
平安時代	土師器, 須恵器, 黒色土器 緑釉陶器, 白色土器, 灰釉陶器, 瓦器, 山茶碗, 輸入陶磁器		土師器27点, 須恵器1点, 黒色土器2点 緑釉陶器7点, 白色土器4点, 灰釉陶器6点, 瓦器1点, 山茶碗1点, 輸入陶磁器17点		
鎌倉時代 南北朝時代	土師器, 須恵器, 瓦器, 輸入陶磁器, 瓦		土師器54点, 須恵器1点, 瓦器2点, 焼締陶器1点, 石製品1点		
室町時代	土師器, 瓦器, 焼締陶器, 国産施釉陶器, 輸入陶磁器		土師器18点, 瓦器3点, 焼締陶器1点 国産施釉陶器3点, 輸入陶磁器12点		
江戸時代 その他	土師器, 瓦器, 焼締陶器, 国産施釉陶器, 輸入陶磁器 鑄造関係遺物, 銅製品, 銭貨		土師器21点, 焼締陶器1点, 国産施釉陶器5点, 輸入陶磁器5点 鑄造関係遺物4点, 銅製品8点, 銭11枚		
合計		48箱	229点(9箱)	1箱	38箱

※コンテナ箱数の合計は、整理後にAランクの遺物を抽出し、詰め直しを行った為出土時より5箱少なくなっている。

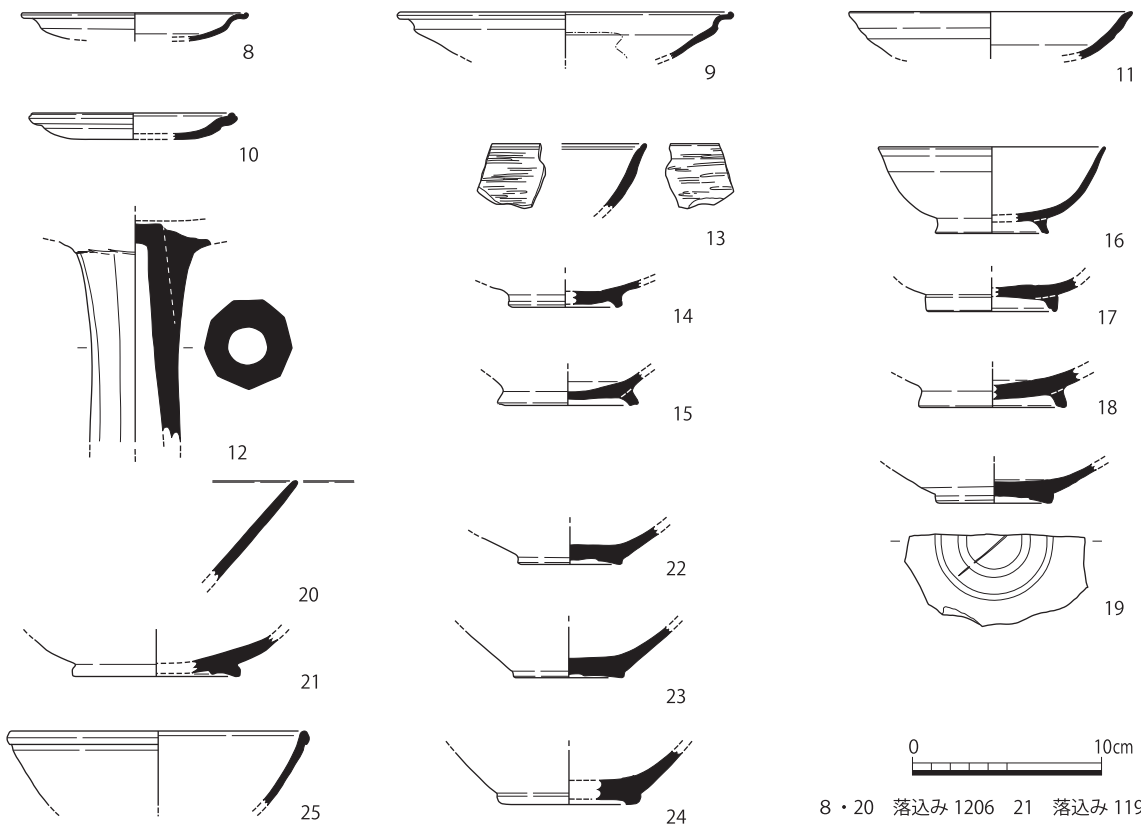
竖穴建物1218



土坑1220



第2期整地層



8・20 落込み 1206 21 落込み 1190
9～19・22～84 整地層掘り下げ

图17 竖穴建物1218・土坑1220・第2期整地層出土遺物 実測図(1:4)

瞭だが、2は粗いタタキ目がわずかに観察される。4・5は甕の底部である。表面が磨滅しているため調整は不明である。6は高杯の脚部である。丁寧にミガキが施されている。脚部上端に二条の凹線、その下に5ヶ所の竹管文が施され、6ヶ所の透かし孔が穿たれている。弥生土器V-1様式に属する。

土坑1220(図17, 図版20) 山陰系古式土師器甕7が単体で出土した。古墳時代前期に属する。口縁部はナデで仕上げられ、胴部外面はハケ目、内面はケズリが見られる。いずれも丁寧である。底部はわずかだが残存しており平底になる。但馬産の甕と考えられ、周辺では向日市鴨田遺跡に類似がある。布留式併行期のものと考えられる。

(2) 第2期の遺物

おもに平安時代の中期の遺物が出土した。第2期整地層には平安時代前期に遡るものも含まれる。ほかに柱列7, 土坑1204出土遺物などがある。10世紀後半～11世紀前半に属す。

第2期整地層(図17) 土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器・青磁・白磁・瓦などが出土した。最も新しい遺物は11世紀前半に位置付けられ、その中に9～10世紀代のものが含まれていた。土師器には、皿8～11・高杯12がある。8～11は皿A, 11は皿Nで、8は口径12.0cm, 9は17.8cm, 10は11.0cm, 11は15.0cmである。いずれも口縁残存率が低く、復元口径には誤差が含まれる。黒色土器にはB類椀13がある。施釉陶器・輸入陶磁器には、緑釉陶器椀14～19, 越州窯産青磁椀20～24, 白磁椀25ほか細片のため図化しなかったが白磁壺などがある。緑釉陶器14の胎土は硬質で釉は濃緑色である。15の胎土は軟質で、釉は黄緑色である。16の胎土は硬質で釉は黄緑色である。17の胎土は軟質で釉は黄緑色である。18の胎土は硬質で釉は黄緑色, 猿投窯産である。19の胎土は硬質で釉は濃緑色, 底部外面には蛇ノ目高台にまたがるヘラ記号がある。越州窯産青磁椀22は底部外面に目痕が6ヶ所観察される。24は被熱のため釉葉がかせている。

整地層出土の遺物は、土師器皿10・11のような京都IV期古～中段階の遺物の中に、土師器皿9, 緑釉陶器16, 越州窯産青磁21などのIII期の遺物, 土師器高杯12, 緑釉陶器椀18, 越州窯産青磁20などさらに古くなる遺物が含まれている。IV期古～中段階に

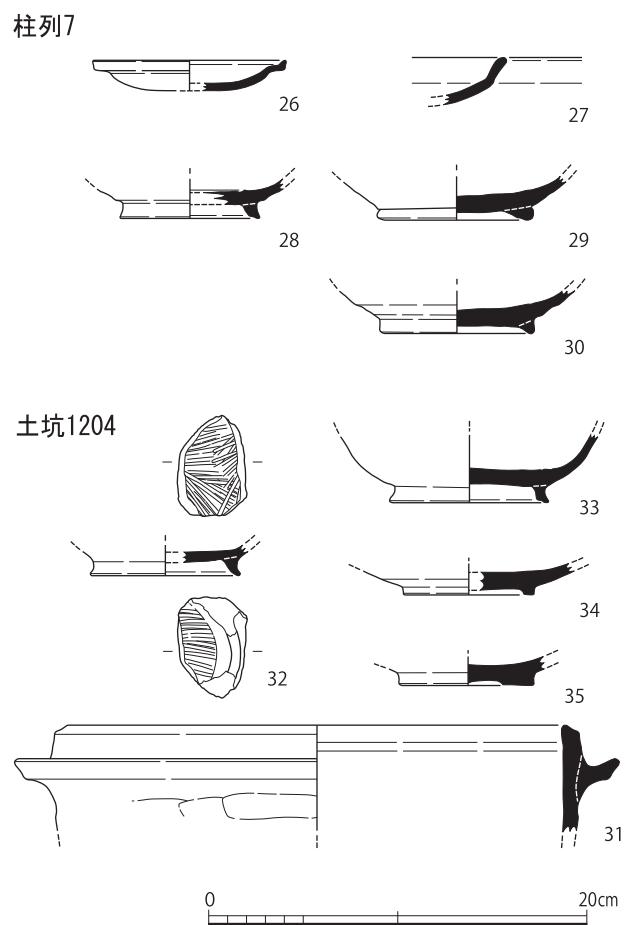


図18 柱列7・土坑1204出土遺物 実測図(1:4)

古い遺物を含んだ客土を利用して整地したと推測される。

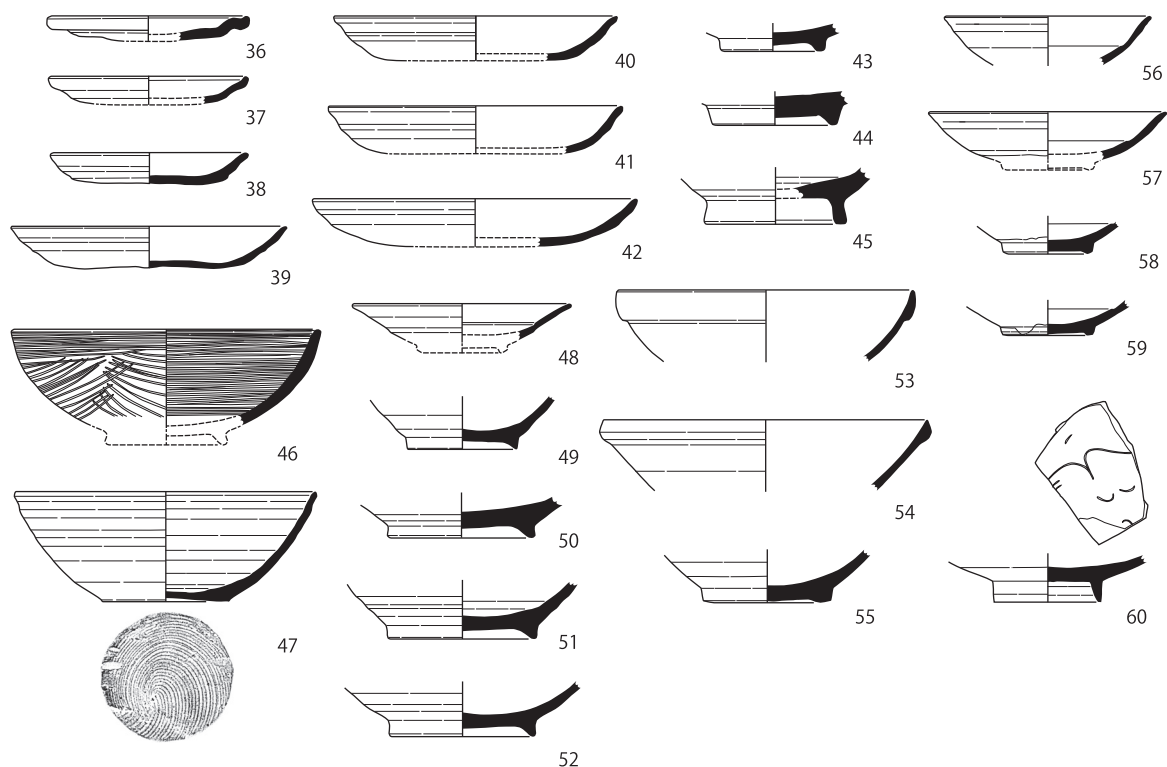
柱列7（柱穴1139）（図18） 土師器皿26・27，緑釉陶器椀28，灰釉陶器椀29・30が出土した。少数のため詳細な時期は不明だが京都IV期の遺物と考えられる。

土坑1204（図18） 土師器羽釜31，黒色土器32，緑釉陶器椀33，白色土器椀34，35を出土した。緑釉陶器33の胎土は硬質で釉は緑色，見込みに重ね焼きの痕跡がある。

（3）第3期の遺物

平安時代中期から鎌倉時代の遺物が出土した。遺構数に対して遺物数は多くない。井戸1200の

井戸1200



土坑1128

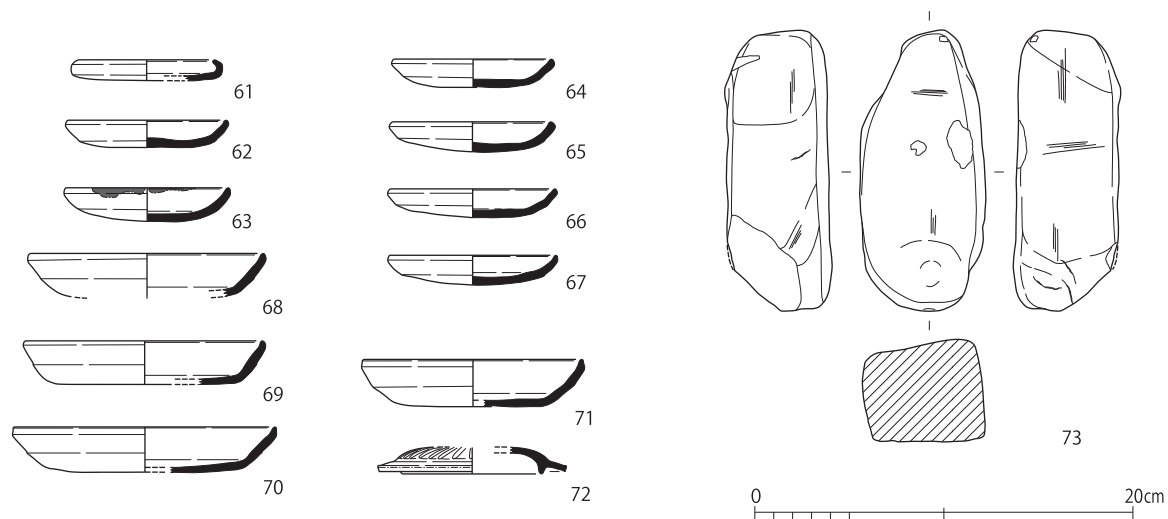
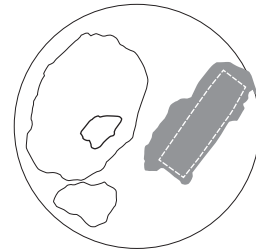
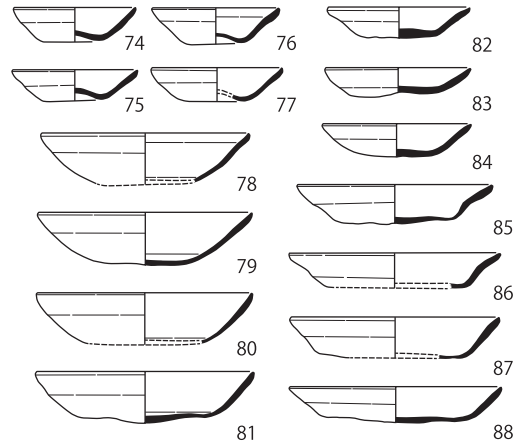


図19 井戸1200・土坑1128出土遺物 実測図（1：4）

遺物は11世紀中頃～後半，土坑1128の遺物は13世紀代に属する。

井戸1200(図19, 図版20) 土師器・白色土器・瓦器・須恵器・灰釉陶器・白磁が出土した。11世紀中頃～後半に位置付けられる。土師器には皿36～42・45がある。36・37は皿A, 38～42はNである。土師器皿36～38は口径10.5～10.8cm, 39～41は14.6～15.6cm, 42は17.2cmである。25は完形に近いが，他は細片のため復元口径には誤差が含まれる。白色土器碗43・44は底部のみの破片である。ほかに瓦器碗46, 須恵器碗47, 灰釉陶器48～52, 白磁碗53～55・60, 皿56～59が出土した。47の口縁部外面は帯状に変色している。重ね焼きの痕跡である。48～52は見込みを除いた内面のみ施釉する。施釉はかなり粗い。京都IV期中段階に属する。

土坑1128(図19) 土師器, 白色土器, 須恵器, 瓦器, 青白磁, 鉄釘などが出土した。13世紀前半に位置付けられる。土師器には皿61～71がある。出土破片数はAc2片, N130片, S3片で, 京都VI期になって新たに見え始めるSは少ない。61はAcで口径8.1cm, 62～70はNで8.3～9.1cm, 71はSで11.8cmである。72は青白磁の蓋である。73は砥石で, 図示した三面に使用痕が見られた。ほかはいずれも細片で瓦器羽釜・鍋・甕, 白色土器高坏, 須恵器鉢などがある。京都VI期中段階の遺物と考えられる。



(4) 第4期の遺物

鎌倉時代～南北朝時代の遺物が出土した。土坑1100・1081などから土師器皿がまとまって出土したほか完形の石鍋や，備前焼の甕が出土している。京都VII期中段階～VIII期に属する。

土坑1100(図20, 図版21) 土師器, 瓦器, 焼締陶器が出土した。14世紀前半に位置付けられる。土師器は皿Nが26片, Sが58片ある。74～77は皿Shで口径6.5～7.0cm, 78～81はSで11.1～11.6cmであった。82～88はNで82～84は7.6～7.9cm, 85は10.4cm, 86～88は11.0～11.3cmである。石鍋89・90は2個体とも底部に補修痕跡がある。89は底部に長方形(6.5cm×1.5cm)の孔をあけ, 同寸法の石材をはめ込み漆で接着している。90の底部は, およそ二分の一が剥離・欠損している。欠損端部は直線的に切り取られ

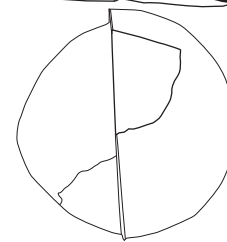
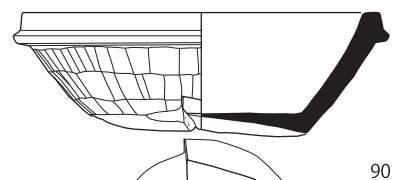
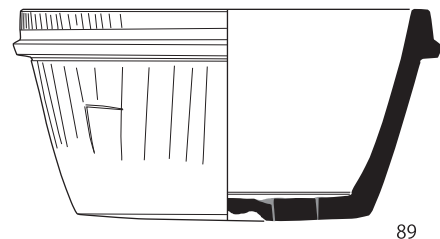
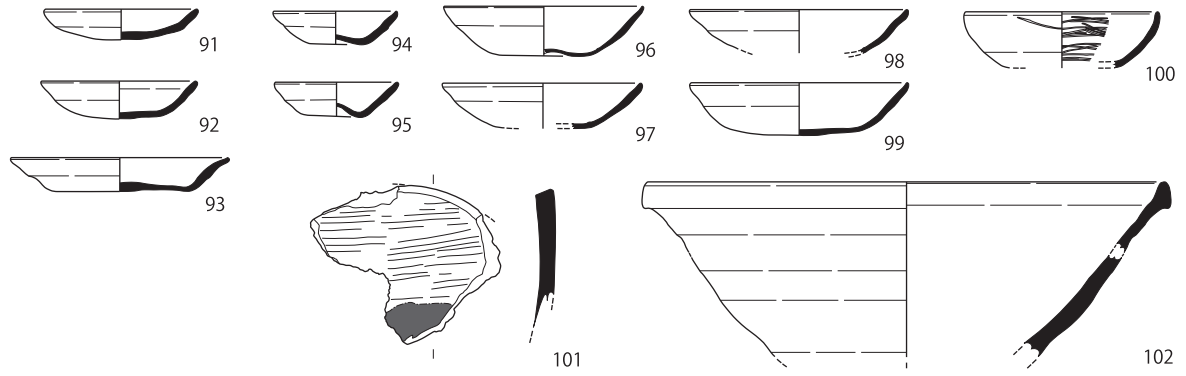


図20 土坑1100出土遺物 実測図(1:4)

土坑1157



土坑 1081

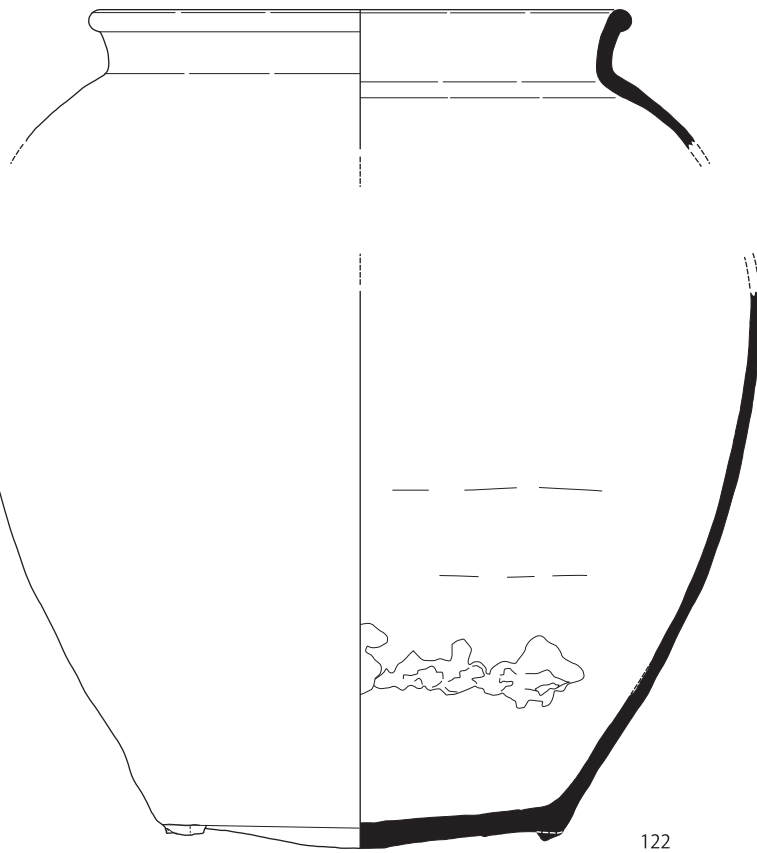
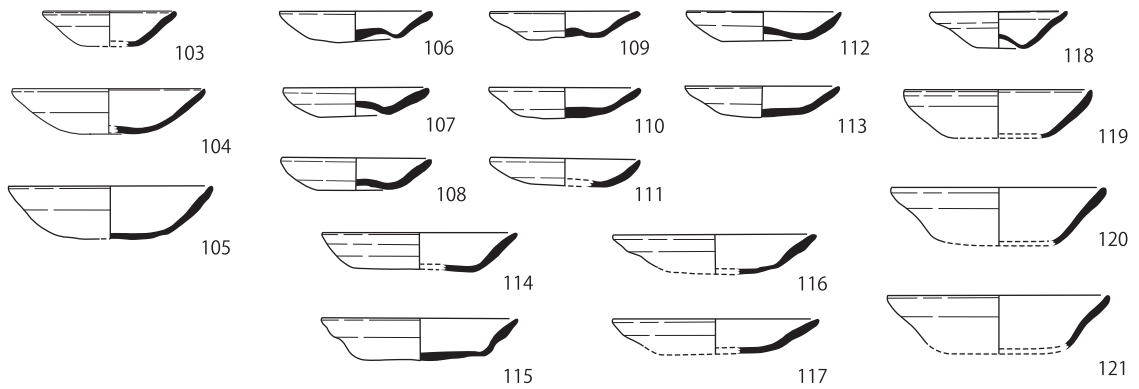


图21 土坑1157·1081出土遺物 実測図(1:4)

た痕跡があり底部は平坦である。欠損後人為的に加工したと思われる。本来の底部との間に0.3cmの厚みの差があるため、欠損端部は段差状になっており、この段差部に漆の痕跡が残っていることから、欠損部に別の石材が補填されていたと推定される。京都Ⅶ期新段階の遺物と考えられる。

土坑1157(図21) 土師器, 瓦器, 須恵器, 焼締陶器, 青磁, 砥石, などが出土した。土師器皿91~93は皿Nで91・92は口径8.2~8.3cm, 93は口径11.6cmである。94・95はShで口径6.6cm, 96~99はSで96・97は口径10.6cm, 98・99は11.6cmである。瓦器100は輪花椀であるが輪花の表現は見られない。101は瓦器火鉢を硯として転用したもので墨痕が確認できる。102は東播系須恵器鉢である。京都Ⅶ期新段階の遺物と考えられる。

土坑1081(図21, 図版21) 焼締陶器の甕122が据えられていた埋甕土坑で、堀形から土師器皿103~105, 甕内部から土師器皿や, いずれも細片であるが瓦器鍋・火鉢, 須恵器甕, 明染付が出土した。堀方出土の土師器皿破片数は皿S5片, 埋土はN167片, S53片であった。土師器皿103~105はSで, 103は口径7.1cm, 104は

10.2cm, 105は10.8cmである。106~117までは土師器皿Nで106~113は口径7.8~8.2cm, 114~117は口径10.4~11.0である。118はShで口径7.3cm, 119~121はSで119は口径10.0cm, 120・121は11.4cm・11.8cmである。

122は備前焼の甕である。口縁部から頸部までの破片は甕底部内に埋没しており同一個体と考える。遺存状態は良いが肩部は欠損していた。外面の調整は全体に縦方向のハケを施し, 肩部はさらに横方向にナデている。京都Ⅷ期古段階の土器で, 時期は14世紀後半のものと考えられる。なお, 103~105は他の土師器よりも古い特徴を有しており, 時期が少し遡ると思われる。

土坑1160(図22) 土師器, 瓦器, 焼締陶器が出土した。土師器のほかは細片であった。土師器皿123~126は皿Nで口径7.4cm~7.9cm, 127~130はShで口径7.0~7.8cm, 131~133はSで口径11.6~12.3cmである。京都Ⅷ期古~中段階に位置づけられる。

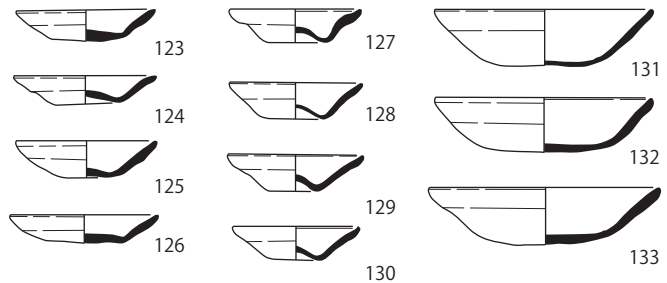
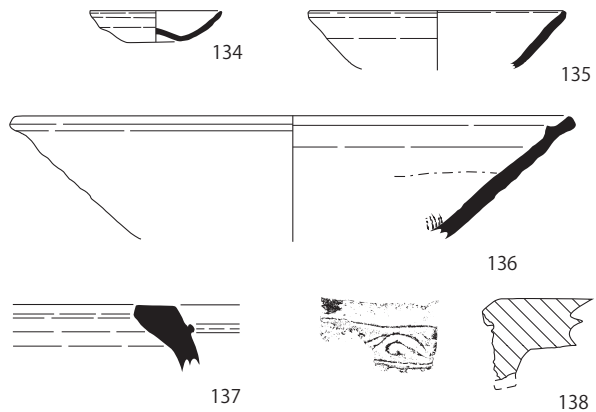


図22 土坑1160出土遺物 実測図(1:4)

土坑1080



土坑1104

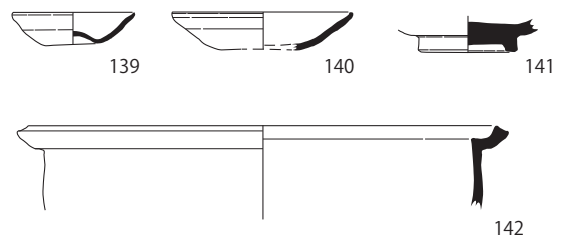


図23 土坑1080・1104出土遺物 実測図(1:4)

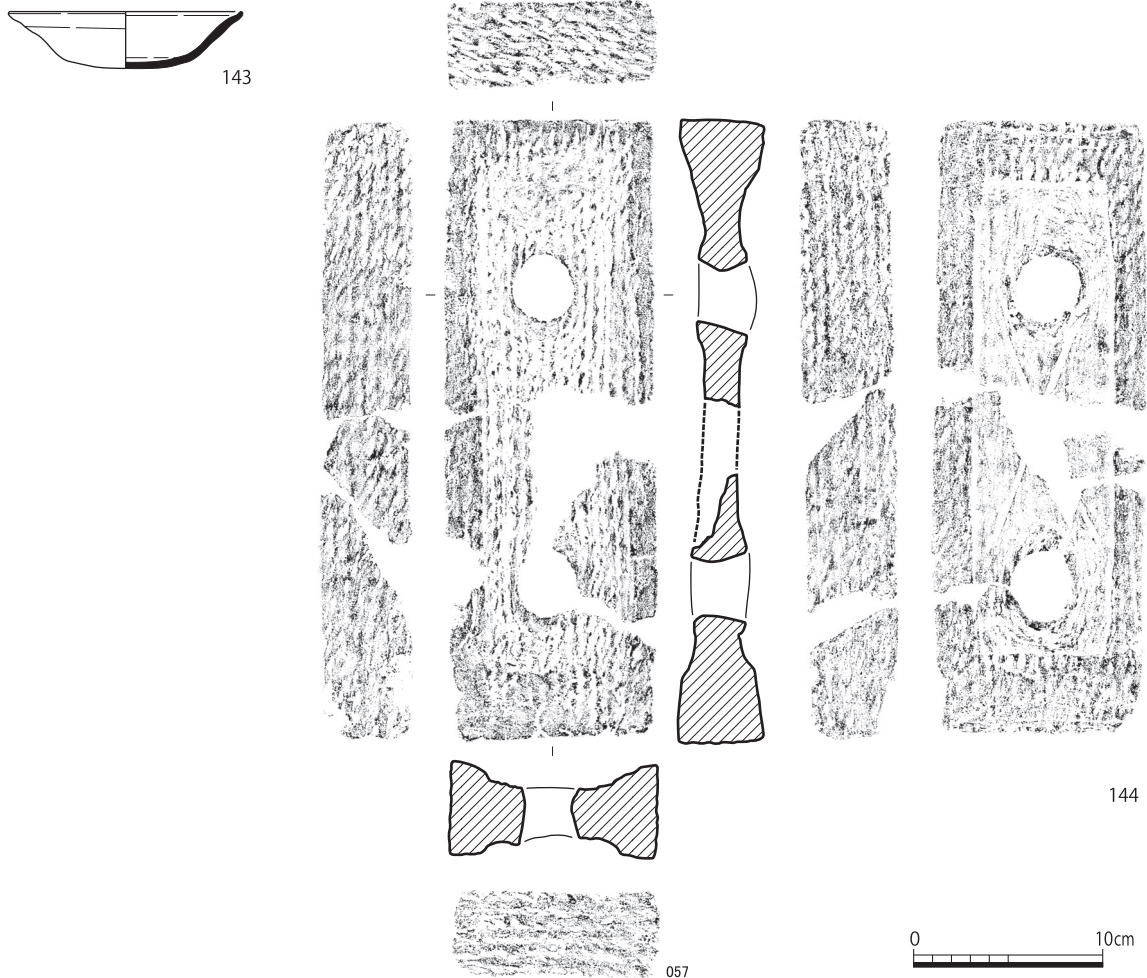


図24 土坑1224出土遺物 実測図（1：4）

（5）第5期の遺物

室町時代の遺物が出土した。全体量は少ない。

土坑1080（図23） 土師器皿134・135，瓦器火鉢137，国産施釉陶器136，軒平瓦138ほか焼締陶器甕，白磁などが出土した。134は皿Shで口径7.1cm，135はSで口径13.6cmである。136は瀬戸美濃焼おろし目皿である。出土数が少ないため詳細な時期は不明だがⅧ期新段階からⅨ期古段階の土器と考えられる。138は下層の混入品で唐草文軒平瓦である。平安時代後期に位置付けられる。

土坑1104（図23） 土師器皿139・140，瓦器鍋142，青磁椀141が出土した。139は皿Shで口径6.7cm，140はSで口径9.6cmである。出土数が少ないため詳細な時期は不明だがⅧ期新段階からⅨ期古段階の土器と考えられる。

土坑1224（図24，図版22） 土師器皿143と有孔埴144が出土した。143は皿Sで口径12.4cmである。144はほぼ完形で長33.0cm，幅11.0cm，厚5.2cm，全面に縄タタキ目が残る。裏面には「×」状のへら記号がある。1点のみのため詳細は不明だが，土師器皿の年代観は京都Ⅸ期の古～中段階に属すると考えられる。15世紀後半か。

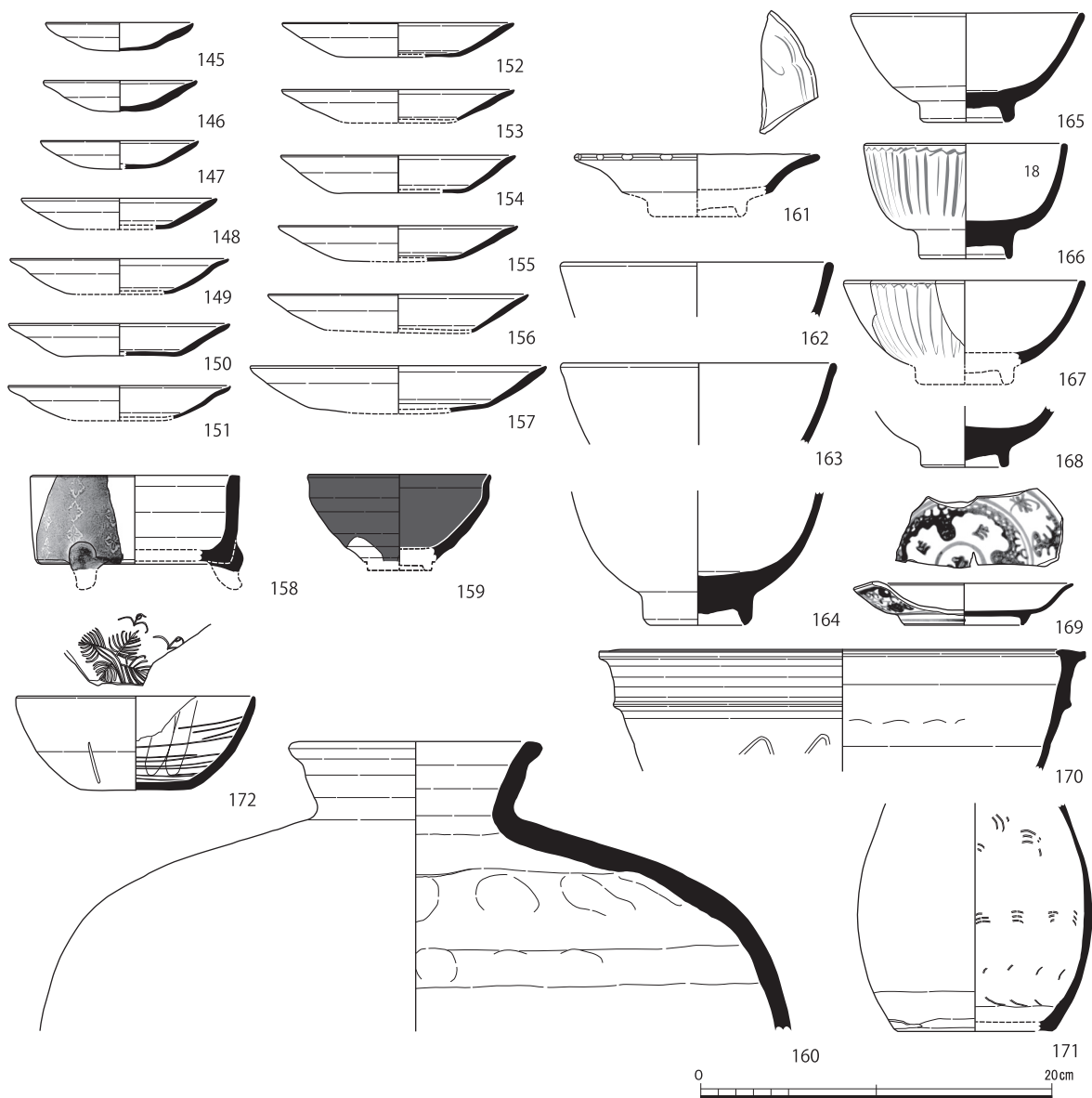


図25 土坑1039出土遺物 実測図(1:4)

(6) 第6期の遺物

土取穴など規模の大きい遺構から多くの遺物が出土したが、下層のものを多量に含んでいた。すべての遺物を報告すると煩瑣で、実態が混乱する恐れがあるため、16世紀代の遺物がまとまって出土した土坑1039をもって第6期の遺構出土の遺物を代表させる。

土坑1039(図25, 図版22) 土師器, 瓦器, 国産施釉陶器, 焼締陶器, 青磁, 白磁, 明染付ほか下層の混入品として瓦器火鉢, 古瀬戸輪花椀, 白磁椀などがあつた。145~147は土師器皿Sbで口径8.4~9.0cm, 148~157はSで148は11.2cm, 149~151は12.5~12.7cm, 152~155は13.2~13.6cm, 156は14.9cm, 157は16.9cmであつた。158の瓦器火鉢は小型品で, 体部には単体の花菱文が, 縦に連続して押印されている。159は瀬戸美濃焼の天目椀で釉薬は褐色である。160は丹波焼壺である。169は明染付皿で二次被熱のために歪んでいる。170は李朝陶器の甕, 171は李朝陶器の壺である。171の内面には当具痕が残る。172は下層からの混入品でVI期の

瓦器輪花椀である。底部内面に精緻な暗文ある。類例の少ない遺物であるため図化した。土京都X期中段階の遺物で、16世紀中頃の年代観が推定される。

(7) 第7期の遺物

江戸時代の遺物としては、17世紀代の遺物が少量と18世紀代の遺物が出土した。これらの遺物の中には、鞆の羽口、坩堝、鉄滓・銅滓、金属製品、状態の悪い銭貨類が含まれていた。

江戸前期から田中長漬物店が創業する寛政までの間に、鑄造関係の施設があった可能性がある。

土坑1017 土師器、焼締陶器、輸入陶磁器、国産施釉陶器・染付、土製品などがある。18世紀代に位置付けられる。土師器には皿173～190と丸底鉢191・192・壺193がある。173～181は皿Nrで口径5.2～5.7cm、181は口径7.1cmである。182～185はSbで182～184は口径7.0～7.3cm、185は口径10.0cmである。186～189はSで10.4～11.0cm、190は11.8cmである。輸入陶磁器には白磁小杯194・皿195、椀196、明染付201・202がある。国産施釉陶器には京焼系陶器皿199、椀203、唐津焼鉢200がある。197・198は肥前焼染付である。206は焼締陶器播鉢である。204・205は土製品で204は蓋状土製品で中央にスタンプがある。205は人形で傘を持っている。

鑄造関係品(図26)には、鞆の羽口207、坩堝208～209がある。このほか図化しなかったが鉄滓、銅滓などが出土した。これらは第7期の遺構および包含層から出土した。205は小穴1059から、204・206・207は第7期の包含層出土である。

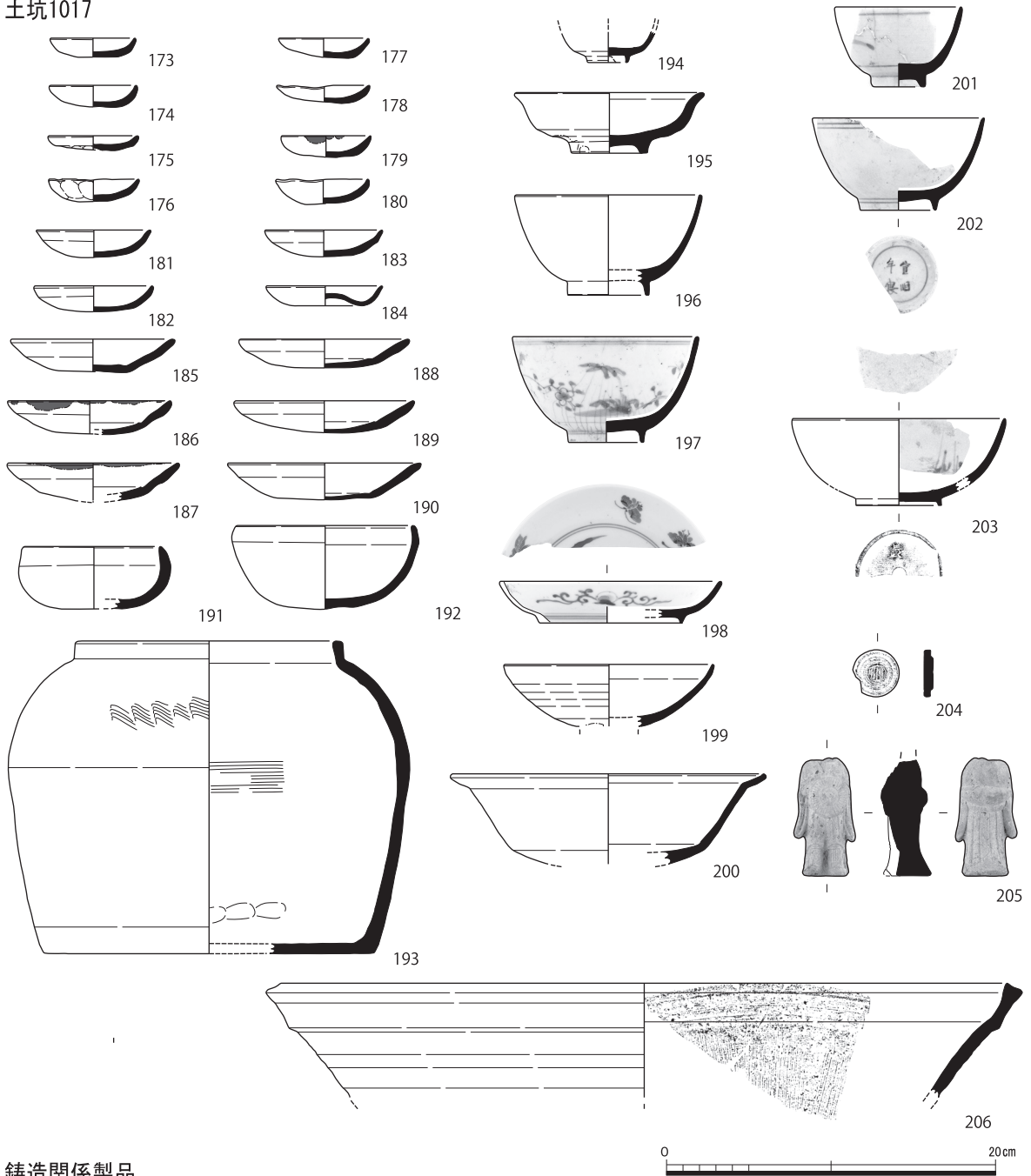
金属製品(図27, 図版22)には、キセル211・212、筭213、灯心おさえ214、火箸215、掛金具216、不明銅製品217、鍋218がある。いずれも銅製である。第7期の遺構および包含層から出土した。213は土坑1037、215は土坑1020、216は溝1060、211・212・214・217・218は第7期包含層出土である。

銭(図27)は、多数出土したが錆びが進行し判読できないものが多くあった。219は祥符元宝(初鑄1008, 以下初鑄を略す)で、第5期包含層から出土した。220は熙寧元宝(1068)で地業5から出土した。221は元祐通宝(1086)で土坑1110から出土した。222は開元通宝(960)第6期包含層から出土した。223も熙寧元宝(1068)で、第6期包含層から出土した。224は景祐元宝(1034)で第7期包含層から出土した。225～229は寛永通宝である。225は土坑1068、226～229は第7期包含層から出土した。

5. まとめ

今回の調査では、6面8時期の遺構を確認した。最も古い遺構は弥生時代であり、最も新しいものは明治時代である。各時代の土地利用は前の時代と無関係ではなく、人々の営みが連綿と続いてきたことがわかる。とくに中世以降は、下京の中心地であるだけに活発な利用が確認された。本件成果は、綾小路に面した1区(埋文研調査)と合わせて検討することで、同小路との関係を含めた変遷を追うことが可能になる。本章では、二調査区の成果をあわせて報告することでまとめとしたい。

土坑1017



鑄造關係製品

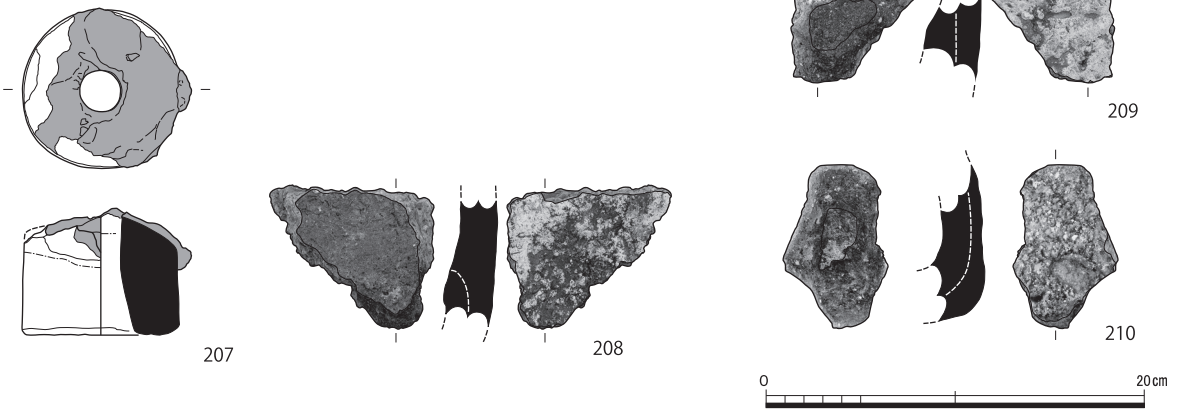
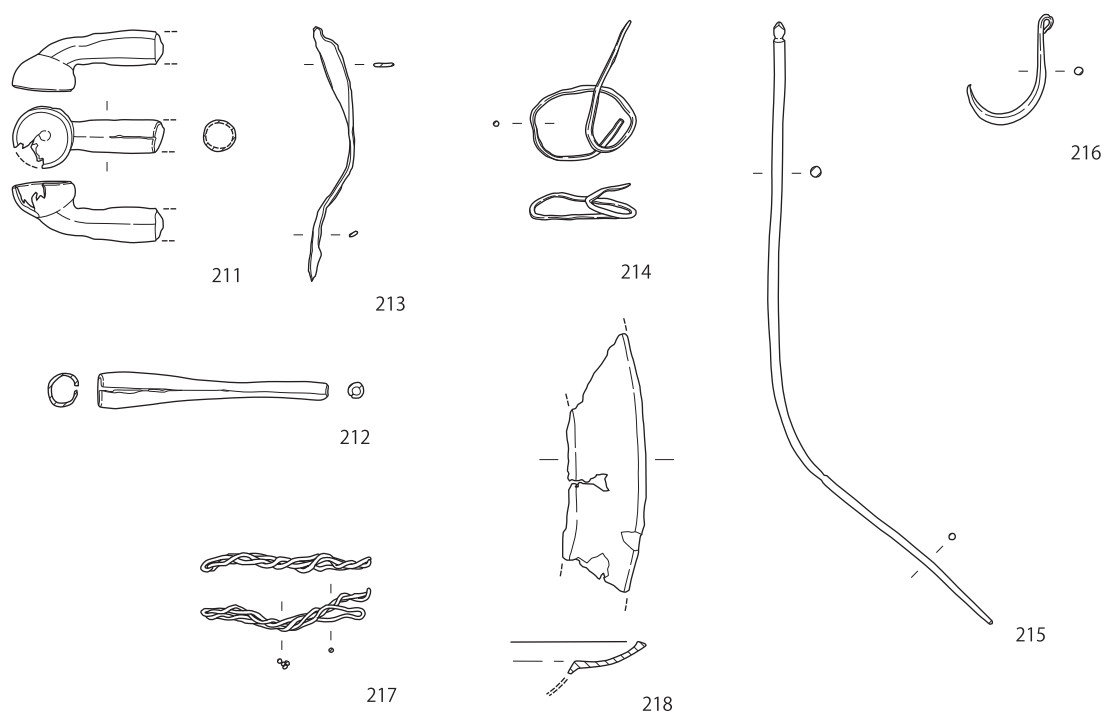


图26 土坑1017出土遺物 実測図(1:4)

金属製品



錢貨

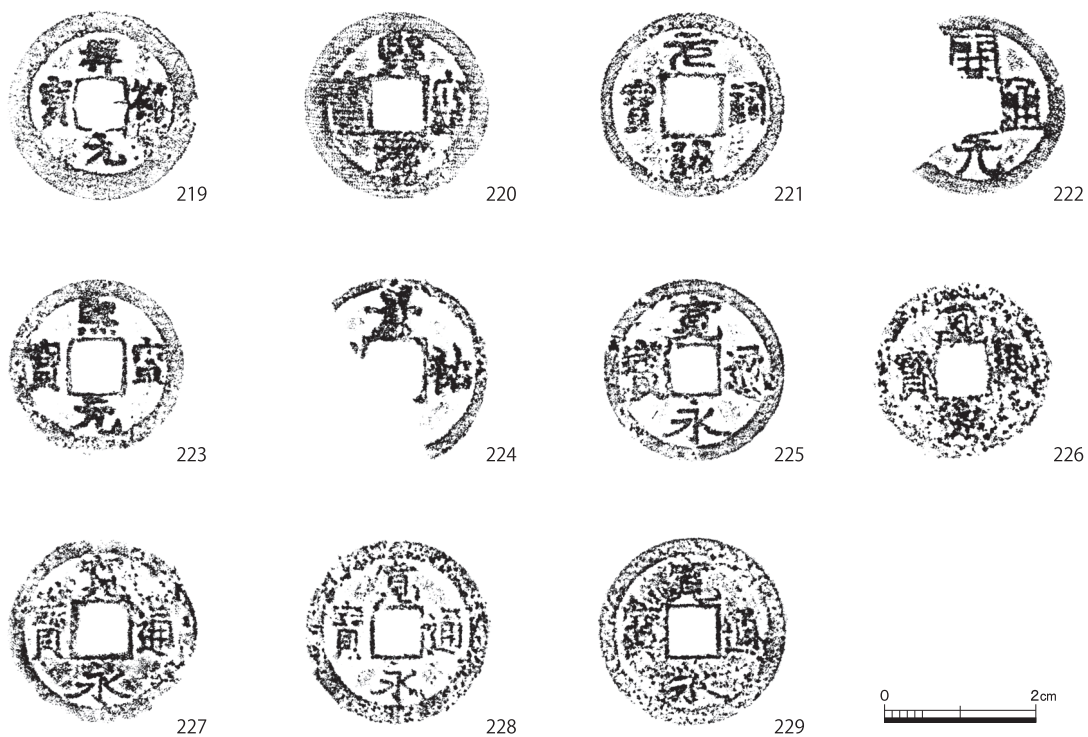


图27 金属製品 実測図(1:4)・錢貨拓本

第1期 2区で弥生時代後期の竪穴住居，1・2区で古墳時代前期の土器溜・土坑，1区で古墳時代中期の竪穴建物・溝を検出した。竪穴建物・溝は方位とは異なる傾きを軸にしている。おそらく地形に合わせ，集落が営まれたと考えられる。周辺では南に近接する調査区で竪穴建物を確認しており，当該地を含む一帯に弥生時代・古墳時代の集落が営まれていたことがわかる。

第2期 1・2区とも窪地を埋めた整地層とその上面に成立する小穴を検出した。2区では東西方向の柱列を確認した。2区・柱列の時期は，Ⅳ期古段階で，平安時代中期には小規模な宅地となっていた可能性がある。

第3期 いわゆるウグイス色の整地層上面に成立した遺構で，平安時代後期の遺構である。1区で綾小路南側溝を，2区で11世紀中頃～後半の方形井戸を確認したほか，両区で多くの柱穴・小穴を検出した。建物プランは復元できなかったが，この時期には活発な土地利用があったと思われる。綾小路の南内溝が確認されたことと，井戸が南側の2区で検出されたことから，綾小路側に間口があり，中心的な建物は小路に面した北側にあったと推測される。

第4期 層厚約30cmの整地層の上面に成立する遺構で，最も古い時期の遺構はⅦ期中段階，中心になる時期はⅧ期である。北側に規模の大きな遺構が集中するのが特徴で，土取穴と考えられる土坑417，風呂221などが1区で検出された。これらは生活に即した施設で，裏手の空間にとまなうものと考えられることから，綾小路側は開口していなかった可能性もある。風呂221出土遺物をはじめ，とくに1区では，火鉢や香炉，輸入陶磁器などが多数出土した。また，銅製品なども出土している。こうした遺物の出土量が多い事は，同時期の様相の中ではやや特異で，それなりの経済力があったと推測される。風呂221は蒸し風呂の下部遺構だと推定されるが，15世紀当時の風呂は，一般に普及しているものではなく，寺院などの施設に特別に設けられたものである事が知られている。これらのことから，当該地には寺院関係施設があった可能性があり，2区も含めた北側が裏手の空間であるとすれば，中心部はさらに南にあったと推定される。

第5期 1区では地業158，風呂210，カマド211，カマド195，土坑170を，2区では亀腹状盛土と推定される地業5を検出した。2区盛土の上面に建物痕は検出されなかったが，小規模な堂が建っていた可能性もある。この期もまた大規模な遺構は北側に集中する。風呂210は第4期・風呂221に近接する位地で検出された。規模も近似しており，第4期のものを作り替えた可能性がある。前期同様に瓦器火鉢や雁振瓦などが出土しており，寺院関係の施設があった可能性がある。また，風炉210を切って成立する土坑170は，焼土や被熱した遺物を多量に含む。時期は京都Ⅸ期新段階（1480～1500）の新相に位置付けられる。

『史料京都の歴史』によれば明応三年（1494）七月六日に四条室町一帯に大焼亡があり，東は烏丸，西は堀河，南は五条，北は四条までの五十四を廻る町が焼けたという（『後法興院記』）。遺物の年代観はこの火災の記事と整合する。

本期の遺構は土坑170の時期で廃絶したと推測され，以後は後述のように綾小路に間口を開く町屋へと変わっていく。

第6期 1区で手水鉢を伴う庭112や柱列，庭141や石組炉などを確認した。2区では大規模な

土坑1062・1039を検出した。庭は、現在の町屋に見られる坪庭の形態に近似する。今期の遺構は柱列や庭など居住空間にともなう遺構が北側、大規模土坑が南側で確認されたことから、X期中段階には綾小路に間口を開いた土地区画になったと推測され、現在までこの配置が受け継がれる。

第7期 7-1期は江戸前期の遺構である。田中長漬物店が建っていた1区は、近・現代盛土の直下に江戸時代前期の遺構が良好な状態で残っていた。礎石列1～7、井戸1・18・120・125・350などほかに三和土を確認した。2区は裏手の空間であったためか、17世紀から幕末までの遺物を含む土坑が多数検出され、遺構の残りは悪かった。主な遺構に区画溝1060がある。なお、本期の遺物中には銅滓や坩堝が含まれていた。明確な鑄造関係の遺構は確認できなかったが、南隣接地でも中世から近世にかけての遺構から滓や坩堝、鑄型などが出土しており、鑄造関係の施設があったと推測されている。本地の一部にも鑄造関係の施設があった可能性がある。

7-2期は幕末から明治にかけての遺構で、1区では井戸20、2区では路面、倉を確認した。当該地は、明治6年の童侍者町地籍図によれば、田中長兵衛氏と永野物集女氏の土地区画に位置する。図面の寸法からおこした当時の境界図を、現在の地図にあてはめると、境界は前述溝1060の位置にあたり、路面は永野物集女氏側の境界際に敷設されていたことがわかった。路面を切って成立する倉2棟は、規模の近似したものが東西に並んでいることから同一の持ち主に帰属すると推定される。しかし、前述の区画にまたがって成立していることから、明治年中に田中長漬物店が敷地を拡大した時に、作ったものである可能性が高いと考えている。以後当該地は、この町割りを踏襲し現在まで至る。

以上、本調査地では弥生・古墳時代から近・現代までの土地利用についての知見を得た。遺構群の配置から、綾小路と町割りについての見解を得られたことは大きな成果といえよう。

下京の中心地に位置する当該地は、鎌倉時代末頃から室町時代にかけて大きく栄え、状況証拠ばかりではあるが、寺院関係の施設があったことが推定される。この施設は、綾小路側を裏手空間として利用していた。これは各通に間口をひらく町屋が、一町区画の中で口の字状に配置されていた京都の町割りの、空闲地ともいえる中心部分に、寺院のような施設が進出した可能性を示唆する。

中世の綾小路通には室町・新町通間に善長寺、新町・西洞院通間に矢田寺があったとされる(『京都坊目誌』)。当該地に推定される寺院関係施設は、豊臣秀吉によって移転を余儀なくされた上記2寺と異なり、15世紀初頭までに廃絶したと推測されるが、中世には、綾小路通沿いに寺院が点在していた可能性がある。

(赤松 佳奈)

参考文献 『史料京都の歴史』 第12巻 下京区、京都市、1981。

新修京都叢書刊行会『新修 京都叢書第20 京都坊目誌四』(株)臨川書店、1976。

『平安京左京五条三坊十町跡・烏丸綾小路遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015-7

二間四尺二寸 (4.91m) 五間四尺八寸 (10.53m)

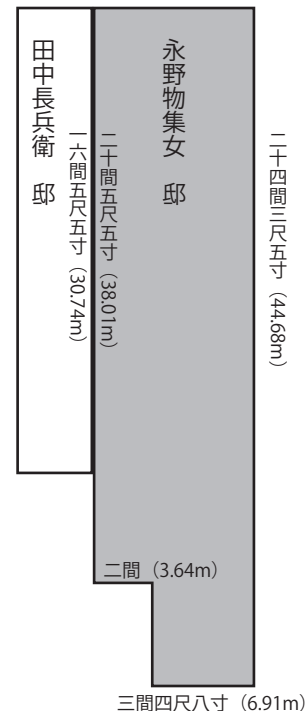
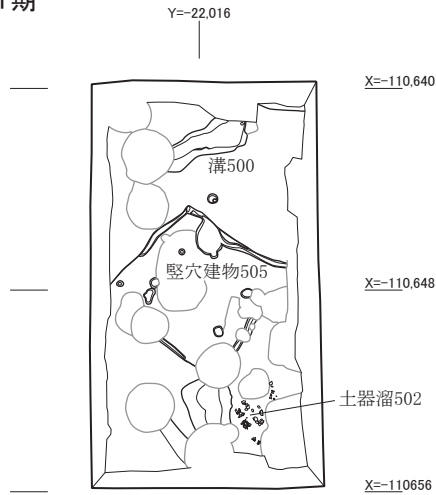
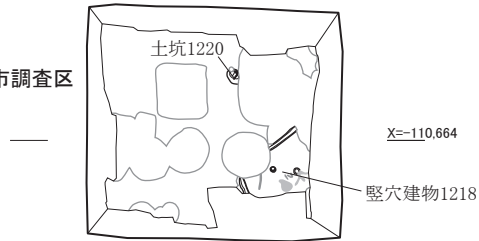


図28 明治8年の地割

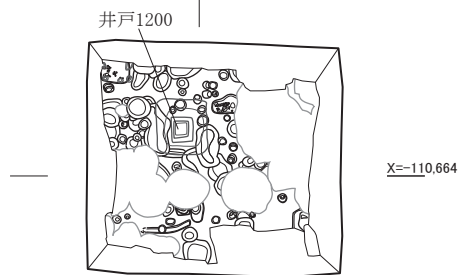
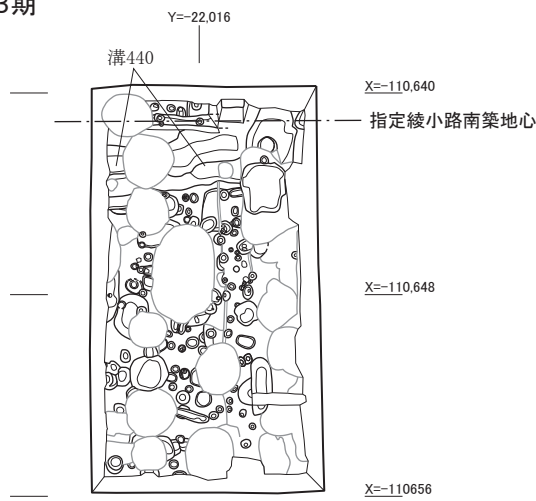
第1期



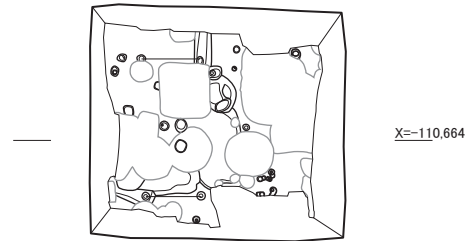
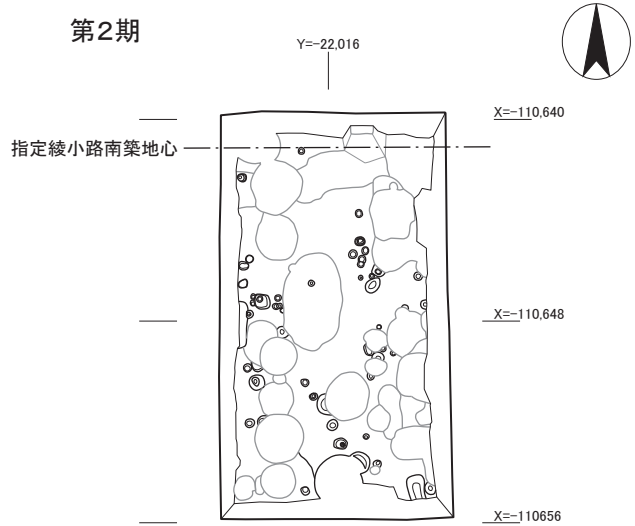
市調査区



第3期



第2期



第4期

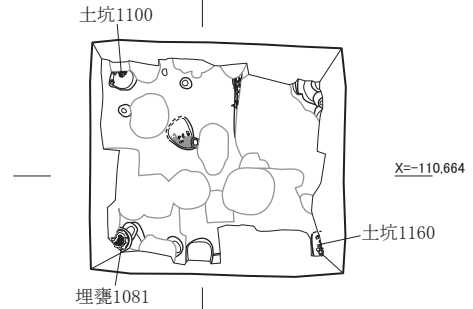
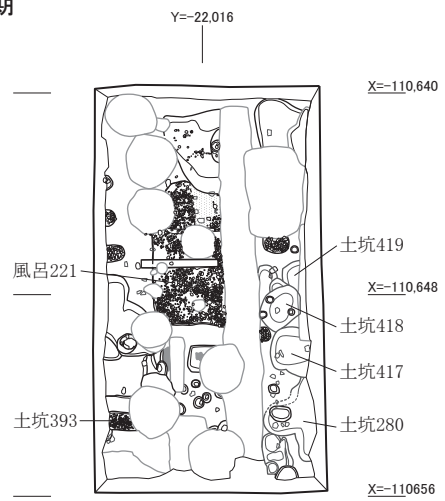
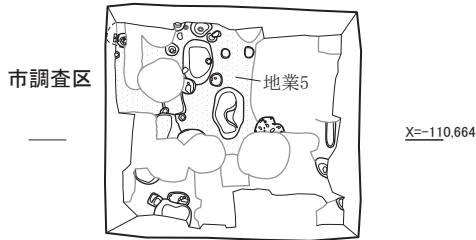
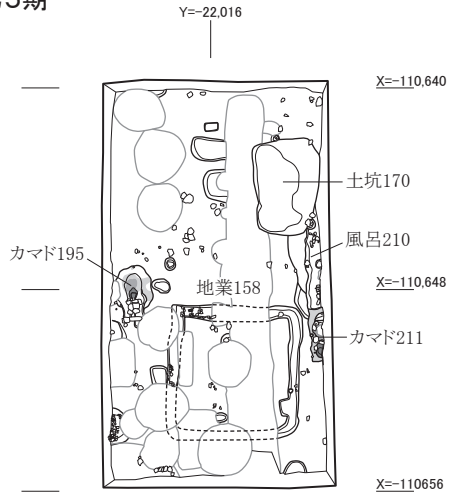
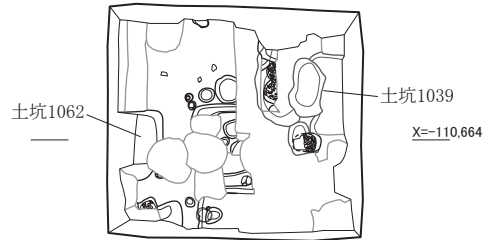
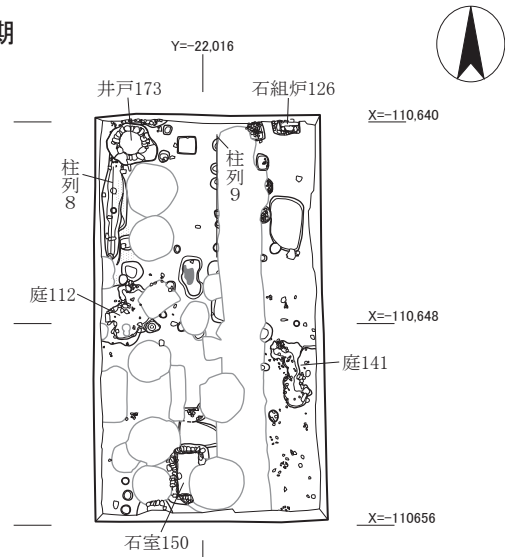


図29 遺構変遷図1 (1:300)

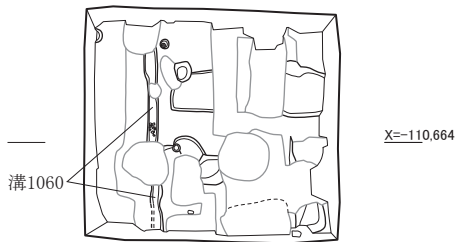
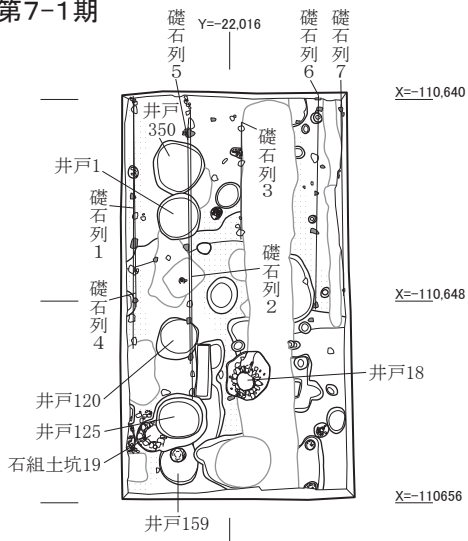
第5期



第6期



第7-1期



第7-2期

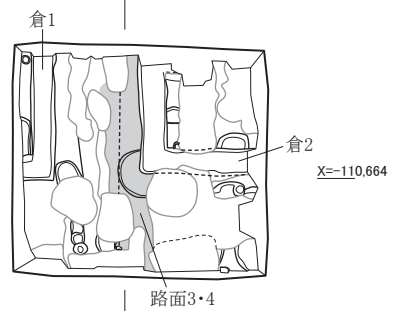
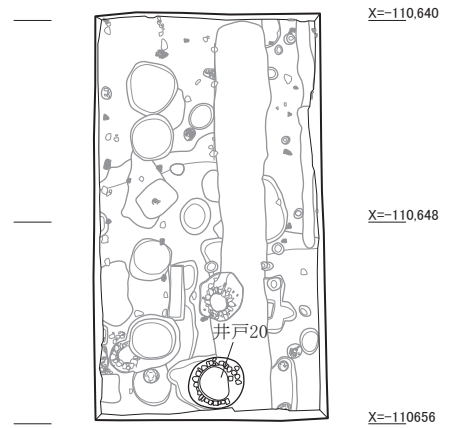


図30 遺構変遷図2 (1:300)

VI 尊勝寺跡・岡崎遺跡

1. 調査経過

本調査は、京都市左京区岡崎最勝寺町6-4,6-5,6-6で実施した、国庫補助事業による発掘調査である。調査地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である尊勝寺跡及び岡崎遺跡にあたる。当該地で個人施主による小規模共同住宅の建設が計画されたため、平成27年2月27日に文化財保護法第93条第1項に基づく届出が行われた。これに対し、文化財保護課では3月26日に試掘調査を実施し、平安時代後期の整地層を確認したため、発掘調査を実施することとなった。

調査は平成27年6月15日から7月17日まで実施した。調査面積は約72㎡である。排土置き場を確保するため、敷地北半部（1区）と南半部（2区）に分け、1区の調査終了後に2区を調査した。また、1区・2区ともに断割調査を実施した。調査地は、尊勝寺の南限に位置することから、築地や内溝などの遺構が検出されることが予想されたが、調査の結果、尊勝寺の南限に関わる明確な遺構は確認できなかった。一方、調査区のほぼ全域で、平安時代後期の整地層を確認した。また、整地層の下層の自然堆積層上面で、古墳時代の木製品などを確認した。掘削終了後、写真撮影・図面作成などの記録作成作業を行い、埋め戻しの後に調査を終了した。

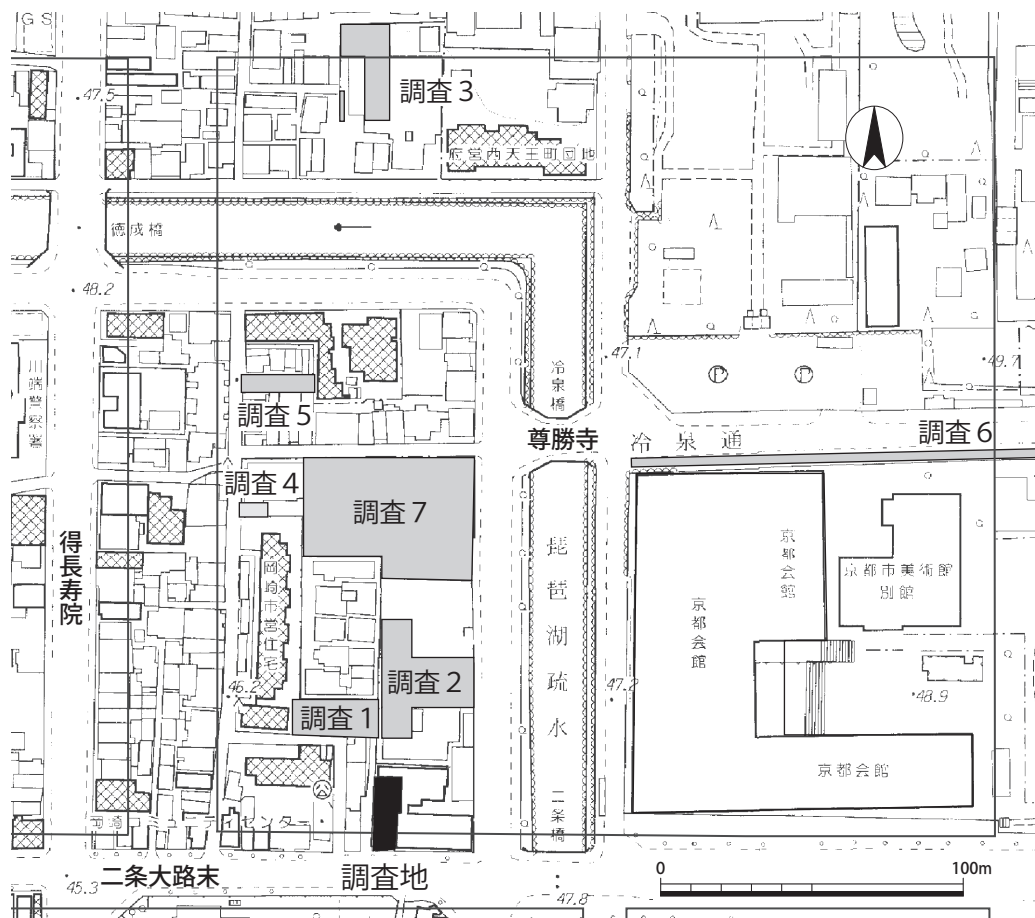


図1 調査位置および近隣関連調査位置図（1：2,500）

2. 遺 跡

(1) 位置と歴史的環境

調査地は、平安時代後期に院政の中心地となった白河に位置する。地形は、北東から南西に向かって緩やかに傾斜している。旧地形では、法勝寺から尊勝寺の東西軸で、大きく三箇所の段差が存在することが分かっており、寺域内でも小規模な段差が存在する¹⁾。

白河の地は、平安時代前期から貴族の別荘などが存在したが、平安時代後期になると、院御所・六勝寺をはじめとする御所・御堂が密集するようになる。今回の調査地は、杉山信三氏の復原案によると、尊勝寺西塔の南東にあたり、尊勝寺の南限および二条大路末の北縁にあたる。尊勝寺は、六勝寺のうち法勝寺に続いて造営された、堀河天皇御願の寺院である。康和4年(1102)に、金堂・講堂などをはじめとする諸堂が供養され、長治2年(1105)には阿弥陀堂・准提堂・法華堂が供養された。創建後、落雷や火災などの災害に見舞われながらも、そのつど

修復再建されたが、13世紀前半～14世紀中頃には、尊勝寺域からの遺構が減少することが指摘されており²⁾、応仁元年(1467)に始まった応仁・文明の乱の兵火で廃絶したと考えられる。以降は、基本的に畑地として利用されていたが、幕末に至り、白河一带に藩邸が立ち並ぶようになる。当該地も、屋敷地あるいは畑作地として利用されていたようである。明治時代に入ってしばらくは畑作地であったが、近代化事業や平安神宮の創建などで、一带の開発が進み、明治20年代の絵図では、藤井紡績の工場敷地内であったことが確認できる。

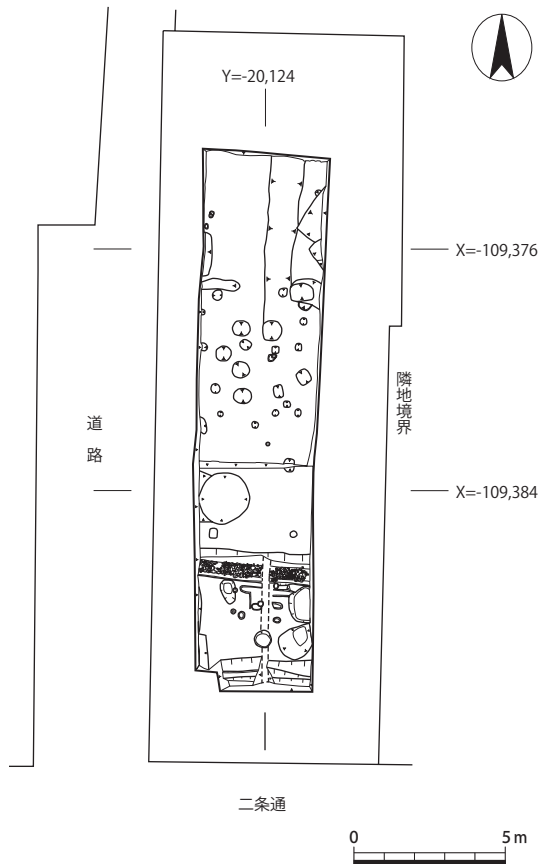


図2 調査区配置図(1:250)



図3 調査前全景(南から)



図4 作業風景(北から)

(2) 周辺の調査 (図1)

今回の調査地は、尊勝寺の南限付近に位置し、北西に西塔が想定されている。西塔付近では、調査1で平安時代後期の整地および掘込地業が確認されている。調査1では、調査区全域が版築されており、さらに、調査区南側では、大型の川原石と橙色粘土で版築されていることが確認された³⁾。地業跡の下層では、弥生～古墳時代の流路跡が確認された。調査2でも調査1と同様に、調査区全域で、砂泥や砂礫、砂を5～10cmの厚さで版築した整地層が確認されている。下層では、弥生～古墳時代の落ち込みが確認されており、自然堆積で埋まるが、上部は寺院造営直前まで凹みとして残り、造営工事で埋められたと考えられている⁴⁾。上記のように、尊勝寺西塔周辺の調査では、建物範囲に限らず、広範囲に整地が行われていることが確認されている。

尊勝寺の寺域については、北限(調査3)⁵⁾・西限(調査4・5)⁶⁾・東限(調査6)⁷⁾に関連する遺構が確認されており、寺域は東西・南北長がともに84丈と想定されている。一方、二条大路末に関連する調査としては、最勝寺跡の調査で、北側溝および南側溝の一部を確認しており⁸⁾、その結果から、幅が約51m(17丈)で、平安京の二条大路とほぼ同規模であったことが判明した。しかし、北側溝は、同じく最勝寺跡に該当する岡崎グラウンド内の調査⁹⁾で確認された北側溝の西延長線上からは、約5m北側に位置している。大規模な湿地の影響で、側溝や築地が存在しない場所もあり、場所によって幅が変更されていた可能性が高いと考えられている¹⁰⁾。

3. 遺 構 (図5～7)

(1) 基本層序

現地表面の標高は、調査区中央部で46.2mである。盛土以下、現地表下0.4mで、整地層を確認した(整地層1)。整地層1の上面を第1面とした。調査区北西端で、第1面上面の標高は45.8mである。

第1面調査後、土置き場の確保の都合から、下層の状況については部分的に断割調査を実施して確認を行なった。整地層1の下層では、現地表下0.7～1.2mで、黒褐色シルトの平安時代後期の整地層を確認した(整地層2)。整地層2の下層、標高44.5m前後で自然堆積層(基盤層)となり、植物遺体を含む泥炭層と細砂・粗砂層の互層となる。整地層2と基盤層との層境では、古墳時代の木製品や、加工痕のある木材¹¹⁾を検出した。

(2) 遺構

第1面とした整地層1上面で検出した主な遺構は、溝と整地土である。また、断割調査では、断割調査区1で木組遺構を、断割調査区2でピットを3基確認した。

第1面の遺構 (図5)

溝1 2区中央部で検出した東西方向の溝で、東西は調査区外へ延長する。南北軸に対して、やや東に方位を振る。検出面で、幅約0.9m、深さ0.53m、検出長3.7mである。底部では、幅0.4m

表1 遺構概要表

時代	遺構	備考
平安時代以前	木組遺構	
平安時代	整地層1・2, ピット1～3	
江戸時代	溝1, 耕作溝	
不明	溝2	

ほど布掘りをし、直径0.05～0.2mの礫や石、瓦を敷く。埋土は、オリーブ黒色シルトである。瓦は平安時代後期に属するが、溝1南側の近世耕作溝と軸を揃えることから、近世の溝と考えられる。

溝2 調査区南端で検出した東西方向の溝である。検出幅0.85m, 検出長3.0mで、北肩のみ確認した。埋土は、上層がにぶい黄橙色～黒褐色泥砂で、下層がにぶい黄橙色～褐色粗砂で細礫を多く含む。遺物が確認できず時期は不明だが、上層と下層の埋土が異なり、同じ位置に、時期の異なる溝が存在する可能性も考えられる。

整地層1 調査区のほぼ全域で検出した。厚さは、1区北東角で0.3m, その他の場所で0.7m前後である。上層と下層に大きく分けられ、上層は、にぶい黄褐色～黒褐色泥砂と灰白～灰黄色の微砂・細砂・粗砂が互層になる。調査区北東角では比較的水平的な層序となるが、南に向かうに従いかなり雑になる。一方、下層は後述する整地層2と類似する土質だが、整地層2と比較するとやや締まりがない。上層は遺物が非常に少ないが、下層からは、平安時代後期の土師器皿や木製品、木片が多く出土した。

断割調査検出遺構 (図7)

整地層2 整地層1の下層から検出した。整地層2上面の標高は、調査区北東角で45.5m, その他の場所で45.0m前後である。埋土は黒褐色粘質土が主体で、厚さは約0.3～0.5mである。整地層2の下層は自然堆積層であり、それを埋めて平坦に整地したものと考えられる。埋土中には、土師器皿や木製品とともに、桃核などの有機質遺物が多く含まれる。サンプルとして埋土を採取し、種子同定を実施した結果、食用となるクルミやウリ類などが確認された¹²⁾。瓦類の出土は少ない。整地層2から出土した土器は平安時代後期のもので、尊勝寺の造営に伴うものと考えられる。なお、断割調査区2の南端付近のみ、直径0.2～0.25mの石がまばらに混じることから、調査区外に何らかの遺構が存在する可能性がある。

木組遺構 断割調査区1の基盤層上面で検出した。東西は調査区外に延長する。幅0.12m, 厚さ0.02m, 検出長0.56mの板材を、直径約0.05m, 長さ0.6mの木杭(杭1)で支えている。杭1は全体に面取りをして加工しており、頂部を丸くし、先端を尖らせる。また、壁断面では、縦軸0.6m, 厚さ0.02mの扁平な木杭(杭2)を確認した。木組遺構の南側では、木製品や土師器皿がまとまって出土した。しがらみ、あるいは整地の単位を示す遺構の可能性を想定したものの、木組遺構の前後で大きな層序の変化は見られない。性格は不明である。なお、板材および杭2はスギであり、杭1はカヤであった。杭1の形状は弓状で、木製品が二次利用された可能性がある。

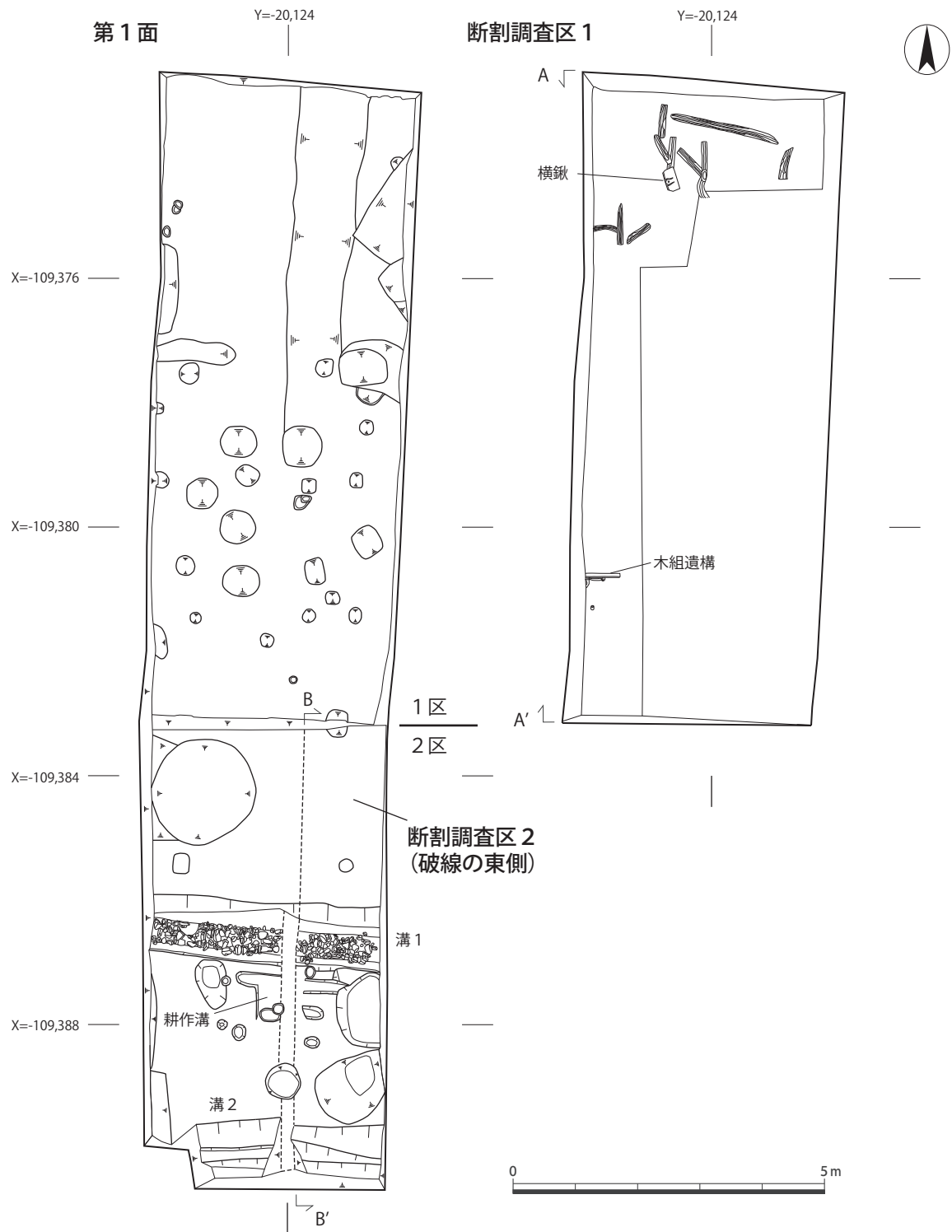


図5 調査区平面図 (1 : 100)

ピット1～3 断割調査区2の断面観察で3基確認した。整地層2上面で成立する。南北0.34～0.45mで、深さは0.52～0.66mである。ピット2では、上部と底部に直径0.15m前後の石を2,3石据えている。建物の礎石と根石と考えられるが性格は不明である。埋土は黒色シルトで、灰色シルトをブロック状に含み、木片を多く含む。

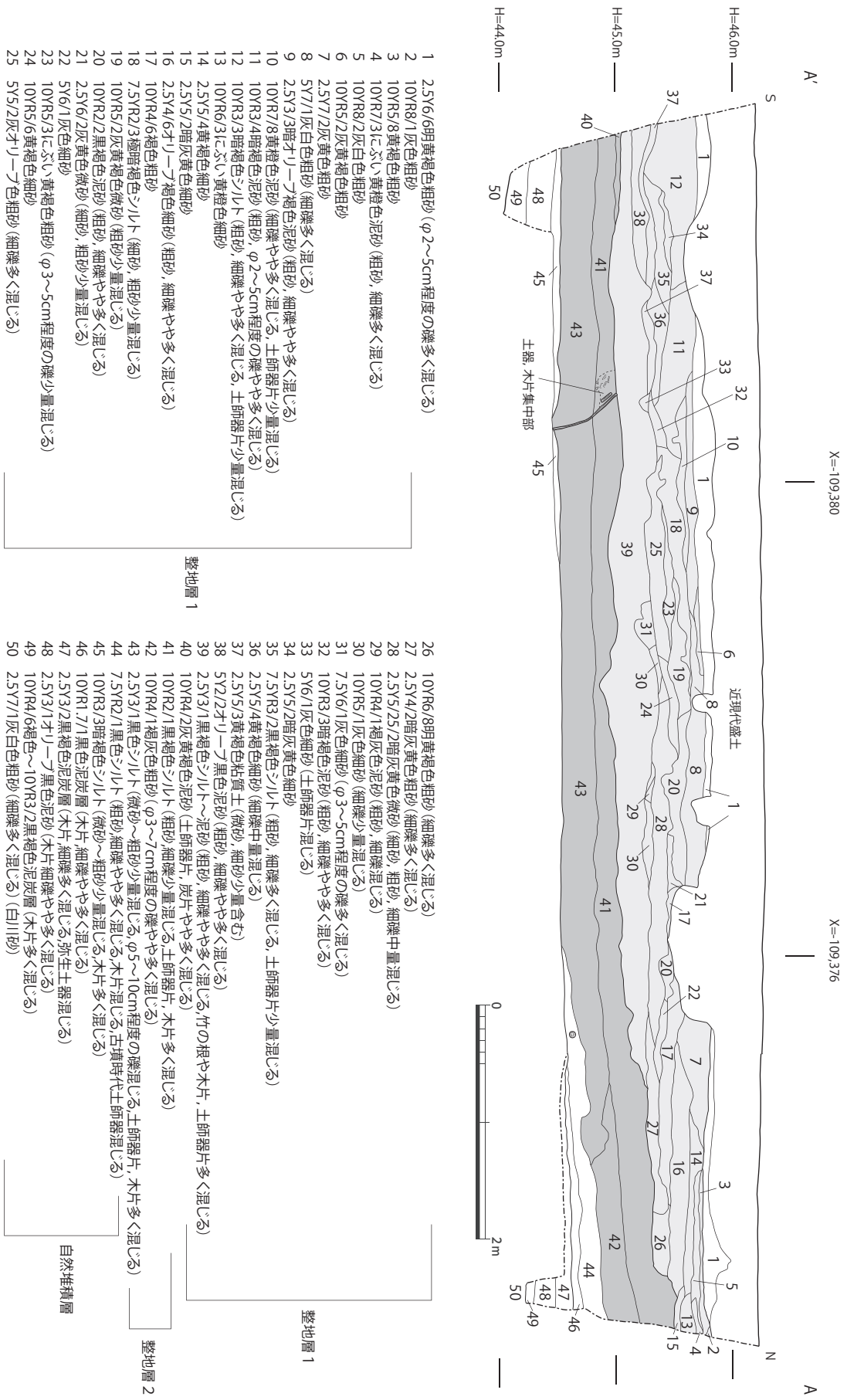
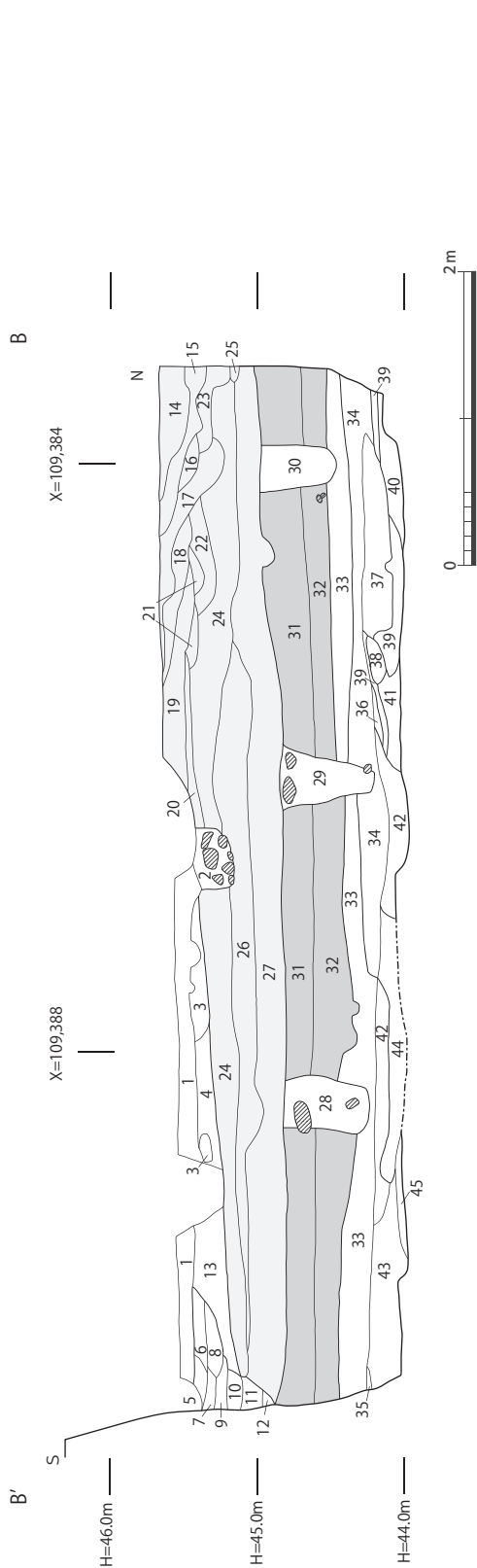


図6 断面調査区1A-A'間断面図(1:50)



- | | |
|---|---|
| <p>1 10YR5/2灰黄褐色泥砂(粗砂多く含む)</p> <p>2 5Y2/2オリーブ黒シルト【溝1】</p> <p>3 10YR2/2黒褐色シルト(土師器片少量含む)</p> <p>4 10YR5/3にぶい黄褐色微砂</p> <p>5 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂(土師器片含む)</p> <p>6 10YR7/4にぶい黄褐色粗砂(10YR2/2黒褐色泥砂をブロック状に含む)</p> <p>7 10YR2/2黒褐色泥砂に10YR7/4にぶい黄褐色泥砂が少量混じる</p> <p>8 10YR4/2灰黄褐色泥砂(φ3~5cm程度の礫やや多く含む)</p> <p>9 2.5Y3/3暗オリーブ褐色泥砂(φ2~3cm程度の礫少量含む)</p> <p>10 10YR4/6褐色細砂~泥砂</p> <p>11 10YR7/2にぶい黄褐色粗砂(φ2~5cm大の礫を多く含む)</p> <p>12 10YR4/6褐色粗砂(細礫多く含む)</p> <p>13 10YR3/4暗褐色泥砂に2.5Y7/3浅黄の粗砂混じる</p> <p>14 2.5Y6/4にぶい黄色粗砂(φ1~5cm程度の礫多く含む)</p> <p>15 10YR3/2黒褐色泥砂(粗砂,細礫やや多く含む)</p> <p>16 2.5Y6/2灰黄褐色泥砂(φ1~2cm程度の礫わずかに含む)</p> <p>17 10YR4/2灰黄褐色泥砂(粗砂,細礫やや多く含む)</p> <p>18 2.5Y5/4黄褐色粗砂(細礫多く含む)</p> <p>19 2.5Y3/3暗オリーブ褐色泥砂(2.5Y6/4にぶい黄色の泥砂をブロック状に含む)</p> <p>20 7.5YR2/1黒色シルト</p> <p>21 10YR3/2黒褐色泥砂(17の粗砂をまだらに含む)</p> <p>22 10YR3/3暗褐色シルト(土師器片,φ1~2cmの礫わずかに含む)</p> <p>23 2.5Y7/1灰白色粗砂(φ1~3cmの礫混じる)</p> <p>24 10YR4/1褐灰色シルト(土師器片,粗砂,細礫やや多く含む)</p> <p>25 2.5Y7/1灰白色粗砂(φ1~3cm程度の礫少量含む)</p> <p>26 10YR3/3暗褐色泥砂(7.5YR4/4褐色泥砂が部分的に混じる)</p> | <p>27 10YR3/2黒褐色泥砂(2.5Y7/4浅黄色の粗砂がブロック状に混じる,土師器片,粗砂,細礫まじる)【整地層1】</p> <p>28 10YR3/2黒褐色シルト(白川砂の粗砂,微砂,細礫混じる)【ピット1】</p> <p>29 10YR2/1黒色シルトに5Y5/1灰色シルトをブロック状に含む(木片混じる,φ10cm程度の礫2,3点混じる)【ピット2】</p> <p>30 2.5Y3/2黒褐色シルト(木片,土師器片,φ1cm程度の白河砂わずかに含む)【ピット3】</p> <p>31 10YR4/2灰黄褐色シルト(白川砂の粗砂を多く含む,土師器片,φ3cm程度の礫混じる)【整地層2】</p> <p>32 7.5YR2/1黒色シルト(33と底で混ざる,31との境に白川砂少量含む)【整地層2】</p> <p>33 10YR4/1褐灰色シルト(木片,灰微砂混じる)</p> <p>34 5Y5/1灰色粘質土(木片,微砂混じる)</p> <p>35 10YR7/4にぶい黄褐色細礫</p> <p>36 2.5Y7/1灰白色微砂</p> <p>37 10YR5/1褐灰色微砂(木片少量含む)</p> <p>38 10YR8/1灰白色細礫</p> <p>39 10YR2/3黒褐色微砂(木片多く含む)</p> <p>40 7.5YR7/1明褐色灰色細礫</p> <p>41 10YR7/2にぶい黄褐色細礫</p> <p>42 10YR2/3黒褐色泥炭層(木片多く含む)</p> <p>43 10YR7/3にぶい黄褐色細礫(10YR2/1黒色微砂をまだらに含む)</p> <p>44 2.5Y7/1灰白色砂礫(白川砂)</p> <p>45 7.5YR2/2黒褐色泥炭層(木片多く含む)</p> |
|---|---|

図7 断割調査区2B-B'間断面図(1:50)

4. 遺物

遺物は整理箱に22箱出土した。遺物は、ほとんどが整地層1下層および整地層2からの出土である。瓦の出土は少なく、土器類および木製品が多く出土した。また、整地層2最下層と自然堆積層中に、弥生時代～古墳時代の土器類が出土したが、全体に細片である。

整地層1上層（図8）

1は輸入白磁碗である。口縁端部を肥厚させ、玉縁状を呈す。2は、石包丁である。

幅5.5cm以上、長さ4.8cm、厚さ0.5cm。

磨製で、紐穴が部分的に残る。

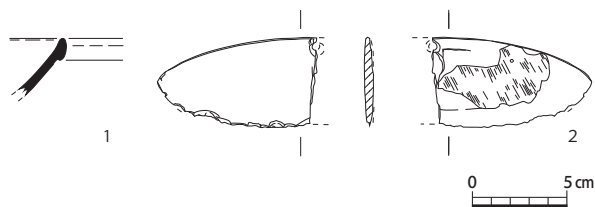


図8 整地層1上層出土遺物実測図（1：4）

整地層1下層～整地層2（図9～11-木1～木12）

（1）土器類

1～3は土師器皿Aである。口径は9.6～9.7cmと小型である。4は皿Acである。口径11.0cm、器高1.3cm。5～14は皿Nである。大きさによって2種類に分けられ、5・6・12・13は口径10.0～11.2cmの小皿、7～11、14は口径が14.2～15.6cmの大皿である。口縁部外面に二段ナデを施し、口縁端部はやや外反する。9は口縁端部に煤が付着していることから灯明皿である。京都IV期新～V期古に属すると考えられる。

15・16は瓦器碗である。2点のみ出土した。口径は、15が12.6cm、16が13.0cm。口縁部内面に沈線が施される。いずれも楠葉型で、I－3期に属する¹³⁾。16は炭素が吸着しておらず、内外面ともに灰黄色を呈する。

17は、山茶碗である。口径10.1cm、底径5.8cmとやや小ぶりである。貼り付け高台で、底部外面に糸切痕を残す。

18～20は輸入白磁である。18・19は白磁皿である。いずれも内面に沈線を有する。18は口径11.2cmで、削り出しの浅い高台を持つ。底径は5.4cm。20は白磁碗である。21は四耳壺の肩部である。耳に月桂樹状の文様が描かれる。22は人形水滴である。髪に花飾りをつけた人物が、膝を立てて浄瓶を持つ姿を表現している。浄瓶の注ぎ口に孔があげられ、穿孔は外側から内側に向かって行われている。型作りで、表面と背面を合わせて作られており、内面には型に詰める際の指頭圧痕が残る。いずれも時期は平安時代後期と考えられる。

（2）瓦類

出土した軒瓦は軒丸瓦2点である。いずれも平安時代後期に属する。瓦1は、複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。中房は平坦で圏線が巡る。蓮子は1＋4で、間に「+」を配する。子葉が互いに接し、間弁は界線と接する。瓦当部裏面上部に溝を付け、丸瓦を挿入し、粘土を付加して接合する。瓦当裏面、外縁はナデ。焼成は硬質で、色調は灰色を呈する。範ずれにより、子葉が二重になる部分がある。播磨産。法勝寺で類例が出土している。

瓦2は、複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。中房は平坦で蓮子は1＋6である。蓮弁・子葉は凸線で

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生～古墳時代	弥生土器, 土師器, 石製品, 木製品		石製品1点, 木製品1点		
平安時代	土師器, 須恵器, 瓦器, 灰釉系陶器, 輸入陶磁器, 瓦, 土製円塔, 石製品, 木製品		土師器14点, 瓦器2点, 灰釉系陶器1点, 輸入陶磁器6点, 瓦5点, 土製円塔1点, 石製品2点, 木製品12点		
江戸時代	土師器, 施釉陶器, 焼締陶器, 磁器, 瓦, 土製品				
合計		14箱	45点(3箱)	1箱	10箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出し、詰め直しを行ったため、出土時より8箱減っている。

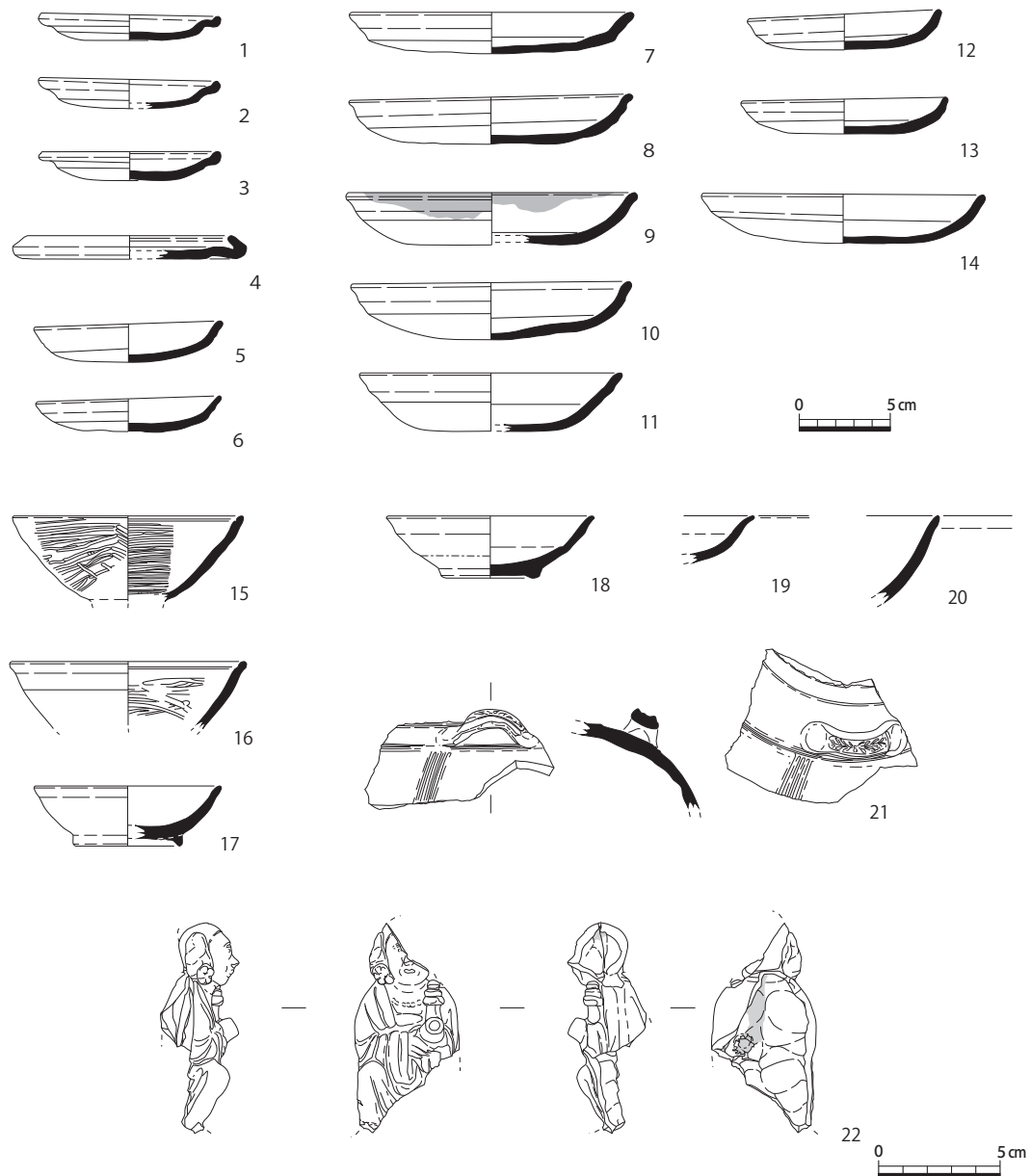


図9 整地層1下層～整地層2出土遺物実測図(1)(1:4, 22のみ1:3)

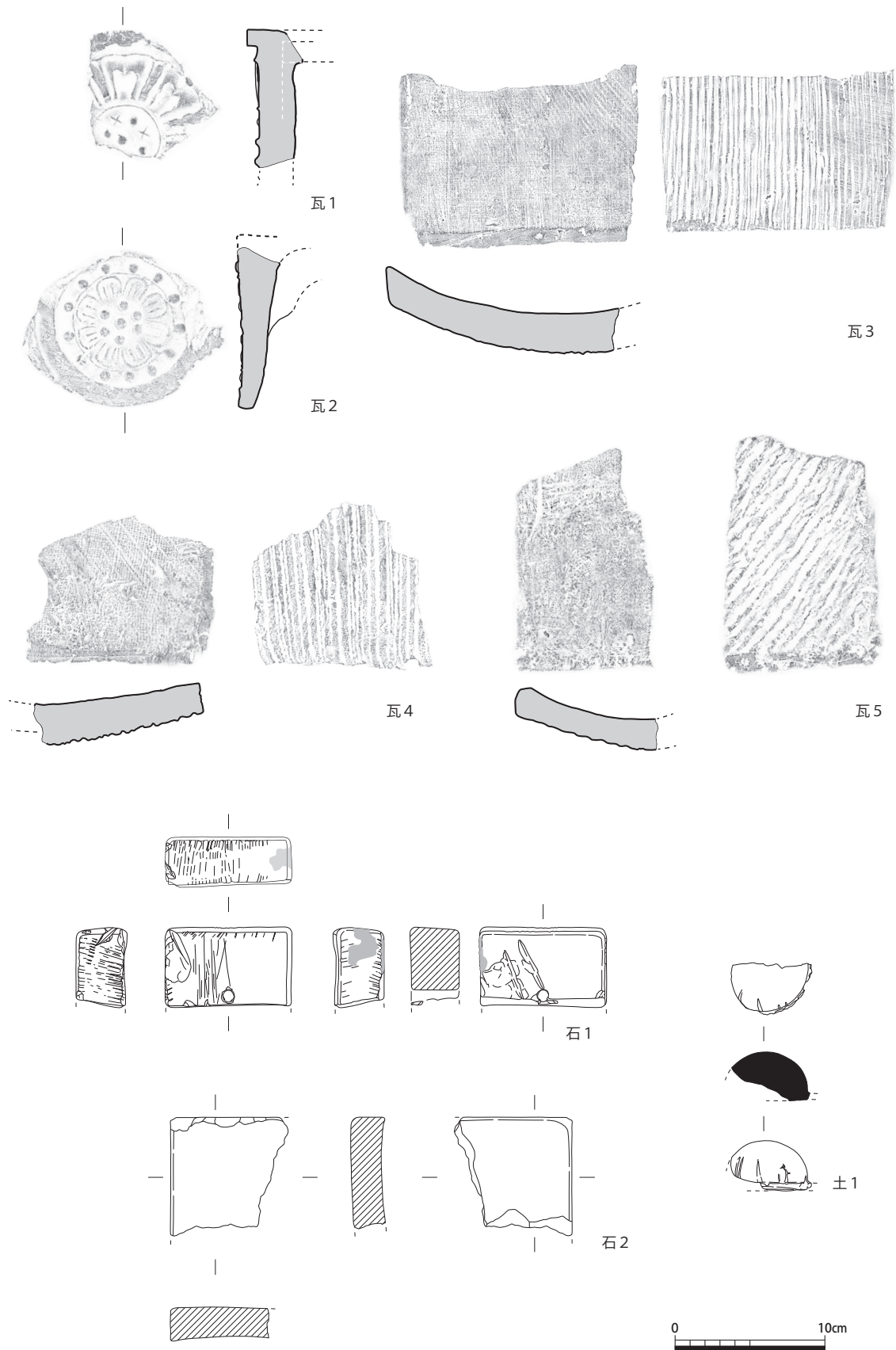


图10 整地層1下層~整地層2出土遺物実測図(2)(1:4)

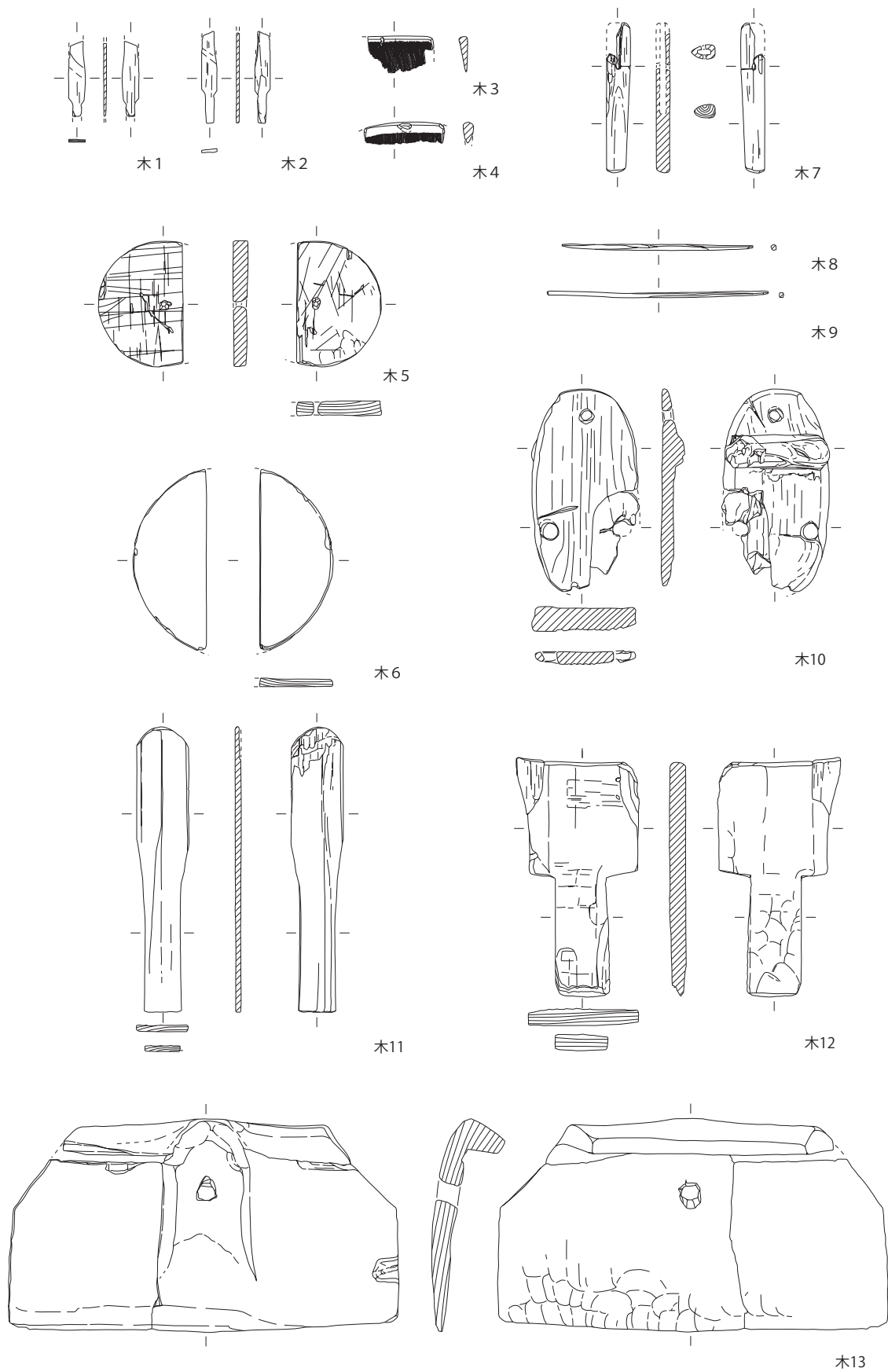


图11 出土木製品実測図(1:6)

表現され、外区は珠文が13個巡る。瓦当面は楕円形で、外縁の外に範からはみ出た部分が残る。瓦当裏面上部に丸瓦をあて、粘土を付加して接合する。裏面オサエで、下端ヨコケズリ。外周はヨコケズリ。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。瓦当面に離れ砂が確認できる。山城幡枝窯跡産。

瓦3は播磨系平瓦。凸面は平行叩き。凹面に布目が残る。凹面端部を面取りし、端面はヨコケズリ。側面はタテケズリ。灰色を呈し、焼成は硬質である。瓦4は京都系平瓦で、凸面は縦方向の縄叩き、凹面は糸切りと布目が残る。側面・端面はケズリを施す。灰色を呈し、焼成は硬質である。瓦5は讃岐系平瓦で、凸面に斜め方向の粗い縄叩き、凹面に粗い布目が残る。端面及び側面は粗く面取りを施す。灰白色を呈し、焼成はやや軟質。

(3) 土製品

土1は土製円塔である。1点のみ出土した。体部には緑釉が全体にかかり、布目は確認できない。底部は大半が欠損している。高さ3.3cmである。

(4) 石製品

石1・2は温石である。滑石を加工した方形のものである。一部破損しているが、側面は丁寧に磨かれている。石1は、横8.4cm・縦5.3cm以上・厚さ3.3cmである。上部に直径0.7cmの小孔をあける。石2は、下面中央がやや窪み、上面は煤によって黒色をおびる。厚さは2.0cm。

(5) 木製品

木1・2は厚さ0.3cmの不明木製品である。木1は残存長9.2cm。木3・4は櫛である。木5・6は曲物底。木5は直径12.7cm、厚さ1.5cm。木6は直径18.3cm、厚さ0.85cmである。木6には、縦・横向の擦痕が確認でき、二次利用されたと考えられる。木7は鞘状の木製品で、内側が空洞になる。木8・9は完形の箸で、木8は長さ22.3cm、木9が19.25cm。脚部を細く尖らせる。木10は下駄で、長さ20.5cm。前の歯のみが残る。木11は、長さ11.5cmの柄が付く工具状の木製品である。長さ24.1cm、厚さ1.6cm。木12はへらで、長さ28.8cm、厚さ0.65cmである。

自然堆積層上面 (図11 - 木13)

木13は、横鋸である。縦21.5cm、横39.5cm。古墳時代前期のものと考えられる。

5. まとめ

今回の調査地は、尊勝寺の推定南限付近に位置することから、築地や内溝などの遺構の検出が想定された。しかし、関連する明確な遺構を確認することは出来なかった。一方で、敷地全域で尊勝寺の造営に伴うと考えられる整地層を確認することが出来た。

同様の整地層は、これまで実施された尊勝寺跡での調査で複数確認されている。まず、調査地の北に位置する阿弥陀堂周辺では数度にわたり調査が実施されており、近年実施された調査7¹⁴⁾では、低地を活用するために黒褐色粘質土で埋め立てた後、上面を砂や土砂を互層に叩き締めて整地を行なっていることが判明した。深い所では1.2mほど埋め立てられていた。

西塔付近では、前述の通り、調査1にて、調査区のほぼ全域で、粘土・粘質土・砂を用いた整地を行なっていることが確認された。また、拳大～人頭大の石と橙色・灰色の粘土や砂を使用して版

築した掘込地業も確認され、西塔基壇に関連するものと考えられている。調査2では、建物遺構は検出されず、伽藍内の空閑地と判明したが、調査区のほぼ全域で、調査1と同様の整地層が確認された。調査1・2では、下層で弥生～古墳時代にかけての溝や落ち込みを確認しており、寺院造営直前まで凹みとして残った部分を、造営工事で埋めたと考えられている。

以上のような調査成果から、従来の指摘通り、尊勝寺では建物の範囲に限らず、寺域内の広範囲で整地がなされていると考えられ、今回の調査成果もそれを補強するものと言える。二条大路末の北側溝については、前述の通り、最勝寺跡で検出されているが、今回その西延長線上で確認することができなかった。当調査区より南に関連遺構があると想定できる。白河街区においては、二条大路末の幅が場所によって一定でないと考えられ、尊勝寺の南限も含め今後の課題である。

(熊谷 舞子)

註

- 1) 堀内明博「白河街区における地割とその歴史の変遷—考古学の成果から—」(高橋昌明編『院政期の裏・大内裏と院御所』), 2006。
- 2) 前掲1) に同じ。
- 3) 梶川敏夫「尊勝寺跡」『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所, 1987。
- 4) 上村和直ほか「尊勝寺跡・岡崎遺跡1」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所, 1994。
- 5) 上村和直「尊勝寺跡」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所, 1991。
- 6) 梶川敏夫「得長寿院跡推定地発掘調査概要」『六勝寺跡 京都市埋蔵文化財年次報告1976-II』京都市文化観光局, 1977。上村和直『六勝寺跡発掘調査概要1978』京都市文化観光局, 1979。
- 7) 堀内明博「六勝寺跡・岡崎遺跡」『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所, 1997。
- 8) 尾藤徳行ほか「最勝寺跡・岡崎遺跡(94KS257)」『京都市内遺跡立会調査概報 平成6年度』, 京都市文化観光局, 1994。
- 9) 内田好昭ほか「最勝寺跡・岡崎遺跡」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所, 1995。
- 10) 前掲1) に同じ。
- 11) 樹種同定の結果, クリやモミ属, ヒノキ, アカガシ亜属, ヤナギ属, コナラ亜属, コウヤマキが確認できた。また, 部分的に焼けた痕跡が残る。
- 12) 種子同定の結果, 木本の可食できるクルミ・モモ・ウメ・サンショウが確認できた。草本は, 湿性のタデ科・タガラシ・キンポウゲ属・タカサブロウや抽水性のコウホネ属・ホタルイ属が見られる。また, 畑等に生えるヒユ属が多い。特に食用となるウリ類・ナス・炭化したイネ・オオムギ・コムギがある。なお, 自然堆積層中の土サンプル結果では, 木本のタラノキ・ムラサキシキブ属, 草本で抽水性のコナギ・イボクサ・オモダカ科・ホタルイ属や, 湿性のカヤツリグサ科, イネの穎(籾殻)片が多く含まれることが分かった。
- 13) 森島康雄「瓦器碗」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編, 1995。
- 14) ㈱イビソク関西支店現地説明会資料(平成27年12月20日実施)。現在報告書作成中である。

Ⅶ 山科本願寺南殿跡

1. 調査経過（図1～7）

（1）調査経過

本件は山科区音羽伊勢宿町32番103における個人住宅新築にともなう調査である。当該地は、山科本願寺南殿跡に位置しており、平成26年9月11日に試掘調査を行った。この結果、南殿に関する遺構を確認したため、国庫補助による発掘調査を実施した。調査面積は49.5㎡である。調査は平成27年1月26日から開始し、廃土置場を確保するため調査区を2つにわけて、南側を1区、北側を2区とした。1区から掘削を開始し、現代盛土を重機で掘削後、近世耕作土以下の地層を人力で掘削した。随時写真撮影・図面作成などの記録をとりながら作業を進め、同年2月6日に1区埋め戻し、2区の重機掘削を開始した。2区も同様に、近世耕作土以下を人力で慎重に掘り進めながら、記録作業を行い、同年2月20日に現地での全ての調査を終了した。なお、原因者との協議で決定した掘削深度は現地表面下約0.6mで、これ以下の遺構面については建物基礎が及ばないことから現地で保存される事となった。また、本件の西隣接地は、上記試掘調査で検出された遺構を盛土で保護している。



図1 調査地位置図（1：10,000）

(2) 位置と環境

山科区音羽伊勢宿町は京都市の東辺、山科盆地の東北部に位置する。逢坂山などと連なり京都府と滋賀県の県境をなす音羽山の麓に位置し、南には音羽川が流れている。近世音羽村の東は奈良街道に接し、当地が交通の要所であったことがわかる。平安時代には、音羽庄が立荘されており、中世には山科七郷と呼ばれる自治機能をもった惣郷が成立していた。山科本願寺南殿は、本願寺第8世宗主蓮如が延徳元年（1489）に現在の音羽伊勢宿町周辺に造営した隠居所である。同じく山科の地にあった本願寺とともに約半世紀におよび栄えたが、天文元年（1532）に焼亡した。現在は、その故地に光照寺が建っている。南殿の由来は、本願寺が「御本寺北殿」（『蓮如上人御一代聞書』）と称されことで、後に蓮如が音羽の地に築いた殿舎は地理的には東にあたるが北殿に対する「南殿」と称された。延徳元年（1489）に蓮如は75歳で南殿に隠居し「南殿様」とも呼ばれ（『第八祖御物語空善聞書』）、最期は明応八年（1499）に南殿で迎えている。

なお、山科野村郷に本願寺が造営され始めたのは文明十年（1478）のことで、文明十二年（1480）には御影堂が完成した。やがて本願寺は地方門徒の参詣などのための町屋や宿坊が境内に立ち、土塁や堀に囲まれた六町におよぶ寺内町へと発展した。蓮如の2代後の第10世証如の時代である天文初年には「寺中広大無辺、莊嚴たゞ 仏国の如し」（『二水記』）と評されるほどであった。繁栄を極めた本願寺は、証如の時代に積極的な武力主義に転じ、法華一揆などと戦うようになって、やがて天文元年（1532）に法華宗・六角氏などの連合軍の攻撃によって陥落・焼亡した。

現在の山科本願寺跡はかつて敷地であった大部分が宅地化しているものの、一部で土塁が現存している。また、これまでに21次の調査が行われており、現存する土塁の近辺では石組み暗渠や

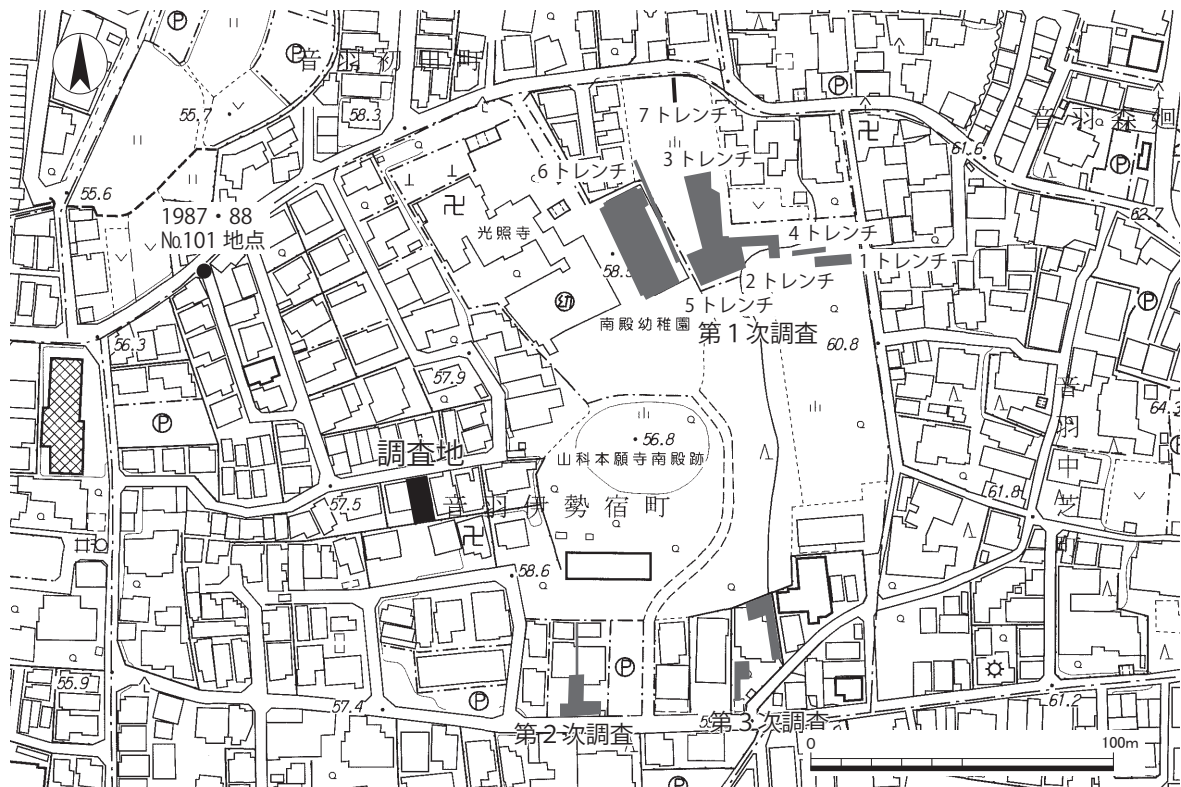


図2 周辺の調査

池¹⁾、石風呂などの遺構が検出されているほか²⁾、御本寺中心部付近では石室や井戸が検出されており³⁾、輸入陶磁器・ガラス玉・漆芸品などが出土している⁴⁾。また、これらの調査から、本願寺内では焼亡までの54年間に、数度の建替えや堀・土塁の埋め戻しと掘削が行われた事がわかりつつある⁵⁾。

さて、山科本願寺南殿跡では兵火で焼失した後の天文五年（1536）に自仏堂や山水亭があった中心部に泉水山光称寺が建てられ、（光照寺記録）それを踏襲した光照寺が現在も建っている。この光照寺に伝わる「御在世山水御亭図」によれば、土塁と堀で築かれた外郭の内部に内郭と西郭が並び、中心部には自仏堂や山水亭、西郭には台所や御指図井と称される井戸があったことがわかる。また、現在寺内には築山や土塁・堀などが良好な状態で残り往時の様子を伺うことができるほか、御指図井と伝承される井戸が音羽町内に残っている。

南殿跡内での発掘調査は今回で4回目となる。また発掘調査以前には昭和55年に光照寺内に現存している庭園の起伏などについて奈良国立文化財研究所⁶⁾が地形測量などを行っている。

第1次調査は、光照寺の東隣接地で実施され、南殿にと



図3 調査前風景



図4 調査風景



図6 試掘調査1区全景（北から）

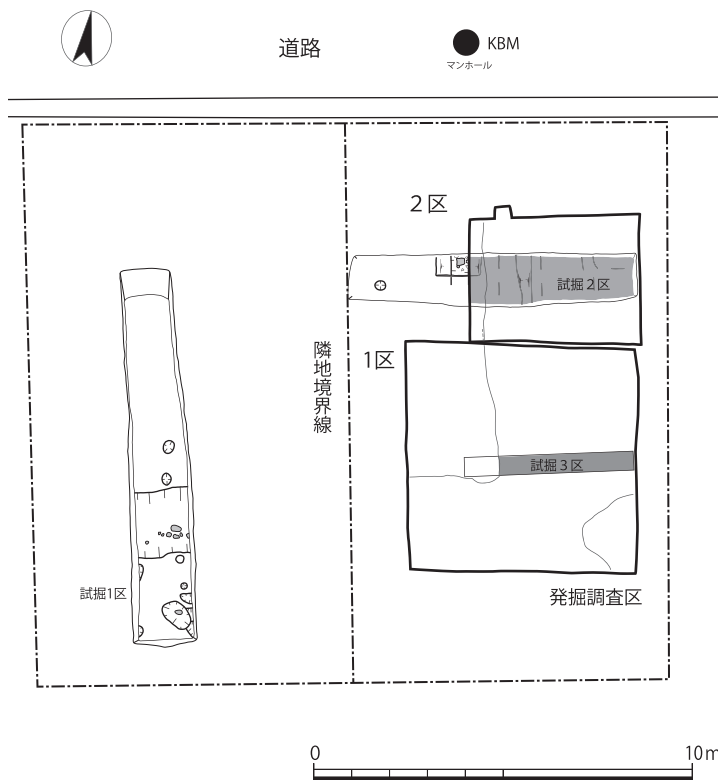


図5 調査区配置図（1：200）



図7 南殿跡土塁 復元図

もなう土塁基底部や堀・暗渠・建物を検出し、調査範囲は現在史跡として登録されている。堀は幅5m、深さ2.2mの規模で、埋土からは江戸時代と室町時代の遺物が出土した⁷⁾。第2次調査は光照寺の南隣接地で行われ、室町時代の柱穴・土坑・溝などが検出された⁸⁾。第3次調査は、現存する土塁南東角の南隣接地で実施された。室町時代後期のピット、柱穴、土坑などを検出したが、遺構は希薄で顕著な土地利用は行われていなかったと推定されている⁹⁾。このほかに、1987年4月～88年5月に山科本願寺跡周辺で行われた立会調査では南殿の西端に当たるNo.101地点で石垣を検出している。石垣は現地表下1.4mの深さで0.2～0.5mの石が二段に積まれていた¹⁰⁾。今回の調査地は第1次調査の調査成果と光照寺に伝わる絵図を重ね合わせた南殿の復元図¹¹⁾によれば内郭と西郭を区切る土塁に位置する(図7)。内郭と西郭の間には通路状の開口部が描かれており、本調査地はちょうど北から巡る土塁の南端部にあたると予想された。試掘調査では本件当該地と、西隣接地(図5 試掘1区)で南殿の区画に関する遺構を確認している。

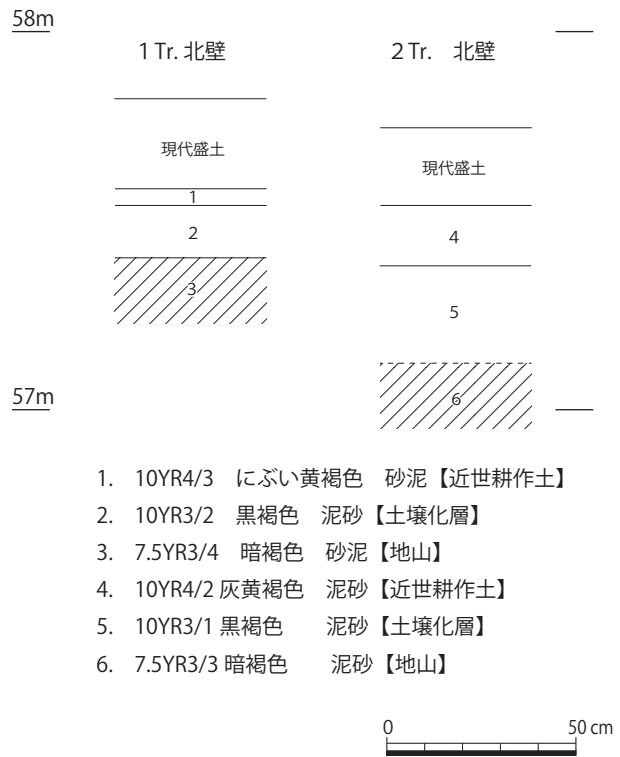
2. 遺 構

(1) 基本層序(図8)

本調査地では、調査区の東半から南の大部分の層序は遺構埋土であったため、調査区西壁の北半をもって基本層序とする。層序は、上から現代盛土、近世耕作土、黒褐色泥砂からなる土壌化層、地山の順であった。1区では現地表下0.24mまで現代盛土、-0.28mまで

57m

にぶい黄褐色砂泥からなる近世耕作土、-0.42mまで黒褐色泥砂からなる土壌化層以下は暗褐色砂泥からなる地山であった。2区では現地表面から0.20mまで現代盛土、-0.35mまで灰黄褐色泥砂からなる近世耕作土、-0.61mまで黒褐色泥砂からなる土壌化層以下が礫混じる暗褐色泥砂からなる地山であった。



1. 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂泥【近世耕作土】
2. 10YR3/2 黒褐色 泥砂【土壌化層】
3. 7.5YR3/4 暗褐色 砂泥【地山】
4. 10YR4/2 灰黄褐色 泥砂【近世耕作土】
5. 10YR3/1 黒褐色 泥砂【土壌化層】
6. 7.5YR3/3 暗褐色 泥砂【地山】

図8 基本層序(柱状図)(1:20)

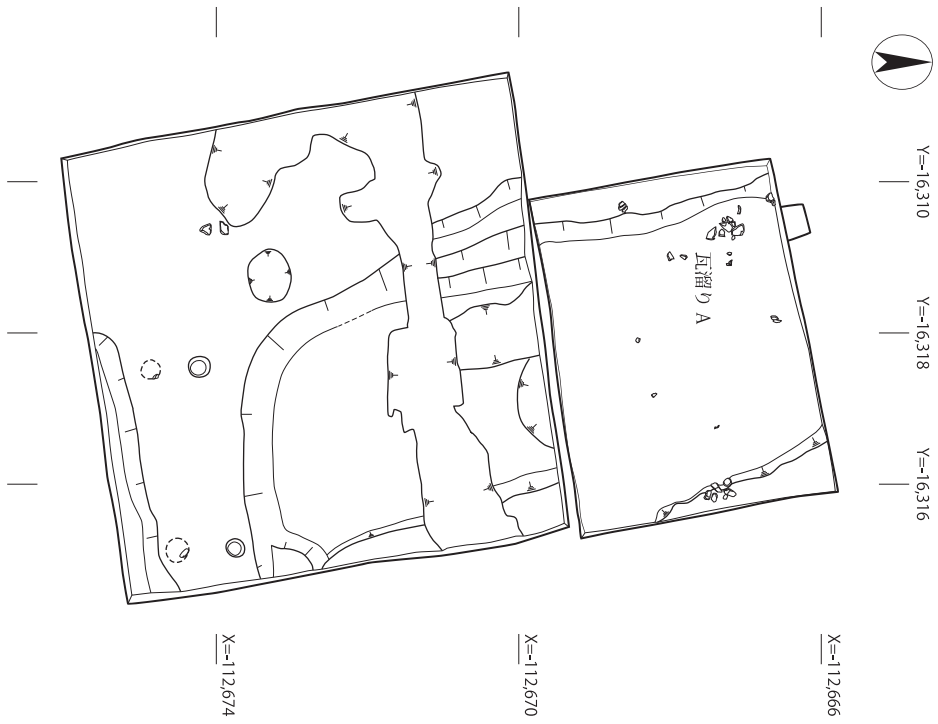
(2) 遺構(図9～12)

黄褐色泥砂の近世耕作土を除去し、地山および部分的に残る黒褐色泥砂の上面で、山科本願寺南殿の土塁にともなう堀(溝1)、溝、堀肩に据えられた礎石、瓦溜りを検出した。掘削深度制限の

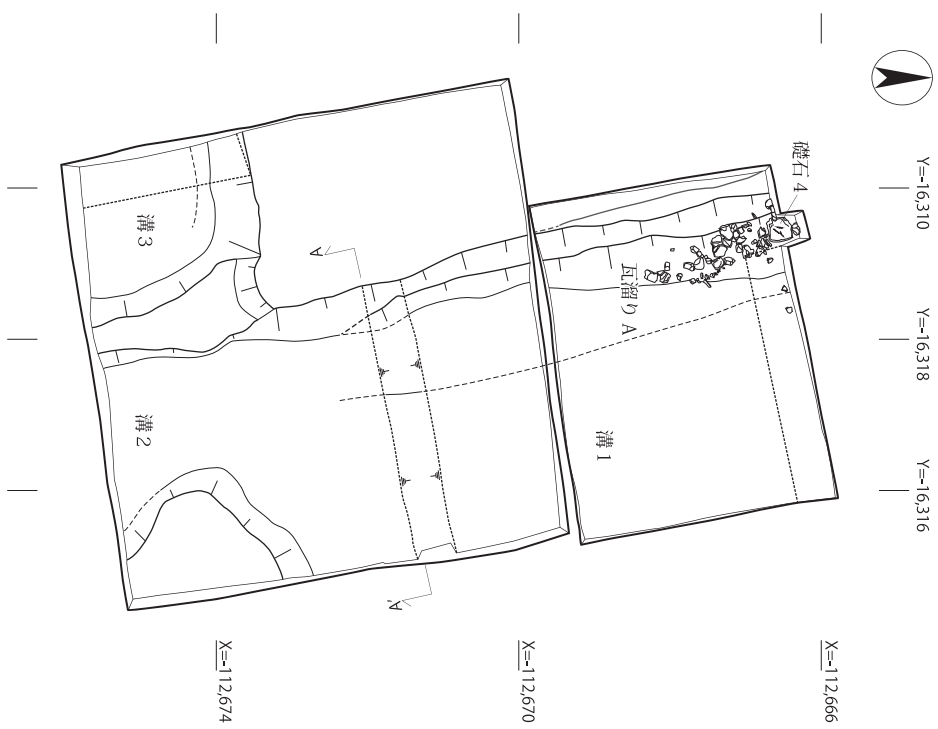
表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
室町時代～ 江戸時代	溝1・2・3, 礎石4	

第1面



第2面



□ 下層確認トレンチの肩



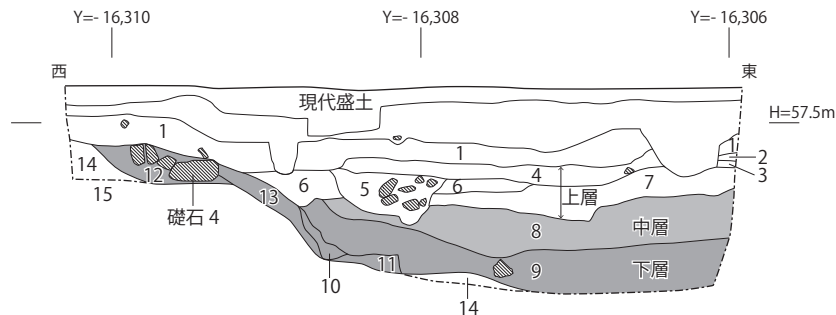
図9 第1・2面 遺構平面図 (1:100)

ため、遺構は完掘していないが、以下に詳述するように平面的な広がりから山科本願寺南殿に関する重要な知見が得られた。

なお、近世に入ると堀（溝1）は溜池化したと考えられ、最終的に埋められたのは江戸時代末頃と推測された。また溝2・3は近世に人為的に埋められたと考えられる。このため、溝1上層の検出状況を1面、全ての溝の検出面を2面とした。

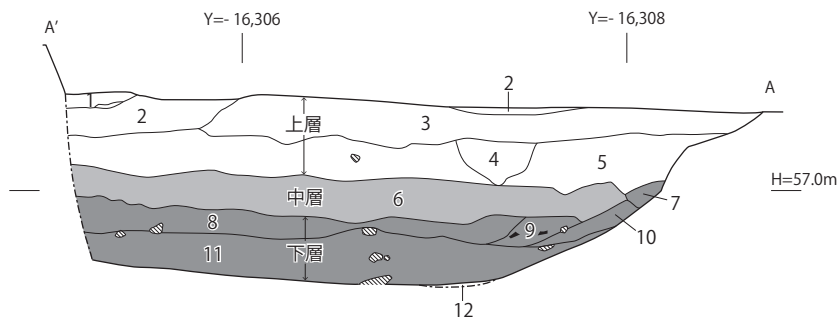
溝1（図10・11、図版25）：南北方向の溝で1区・2区の東半で検出した。最下層は後述する溝2・3につながり、機能時にはL字状を呈していたと考えられる。調査地の東半で検出され、東肩は調査区外にのびている。検出幅3.8m、深さは2.5～3.0mである。埋土は大きく上・中・下の3層に別れる。上層はさらに2枚に別れ、上から層厚20～30cmの暗灰黄色砂泥からなる耕作土、層厚20～30cmの黄褐色砂泥である。中層は層厚20cm、細礫～人頭大の礫を含む褐色砂泥で、人為的な埋

2 Tr. 北壁



- | | |
|----------------------------------|----------------------------------|
| 1 10YR4/2 灰黄褐色泥砂 (近現代盛土) | 9 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 |
| 2 10YR4/4 褐色砂泥 | 多量の拳大～人頭大の礫混じる (溝1下層) |
| 3 10YR3/3 暗褐色泥砂 | |
| 4 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (耕作土) | 10 10YR3/2 黒褐色泥砂 |
| 5 10YR3/2 黒褐色泥砂 (近代溝) | 11 7.5YR3/2 黒褐色砂泥 |
| 6 2.5Y4/2 音灰黄色砂泥 (近世耕作土) | 12 10YR3/4 暗褐色砂泥 (礎石 4、瓦溜り A 埋土) |
| 7 2.5Y5/3 黄褐色砂泥 (溝1上層) | 13 7.5YR3/4 暗褐色砂泥 (溝1肩) |
| 8 10YR4/6 褐色砂泥 粗砂～人頭大の礫含む (溝1中層) | 14 10YR3/1 黒褐色泥砂 (土壌化層) |
| | 15 7.5YR3/3 暗褐色泥砂 (地山) |

1 Tr. 中央アゼ

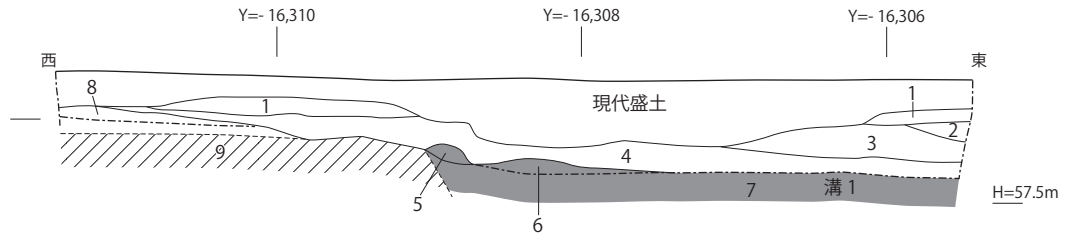


- | | |
|------------------------------------|---|
| 1 7.5YR4/4 褐色砂泥 礫混 固く締まる (近現代盛土) | 7 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (溝1肩) |
| 2 2.5Y4/2 音灰黄色砂泥 マンガン附着 (近現代攪乱) | 8 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂 礫混 |
| 3 2.5Y4/2 音灰黄色砂泥 | 9 10YR5/3 にぶい黄褐色泥砂 炭片含む (溝1下層) |
| 4 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 (溝1上層) | |
| 5 2.5Y5/3 黄褐色砂泥 | 10 10YR3/2 黒褐色砂泥 |
| 6 10YR4/6 褐色砂泥 φ1cm～人頭大の礫含む (溝1中層) | 11 10YR3/2 黒褐色泥砂 多量の拳大～人頭大の礫混じる (溝1最下層) |
| | 12 10YR3/1 黒褐色泥砂 (土壌化層) |



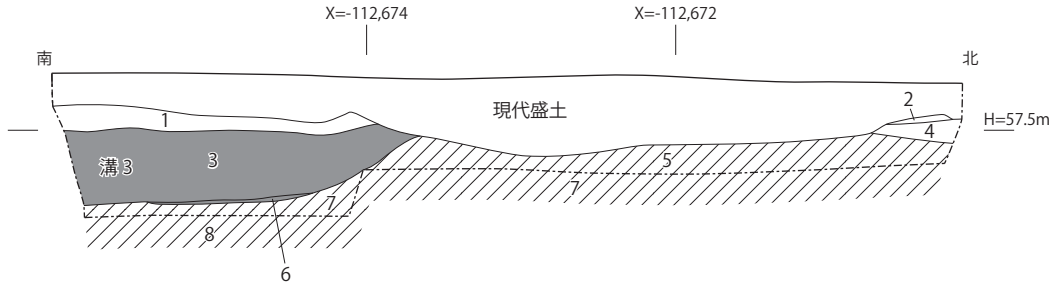
図10 溝1断面図 (1:50)

北壁



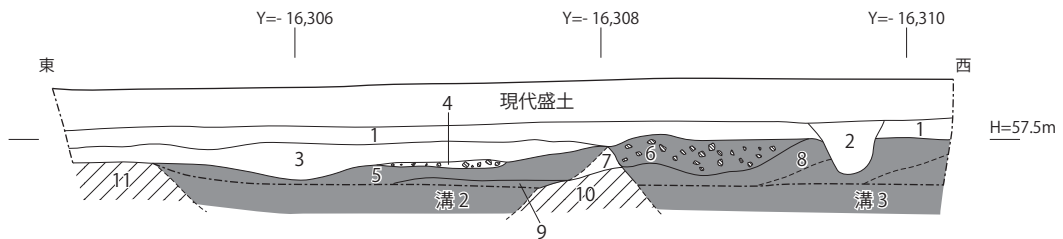
- 1 7.5YR4/4 褐色砂泥 礫混 固く締まる] (近現代盛土)
- 2 2.5Y4/2 音灰黄色砂泥 マンガン付着] (近現代盛土)
- 3 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 (近代～近世耕作土)
- 4 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 (近世耕作土)
- 5 10YR3/3 暗褐色砂泥
- 6 2.5Y4/4 オリーブ褐色極細砂～泥土 (溝1 上層)
- 7 10YR4/4 褐色砂泥 礫混
- 8 10YR3/2 黒褐色泥砂 (土壌化層)
- 9 10YR3/2 黒褐色泥砂 (地山)

西壁



- 1 10YR4/4 褐色砂泥 (近世耕作土)
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (近世耕作土)
- 3 10YR3/3 暗褐色泥砂 粗砂・地山のブロック土含む (溝3)
- 4 10YR2/3 黒褐色泥土
- 5 10YR3/2 黒褐色砂礫 (地山、上部土壌化)
- 6 7.5YR3/3 暗褐色泥土 炭含む (溝3 下層)
- 7 7.5YR3/4 暗褐色砂泥 礫混] (地山)
- 8 10YR3/1 黒褐色泥土

南壁



- 1 10YR4/4 褐色砂泥 (近代～近世耕作土)
- 2 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥 (1層に伴う Pit)
- 3 2.5Y5/3 黄褐色砂泥 (近世耕作溝)
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色砂礫 + 泥土 (整地土か)
- 5 10YR3/2 黒褐色泥砂 (溝2 埋土)
- 6 10YR3/2 黒褐色砂礫 + 泥土 (溝2 埋土)
- 7 10YR4/3 にぶい黄褐色泥土 (土橋)
- 8 10YR3/3 暗褐色泥砂 粗砂 4層のブロック土含む (溝3 埋土)
- 9 10YR3/2 黒褐色泥砂 (溝2)
- 10 10YR4/6 褐色泥土 (土橋?)
- 11 10YR5/6 黄褐色砂礫 (地山か)



図11 溝1～3 断面図 (1区壁面断面図) (1:50)

土であった。下層も2枚に別れ、上から層厚10～20cmのにぶい黄褐色泥砂、層厚20～30cm、拳大の礫を多量に含む黒褐色泥砂であった。中層までは近世の遺物を含み、最上層には近世後期の遺物を含む。上層の南肩は1区の中央部で検出され(図10)、後述の溝2埋土を切っていた。溝1中層は人為的な埋土であること、近世の遺物を含むことから、近世の段階で一部埋め戻されたと推測される。最上層は攪拌された耕作土であったが、その下に水成堆積の砂泥が観察されたことから、近世段階には池状を呈していたと推測される。掘削当時の溝(下層)は、位置と規模から南殿内郭を囲む土塁に伴う堀と考えられる。

瓦溜りA(図12, 図版26・27): 2区の溝1西肩部で検出した瓦溜りである。明瞭な掘方が検出できなかったことから、肩部に溜まっていたものが溝1の埋没過程で埋まったものと考えられる。範囲は北西から南東にむけて1.5m程度、掘り下げていくと列をなす人頭大の石を複数検出した。護岸の可能性を考えて2区北壁部の下層確認用の断割り掘削時に石列下の状況を観察したが、新たな石は無く、石垣では無かった。土師器・焼締陶器・瓦・砥石などが出土した。

溝2(図11, 図版25): 溝1の南につづく溝で幅2.5m, 深さ0.3m以上であった。溝1より幅が狭くなっている。埋土は黒褐色泥砂で人為的な埋め土であった。掘削深度制限のため底および下層は確認できていない。

溝3(図11, 図版25): 1区南半で検出した東西方向の溝で、北肩は南北方向の堀1西肩と連なっている。東から西に向かって傾斜しており、東端と溝2の間には土橋状の高まりが検出された。検出した溝の幅は2.3m, 深さ0.5mであった。南肩は調査区外のため検出できていない。埋土は粗砂と地山ブロックを含む暗褐色砂泥の人為的な埋土である。東壁断面では溝底に層厚5cmほどの暗褐色泥土を観察した。機能時堆積層の可能性はある。土橋部分は褐色泥土からなる地山で

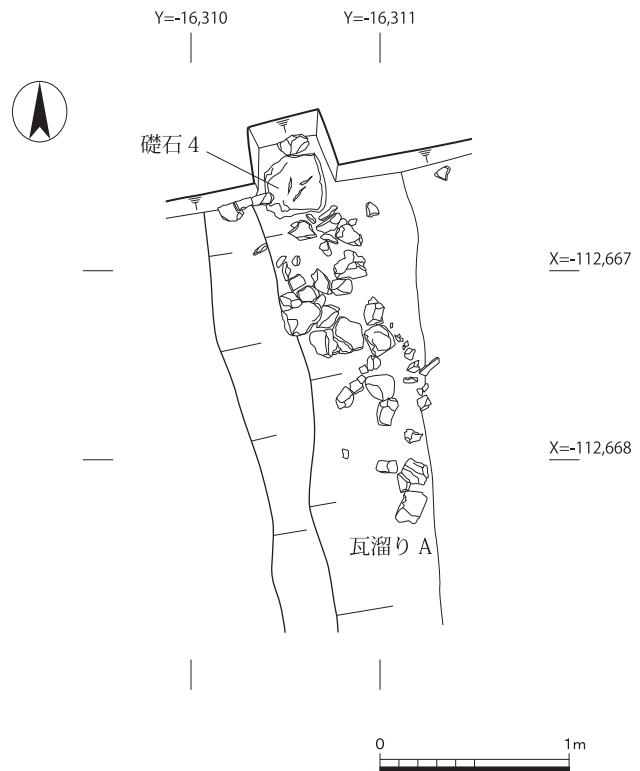


図12 瓦溜りA 平面図(1:40)

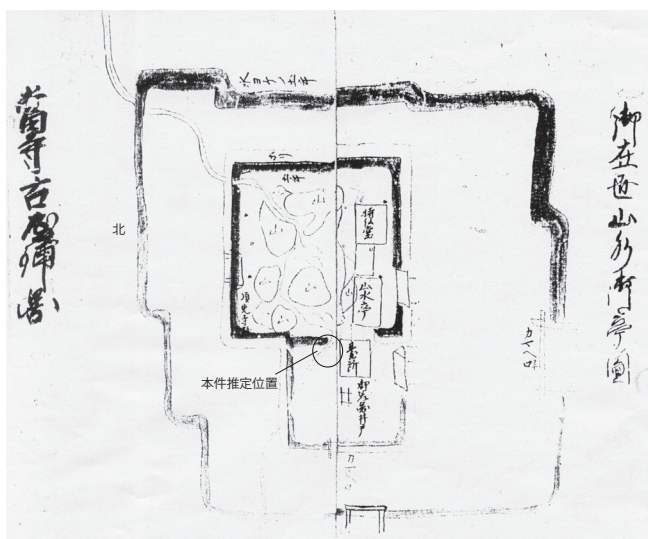


図13 御在世山水御亭図(光照寺伝)

あった。

礎石4（図12，図版27）：2区の北端，溝1の西肩で検出した。一辺0.3m，厚さ0.15mの方形で上面は平坦である。掘方は溝の肩を兼ね，深さは0.2mで，埋土は暗褐色砂泥であった。なお試掘調査2区でも，溝の西肩で礎石の可能性のある石を検出している。試掘で確認したものと礎石4は並ばないが，瓦溜りAの検出状況を含め北西方向に建物があったと予測されるため礎石と考えた。

光照寺絵図（図13）には，土塁，堀，山水への引き込み溝が描かれており，内郭の東西を区切る土塁には堀が描かれていないが，溝1は土塁推定位置にほぼ重なり，瓦溜りAから出土した遺物の年代観から，掘削は山科本願寺期にさかのぼると考えられる。深さも2.5m以上あることから，土塁に伴う堀と言えるだろう。溝1の西肩は溝3の肩と連続的で，遺構の姿を大きく捉えた時，溝1・3は一連の遺構で逆L字状を呈していたと考えられる。この位置には，南殿中心部に行くための通路があったと推測され，溝3はその道路側溝の可能性もある。また，溝2は位置は異なるものの絵図で描かれた山水への引き込み溝のような性格のものが推定される。

その他の遺構 2区溝1の西で自然流路の肩を検出した。未掘削のため詳細は不明だが埋土は黒褐色泥砂である。包含層や遺構中に混入品に古墳時代の須恵器・土師器の細片が含まれていたことからその時期のものとの可能性がある。

3. 遺物（図14・15）

遺物は整理箱に4箱出土した。ほとんどが瓦である。

溝1出土遺物 最上層から京焼系統1や細片のため図化しなかったが染付碗などが出土している。下層および瓦溜りAからは土師器皿2・3，国産施釉陶器の卸目皿4，焼締陶器播鉢5・6，平瓦8・熨斗瓦9，砥石10ほか図化できなかったが青磁碗の細片や丸瓦などが出土した。

1は京・信楽系陶器碗で，胎土は明黄褐色，釉は白色で貫入が見える。

2・3は土師器皿Sで2は口径

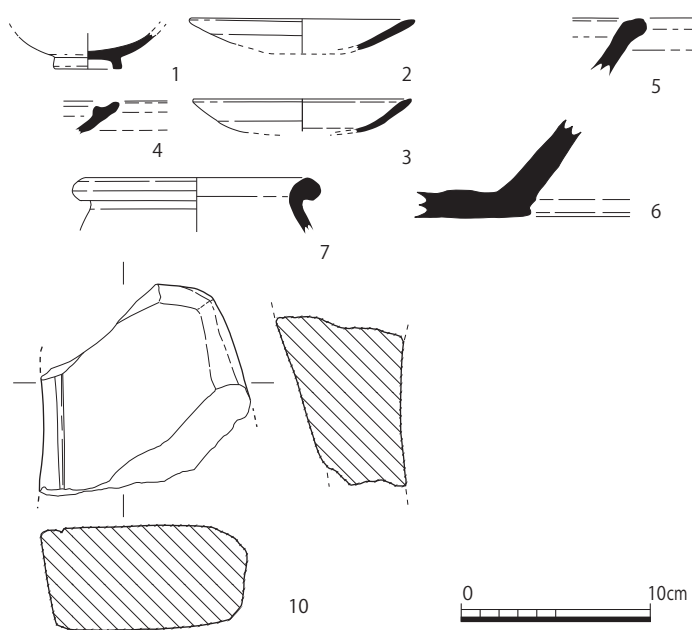


図14 出土遺物実測図（1）

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
室町時代	土師器, 焼締陶器, 国産施釉陶器, 瓦, 砥石				
江戸時代	国産施釉陶器,				
合計		4箱	10点(1箱)	0箱	3箱

12.0cm, 3は口径11.6cmである。4は瀬戸・美濃窯の灰釉卸目皿, 5・6は別固体だが信楽産の播鉢である。6はスリ目が5本ある。8の凹面には布目痕がみられ, 凸面および側面は約1cm幅で平滑にナデられている。9は凹面に布目跡および糸切痕が残る。凸面に葺足が残り, 幅も小さいことから熨斗瓦と考えられる。10は砥石である。

溝2からは, 唐津壺7ほか, 細片のため図化しなかったが信楽産の播鉢などが出土した。7は頸部までしか残っていないが, 内・外面ともに褐釉が施される。江戸時代前期のものと考えられる。

これらの遺物から, 溝1の上層は近世後期, 溝1下層はX期中段階頃のものと考えられる。

以上, 堀は室町時代末期に掘られ当初はL字状を呈していたこと。溝2・3はおそらく江戸時代初頭に埋められていること。堀1は江戸時代後期までなんらかの形で残り埋められた事などがわかった。

4. まとめ

今回の調査地では山科本願寺南殿の内郭を囲む堀を検出し, 内郭西端の位置が特定できた。南殿内の第1次調査や, 光照寺に現存する土塁・堀から分かる内郭東端の位置と今回の成果をあわせることによって, 内郭の範囲が概ね推定でき, 今後の調査につながる重要な知見が得られた。

また, 西郭から内郭につながる通路推定地には道路側溝などが掘られていた可能性もあり, 光照寺内に現存する庭園や土塁と合わせれば, 南殿内郭部分については「御在世山水御亭図」に描かれたものとかかり近い状況が復元される。この一つの要因は, あくまで推測にすぎないが, 山科本願寺および南殿焼亡後, 比較的早期に光照寺(当初は光称寺)が故地に建てられたことから, 図が描かれた元和三年(1618)の時点では¹²⁾, 土塁を含む内郭施設の多くが残っていた事にあると予想される。

これに対して, 土塁外郭については現在のところ, 推定や復元に取り組む情報が得られていない。大正年間の地形図や地籍などに残る地割の痕跡をたどっても土塁に該当するものを探すことは困難であった。ただし, 現在史跡となっている第1次調査地では東西方向の土塁を確認してお

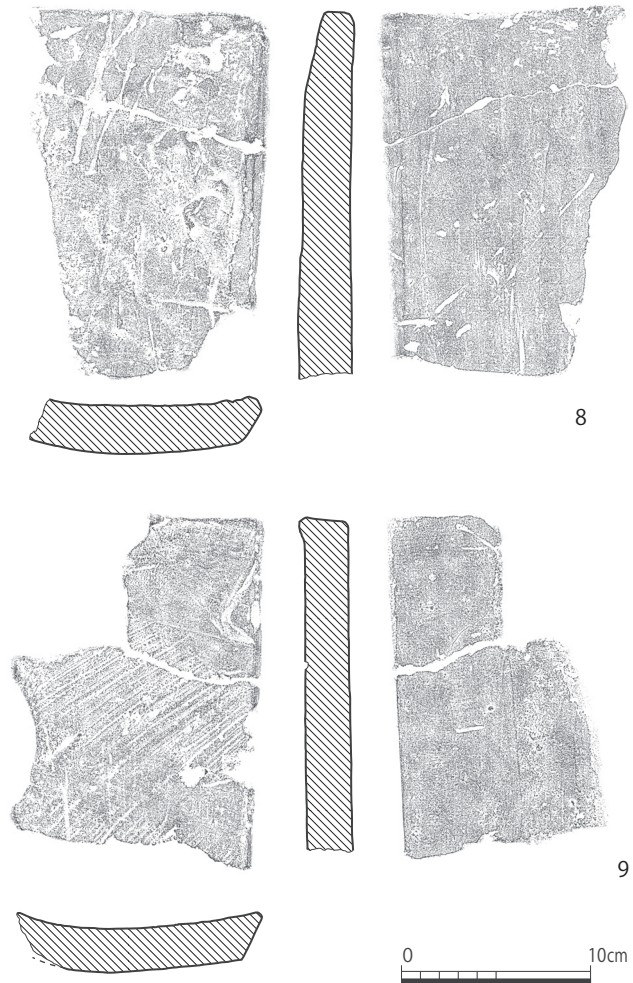


図15 出土遺物実測図(2)

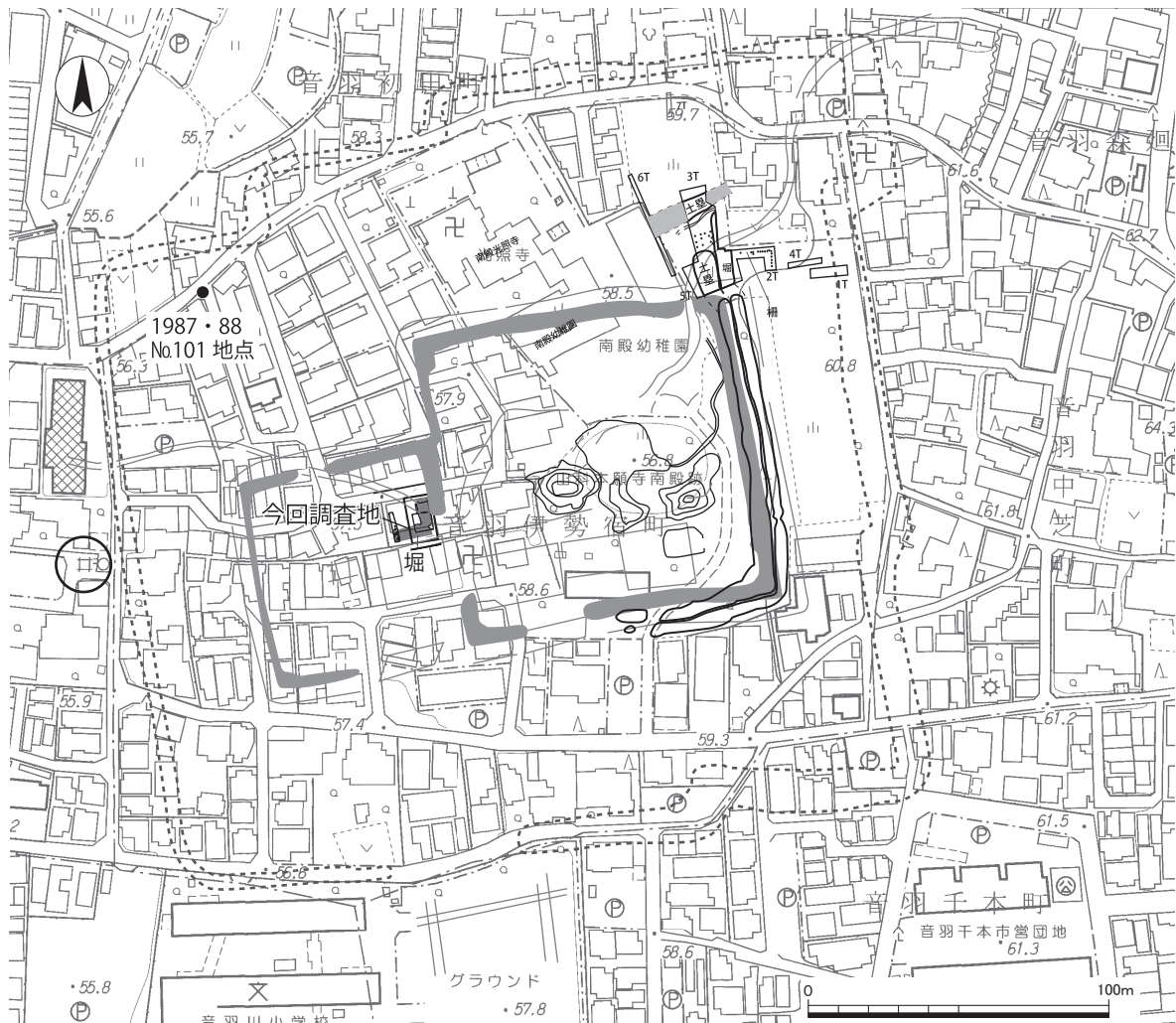


図16 山科南殿跡 復元推定図

り、現在の光照寺北端には東西方向の水路が通っていることを考えれば、外郭が存在していた可能性を否定することはできない。今後の調査では、とくに外郭部分について、絵図に捕らわれない調査成果の追及が必要になるものと思われる。 (赤松 佳奈)

註

- 1) 『山科本願寺跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005-3』(財)京都市埋蔵文化財研究所, 2005。
- 2) 『京都市内遺跡発掘調査報告 平成24年度』京都市文化市民局, 2013。
- 3) 岡田保良・浜崎一志「山科寺内町の遺跡調査とその復元」『国立歴史民俗博物館研究報告』第8集, 1985。
- 4) 『京都市内遺跡発掘調査報告 平成17年度』京都市文化市民局, 2006。
- 5) 『京都市内遺跡発掘調査報告 平成26年度』京都市文化市民局, 2015。
- 6) 『中世庭園文化史』『奈良国立文化財研究所学報』第6冊, 1955。
- 7) 出口 勲「I山科本願寺南殿跡」『京都市内遺跡発掘調査概報平成14年度』京都市文化市民局, 2003。
- 8) 『京都市内遺跡発掘調査報告 平成18年度』京都市文化市民局, 2007。
- 9) 近藤奈央「山科本願寺南殿跡」『京都市内遺跡発掘調査報告平成25年度』京都市文化市民局, 2014。
- 10) 『昭和61年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所, 1989。
- 11) 註7と同じ
- 12) 「御在世山水御亭図」が収録されている光照寺伝「野村本願寺古御屋敷」には、元和3年に書き残された文書が虫食いによって劣損していたため元禄二年にこれを書き写したという旨が記されている。

VIII 鳥羽離宮跡

1. 調査の目的と経過 (図1～3)

調査地は、伏見区中島前山町22に所在し、周知の埋蔵文化財包蔵地「鳥羽離宮跡」に該当する。当該地で個人住宅建設が計画され、平成26年1月23日付で文化財保護法第93条第1項に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」が行われた。

調査地はこれまで鳥羽離宮南殿の東側に広がる池の中と復元されていたものの、周辺での試掘および立会調査の成果から調査地付近に陸部の存在が想定されていた。特に、北側隣地(図8の④)での試掘調査では、地表面から0.5mの深度で陸部と考えられる面が検出されており、今回なされた届出の計画内容では基礎が遺構面に底触する可能性があった。また、鳥羽離宮南殿の苑池を復元するうえで重要な地点でもあることから、文化庁国庫補助事業に伴う発掘調査を実施することとなった。

調査区は敷地の西半部に一ヶ所設けた。規模は南北12m×東西6mで、部分的に調査区の拡張を行った。調査面積は73㎡となる。調査は、2015年2月23日から開始し、3月13日に埋戻しを完了した。調査日数は延べ15日間である。

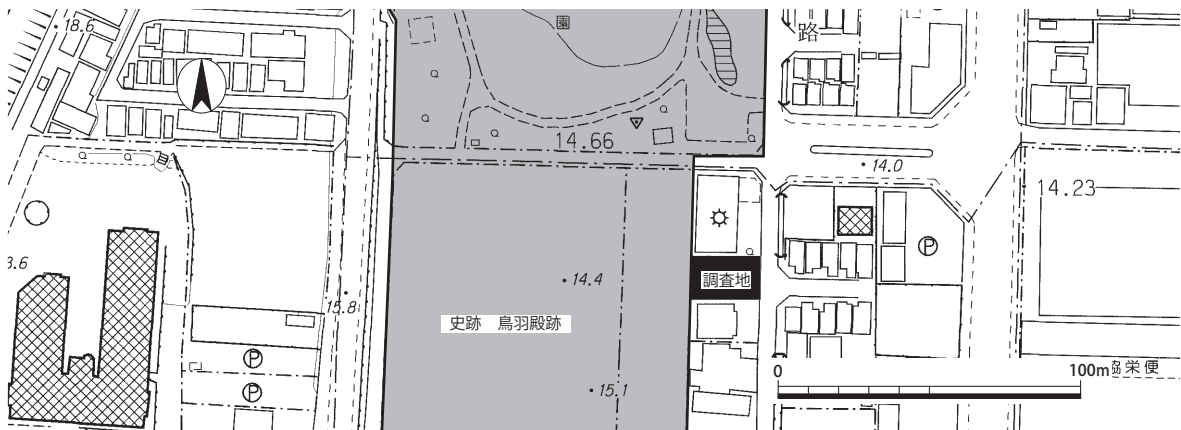


図1 調査地位置図 (1 : 2,500)



図2 調査前風景 (南東から)



図3 調査風景 (南西から)

2. 位置と歴史的環境

鳥羽離宮は平安京から6kmほど南方に位置しており、桂川と鴨川の合流点の北側に位置する。

周辺では、鳥羽離宮造営以前より人の活動痕跡が認められており、鳥羽遺跡や下鳥羽遺跡では、数は少ないものの縄文時代晩期に遡る遺構が確認されている。また、弥生時代から古墳時代にかけては竪穴住居や墳墓など多くの遺構が検出されており、この時期からすでに開発・利用されていた地域であることが窺われる。

しかし、これ以降から鳥羽離宮が造営されるまでは付近での土地利用は減少し、集落は散在的に確認されるのみである。この付近一帯には湿地が多く存在しており、おそらく平安時代前期には田園として利用されるような場所であったと想定される。しかし、平安時代後期に様相が一変する。『百練抄』寛治二年（1088）二月五日条には、1086年に藤原季綱が白河上皇に土地を進上し、高階泰仲が舎屋を造進したことが記されており、これにより白河上皇の最初の院御所である鳥羽離宮南殿が成立した。白河上皇の死後も鳥羽天皇が精力的に造営を進め、それによって日本最大級の離宮が誕生した。鳥羽離宮は、南殿・北殿・泉殿・馬場殿・東殿・田中殿と呼ばれる6つの院御所と、証金剛院・勝光明院・安楽寿院・浄菩提院・金剛心院などの御堂、そして自然地形を利用した広大な園池などによって構成されている。

今回の調査地は、鳥羽離宮の中でも最も早くに造立された南殿の西縁部にあたり、東側隣地は現在、史跡公園となっている。史跡公園内では1960年代に発掘調査が実施されており今調査地から西へ50mほどの位置で証金剛院と推定される建物跡が確認されている（図8の②）。

3. 遺 構（図4～6・表1）

（1）基本層序（図4）

本調査地点に関しては後世の攪乱等はほとんど見られず、層序は安定していた。G L -0.7 mまで現代盛土で、その直下から-0.9 mまで旧耕土と床土と考えられる褐色・明褐色泥砂が存在する（a～c層）。このうち、a層はビニール等が混じる現代の旧耕土である。この下は、マンガンを多く含む灰黄褐色泥砂・粘質土が0.4 m程の厚さで存在する（d・e層）。判然としないものの、部分的に畦と思しき段差が認められることから、水田跡と推察される。更にその下は、室町時代の土器を含む灰・黄灰色シルトとなる（f・g層）。同質の土が厚く認められる事から、整地土の可能性はある。しかし、この上面で精査を行ったが明確な遺構は確認できなかった。この室町時代の遺物包含層の直下が遺構面となる。h層は、鳥羽離宮跡に伴う池の埋土である。k層は陸部を形成する土層で、この直上には砂が敷かれる（i層）。j層は、砂礫で構成されたk層堆積以前の河川堆積である。

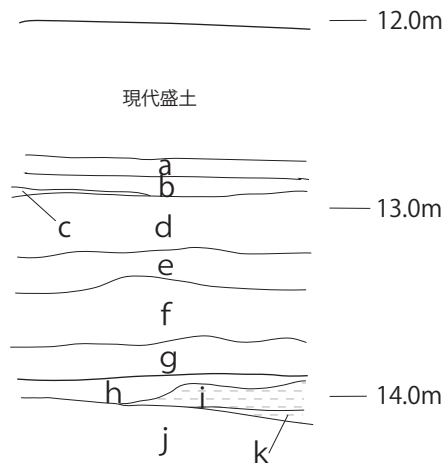


図4 基本層序（1：40）

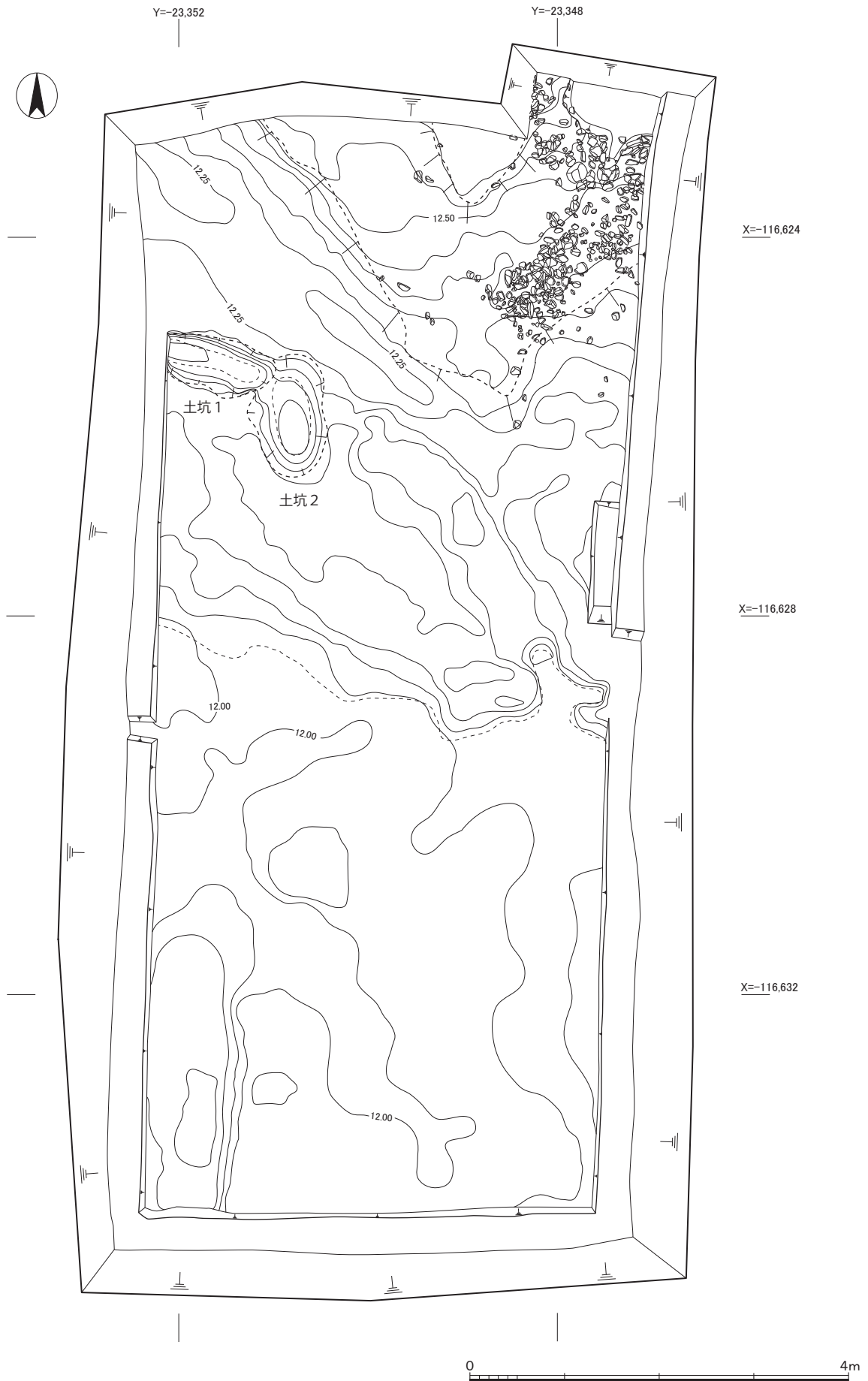
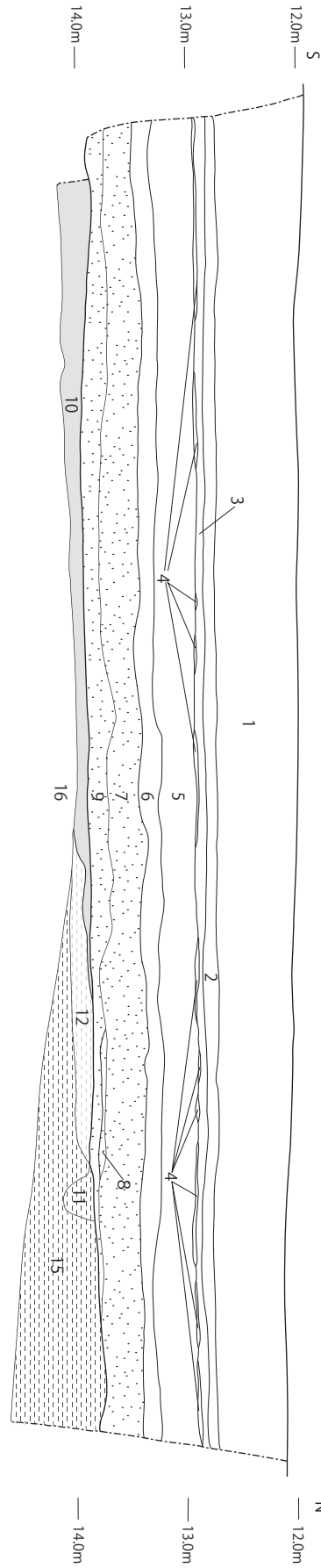


图5 調査区平面図 (1 : 60)

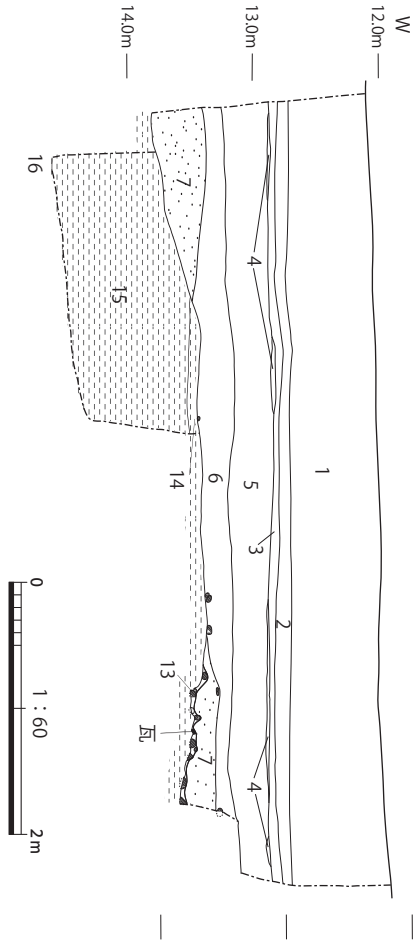
X=-116635.126
Y=-23352.016

X=-116622.782
Y=-23352.783



X=-116622.782
Y=-23352.783

X=-116623.068
Y=-23346.426



- 1 現代盛土
- 2 7SYR4/1 褐灰色泥砂（ビニール含む）【旧耕土】
- 3 7SYR5/1 褐灰色砂泥【旧耕土】
- 4 7SYR5/6 明褐色泥砂【床土】
- 5 10YR5/2 灰黄褐色泥砂（マンガン含む）【旧水田か】
- 6 10YR5/2 灰黄褐色粘質土（マンガン多量を含む）【旧水田か】
- 7 2.5Y6/1 黄灰色シルト（マンガン含む）【整地土か】
- 8 5Y6/1 灰色シルト（2mm程度の砂粒を含む）【整地土か】
- 9 2.5Y6/1 黄灰色シルト（マンガン含む）【整地土か】
- 10 5PB6/1 青灰色粘土【池埋土】
- 11 5PB5/1 青灰色粘土に12層が混じる【景石の抜き取り穴】
- 12 N6/1 灰色微砂（土器細片含む）【汀の砂敷】
- 13 5Y7/1 灰白色砂礫（5～20cmの礫を含む）【陸部の上に敷かれた砂礫】
- 14 10YR6/3 にぶい黄褐色泥砂（マンガン・土器細片含む）【陸部】
- 15 10YR6/2 灰黄褐色砂質土（マンガン多量を含む、固く締まる）
- 16 5YR6/8 橙色砂礫（古墳時代の土器含む）【河川堆積】

図6 調査区壁断面図（上：西壁，下：北壁 1：60）

(2) 遺構 (図5・6, 表1)

調査では、池の汀や景石の抜き取り穴などの鳥羽離宮に伴う園池遺構を検出した。汀線は調査区の北側から南側に向かって舌状に張り出しており、陸部は、北・東・西側に向かって調査区の更に外に続いていく。

検出した陸部と池底の比高差は最大で1.35mほどで、池の底から約5度の緩い傾斜をもって肩口まで至る。部分的にしか遺存していないものの、汀には砂、陸部の高所には砂と5～20cm程度の川原石を敷き洲浜を仕上げる。池底については、河川堆積と考えられる砂礫層をそのまま利用しており、そこに人為的に手を加えた痕跡は認められない。

汀の南西側では、景石の抜き取り穴と考えられる土坑を2基検出している。この土坑は東西に並んでおり、規模は東側の土坑1が長さ1.1m以上・幅0.6m、西側の土坑2が長さ1.2m・幅0.7m・となる。土坑の形状から推測すると、各土坑にそれぞれ1石ずつ景石を据え付けたものと考えられる。周辺での調査成果などから、これらの景石は西側で確認されている建物群からの景色を意識したものであろう。

断割り部の断面観察の結果、陸部の大部分を構成する15層には遺物が含まれず、同質の土が大量に堆積していることから、人為的な盛土ではないと判断した。おそらくは、鳥羽離宮の造営に際してこのような自然地形を活用しながら園池を形成したものと推察される。この上には、少量だが遺物を含む14層が10cm程の厚さで存在し、更にその上に砂や礫を敷いて洲浜を仕上げていく(13層)。なお、調査区全体で河川堆積と考えられる砂礫層(16層)が確認できる。この層からは、ごく少量ではあるが古墳時代の土師器が出土している。遺物が認められたのは陸部を形成する15層の存在しない範囲のみであった。陸部については、断割りを実施した限られた範囲でしか確認できていないため、この陸部が形成されたのが古墳時代よりも以前か否かという問題に関しては明確な答えをもたない。しかし、現場で確認した限りでは15層のある範囲とそうでない範囲を比較しても砂礫の量・粒径・状態に差異は認められない。従って、現時点では古墳時代以降に陸部が形成されたものと考えておきたい。ただし、その場合はどのような状況によって同質かつ多量の土で構成されている陸部が形成されたかは、今回の部分的な調査では判断できない。

陸部の上に施された礫の直上や池の埋土からは鳥羽離宮に伴う軒丸瓦が出土している。また、池や陸部を覆うように認められる7～9層からは室町時代の遺物が認められることから、検出した苑池遺構は室町時代を前後とする時期に廃絶したものと考えられる。

表1 遺構概要表

時代	遺構	備考
平安時代～中世	池の汀・景石の抜き取り穴	

4. 遺物 (図7・表2)

今調査で出土した遺物の量は、コンテナ3箱分である。種類としては、土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦類・瓦器・銭貨がある。

1は、皿S(小)である。9層から出土した。口径は6.6cmで、口縁部に炭化物が付着する。京都VIII期に位置づけられる。2は、10層より出土した。口径は11cmで、全体的に摩耗が激しい。京都VI期に位置づけられる。3は、瓦器椀である。摩耗が激しい。10層より出土。

4～6は、16層より出土した。4は甕である。内外面にハケが確認できる。その後、内面のみナデを施している。5は二重口縁壺の口縁部である。6は、小型丸底鉢である。内外面にミガキの痕跡が確認できる。いずれも古墳時代の遺物と考えられる。本調査地で確認した汀は、自然流路を利用して設けられたものと考えられる。これらの遺物は、ローリングによる摩耗もそれほど顕著には見られないことから、調査地に近接して存在する上鳥羽遺跡から流れた遺物と考えられる。

7～9は剣頭文軒平瓦である。7は、中央に二つ巴文を配し、その両側に3つ剣頭文を配す。凹面は不調整で布目が残る。凸面には、オサエが認められる。10層より出土。8は、中央に三つ巴文を配し、その両側に剣頭文を3つ配す。全体の摩耗が激しい。10層より出土。9は、中央に「○」の中に「◇」を配した幾何学文、その両側に剣頭文を2つ配する。更にその外側に「□」の中に「×」を配した幾何学文が並ぶ。摩耗が激しいものの、凹面に不調整の布目痕、内面にオサエの痕跡が確認できる。

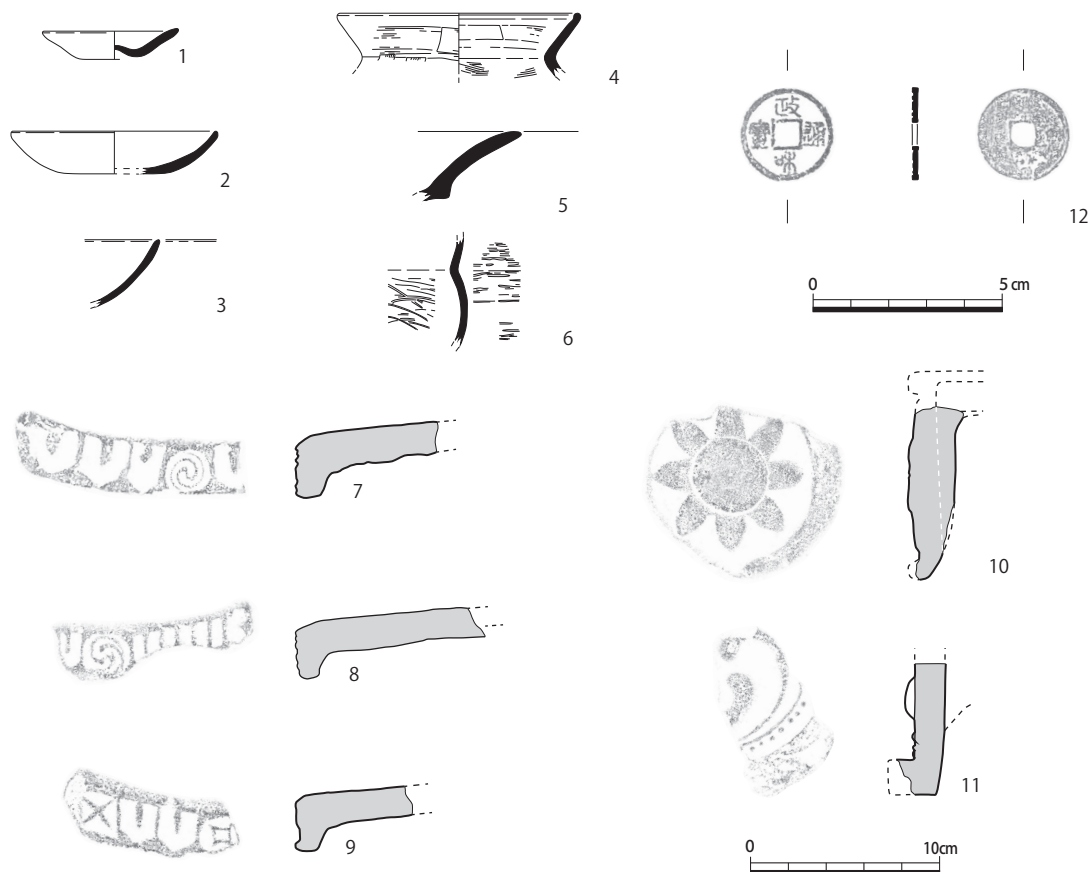


図7 出土遺物実測図 (12のみ1:2, それ以外は1:4)

10は単弁八葉蓮華文軒丸瓦である。10層より出土した。本調査地の西側隣接地（図8の②）での調査に際しても、同型の軒丸瓦が出土している。

11は、三巴文軒丸瓦である。内区に右回りの巴文を3つ並べ、外区には珠文を配する。陸部に敷かれた礫の直上より出土した。

12は、北宋の「政和通寶」である。初鑄は1111年。10層上面より出土した。

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代	土師器		3点		
平安時代以降	土師器・須恵器・緑釉陶器 磁器・瓦器・瓦・銭貨・鉄釘		9点		
合計		3箱	12点(1箱)	1箱	1箱

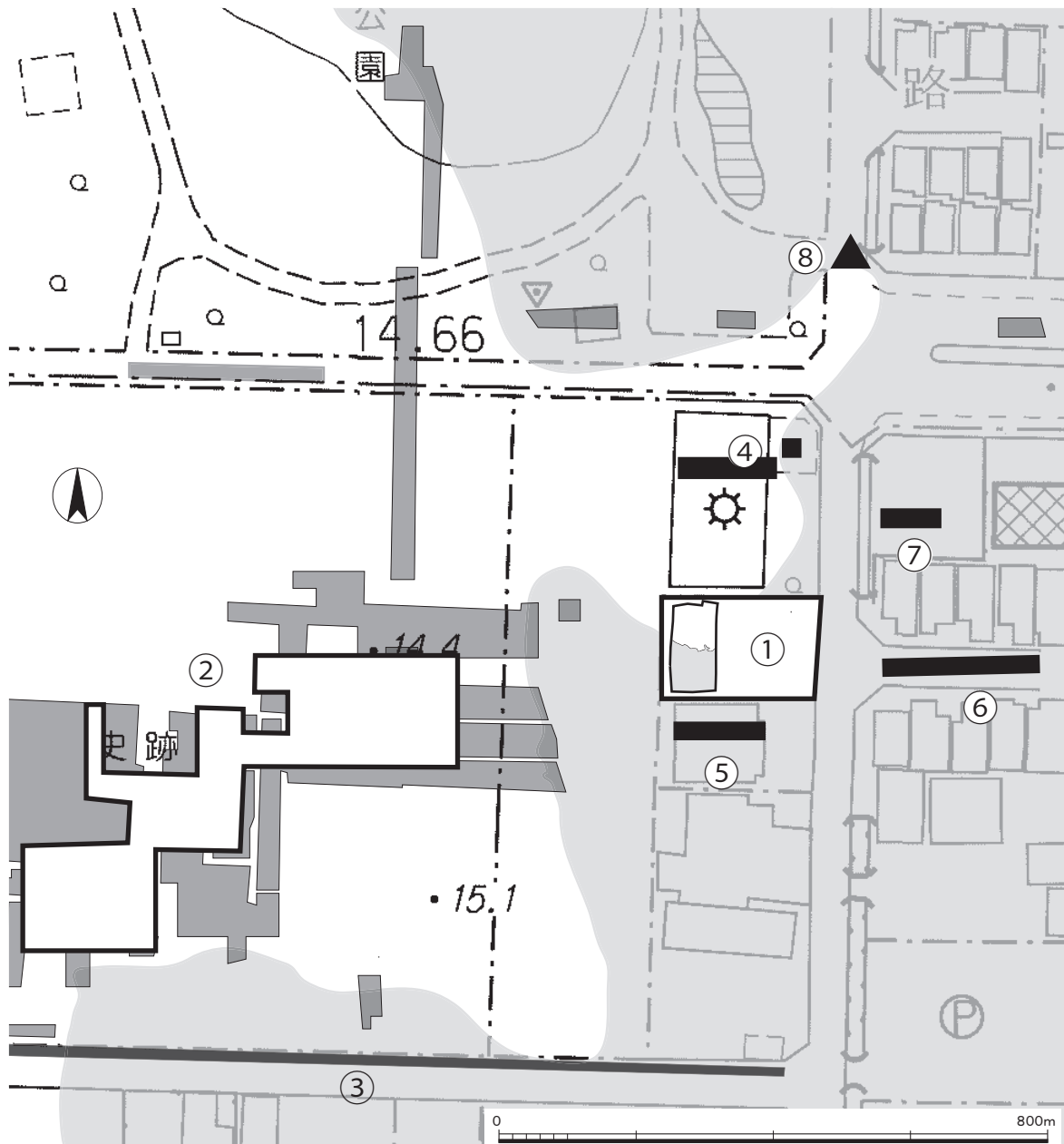
5. まとめ（図8）

今調査地は、従来では鳥羽離宮に伴う池の中と想定していた場所であった。そのような場所で、園池遺構を検出することが出来たのは大きな成果といえる。遺物の出土量が少ないため、時期を確定することは難しいが室町時代には廃絶していたものと考えられる。文献から鳥羽離宮南殿の成立年代は判明しているが、廃絶時期ははっきりとしない。ただし、建仁元年（1201）に修理が行われたこと、弘安9年（1286）に方違の行幸に南殿が用いられたことが記されており、少なくとも鎌倉時代までは存続していたものと考えられる。建物等と縁辺部の園池遺構の廃絶時期が同じという確証はないが、これらの文献の内容と本調査から考えられる園池の廃絶年代に矛盾はない。

今調査と周辺での調査成果を併あわせた復元図を示すと図8のようになる。この復元によると、北東にむかってのびる複雑な汀線が想定される。また、陸部には鳥羽離宮に伴う遺構が存在する可能性もあり、注意が必要である。

鳥羽離宮の園池は、その大部分が自然地形を利用して造られたものと考えられるが、それゆえに汀線が複雑な様相を呈する事を今調査を通して改めて認識させられた。最初に触れたように、鳥羽離宮跡は院御所や御堂などの建物跡、そしてそれに伴う広大な庭園によって構成されている。その規模は、南北1km・東西1.2kmにおよび、総面積は120haともいわれる。その大部分が園池であることを考えるならば、園池は鳥羽離宮を構成する重要な要素と言える。従って、鳥羽離宮の復元を行っていくうえで園池の実態を明らかにしていく事は不可欠であろう。また、それ以外にも未だ不明な点も多く残されている。併せて今後の調査・研究の進展に期待したい。

（熊井 亮介）



地点	調査方法	報告書	備考
①	発掘	本書	本報告の調査。汀・景石の抜き取り穴を検出。
②	発掘	『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育庁, 1965~1968。	建物・回廊・汀・景石・溝・土坑などを検出。
③	発掘・立会	『京都市埋蔵文化財調査概要』平成元年度 財団法人京都市埋蔵文化財研究所, 1994。	柱穴・景石・土坑などを検出。
④	試掘	『京都市内遺跡試掘調査立会調査概報』昭和63年度 京都市文化観光局, 1989。	陸部を検出。
⑤	試掘	『京都市内遺跡試掘調査概報』平成8年度 京都市文化市民局, 1997。	湿地状堆積を確認。
⑥	試掘	『京都市内遺跡試掘調査概報』平成14年度 京都市文化市民局, 2003。	湿地状堆積を確認。
⑦	試掘	『京都市内遺跡試掘調査概報』平成16年度 京都市文化市民局, 2005。	湿地状堆積を確認。
⑧	立会	『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和59年度 財団法人京都市埋蔵文化財研究所, 1987。	景石を検出。

図8 鳥羽離宮南殿跡付近の汀線想定復元図 (1:1,000)

Ⅸ 伏見城跡

1. 調査の経緯と経過

調査地は、伏見区桃山筑前台町27-4他に所在し、周知の埋蔵文化財包蔵地「伏見城跡」に該当する。ここに個人住宅新築の計画がなされ、平成26年7月27日付けで文化財保護法第93条第1項に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」が行われた。これに対し、文化財保護課では、平成27年3月26日に試掘調査を実施したところ、伏見城期の整地層及びピットなどを検出した。届出された計画では、遺構面に影響が及ぶため、発掘調査が必要であると判断し、記録保存のための発掘調査を行うこととなった。

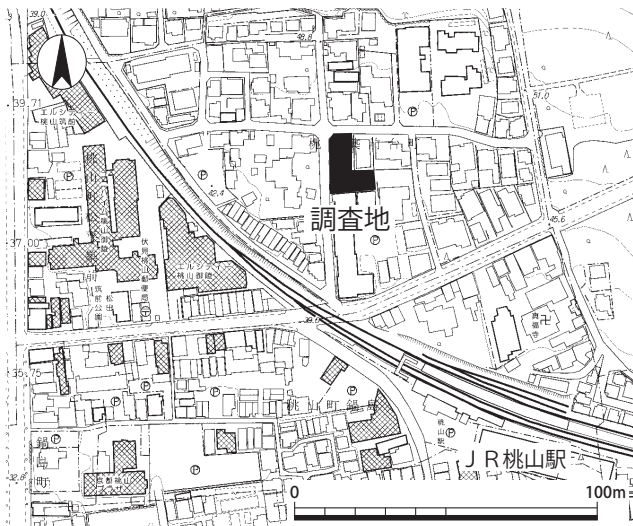


図1 調査地位置図(1:5,000)

調査区は計画範囲内に東西8m、南北19mの調査区と東西22m、南北6mの調査区を「L」字状に合わせて設定し、残土置き場確保のため反転調査を行った。また補足調査が必要となったため、協議の後、調査区の一部を拡張した。調査面積は約295㎡、調査期間は平成27年4月16日から6月19日である。また6月13日に地元向けの現地説明会を開催し、約130人の参加を得た。



図2 調査前全景(北西から)



図3 調査風景(北西から)



図4 遺構掘削風景(東から)



図5 現地説明会風景(北から)

2. 遺 跡

(1) 地理的環境と歴史的環境

調査地は京都盆地の東側を画する東山の南端、桃山丘陵西側の北東から南西に向かう緩斜面地の中腹に立地し、標高は約46～47mである。この緩斜面には所々に平坦部分が存在し、伏見城築城の造成時に地形が大きく改変された際の名残りと考えられている。またこの地形改変により、調査地周辺では室町時代以前の痕跡を確認することは少ないが、古くは縄文土器の散布地である金森出雲遺跡や古墳時代の桃山古墳群（永井久太郎古墳）、奈良時代前期の瓦が確認されている御香宮廃寺などが想定されている¹⁾。また室町時代の濠や土塁状の高まり、柱穴、井戸なども確認されるなど²⁾、部分的ではあるが伏見城築城以前の痕跡を確認でき、様子を知ることができる。なお文献上では、平安時代後半になると橘俊綱による伏見殿の建立、これを中核とした後に皇室御領となる伏見荘が形成されるなど、風光明媚な土地であったことも知られている。

伏見城は、築城から廃城までの約30年に4つの画期（Ⅰ期：指月屋敷、Ⅱ期：指月城、Ⅲ期：豊臣期木幡城、Ⅳ期：徳川期木幡城）があると考えられている。文禄元年（1592）、現在の観月橋団地一帯に想定されている「指月丘」に、甥の秀次に関白職を譲った豊臣秀吉が隠居所として指月屋敷を築きはじめたことに始まる（Ⅰ期）。翌年の文禄二年（1593）の秀頼誕生を機に、指月屋敷を本格的な城郭として改築し始め、指月城を築城することとなる（Ⅱ期）。文禄四年（1595）には秀吉が聚楽第の破却を命じたことにより、これまで聚楽第周辺に屋敷を構えていた大名たちも指月城下に屋敷を構え始める。しかし慶長元年（1596）の大地震により、指月城や大名屋敷が倒壊するなどの甚大な被害を受けた。これを受け秀吉は、翌年の慶長二年（1597）に、近隣の木幡山を中心として新たに城を築き始める（Ⅲ期）。この際に、城下西側を中心に武家屋敷や商工業者が集まる城下町の一体整備も行った。秀吉は晩年をこの再建した城で過ごし、慶長三年（1598）に生涯を閉じることとなる。その後、慶長四年（1599）に徳川家康が秀吉の後に入城するが、慶長五年（1600）の関ヶ原の合戦の前哨戦で主要な建物は焼失。同年の関ヶ原の戦いで勝利をおさめた徳川家康により、翌年（1601）には同じ場所に伏見城の再建が始められ（Ⅳ期）、慶長八年（1603）には征夷大將軍宣下をこの城で受けている。元和元年（1615）の大坂夏の陣で豊臣氏が滅亡し、二条城が造営されたことにより、伏見城は城郭としての役割を終え、元和九年（1623）の徳川家光の三代将軍宣下を最後に廃城となる。廃城の際には、石垣一石まで破却せよとの厳命が下ったため、構築物は破却され、その遺材の一部は大坂城、淀城、二条城、本願寺唐門の修築などに使用されたと伝えられる。現在では地形や一部残存する石垣などから当時の伏見城の様子を窺い知ることができる。その後、奉行所などの一部機関を残し、江戸屋敷にその拠点が移され、周辺の武家屋敷もその役目を終えることとなる。



図6「伏見御城郭並武家屋敷取図」該当部分

(2) 周辺の調査 (図7)

調査地は伏見城の大手門西に位置し、伏見城下の大名屋敷が建ち並ぶ部分にあたる。伏見城下の大名屋敷配置を記した『伏見御城郭並武家屋敷取図』(桃山城所蔵)や『伏見御城絵図』(中井家所蔵)では、「肥前中納言」と記されており(図6)、肥前中納言は、前田利家の子、前田利長を指すことから、加賀百万石を築いた加賀前田家の屋敷地であったことが推定できる。

現在、屋敷地推定地の中央には、明治天皇陵造営に際して再整備された、JR奈良線が通っており、一部削平されている。しかし現況の地図から等高線を拾い類推すると、推定地西側や大手筋に面する部分と推定地北東部では、おおよそ8～10mの比高があり、推定地内で平坦面が上段と下段の大きく2段に分かれることが明らかである(図7 等高線参照)。

推定前田屋敷跡地内³⁾では、これまで21件の調査が行われている(図7)。特に3件の発掘調査、3件の試掘調査、6件の詳細分布調査で成果が挙がっており(表1)、ここでは、調査地に隣接する主な調査事例を述べる。

平成元年(1989)に行われた調査(図7-2)では、礎石建物・掘立柱建物・柵・井戸・溝が検出されている。特に調査区の西側で確認された建物4は、東西7間以上、南北5間以上の礎石建物で、主屋と考えられおり、またこの主屋の東側には附属建物が増築されていることも確認されている。2時期の整地層が確認され、下層の整地層を豊臣期、上層を徳川期と想定している。出土遺物には金箔を施した軒瓦があり、鬼瓦や「加賀梅鉢」の文様が施された軒丸瓦などが出土したことから、この地が前田家の屋敷地であったことが示された事例である。また地山上面では、濠や土墨状の高まりを確認しており、『山州名跡志』巻十三に記載のある、伏見城築城前に御香宮の東に存在していた「水淵大和守」築造の小城との関連も指摘されている。

平成9年(1997)に行った試掘調査(図7-4)では、現地表土直下、GL-0.3～0.4mで造成土と考えられる無遺物層に至り、遺構は造成土の上面で検出されている。南北に長い敷地の北半分には湿地が想定され、東西方向の瓦と礫を組み合わせた暗渠排水が確認されている。柱穴や土坑、溝が敷地中央部で確認できるが、敷地南側の1/3では造成土の単位が認められるのみである。

平成23年(2011)に行った試掘調査(図7-5)では、現地表土、近世耕作土の下、GL-0.6～0.7mで明黄褐色～灰黄色シルトや極細砂の造成土と考えられる無遺物層に至る。遺構はいずれも造成土の上面で検出されている。南北に長い敷地の中で、南側で落ち込みを1基、中央部で幅0.5m、検出長5m以上の瓦を敷き詰めた南北溝を1条確認している。溝には掘形は認められず、造成時に埋め込んで形成されていることから、暗渠の可能性が指摘されている。

平成24年(2013)に行った試掘調査(図7-6)では現代盛土や近世以降の包含層の下、GL-1.1～1.6mで黄褐色砂泥や明褐色砂泥の造成土と考えられる無遺物層に至る。遺構はいずれも造成土の上面で確認できる。伏見城期の遺構としては、敷地南西部で南北方向の路面状の広がりを確認している。路面幅は残存で幅2.5m、検出長は11m以上にわたる。造成土直上に直径1～3cmの小礫を敷き、その上に地山と同様の土で表面を整地している。また表面整地後に置かれた約40cmの方形礎石が、路面舗装範囲の東端で確認されており、路面縁の束石、もしくは屋敷地内道路に設けら

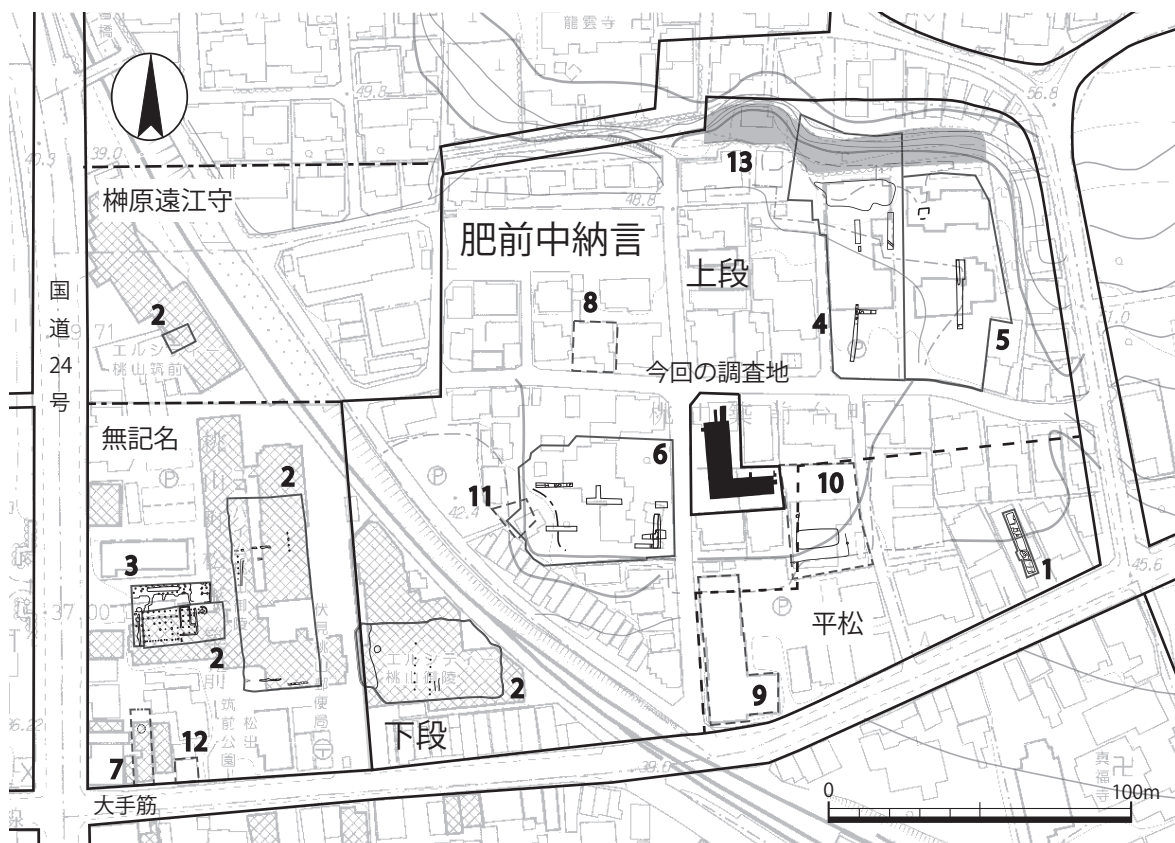


図7 周辺調査区配置図(1:2,500)

表1 調査一覧表

No.	調査区分	検出遺構	出土遺物	文献	備考
1	発掘	地山上面で伏見城期の溝、土坑を確認。南側溝のには2段以上の石垣の護岸を確認。	土師器・陶器・瓦(丸・平・軒丸・軒平・鬼瓦・金箔瓦)	「伏見城跡2」『昭和54年度京都市埋蔵文化財調査概要』	2012
2	発掘	伏見城期の整地土、鎌倉～戦国時代の整地土、地山上面の3面で遺構を検出。伏見城期の礎石建物、溝、柵列を確認。	土師器・瓦(丸・平・軒丸・加賀梅鉢の軒丸瓦・金箔瓦)	内田好昭ほか「伏見城跡」『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』	1994
3	発掘	伏見城期の整地層、中世の整地層、地山上面の3面で遺構を確認。伏見城期は溝1条、柵列3条を確認。室町時代の堀1条。	土師器・瓦(丸・平・軒丸・金箔瓦・鬼瓦)	前田義明「伏見城跡・御香宮廃寺」『平成9年度京都市埋蔵文化財調査概要』	1999
4	試掘	柱穴4、土坑3、溝1条など 敷地北側には湿地堆積が確認でき、池が想定される。	なし	京都市内遺跡試掘調査報告 平成9年度	1997 97F059
5	試掘	GL-0.6～1.0mで基盤層。基盤層上面で、溝、落ち込みなどを確認。	なし	京都市内遺跡試掘調査報告 平成23年度	2012 11F008
6	試掘	GL-0.8～1.4mで南北方向の路面状遺構(近代以降か?)を確認。	瓦片	京都市内遺跡試掘調査報告 平成25年度	2014 12F017
7	詳細分布	炭化物を含む土坑を確認。	土師器・瓦(軒丸・軒平・道具瓦・鬼瓦・加賀梅鉢の軒丸瓦・金箔瓦)	京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成5年度	1994 93FD251
8	詳細分布	GL-1.0mで江戸前期の包含層。-1.2mで桃山～江戸前期の柱穴10基。	土師器・瓦	京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成8年度	1997 96FD464
9	詳細分布	地表面直下すべて砂礫～シルトの無遺物層。	なし	京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成9年度	1998 88FD10
10	詳細分布	石垣・瓦溜りを確認。	瓦(丸・軒丸・軒平・金箔瓦)	京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成11年度	2000 98FD394
11	詳細分布	GL-1.3mで時期不明の包含層。	平瓦	京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成25年度	2014 13FD096
12	詳細分布	GL-0.7m時期不明の包含層。GL-1.1m明黄褐色砂礫～シルトの地山。	土師器	京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成26年度	2015 14FD184 (14F173)
13	現存	石垣・比高差3m以上の段差の南面に石垣が残存している。		絵図に石垣が図示されており、現状と一致する。	

※他、詳細分布調査9件あり

れた門の礎石の可能性が想定されている。南北の比高差は0.9mと北から南に傾斜する。時期決定できる遺物に恵まなかったが、層位などから伏見城廃絶以前の遺構と考えられている。この他、土坑や溝などが確認できたが、いずれも江戸時代後半以降に下る遺構であった。

このほかでは、調査地の南東隣接地で行った詳細分布調査(図7-10)の際には、金箔瓦を含む多量の瓦溜りを3基、石垣の一部、整地層が確認されている。石垣の面は東を向き、石の西側には

栗石が確認されている。遺物から時期差を示せるものではなかったようだが、石垣が廃棄され、石垣前の瓦溜りや上層に炭化物層のある瓦溜り（No.3）が形成され、その後、石垣の上面に黄褐色細砂やにぶい赤褐色砂泥、赤褐色泥砂の盛土を行い、その盛土斜面地に瓦が投棄された、という変遷が考えられている。また確認できた石垣が南北方向のものであることから、絵図（図6）にあるように前田屋敷跡と平松八右衛門屋敷跡との屋敷境を示す石垣である可能性が考えられている。

以上のように、周辺調査では伏見城期の整地層のほか、建物、柵、溝や土坑、石垣や瓦溜りなどが確認されているが、これら遺構は、推定前田屋敷跡の南西部にあたる。屋敷地内上段部分にあたる中心部が想定される部分では小規模な調査しか行われておらず、その様相は明らかになっていない。今回の調査は上段部分では初めての発掘調査となることから、屋敷中心部の様相を把握することを目的として調査を行った。

3. 遺 構

今回の調査では、近現代の攪乱や江戸時代中期～幕末の土坑、伏見城廃絶後の区画溝、伏見城期と考えられる建物跡や塀などの他、大規模な造成土を確認した。造成土に関しては、調査区西壁際及び南壁際西半（図9：断割2）を重機及び人力にて掘り下げ調査を行った。

（1）基本層序（図8）

基本層序は、近現代の盛土の下、調査区南側の一部のみに層厚0.1 m程の明褐灰色粘質土を挟み、概ねGL-0.4～0.5 mで、にぶい橙色粘質土や橙色粘質シルトなどの造成土に至る。造成土の堆積状況と地山確認のため、一部、計画建物の基礎掘削底であるGL-1.4 mまで断割りを行ったが、造成土中に収まり、地山を確認することはできなかった。なお遺構掘削の際に、部分的にGL-2.7 mまで掘り下げたが、地山を確認できず、造成土は2.3 m以上の層厚があると考えられる。遺構検出は、造成土上面で行った。造成土上面は、近現代の攪乱を受けており、本来の造成土上面の高さや堆積土の状況は確認できなかったが、検出した遺構面の標高は、調査区北側で47.3 m、南側で47.0 mであり、南北約30 mの間で比高0.3 m程の傾斜であることから、ほぼ平坦であるといえる。

（2）遺構の概要（表2）

今回の調査では、壺地業や布掘地業などの各地業のほか、土坑、溝などの遺構を確認した。遺構はいずれも造成土上面で検出し、重複関係から、伏見城期と伏見城廃絶後の少なくとも2時期を確認した。以下、時期別に報告する。

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
伏見城期	大型壺地業(7基), 小型壺地業(15基), 布掘地業(布掘地業90), 地業(地業122), 造成土	
伏見城廃絶後 (江戸時代)	SK56, SD 3	

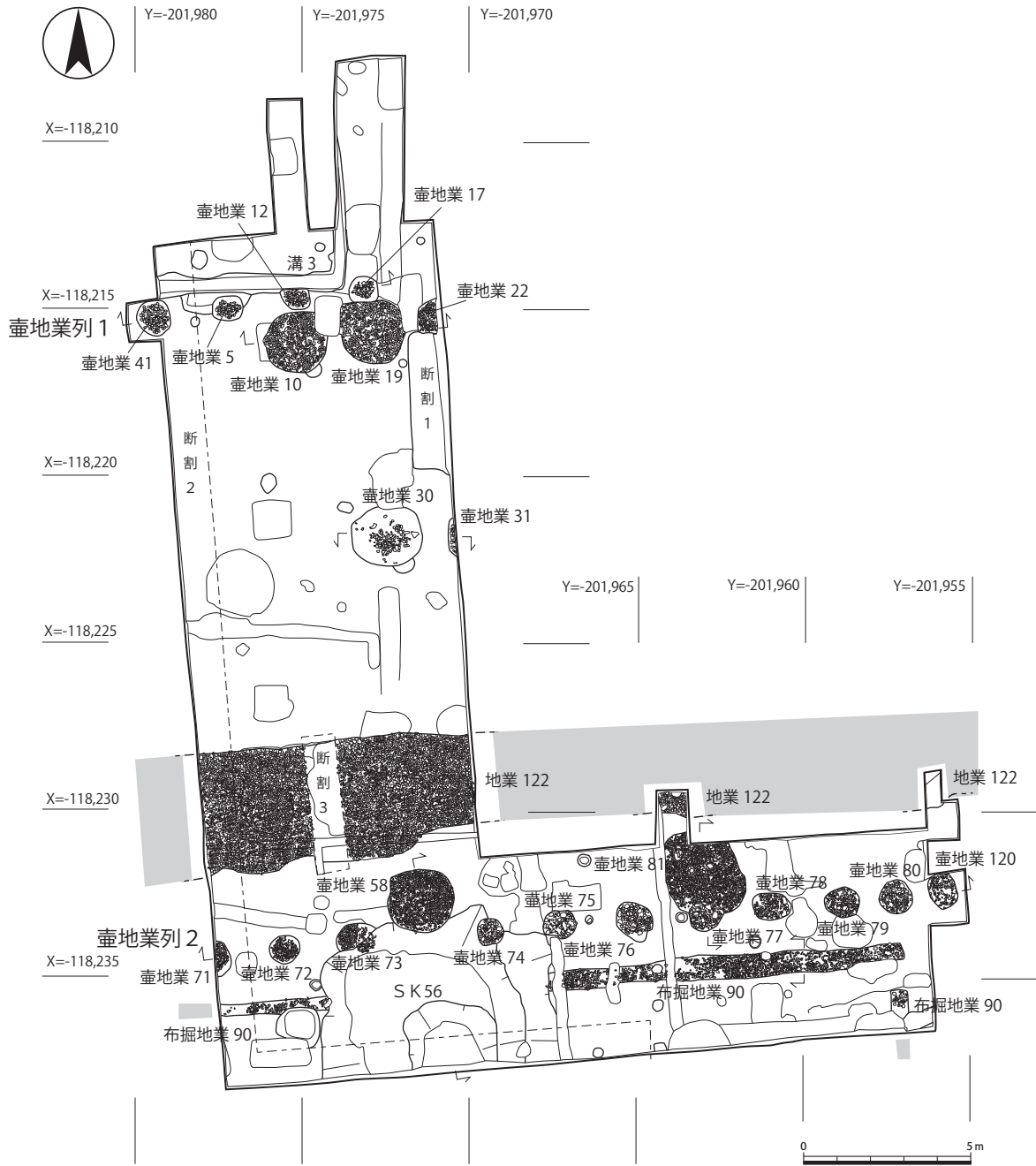


図9 遺構平面図 (1:200)

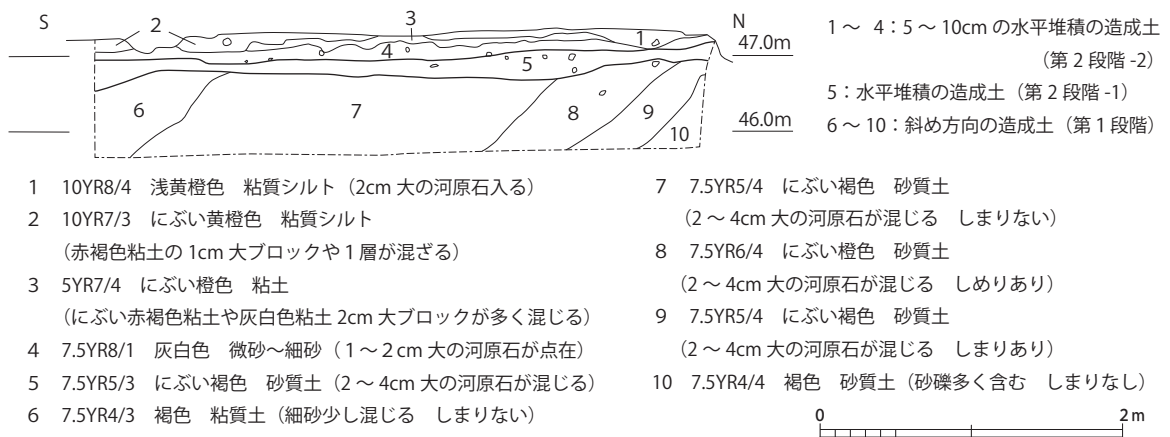


図10 調査区北東部断割1西壁断面図 (1:100)

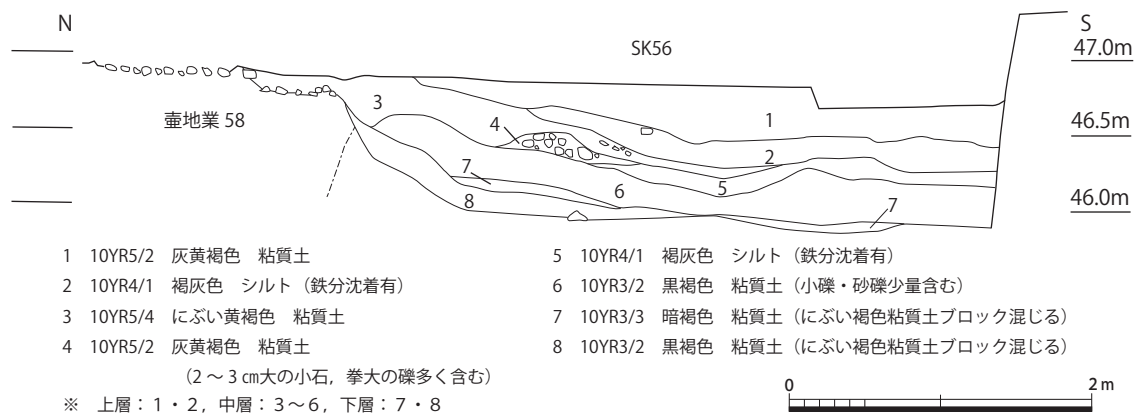


図11 SK56断面図 (1:50)

伏見城廃絶後

造成土上面にて、土坑1基 (SK56)、溝1条 (SD03) を確認した。

SK56 調査区南壁中央部にある東西7m、南北5m以上の方形土坑である。壺地業58、73、74と一部重複する。埋土は3層に区分でき、中層には拳大の礫が多く含まれる (図11)。特に中層からは土師器皿、古伊万里や唐津焼の碗の他、信楽焼播鉢、軒丸瓦などの江戸時代前半の遺物、上層からは軒丸瓦片などの江戸時代後期の遺物が出土している。出土した花紋の軒丸瓦は、いずれもやや小ぶり、堀などに葺かれていたものの可能性がある。

SD3 調査区の北西隅にある幅0.5~0.7m、深さ0.2mのL字に屈曲する溝である。検出長は東西5.5m、南北4.7mである。壺地業12と一部重複して形成される。埋土はオリーブ褐色砂質土で、江戸時代後半の瓦片が出土した。また溝で囲まれた調査区北西部は、周辺と比べ0.05~0.1mほど高い。溝の北西部では同時期の柱穴などは確認できなかったが、区画溝である可能性が高く、この高まり部分に建物が想定できる。

伏見城期

造成土上面で、大型壺地業7基、小型壺地業15基、布掘地業1か所、地業1条を確認した。

大型壺地業 (図12・13) 大型の壺地業 (壺地業10・19・22・30・31・58・81) の規模は、いずれも直径1.7~1.8mの円形である。深さは、深いもので2.3m以上である。底が確認できたものは7基中2基で、壺地業58は深さ1.95m、壺地業81は深さ2.05mである。埋土は2~3cmや拳大の礫と粘質土が約10~15cmの厚みで交互に積まれている。遺構の周壁には埋土の礫が食い込んだ痕跡があり、上から押し固めた際にできたものと考えられる。壺地業の残存状況は調査区の南側にいくほど残りが良く、壺地業30・31・58・81は礫層上面に粘質シルトの堆積が認められる。また壺地業58・81は根石や礎石抜き取り痕跡も確認できる。地業、根石ともに河原石が用いられているが、根石で囲まれた範囲内には河原石の他、一部、拳大の花崗岩片が散在していたことから、礎石には花崗岩が使用されていた可能性が高い。礎石抜き取り痕跡及び根石の配置から、礎石は0.8m以上の直径であったと推定できる。これら壺地業は、壺地業10・19・22、壺地業30・31、壺地業58・81と東西南北の同一ライン上に位置する。しかしそれぞれの地業間は、壺地業10・19・22、壺地業30・31の東西間が2.4m、壺地業58・81の東西間が8.5m。壺地業19と壺

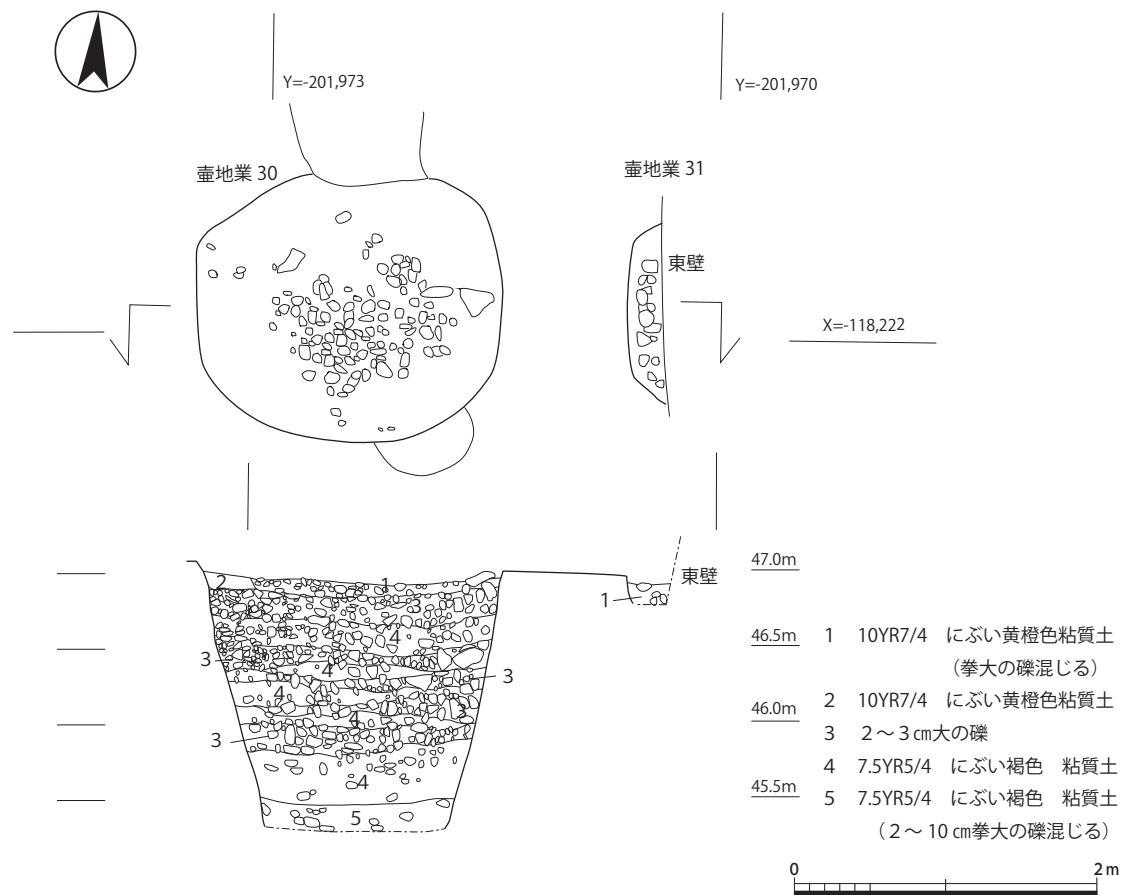
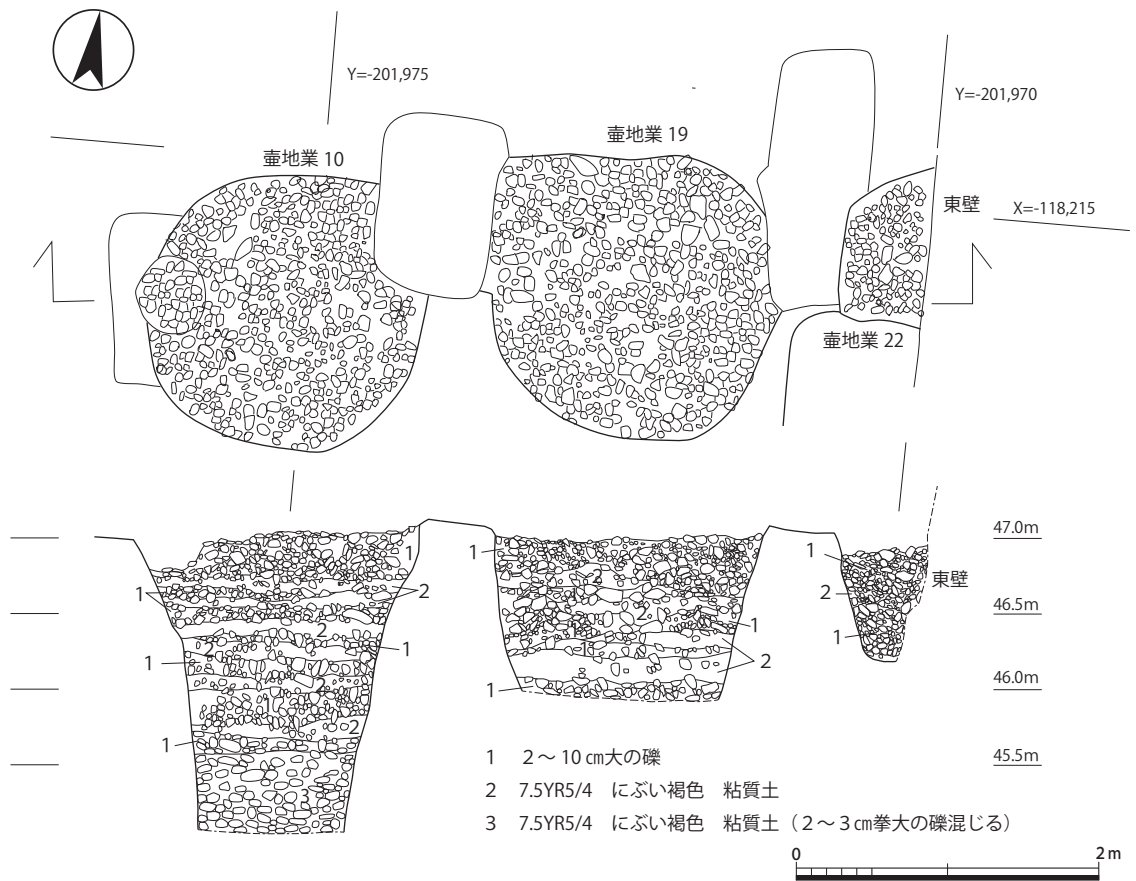


図12 大型壺地業10・19・30・31平・断面図 (1:50)

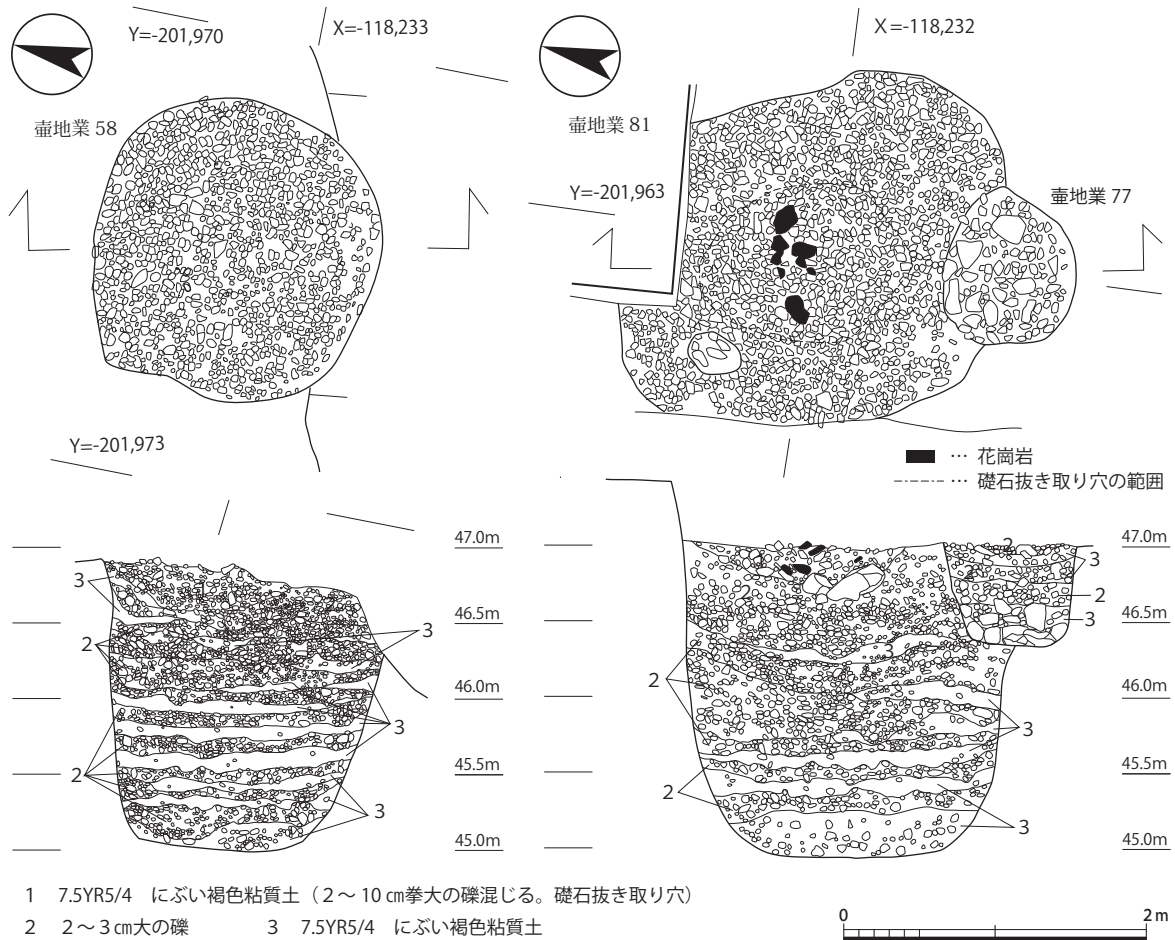


図13 大型壺地業58・81平・断面図 (1:50)

地業30の南北間は6.0m, 壺地業30と壺地業58の南北間は11.0mと一貫性は認められない。これら壺地業は主に調査区の北東側で展開していることから一部拡張したが、今回の調査区範囲内で、壺地業を確認することはできなかった。現状では、同様の構造と規模であること、柱筋が通っていることから一連のものと捉え、大型の礎石立の構造物が存在していた可能性を指摘しておく。構造物の主軸は、西に2°振る。

小型壺地業 (図14) 小型の壺地業 (壺地業5・12・17・41, 71~80・120) の規模は、いずれも直径0.8~0.9mの円形で、深さ0.4~0.7mである。いずれも東西方向に並び、調査区北側で壺地業5・12・17・41 (壺地業列1), 調査区南側で壺地業71~80・120 (壺地業列2) が確認できる。これらは、壺地業81を切る壺地業77, 壺地業19を切る壺地業17のように、重複して形成されていることから、大型の壺地業よりも新しい時期の遺構と考えられる。

壺地業列1の地業間は2.1m。埋土は2~3cmや拳大の礫と粘質土が約5~10cmの厚みで交互に積まれている。遺構の周壁には埋土の礫が押し付けられた痕跡があることから、上から押し固めた際にできたものと考えられる。地業列の主軸は西に6°振る。

壺地業列2の地業間は基本2.1mであるが、東端にあたる壺地業80と120の地業間は1.5m, その西側の壺地業79と80の地業間は1.8mとやや乱れる。埋土は、壺地業71・72・75~77のように、10~15cm大の石を周壁に並べた後、その内部に2~3cmや拳大の礫と粘質土が約5~10cm

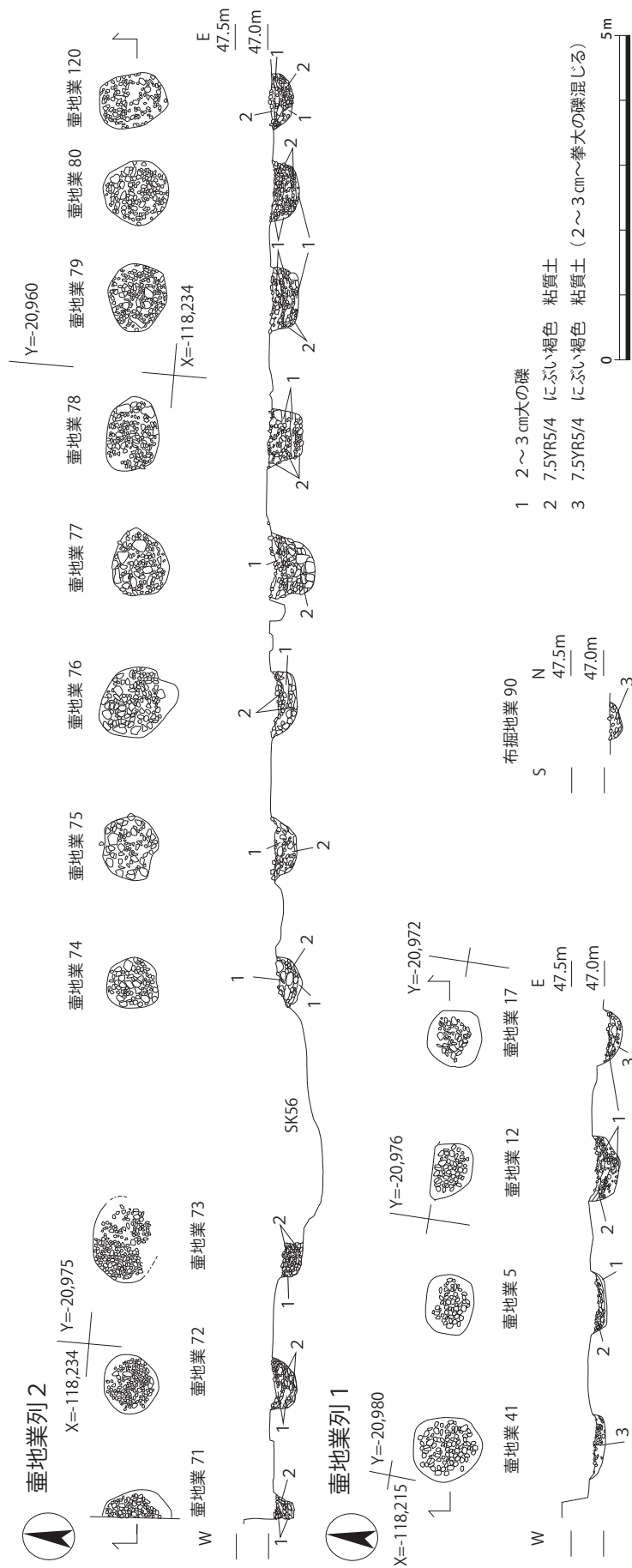


図14 小型壺地業列1・2平・断面図，布掘地業90断面図（1：100）

の厚みで交互に積み上げていくものと、壺地業74・79・120のように、2～3cm大の礫と粘質土以外に10～15cm大の石が数個混じりながら積み上げていくもの、壺地業73・78・80のように2～3cmや拳大の礫と粘質土が約5～10cmの厚みで交互に積まれる壺地業列1と同じ様相を示すものの、3つ工法の壺地業が確認できた。しかし、工法の違いからでは、壺地業に配列のまとまりは見いだせないことから、同一構造物に様々な工法が用いられていたものとする。地業列の主軸は西に6°振る。

壺地業列1・2ともに調査区外に延び、柵や塀のような遮蔽物が想定される。しかし、ともに礎石立柱塀としたとき、礎石立柱の控柱痕跡が確認できない。また控柱を斜めに突っ張るものを想定しても、地業列の正面を判別することが難しい。また壺地業列2は後述する布掘地業90との関連性もあり、どのような構造物であったのかの想定は難しい。

布掘地業 調査区南側で検出した東西方向及び南北方向の布掘地業(90)である(図14)。検出長は、東西20.5m、南北0.8m。また東端の角は接せず、0.7mの間隔が空く。幅は0.4～0.6m、深さは0.05～0.2m、断面は半月状で溝の形状をしている。埋土は2～3cm大の礫と粘質土が混じりあって堆積し、遺構の周壁には礫が食い込んだ痕跡があることから、上から押し固めた際にできたものと

考えられる。この遺構で囲まれた内側には柱穴などは確認できなかった。同様の事例では、淀城跡で確認されている米蔵の布基礎⁴⁾に用いられ、土塀造りの倉庫や蔵などの施設の一部である可能性が高い。主軸は西に6°振り、壺地業列1・2と同じ主軸である。

地業 調査区中央部で検出した東西方向の地業（122）である。幅は4m、深さは1.4m以上、断面は逆台形をしている。検出長は22mである。埋土は、2～3cmや拳大の礫と粘土ブロック混じり砂質土が交互に積み、最上面は粘土ブロック混じり粘質土で覆われる（図8）。ただし、調査区内で確認している他の地業とは積み方が異なる。20～30cmの厚さで2～3cmや拳大の礫が堆積している。部分的に粘質土が認められるものの、均一に堆積しておらず、遺構の肩部分に集中し、中央部ではわずかに粘質土が確認できる程度である。また、礫層の隙間が広く、詰め具合は他の地業に比べ緩い。上面で、遺構検出を試みたが確認できなかった。埋土の堆積状況から、何らかの地業であると考えられるが、性格は明らかではない。

検出時、上面は後世の攪乱により一部削平を受けており、上面を覆っていたであろう粘質土は一部でしか確認できなかったが、断面観察から、礫の堆積する中央部はやや盛り上がりしており、遺構中央部は灰褐色小礫（図8-4層）が露出していた。また埋土に含まれる礫の表面には薄い土の幕があったことから、水が流れていたことが推測できる。現地作業中に雨が降った際には、この溝が排水溝の代わりとなり、遺構面が水没するようなことは一度もなかったことから、排水溝の役割も果たしていた可能性も考えられる。

造成土（図8・10）

調査区内全域で厚さ2.3m以上の造成土を確認した。調査区西壁際及び南壁際西半を断ち割り、土層観察を行った。造成土は、約45度の傾斜で北東から南西に堆積している（図8）。赤褐色粘質土や褐色粘質土、黄褐色粘質土、拳大の河原石を含む砂礫をそれぞれ交互に斜め方向に積み（第1段階：図8・10）、その後、この斜めの造成土の上面を約0.1～0.2mの厚さで小礫を含む赤褐色粘質土で覆い（第2段階-1：図8・10）、その上面に細砂や粘土を約0.05～0.1mの厚さで水平に積み重ねる（第2段階-2：図8・10）。3～4層分を確認した。斜めに積み上げていく中で、土の選別を行い、粘質土の間に砂礫を設けるなどの工法には、造成土中の水はけを良くし、土滑りを防ぐ効果もあったと考えられる。しかし、今回の掘削深度は地山に達しておらず、造成土の基底部分や裾部の様相を確認することはできなかった。

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
伏見城築城以前	土師器, 須恵器, 埴輪		土師器1点, 須恵器1点, 埴輪1点		
伏見城期	土師器, 焼締陶器, 陶磁器, 輸入陶磁器, 瓦		焼締陶器2点, 輸入陶磁器1点, 瓦5点		
伏見城廃絶後(江戸時代)	土師器, 国産陶器, 国産陶磁器, 輸入陶磁器, 瓦, 銭		土師器14点, 焼締陶器3点, 施釉陶器3点, 陶磁器3点, 瓦13点		
伏見城廃絶後(明治以降)	国産陶磁器, 瓦, 鉄製品				
合計		14箱	47点(1箱)	1箱	12箱

※コンテナ箱数の合計は、整理後にAランクの遺物を抽出し、詰め直しを行った為出土時より4箱少なくなっている。

4. 遺物

出土した遺物は整理箱にして18箱である(表3)。出土遺物の大半がSK56から出土した土器や瓦などであり、瓦が大半を占める。伏見城期と考えられる遺構からの出土遺物は少なく、小片が多い。稀に室町時代以前の土器片も認められるが、遺構に伴うものではなく出土量もわずかである。

SK56出土遺物(図15-1~21・27, 図16-30~36, 図版32-44~47)

SK56からは整理箱16箱分の遺物が出土した。土師器皿, 焼締陶器, 陶磁器, 瓦, 鉄製品, 銭などがあるが, 土器は少なく, 大半が瓦で, 軒丸瓦, 丸瓦, 平瓦, 道具瓦片などがある。特に道具瓦は破片が多く, 部位の特定が困難であったため, 図示できず, 写真にて報告する。埋土は3層(上・中・下層)に区分でき, 層位ごとに報告する。

上層(図15-1~11・図16-30~32・図版32-44) 1~8は土師器皿で, いずれも白色系である。1・2は皿Sbで, ともに口径8.0cm, 器高1.8cm。口縁端部はやや内傾し, 丸く収める。3~7は口径9.6~10.4cm, 器高1.7~1.9cm。いずれも内面に圏線が施される。底部は丸みを帯びたもの(3・4)と平底(5~7)のものがある。京都XⅢ期に相当すると考えられる。8は口径8.9cm, 器高1.6cm。ロクロ成形の後, 底部にはケズリが施される。胎土はやや橙色を帯び, 胎土は精良である。3・8の口縁部には煤が付着しており, 灯明皿として使用されたと考えられる。9は信楽焼播鉢である。7条/単位の摺目が施される。18世紀代のものか。10・11は肥前陶磁器碗である。10はくらわんか碗で, 外面には梅花文, 高台見込みには「大明年製」の形骸化した文様が施される。11の外面にはこんにやく印判により花文が施される。30・31は軒丸瓦である。30は8葉2重の菊文で, 周縁の一部のみ確認できる。単葉の中央部は少し凹む。31は16葉2重の菊文で, 周縁はない。単葉の中央部は少し凹む。32は棧瓦である。側面に「与」の刻印が施される。44の外面は斜めに切り込みをいれることで, 波状の形状が作りだされる。側面に楕円で囲まれた中には文字もしくは記号を組み合わせたとと思われる刻印(図版4-44-3)が施される。

中層(図15-12~18・図16-33・34) 12~15は土師器皿で, この4枚は重なり合って出土した。12~14は皿Sbで, 口径8.3cm, 器高1.7cm。15は口径8.4cm, 器高1.6cm。8同様に, ロクロ成形の後, 底部にはケズリが施される。胎土はやや橙色を帯び, 胎土は精良である。13・14は別個体であるが, 器体がもろく離別できなかった。16は信楽焼広口壺の口縁部である。17世紀代のものか。17は信楽焼播鉢である。口縁部はナデにより上方につまみ出され, 端部外面にナデが施され, 断面三角形となる。6条/単位の摺目が施される。18は肥前磁器碗の青磁染付である。口縁端部内面には格子文, 見込みには手書きの五弁花, 高台見込みには「大明成化年製」の形骸化した文様が施される。33・34は軒丸瓦である。復元であるが, 33は12.7cm, 34は13.4cmの径である。ともに8葉2重の菊文で, 周縁をもつ。花卉の中央部は少し凹む。34は瓦当の接合痕跡が明瞭に残る(図版4-34-2)。周縁と花文部分には赤漆が施され, わずかではあるが, 金箔も確認できる。

下層(図15-19~21・図16-35~37・図版32-45~47) 19は土師器皿で, 胎土は白色

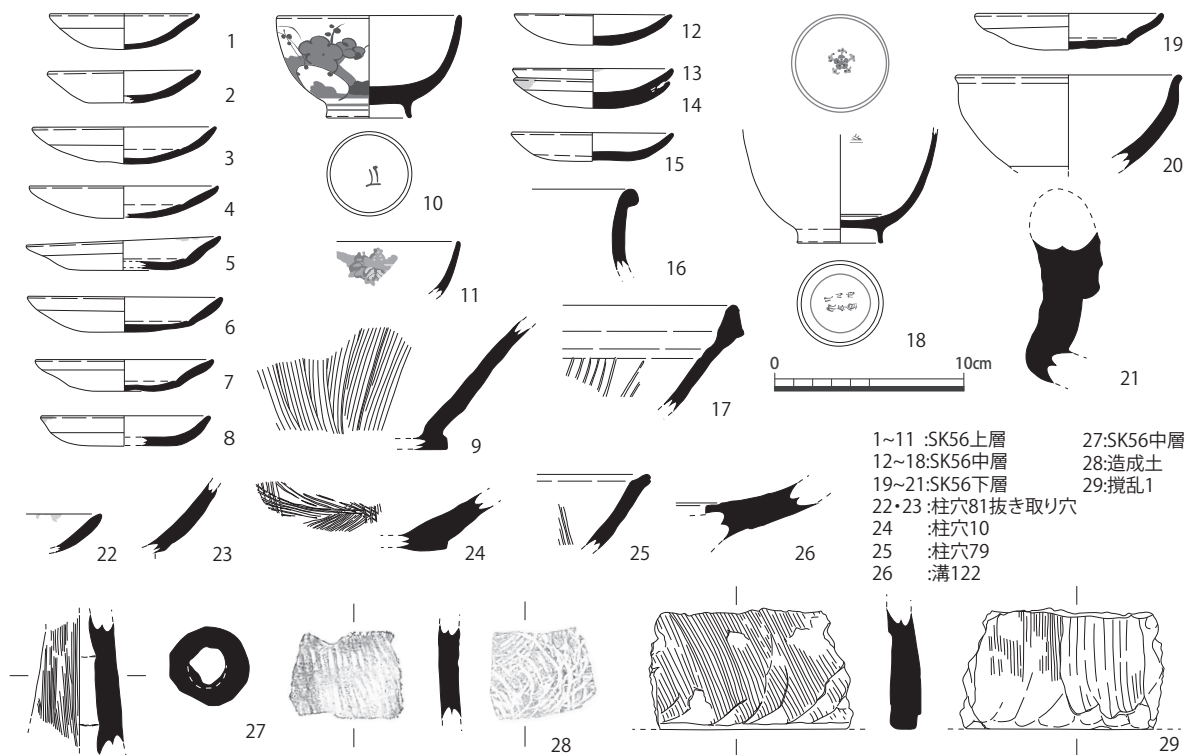


図15 出土遺物実測図・土器類（1：4）

系である。口径10.0cm，器高1.9cm，内面には圈線が施される。京都XⅢ期に相当すると考えられる。20は瀬戸・美濃焼天目碗である。口径12.0cm，残存高が10.0cmで，口縁端部は短く外反する。口径に対し器高が低く，浅い印象を受ける。21は備前焼大甕の口縁部である。破面の角が取れ，摩滅している。ともに16世紀末～17世紀初頭のものか。34～36は軒丸瓦である。35・36は16葉2重の菊文で，周縁はない。花卉の中央部は少し凹む。復元であるが，36は13.2cmの径である。瓦当の接合痕跡が明瞭に残る。37は巴文である。周縁や珠文などの一つ一つの部位がやや大きく，復元径では17.6cmと考えられることから，鏡瓦の可能性はある。

45～47は用途不明瓦である。45・46ともに，円筒状の部材の接合部分と思われる。円筒状の内径は接合部で約4cm，破損端部で約3.5cmと接合部から徐々に細くなる。接合部付近の一边は残存しており，円筒状の部材は何かしらの端にあたと想定できる。内外面ともに炭化が残っており，焼成時，内側が袋状になっていたものではないことがわかる。45の残存値は，横が約12cm，縦が約7cm，厚みは1.3～1.5cm，46の残存値は，横が約9cm，縦が約6cm，厚みは1.3～1.5cmである。47の残存値は横が約10cm，縦が約12cm，斜辺は約12cm，厚みは1.3～1.8cmである。外面の一部に漆痕跡が認められることから，金箔が貼られていた可能性がある。

このようにSK56は，概ね18世紀半ばの時期を示す。下層で認められる16世紀末～17世紀初頭の時期を示す（20・21）遺物は，周辺遺構からの混入である可能性が高い。

壺地業81礎石抜き取り（図15－22・23・図16－38）22は土師器皿で，胎土は白色系である。残存状況は良くないが，口縁端部に面は認められず，丸く仕上げる。京都XⅠ期中～新に相当する可能性がある。23は瀬戸・美濃焼天目碗の体部である。体部片のみではあるが，露胎部分に

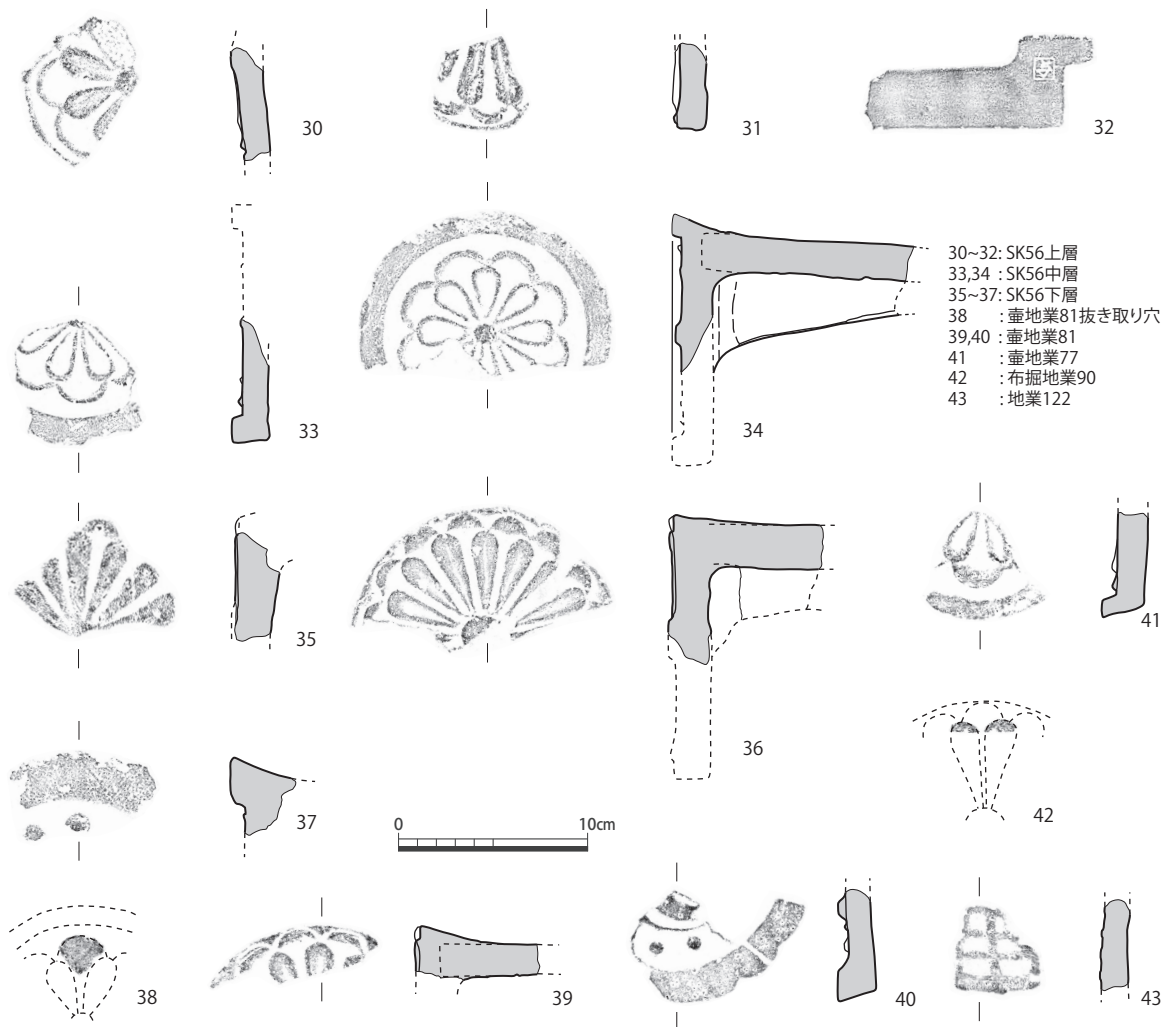


図16 出土遺物実測図・瓦類（1：4）

は鉄塗が塗られていることから、17世紀前半の可能性がある。38は軒丸瓦である。8葉2重の菊文で、周縁をもつものの一部と考えられる。概ね17世紀初頭～前半の様相を示す。

壺地業81（図16-39・40） 39・40は軒丸瓦である。39は16葉2重の菊文で、周縁はない。花卉の中央部は少し凹む。瓦当の接合痕跡が明瞭に残る。40は巴文である。細い巴文の尾部と連珠文の一部が確認できる。

壺地業10（図15-24） 24は備前焼播鉢の底部である。9条/単位の摺目が施される。16世紀後半のものと考えられる。

壺地業77（図16-41） 41は軒丸瓦である。8葉2重の菊文で、周縁の一部のみ確認できる。花卉の中央部は少し凹む。

壺地業79（図15-25） 25は信楽焼播鉢である。器面の摩滅が激しい。3条以上/単位の摺目が施される。15世紀後半のものと考えられる。

布掘地業90（図16-42） 42は軒丸瓦である。16葉2重の菊文である。

地業122（図15-26・図16-43） 26は青磁盤である。見込み中央部にかけて一段低くなる形状であり、内面には胎土目痕が残る。43は平瓦である。凸面にはタタキが施される。

これらに混じって、明らかに平安時代以前に遡る可能性がある遺物片（図15-27～29）も数点、認められる。遺構の時期を示すものではないが、伏見城期以前の様相を推測する手がかりになる可能性があるため報告する。

27はSK56中層より出土した高杯の脚部である。粘土紐巻上げ痕が確認できる。断面は円形を意識しているが、ナデの後にハケが施され、その際に面が形成されている。白色土器と同様の胎土である。28は造成土断割り2より出土した須恵器の甕である。内面には同心円状圧痕、外面にはタタキが施される。29は攪乱1より出土した埴輪片である。内外面ともにナデの後、縦ハケが施される。胎土には砂粒が多く含まれる。焼成は堅緻である。

5. まとめ

今回の調査では、大規模造成土、建物や塀が想定できる地業などの遺構を確認できたことが大きな成果である。遺構はいずれも造成土上面で検出し、伏見城廃絶後の区画溝や土坑、この他、重複関係から少なくとも2時期の建物や塀を想定できる地業に区分できる。しかし、伏見城廃絶後の遺構以外では出土遺物が少なく、今回の調査成果のみで、断言できる事柄は少ない。このため周辺調査成果と合わせて、現時点での見解と今後の課題をまとめておきたい。

（1）造成土について

今回の調査では、北東から南西方向の厚さ2.3m以上の造成土を調査区全域で確認し、大規模な造成土を確認した。同様に今回の調査地の西側調査（図7-6・11）では、1m以上と推定できる造成土が確認され、上面で遺構が形成されている。しかし調査地南隣接地で行われている調査（図7-9）ではGL-0.5m、対象地から北東に60m地点で行われている調査（図7-4・5）ではGL-0.6～1mで地山が確認されている。また調査地から南東に100m、伊達街道と大手筋の交差点の北西にあたる調査（図7-1）では現代盛土が厚くGL-1.6mで地山が確認されている。このように近接した調査地でありながら、造成の様子が大きく異なることが指摘できる（図17）。また調査地の北300mに位置する1993年度に行われた桃山高校構内の発掘調査⁵⁾では、敷地西半分には最大2mの大規模な盛土造成が行われていることと、上下に遺構面が存在していることが明らかになっており、この他、同敷地内での1979年・1982年の調査⁶⁾や1990年に行われた京都府教育総合センター地内の調査⁷⁾などがある（図17）。これらより地山を確認した地点と造成土を確認した地点を整理し、大正11年測図の都市計画地図の等高線とを重ね合わせると、概ね伊達街道に近接する東側で地山、中央部では2.3mを超える造成土が確認でき、大手筋に面する南側及びJR奈良線を挟んだ西側では、地山もしくは0.7m以下の造成土が確認される傾向がある。このことから推定前田屋敷地内で確認できる上段の平場が、大規模造成により形成されていると考えられる。このような伏見城下の大規模造成については、府立桃山高校構内や周辺の調査成果をもとにすでに検討が行われており⁸⁾、現在の伊達街道から西75m地点で検出された整地土の東肩から、府立桃山高校と京都府教育総合センターの敷地境までの範囲が想定されている。敷地境の比高10mあまりある崖面はその名残とされている。また、整地土内に金箔瓦が含まれていることや、焼土や整地土を挟んで上層

と下層での建物の主軸が変化すること、この他、下層の遺構面を切り上層の遺構面には覆われる断層が確認され、その形成要因が、慶長大地震によるものであると断定されている。したがって、下層は指月伏見城期、上層を木幡山伏見城期に伴う遺構が形成されたと考えられている。

ここで検討された府立桃山高校構内は絵図(図18)によると、毛利安芸守(上屋敷)や蜂須賀阿波守の屋敷地が構えられ、屋敷地西側には、南北方向の石垣や堀が描かれている。構内調査で確認された大規模造成の西端が府立桃山高校と京都府教育総合センターの敷地境までであると想定されていることから、絵図に書かれている石垣(石垣①)

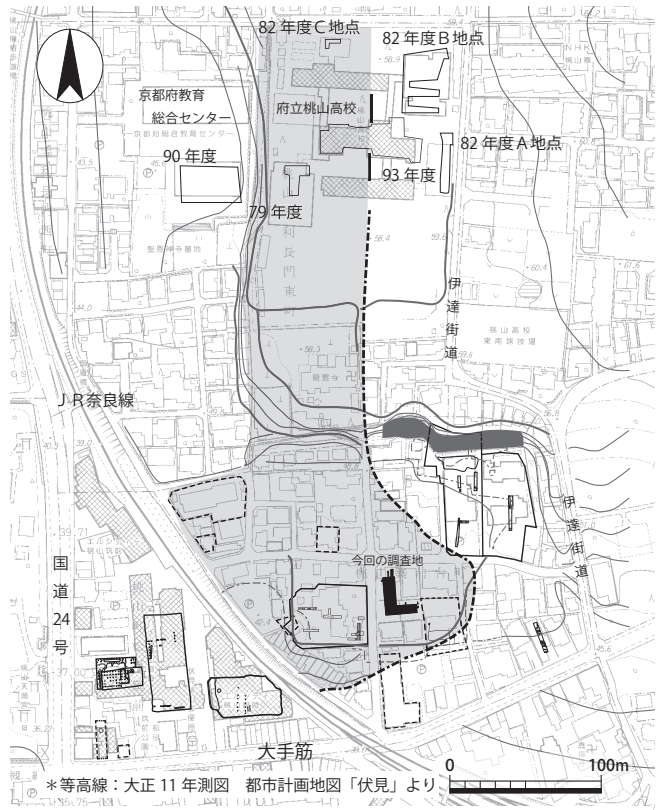


図17 周辺調査及び大規模造成土想定範囲(1:5,000)

①は屋敷地造成の西端に伴うものと考えられる。この他、絵図にある蜂須賀阿波守の屋敷地と肥前中納言屋敷地の間には高さ8~10m石垣(石垣②)があり、この石垣は蜂須賀阿波守の屋敷地造土の南端と考えられる。また肥前中納言屋敷地北西にも石垣(石垣③)が描かれている。このような石垣構築を伴う大規模造成が同一敷地の中で徐々に行われたとは考えにくく、一体的に整備されたと考えられる。

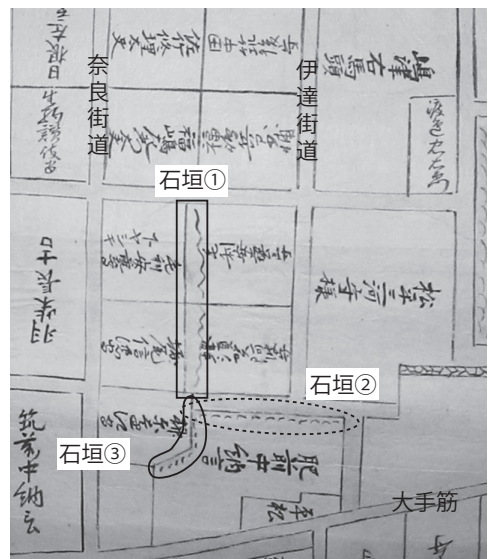


図18「伏見御城郭並武家屋敷取之図」
府立桃山高校付近

これらのことを踏まえると、今回確認した大規模造成土は、府立桃山高校構内の調査や周辺の調査で確認された2mもの造成土と一連のものである可能性があり、木幡山伏見城が築城時の整備に伴う可能性が考えられる⁹⁾。

(2) 壺地業について

今回の調査で確認した地業は、上記(1)で検討した結果、木幡山伏見城期と想定した造成土の上面で検出したことから、木幡山伏見城期以降に形成されたと推定する。今回、確認した地業は、溝状の布地業と壺地業と呼ばれるものの2種類ある。特に壺地業は礎石を据えるために行われる行為であるため、その配置から建物を想定することができる。今回、壺地業77と81では重複関係が認められることから、構造物には二時期の変遷が考えられる。

これまで伏見城下及び同時期の遺跡の調査で確認されている事例としては、推定伊達家上屋敷

地内で行われた発掘調査で総柱建物が2棟分確認されている¹⁰⁾。確認された壺地業は、規模から2種類に区分でき、一辺0.4～0.8m、深さ0.25～0.4mのもの(建物A)が18基、一辺0.9～1.3m、深さ0.6～0.7mのもの(建物B)が4基、確認されている。A・Bの柱間は約2mで、京間(6尺5寸)を意識していると考えられている。また、伏見城内郭内の推定長東大蔵丸(伏見桃山城運動公園内野球場隣接地)で行われた詳細分布調査¹¹⁾では、3か所(No.1～3)の調査が行われており、No.1地点では、直径1.0m、深さ0.8mの壺地業を3基、柱間は1.9mである。No.2地点では、直径0.6m、深さ0.4mの壺地業を1基が確認されている。伏見城以外の同時期の構築物では、方広寺跡で大仏殿基壇、南門及び南回廊に伴う壺地業が確認されている¹²⁾。大仏殿基壇に伴う壺地業は、直径5.2～6mの円形や一辺4mの隅丸方形のものが確認され、深さは1.8mが推定されている。また礎石抜き取り痕も確認されている。柱間は8mである。南門では直径1.8mの壺地業を4基、柱間は中央が6m、両脇が3.8m前後に復元されている。この門に取り付く南回廊では直径1m、深さ0.3mの壺地業を7基、柱間は3.75mである。

今回の調査で確認した壺地業は、直径1.7～1.8m、深さ2.3m以上の大型壺地業と直径0.8～0.9m、深さ0.4～0.7mの小型壺地業であり、遺構配置から、大型壺地業は建物、小型壺地業は塀や築地などの遮蔽構築物を想定している。規模を比較すると、大型壺地業は、推定長東大蔵丸の事例以上であり、大仏殿南門とほぼ同規模で、現在、伏見城下で確認されている壺地業の中では、最大級の規模となる。また、小型壺地業は伊達上屋敷地内建物Bや大仏殿南回廊と同規模である。このように壺地業の規模のみでも、大規模な建物や塀を想定することができる。検出した場所が、推定前田屋敷地内の上段部であり、主要な建物があったと考えられ、また大手筋から伏見城へ登城する際には左正面に位置することからも大規模な建物を想定できる。しかし大型壺地業の柱間は東西2.4m、8.5m、南北6.0m、11.0mと同一建物を構成するには、規則性を見出しにくい。想定通り大規模な建物であるとするならば、今回の調査ではその一部のみを確認したということになり、特に大型壺地業については一連の建物とすべきか別の建物とすべきか、現時点では結論は出ない。また、現時点では大型壺地業と小型壺地業を異なる構造物として検討しているが、大仏殿基壇に伴う壺地業¹²⁾では同規模の足場穴が重複して成立しており、同一構造物である可能性も残る。

今まで推定前田家屋敷地では多くの調査が行われ、建物や石垣、梅鉢文の瓦など前田家を示す遺物が確認されている。しかし上段部の調査は小規模なものが多く、今回の調査が初めての面的な調査となった。今回これまでの調査成果とともに、木幡山伏見城築城時の大規模造成の様相を示すことができ、豊臣秀吉、徳川家康ともが重用した前田家の屋敷地内中枢部の一端を垣間見ることができたことは一つの成果である。しかし、その様相を解明するまでには至らず、建物復元については、課題を残す結果となった。今後も、新資料の蓄積と過去の調査成果の検討を重ね、様相を明らかにしてゆく必要があると考える。(奥井 智子)

註

1) 「104 丹波橋」『京都市遺跡地図 平成26年度版』京都市、2016。

- 『史料 京都の歴史』第16巻 伏見区 京都市, 1991。
- 2) 「伏見城跡」『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所, 1994。
「伏見城跡」『京都市中世城館跡調査報告書第3冊 一山城編1一』京都府教育委員会, 2015。
 - 3) 図7は平成16年発行京都市都市計画局発行の1/2,500地図に図6を重ね合わせたものである。図6では国道24号線と大手筋との交差点の北東の敷地は無記名であるが、表1-No.2・3調査成果より、この地も前田家の敷地であったと考えられるため、絵図に明記されている推定範囲よりもやや広い範囲で調査件数を集成した。
 - 4) 「長岡京跡・淀城跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-3』財団法人京都市埋蔵文化財研究所, 2006。
 - 5) 岩松保ほか「伏見城跡平成5年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第59冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター, 1994。
 - 6) 村尾政人「伏見城跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-1)』京都府教育委員会, 1980。
長谷川達「伏見城跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第8冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター, 1983。
 - 7) 柴暁彦「伏見城跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概要』第44冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター, 1991。
 - 8) 時期決定要素の少ない伏見城下で認められる造成土の契機について、検討が行われている。ここでは調査成果をもとに、桃山高校の周辺調査で確認されている造成土について示されている。森島康雄「伏見城下町の成立と過程」『国家形成期の考古学—大阪大学考古学研究室10周年記念論集—』大阪大学考古学研究室, 1999。
同氏「伏見城下町の考古学的調査」『ヒストリア』第222号 大阪歴史学会, 2010。
 - 9) 加賀藩史によると文禄三年(1594)9月には「伏見邸」の記載があり、同年11月17日には「伏見に於いて藩邸を築造せんとす。鶴見彦介に興じる。南之方御堺西東30間、北南4間、家を可作候。……」とあることから、文禄三年には大規模な屋敷を作り始めている。また文禄四年(1595)8月24日には秀次の遺館である伏見第を秀吉から貰い受けており、約1年の間に少なくとも2つの屋敷及び屋敷地を所有していたが、その所在については明らかになっていない。慶長元年(1596)の伏見大地震時の記載では、「大納言様御屋敷と肥前様と上下にて候。」とある。この記載を、上屋敷、下屋敷ととらえるか地形として上段、下段するかは判別できない。仮に地形としてとらえるなら、慶長大地震の時点で『御城郭並武家屋敷取之図』のとおり当該地に前田家の屋敷があったと考えられ、指月城築城の城下整備がここまで及んでいたという可能性もでてくる。しかし今回の調査では、造成土下の様相が明白でないものの、5-(1)の検討結果及び、府立桃山高校などの調査成果と本調査及び表1-No.2・3調査との状況に共通点が多いことから、現時点では、今回の造成土を木幡山伏見城期に伴うものであるという見解を示しておく。
 - 10) 「伏見城跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2012-7 財団法人京都市埋蔵文化財研究所, 2013。
 - 11) 「IV-6 伏見城跡(14 F 111)」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成26年度』京都市文化市民局, 2015。
 - 12) 「法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2009-8 財団法人京都市埋蔵文化財研究所, 2010。「方広寺跡・六波羅政庁跡・法住寺殿跡」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成25年度』京都市文化市民局, 2014。

参考文献

- 星野猷二・三木善則『器瓦録想 其の二 伏見城』伏見城研究会刊, 2006。
日本史研究会編『豊臣秀吉と京都 一聚楽第・御土居と伏見城一』文理閣, 2001。

X 長岡京跡第583次・淀城跡

1. 調査経過

本調査は、京都市伏見区淀木津町地内ほかで実施した長岡京跡・淀城跡の範囲確認調査である。平成27年7月16日に上陸した台風11号の影響で桂川の河川敷の土が流出し、石列や木樋などが露出した。これらが「淀城御府内図」の内高嶋に描かれている施設と類似することから、淀城跡に関連する遺構と判断し、緊急に範囲確認調査を実施することになった。

土の流出範囲は5000㎡以上であったが、遺構露出の顕著な上流域を中心に調査区を設定した(図1)。調査に先立ち国土交通省近畿地方整備局淀川河川事務所(以下、淀川河川事務所)と協議を重ね、遺構は保護層を設けたうえで保存されることになった。そのため本調査の目的は露出遺構の記録である。ただし、露出した遺構の性格及び成立時期を検討するために、一部断割り調査を実施した。

調査は平成27年8月24日から9月24日まで実施し、調査面積は約2470㎡である。調査の結果、露出した遺構が淀城内高嶋に築かれた池、暗渠、石垣などであることを確認した。なお、調査地は12月中に京都市文化財保護課の立会のもと、淀川河川事務所によって埋め戻された。

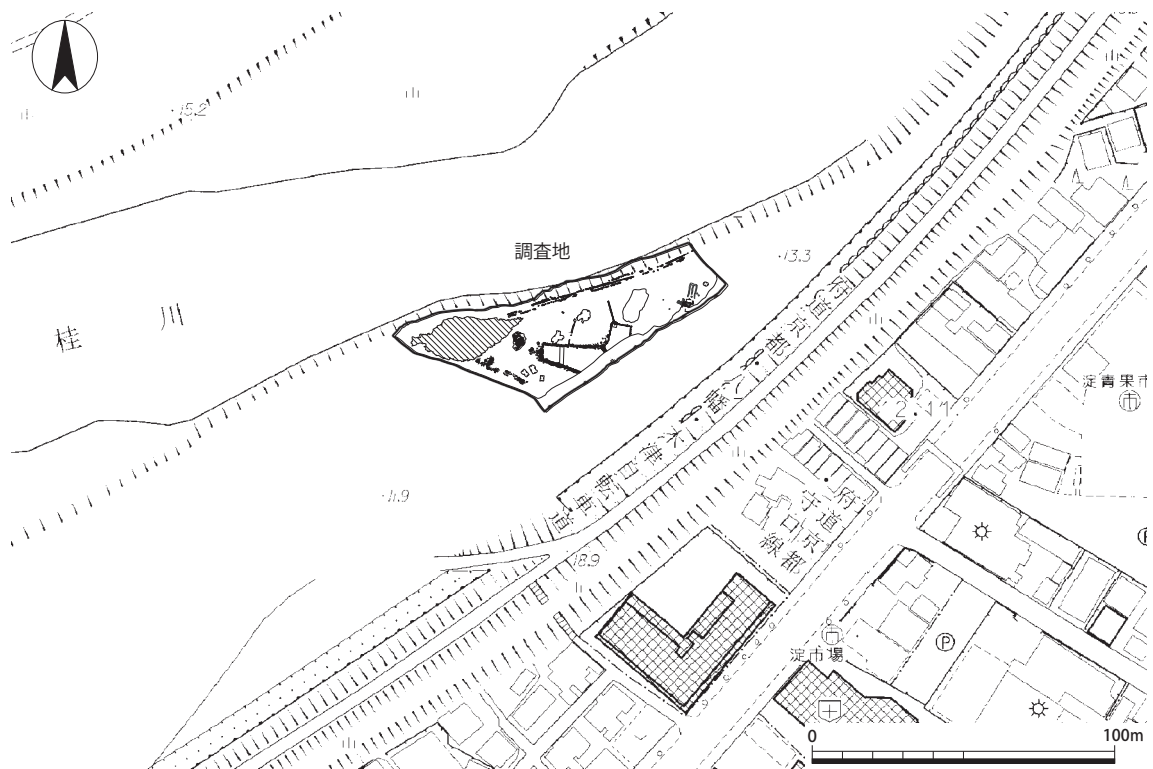


図1 調査区配置図(1:2,500)



図2 調査前全景（南西から）



図3 埋戻し後全景（南西から）

2. 遺 跡

（1）地理的環境と歴史的環境

現在の淀は、宇治川と桂川に挟まれた地域で、度重なる洪水や河川改修などによって形成された自然堤防地帯が大部分を占める。しかし、かつての淀は北東から桂川、南東から木津川、東から宇治川が合流し、巨椋池の出口に形成された中州とその周辺地域にあった。この地域は京都盆地の西の出入口にあたり、標高が10m前後と低く西方の大阪湾・西国方面などと盆地内を繋ぐ水陸交通の要衝であった。文献史料での初見は、延暦23年（804）7月24日、桓武天皇が与等（淀）津に行幸するとあり平安京の外港として登場する（『日本後紀』延暦23年7月24日条）。大同5年（810）の平城太上天皇の変（藤原薬子の变）では、宇治橋や山崎橋とともに与渡市津にも頓兵が置かれ（『日本紀略』大同5年9月11日条）、有事に際しては都を護る前線にもなった。平安時代後期から中世には「淀魚市」で魚介類・塩・木材などが取引されたとあり、引き続き交通の要衝として栄えていたことが分かる（『東寺百合文書』『北野社家日記』など）。『実隆公記』永正元年（1504）9月に摂津国守護代薬師寺元一が細川政元に対して謀反を起こし城を占拠したとあり、この時の城が淀城（古淀城）と考えられている¹⁾。城は室町時代前半に納所に置かれた山城守護代の守護所を引き継いだものと見られ、永禄10年（1559）8月に管領・細川氏綱、続いて岩代友通が入城する（『細川両家記』）。天正16年（1588）からは豊臣秀吉によって茶々（淀殿）の産所として大改修されるが、同年9月には淀殿・鶴松ともに大阪城へ移り、文禄3年（1594）の伏見城の築城計画に伴って古淀城は破却された。その後、元和9年（1623）7月に伏見城の廃城が決定すると、同年8月に京都守護の城として松平定綱に淀藩の居城の築城が命じられる。先の古淀城が宇治川の北岸に築かれたのに対し、新たな淀城は桂川・宇治川・木津川の三川が合流する中州に築城された。寛永3年（1626）6月に徳川秀忠、8月には秀忠・家光が入城しており、この頃までには主要施設が完成していたと考えられる。この時の淀城は、本丸の南西隅に天守、北側に城主の御殿がある二ノ丸を設けこれを内堀が囲んでいた。さらにその外側に西ノ丸と三ノ丸が展開し、南には内高嶋、東には東曲輪・魚市などが配された。京都と大坂を結ぶ大坂街道は、東曲輪の東の城下を通る。寛永10年（1633）に十万石で入封した永井尚政が、木津川を付け替え、旧河道に新た

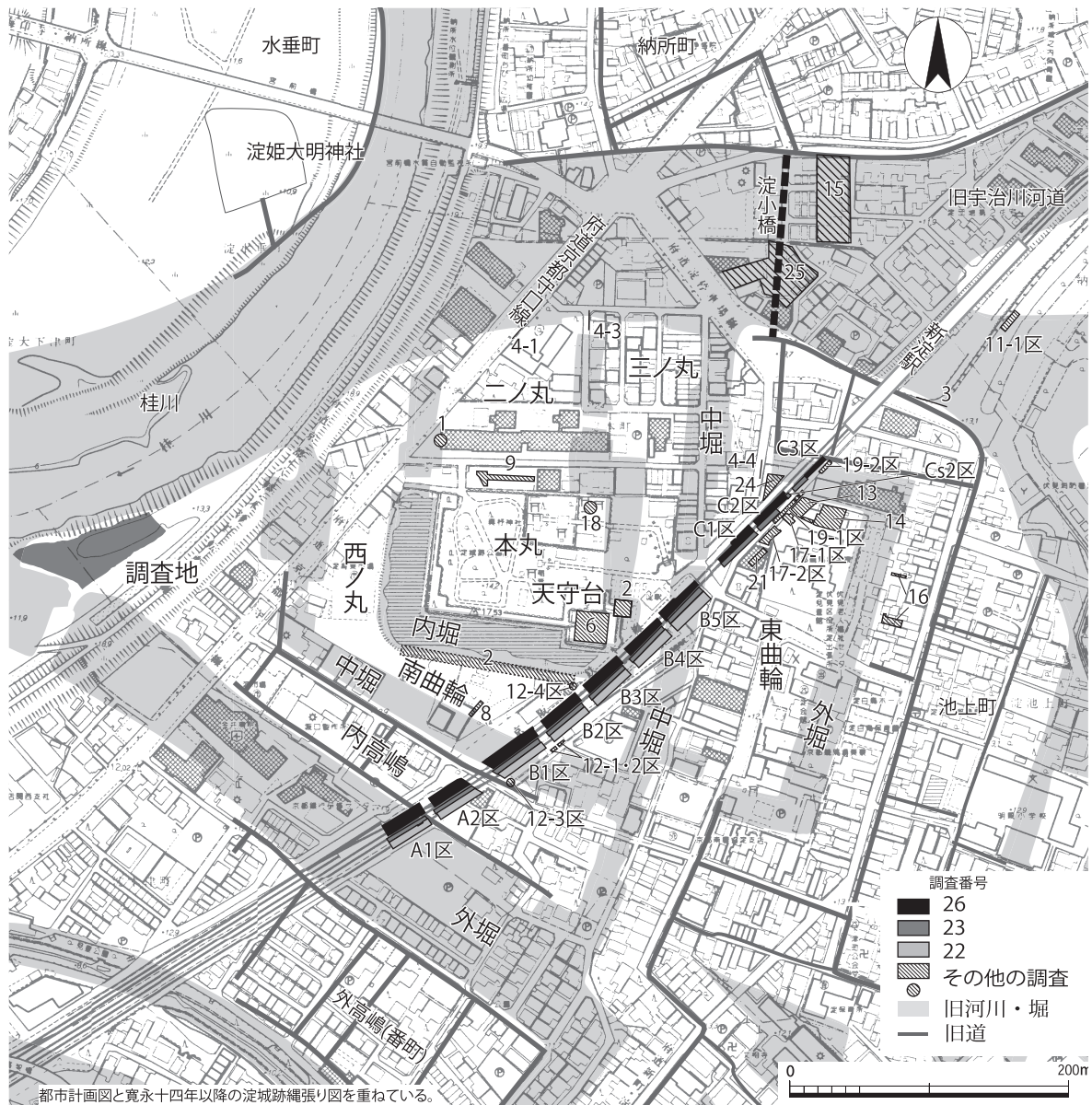


図4 調査地と周辺調査位置図 (1 : 5,000)

な家臣団の屋敷地を設けた。その後、宝暦6年(1755)の落雷によって天守を始め城内の大半の建物が焼失したが、その後再建されることはなかった。慶応4年(1868)1月の鳥羽伏見の戦いの際には、幕府軍に焼き払われ城下町も戦火に見舞われた。明治4年(1872)の廃藩に伴い淀県となり、淀城も廃城となる。その後、現在の河川への付け替え工事や、河川修築・改良工事が行われ、周囲の景観が大きく変えられた。明治7年(1874)の淀裁判所建設計画に伴って、淀城の石垣解体工事が実施され、天守本丸の石垣を残し、大半の石材が取り除かれた。現在では、淀城跡公園として本丸・天守台の石垣と内堀が残されているのみである。

(2) 周辺の調査 (図4, 表1)

これまでに淀城跡で行われた主な調査成果は表1にまとめた。主な遺構は淀城期(江戸時代)と淀城期以前に分けることができる。

表1 周辺調査一覧

調査番号	調査地点	所在地	調査期間	主な成果	文献番号
1	二ノ丸西側内堀	淀本町	1976.12	二ノ丸西側の内堀東辺の石垣検出。	6
2	本丸天守台、内堀南辺石垣	淀城跡公園	1977.8～9, 1978.3～5	天守台4面石垣立面図作成。天守台南西隅を試掘、石蔵の存在を確認。北東角を試掘犬走りの状況を確認。内堀南辺の石垣を検出。	1
3	城北北端部	淀池上町地内	1984.6～	北面する石垣を検出、旧宇治川の護岸石垣か？	6
4	二ノ丸北端部	淀本町ほか	1984.8～	人頭大の集石を検出、旧宇治川の護岸石垣か？東西方向の石垣検出。	6
5	本丸屋敷南西隅櫓台	淀城跡公園	1986.8～10	石垣改修工事に伴って立会調査。	1
6	本丸天守台、西・南・天守台石垣	淀城跡公園	1987.7.30～11.15	天守台：石蔵（地下室）の存在明らかになり、柱礎石などを検出。全面が著しく焼けている（宝暦6年の落雷）。石垣調査：全面の石材計測・図化と刻印・墨書などの有無の確認。	2～4
7	本丸天守台	淀城跡公園	1989.9～1990.3	天守台の四周石垣の積替え改修工事が実地された。	5
8	内堀・内高嶋	淀本町174-62, 148-1	1990.10.1	内堀および、北面する内高嶋南辺の石垣。	6
9	本丸北側	淀本町173-10	1996.2.7～9	本丸と二ノ丸の境界となる逆「L」字状の石垣を検出。	7
10	城外北西部	葭島渡場町32	1998.3.3～4.21	5箇所調査区。GL-2mまで現代盛土、以下湿地状堆積。	8
11	城外北西部	納所町（京都競馬場北西外周道路）	1998.8.16～9.3	3箇所調査区。GL-2mまで現代盛土、以下1区では時期不明遺構面、2・3区では流路・湿地状堆積。	9
12	南曲輪、内高嶋、内堀、中堀	淀池上町（京阪電鉄構内）	2003.11.7, 11.10・13	1区：土坑、2区：内高嶋相当部で東西方向石垣、3区：中堀南辺の石垣、4区：内堀南辺の石垣裏込め	10
13	東曲輪	淀池上町地内	2003.11.7～2004.1.19	（14の西側。）淀城期：布掘基礎建物の西延長部検出。	11
14	東曲輪	淀池上町	2003.11.13～2004.1.21	淀城期：布掘基礎の長大な建物（土蔵）を検出。絵図などにみられる「米蔵」に相当すると考えられる。	12
15	旧宇治川河道	納所町560-1ほか	2003.12.25	3箇所調査区。GL-2mまで現代盛土、以下流路・湿地状堆積。	13
16	東曲輪外堀東	淀池上町38ほか	2004.10.14	2箇所調査。淀城期：1区で外堀に直交する東西方向の石垣、外堀に連結する小規模な堀か。	14
17	東曲輪	淀池上町地内	2004.11.30～2005.3.2	2箇所調査区。淀城期：布掘基礎建物の南西角部、その西の石垣、東曲輪の路面状整地。淀城以前：町屋関連建物・カマド・井戸を確認。	12
18	本丸北東部	淀本町167 與杼神社境内	2006.4.26	境内北辺・東辺の石垣が淀城期のものと確認。	15
19	東曲輪	淀池上町地内	2006.5.8～6.13	2箇所調査区。淀城期：東曲輪の区画に関する石垣（石列）、井戸などを確認。	16
20	本丸北西部城内	淀木津町～納所下野（京阪電鉄構内）	2006.5.9	淀城期：焼土層・溝・整地層など確認。⇒発掘調査を指導。	15
21	東曲輪	淀池上町地内	2006.6.14～7.11	淀城以前：大坂街道の路面・石列、町屋関連の柱穴などを確認。	17
22	本丸北西部城内	淀池上町地内（京阪電鉄構内）	2006.8.21～2007.2.28	淀城期：米蔵建物の布基礎や路面を確認。堀跡と石垣を確認。	18
23	本丸北西部城内	淀池上町地内（京阪電鉄構内）	2010.2.15～8.31	大坂街道の路面を確認。堀の石垣と礎石建物跡。	19
24	東曲輪	淀池上町地内	2011.2.22～3.31	淀城期：東曲輪における石垣（角櫓）門礎石（京口門）、中堀。淀城以前：大坂街道およびこれに伴う境界石列、面する建物礎石列などを確認。	20
25	旧宇治川河道	淀本町215-2	2011.4.6	3箇所調査区。GL-1.2mま以下流路・湿地状堆積。	21
26	本丸北西部城内	淀木津町・下津町地内（京阪電鉄構内）	2011.9.22～12.7	淀城期：内高嶋外堀、礎石列。南曲輪建物跡、石垣、堀、東曲輪石垣、東曲輪階段状石列を確認。淀城以前：大坂街道路面、地業、溝などを確認。	22

関連文献一覧表

- 1 星野猷二・三木義則『器瓦録想 其の三 淀城』伏見城研究会，2007。
- 2 星野猷二・藤井重夫『淀城跡調査概要 I (淀城跡・天守台調査概報)』京都市建設局公園管理課・淀城跡調査団(伏見城研究会)，1988。
- 3 江谷寛「発掘から見た淀城天守閣」『淀の歴史と文化』淀観光協会，1998。
- 4 藤井重夫「石垣に残る刻印」『淀の歴史と文化』淀観光協会，1998。
- 5 中村石材工業株式会社『淀城跡公園石垣改修工事報告書』京都市建設局公園緑地部，1990。
- 6 久世康博「淀城跡(T B 29)」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』京都市文化観光局，1991。
- 7 馬瀬智光「淀城跡 No.21」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成8年度』京都市文化市民局，1997。
- 8 吉崎伸「長岡京左京九条四坊」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所，2000。
- 9 上村和直「長岡京左京九条四坊」『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所，2002。
- 10 馬瀬智光「長岡京跡・淀城跡 No.17」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成15年度』京都市文化市民局，2004。
- 11 内田好昭「長岡京跡・淀城跡(2次・3次調査)」『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報，2006-3(財)京都市埋蔵文化財研究所，2006。
- 12 内田好昭『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003-13，(財)京都市埋蔵文化財研究所，2004。
- 13 「試掘調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成15年度』京都市文化市民局，2004。
- 14 馬瀬智光「長岡京跡・淀城跡 No.102」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成16年度』京都市文化市民局，2005。
- 15 「試掘調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成18年度』京都市文化市民局，2007
- 16 尾藤德行「長岡京跡・淀城跡(4次調査)」『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2006-3 (財)京都市埋蔵文化財研究所，2006。
- 17 尾藤德行「長岡京跡・淀城跡(5次調査)」『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2006-23 (財)京都市埋蔵文化財研究所，2007。
- 18 尾藤德行・丸川義弘・能芝勉「淀城跡(6次調査)」『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2006-23 (財)京都市埋蔵文化財研究所，2007。
- 19 尾藤德行・長戸満男・南出俊彦『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2010-7 (財)京都市埋蔵文化財研究所，2010。
- 20 尾藤德行『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2010-17 (財)京都市埋蔵文化財研究所，2011。
- 21 「試掘調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成23年度』京都市文化市民局，2013。
- 22 高橋潔『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2011-7 (財)京都市埋蔵文化財研究所，2012。

淀城期(江戸時代) 1977・1978年に淀城天守台の石垣測量調査が実施され、この測量成果を基に、石材・刻印の詳細調査が行われた(調査2)。また、同年に天守台の発掘調査も行われ、地下室の存在が明らかとなり(調査2)、1987年に実施された調査6では、宝暦6年(1756)の火災の痕跡を確認している。淀城内では東曲輪の様相が、京阪本線淀駅舎移転や線路の高架化工事に伴う断続的な発掘調査によって明らかになりつつある。東曲輪の北端には米蔵(土蔵)があり、それをとり囲む石垣・溝・路面があった(調査13・14)。米蔵の基礎は、幅8m・長さ40mで栗石

が詰め込まれていた。また、調査24で角櫓の一部と考えられる石垣や、これに取り付く門の礎石なども検出している。南曲輪においても土蔵の基礎と礎石、石垣を確認している（調査22・23）。土蔵は米蔵と同じ基礎構造で、梁間2間（7.88m）、桁行6間（23.6m）の建物跡と想定する。また、淀城の築城にあたって脆弱な自然堤防を拡張していることが明らかとなった。

淀城築城以前 調査17及び調査18・19・26で大坂街道と見られる路面と、路面に直交する地割、柱穴や礎石などの町屋跡を確認している。短時間で何度も整地がなされており、洪水被害を受けていたことが分かる。

3. 遺構・遺物

(1) 基本層序（図5）

基本層序は上から第1層：現代盛土及び洪水層，第2層：洪水層・土壌化層（1～7層），第3層：洪水層（8～11層），第4層：明黄褐色泥砂（13層），第5層：a黄色粗砂（14層），第6層：a灰白色微砂～粗砂・灰色粗砂（15・16層），第6層b：オリーブ色粗砂・黄色粗砂～細砂（17・18層）である²⁾。

第1層はビニールやプラスチック片などを含んだ現代盛土及び洪水層，第2層は現代遺物が混入しない洪水層である。第2層は洪水と土壌化を繰り返し，少なくとも2～3回の洪水が認められる。このような厚い洪水層が堆積するのは，桂川沿いに築かれた堤防が土砂の流出を防ぎ，堤防付近に土砂が堆積するようになったためである。したがって，河川敷のひな壇状の地形は堤防築造以後に形成されることが分かる。なお，土壌化層には土地利用の痕跡は認められない。第3層の洪水層は，第4層の遺構面を著しく削平しており，幕末から明治時代に起きた洪水の堆積層の可能性がある。そこで，第2層と区別しておく。第4層は明黄褐色を主体とした整地層で，上述の通り大部分が洪水によって削られているが，火災処理土坑を埋めるように堆積している³⁾。第5層は，調査区の大部分で露出していた整地層で本調査における遺構成立面と考えられる。主体は微砂から砂礫で上層にのみ泥砂が堆積する。淀城築城後の整地層の可能性が高い。第6層も第5層と同様に遺構面と考えられる。砂質を主体とした整地層で，調査区南東壁や攪乱の壁面の一部で観察することが出来る。層序の関係から，築城当初の整地の可能性が最も高い。調査区の多くは標高11.0m前後であり，第5・6層の整地土の上層は削平されている。

(2) 江戸時代の遺構（図6）

池跡（図7～10） 調査区中央で検出した池跡である。調査区外へと展開する。標高10.95～11.0mで検出した。検出面で東西約31m以上，南北7m以上，平面形は「L」を呈す。部分的な調査ではあるが，最も深いところで深さ1.2mとなる。池の縁は石組みで，内側に面を持つように

表2 遺構概要表

時代	遺構	備考
江戸時代	石組み枱，池跡，木樋1・2，木製枱，石垣，瓦組遺構，集石遺構1～3	

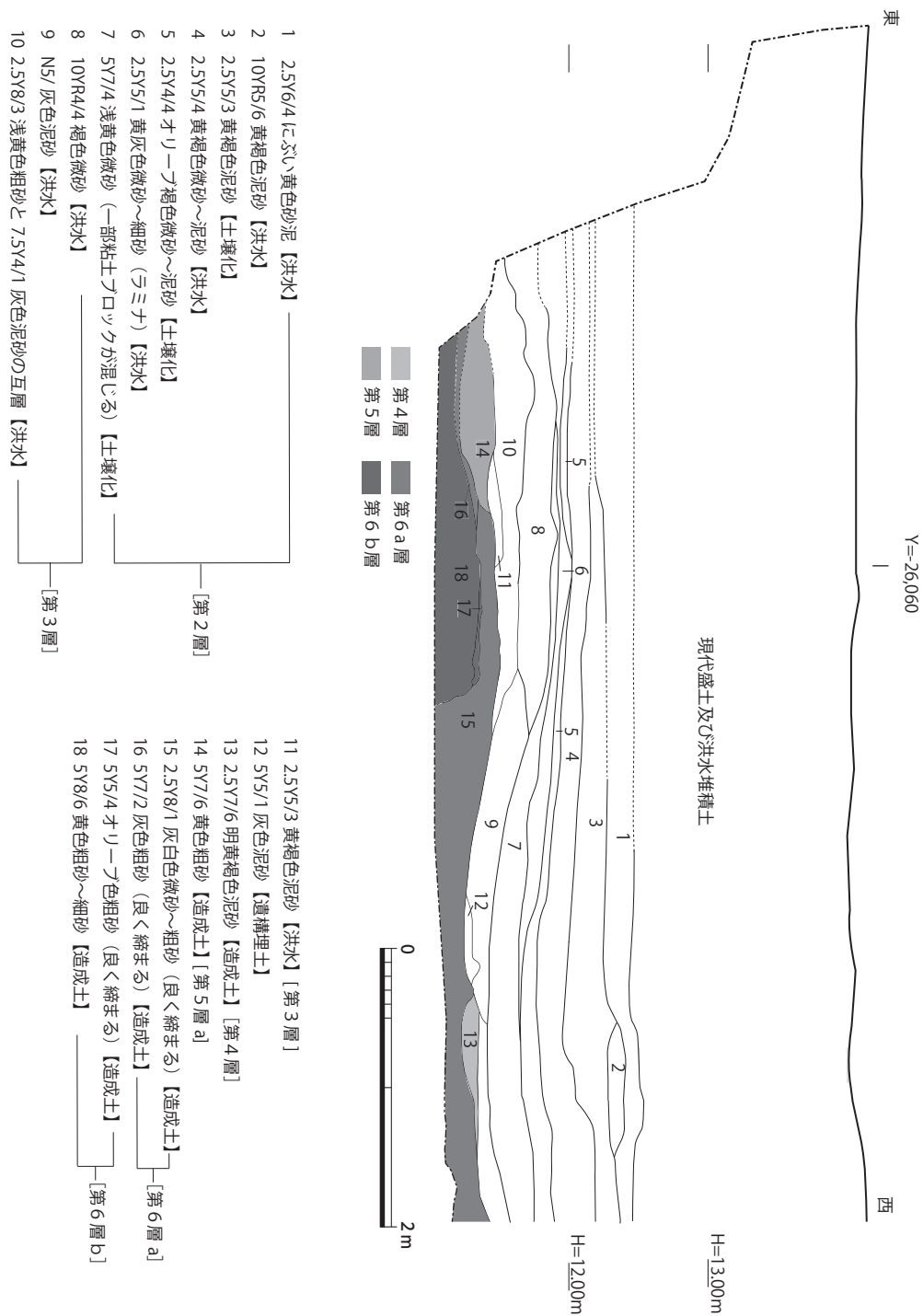


図5 調査区南壁断面図（1：50）

人頭大以上の石を並べる。裏込めには拳大の石を使用する。石組みは4～5段で、いわゆる野面積みである。断割り1北面石垣の底の検出標高が10mと他の石垣に比べて高い(図9)。また、断割り1南北石垣(図9)は他の石垣に比べてやや隙間が認められる。断割り2では、石垣の検出面に対し東へ39°振る石垣を検出した(図10)。埋土は大きく4層に大別することが出来る。詳細は後述するが埋土の分析を行った。上層(1～5層)は砂質の強い泥砂～砂泥土で、一部にラミナが認められる。層厚は中央が厚いのに対し、石垣に向かうほど薄くなる(いわゆるレンズ状堆積)。中

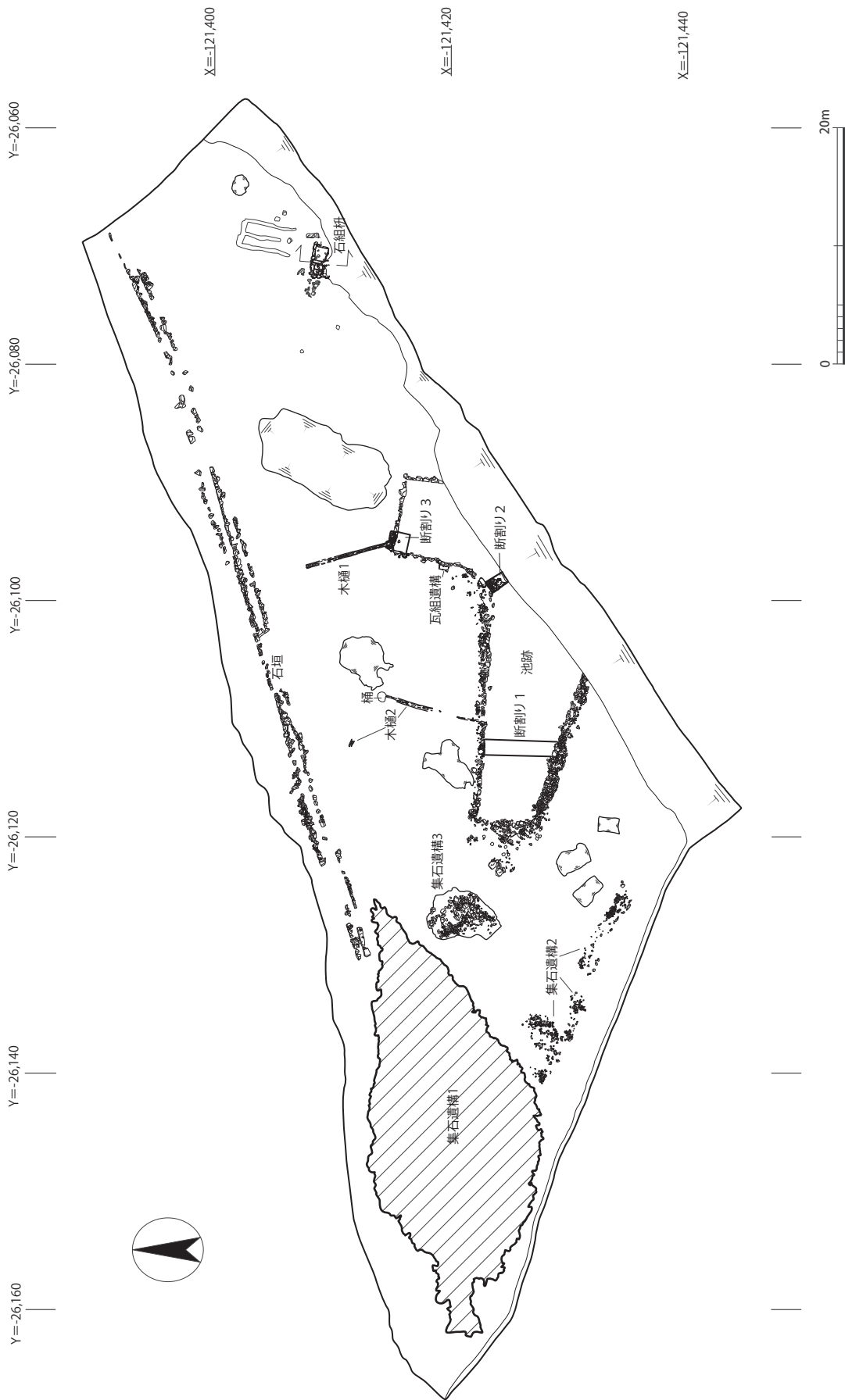
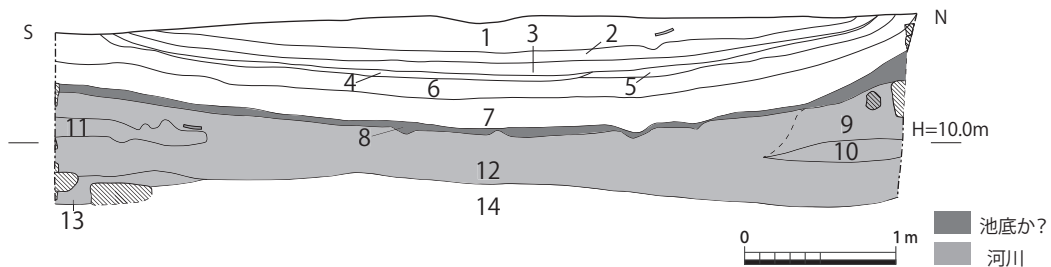


図6 遺構平面図 (1 : 500)



図7 池跡・木樋1・2平面図(1:200)



- | | | | |
|---|---------------------------|----|-----------------------------------|
| 1 | 5Y5/1 灰色泥砂(よく締まる)【洪水層】 | 8 | N5/ 灰色粘質土【池底か?・池埋土】 |
| 2 | 5Y6/1 灰色泥砂【洪水層】 | 9 | 2.5GY7/1 明オリーブ灰色シルト~7.5Y5/1 灰色シルト |
| 3 | 7.5Y5/1 灰色泥砂(上層砂質強い)【洪水層】 | 10 | 5Y4/1 灰色シルト(砂が混じる) |
| 4 | 7.5Y6/1 灰色砂泥【洪水層】 | 11 | 7.5Y5/1 灰色シルトに7.5Y8/1 小礫混じる |
| 5 | 5Y5/1 灰色泥砂(上層砂質強い)【洪水層】 | 12 | 5Y5/1 灰色シルト~5Y7/1 灰白色シルト |
| 6 | 2.5Y5/1 黄灰色砂泥(ラミナ)【池埋土】 | 13 | 2.5GY5/1 灰色シルト |
| 7 | 2.5Y4/1 黄灰色砂泥(ラミナ)【池埋土】 | 14 | N5/ 灰色粘土~砂泥 |
- 【河川】

図8 池跡断割り1西壁断面図(1:50)

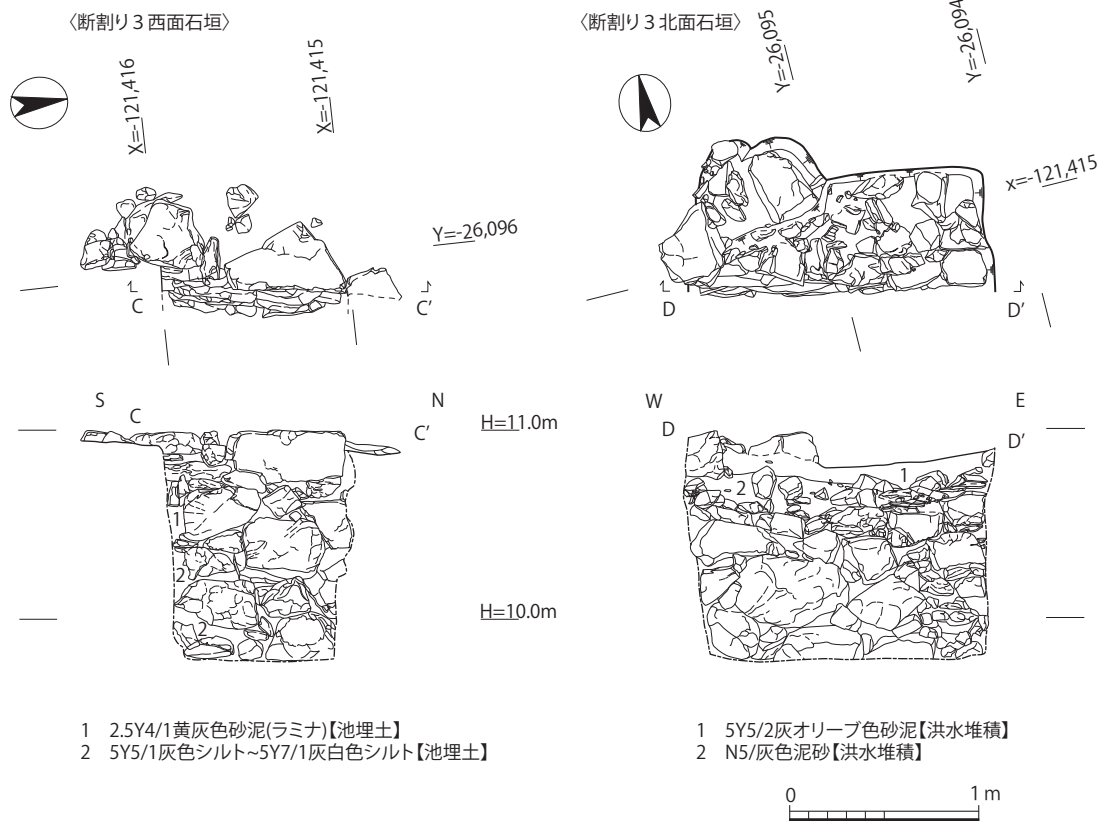
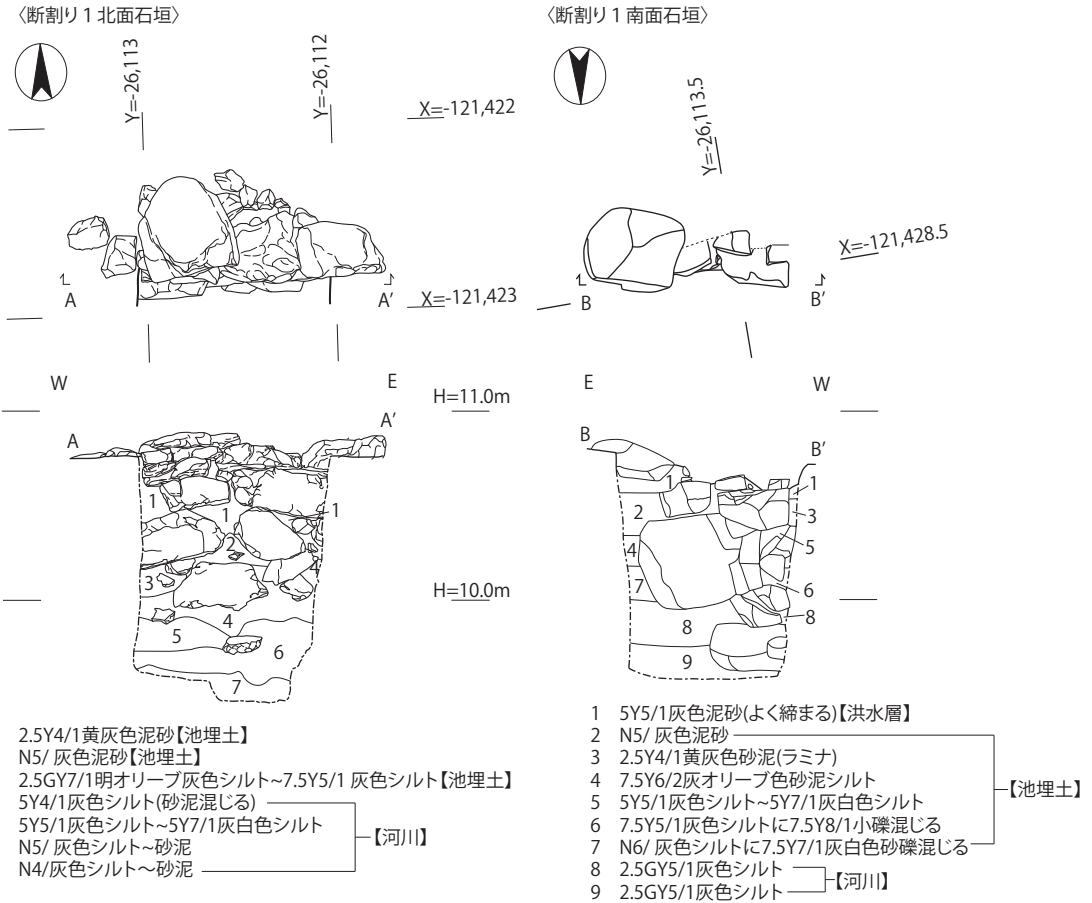


図9 池跡石垣立・平面図 (1 : 40)

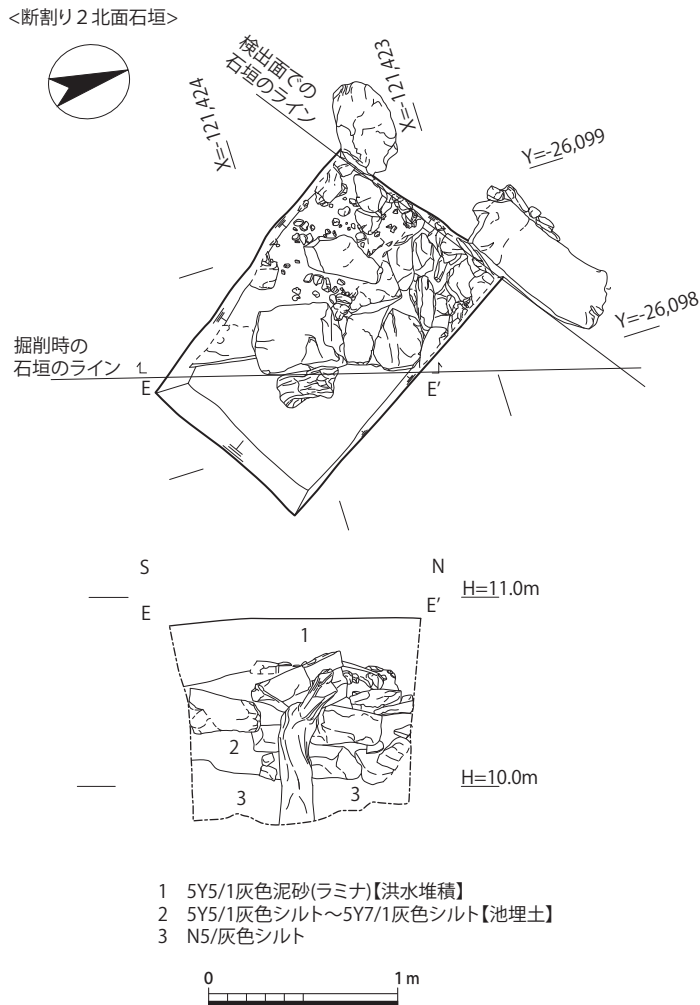


図10 石垣立・平面図（1：40）

の石列が乱れており、最終埋没時の洪水による土砂の流入によって乱されたと考えられる。

瓦組遺構（図7） 調査区中央南よりで検出した瓦組遺構である。4～5枚の完形の平瓦と半裁平瓦を用いて構築されている。平瓦側端部を上にして、平面形が長方形の柵型となるように据える。掘り方を確認することができなかつたため、造成とともに瓦を据えている可能性が高い。埋土は造成土と同質の土である。用途は不明である。

石組柵（図11） 調査区北東で検出した石組柵である。残存規模は東西約3.1m、南北約1.4m、高さ約0.78mとなる。基底部分は人頭大程度の石を長方形の柵形に据え、その上に石を2～3段積み上げる。内側中央部には長軸を縦にした石（支柱石）を据え天井石を載せる。天井石の天端で標高11.85mとなる。内部は天井石を境にして西側と東側を区別でき、西側の底には敷石が認められるが、東側には存在しない。なお、造成土の主体が砂質であることから、側石を据えるための掘り方を確認することができなかつた。また、北側は削平が著しく石材が露出した状況であった。石材は主に花崗岩で側石や支柱石は割石と共に自然石が用いられている。一方、天井石は花崗岩で側面に矢穴が認められる。埋土は両側ともに上層が洪水層（A-A' 3～5層）で、東から西（上流から下流へ）へと厚く堆積する。A-A' 6～12層は廃棄後の堆積土で、6・7層に炭化物が多量に含まれている。一方、11・12層はほとんどが炭層である。この炭層は明らかに6・7層とは異なり、使用時

層（6～8層）は、泥砂でやや粘性が強く中央が上層の影響を受けて凹む。下層（9～13層）及び最下層（14層）は、砂が混じるシルトで一部に礫の間層（9～11）が認められる。上層はラミナが認められレンズ状堆積であることから、桂川の氾濫堆積層と推測する。また、8層は薄い粘質土が一面に広がり池底と推測されるが、漏水を防ぐことを目的としたものではない。下層及び最下層は、砂礫の含有量が顕著であることから旧流路もしくは桂川の支流と考えられる。また、砂礫の含有量が北側（桂川）から南側（堤防）へ向けて増加しており、北側に向かうほど流速が早いことが分かる。また、東端

から底に堆積していたと考えられる。14・15層はよく締まっており、石升の底部を補強しているものと考えられる。砂層の造成土内に構築していることから漏水を防ぐことを目的としていると推測する。

木樋1(図12) 調査区中央北側よりで検出した暗渠である。検出長は7.6mで、池跡の北西端に接する。造成土を掘り込んで木樋を据えつけ、埋め戻し暗渠としている。樋は4枚の板を組み合わ

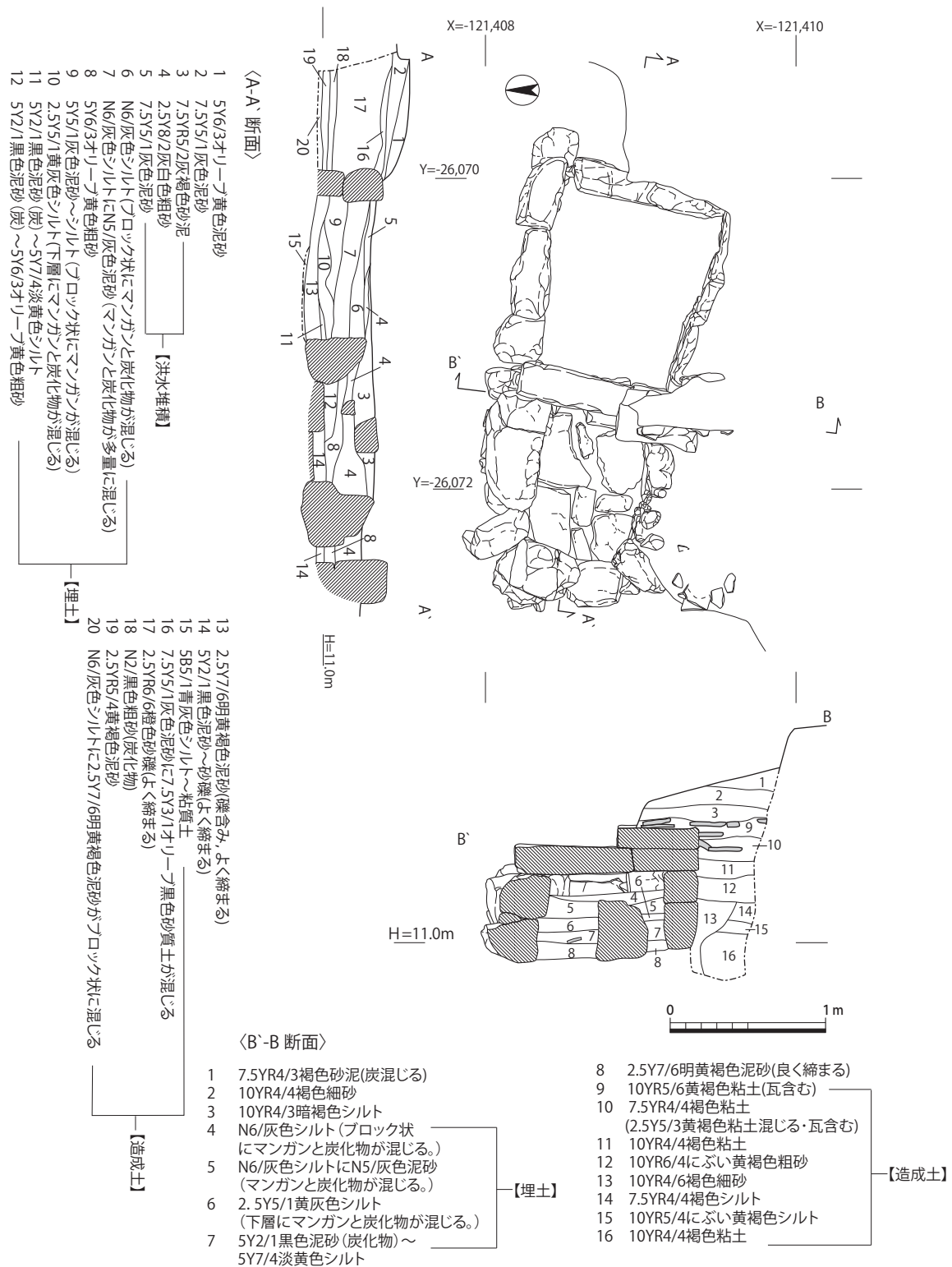


図11 石組榦平・断面図(1:40)

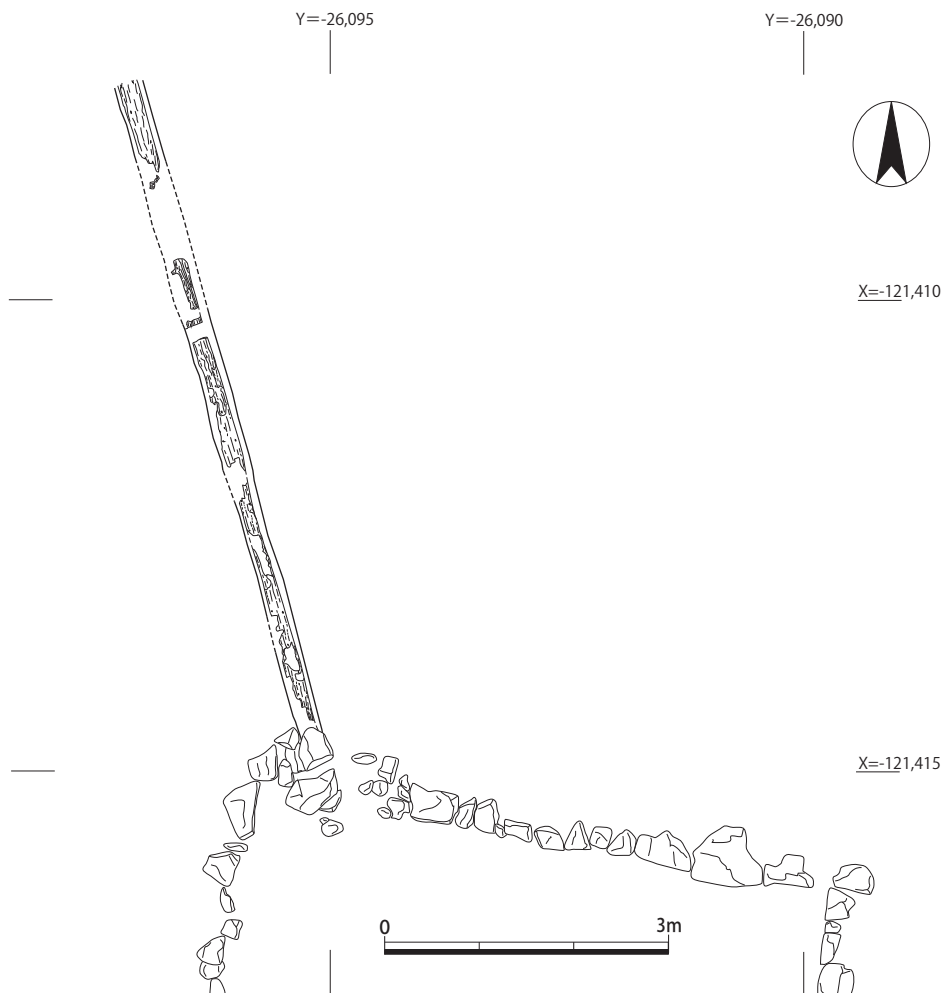


図12 木樋1・池跡 (1:80)

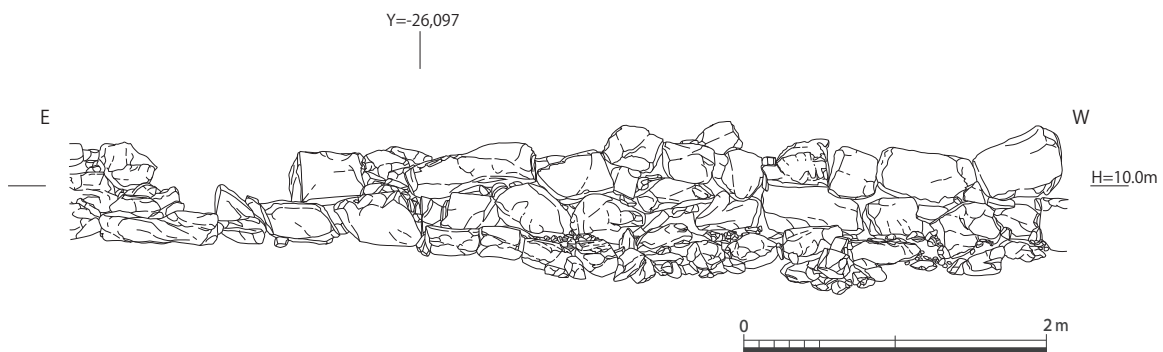


図13 石垣立面図 (1:50)

せて作られている。木樋の底面の標高は桂川に向かって緩やかに下がっており(10.534~10.575 m)、池から溢れ出た水が木樋を通り川へ排水されたと考えられる。木樋の天井板は一枚板が使用していることから、隙間から砂や泥が入り込まない工夫が見られる。池の排水施設の一部と考えられることから、遅くとも「山州淀御城府内之図」が描かれた18世紀初頭以降には成立したものと考えられる。

木樋2・木製柵(図7) 調査区中央で検出した木樋と木製柵である。ほとんどの木樋が失われている。木樋は池から北側に延び、木製柵に接続し北西へ向き変えて桂川へと向かう。木樋1と同様に造成土を掘り込んで樋を据えている。木製柵は円形で木樋1と同様に造成土を掘り込んで据

えている。検出高は木製枅が10.4566 mと最も高く、桂川側の木樋と池側の木樋に向かって僅かに低くなる。

石垣（図13） 調査区の桂川沿いで検出した北面の石垣である。桂川沿いの護岸である。南北2列で東西に約65 m分確認した。石積は1～3段で、下段には1辺0.2～0.8 mの自然石を据え、その上に、1辺0.4～0.7 mの自然石を乗せる。上段は0.35～0.9 mの自然石を並べる。南北の石垣の間隔が0.2～0.3 mと非常に近接している。石垣の性格として、階段状の石垣、造成や石を積み上げる際の土止め、足場、作り直しなど様々な用途が想定ができる。

集石遺構1（図7） 調査区北西で検出した集石遺構である。東西約37 m、南北14.5 mの不定形である。ほとんどが拳大の石で、僅かに人頭大の石も含まれる。石の9割が角礫の頁岩～粘板岩で、その他に黒雲母花崗岩や砂岩が認められた⁴⁾。寛永14年以降の縄張り図を見ると外堀と内高嶋、桂川が接する場所であることから護岸と推測する。成立時期は不明であるが、検出標高がやや高く第4層もしくは第5層で成立していると考ええる。

集石遺構2（図7） 調査区西端で検出した集石遺構である。北西から南東にかけて人頭大の石が帯状に並ぶ。氾濫によって石が露出している状態にあるが、本来は造成土を掘り込んで成立していた可能性が高く、第5層もしくは第6層で成立していると推測する。淀城の復元図や絵図によると、これより西側が外堀となる。したがって、外堀の北側護岸と推測する。削平されている場所も多いが、標高約10.8～11.3 mで検出した。これまでの発掘調査では標高11.0～11.3 mで外堀を確認しており、今回の検出高はほぼ一致する（表5：調査22・23・26）。

集石遺構3（図7） 調査区中央西側で検出した集石遺構である。東西約4 m、南北約6 mの不定形の土坑に拳大から人頭大の石が詰め込まれている。標高は約11.0 mで検出した。性格については不明である。

（3）遺物

今回の調査では整理箱に9箱の遺物が出土した。出土遺物には陶磁器、瓦類、金属製品がある。大半が調査区内に散在していたものである。

（4）池埋土の分析（表6）

二葉マツの葉はすべての地点の各層から、スギはすべての地点の上・中層から検出された。二葉マツ葉は常時、スギは中層以降に池周辺に植生していた。河畔に生育するハンノキ属は河川に近い北側上層で検出した。その他の雑草類は道端・畑など攪乱性と湿性や浮葉性の植生のものがあるが、多くは上・中層に集中している。また、水質環境の悪化を示すミジンコ耐久卵は上層から、川原の氾濫原のアシ原によく見られる高師小僧は上・中層に集中している。中層以降に池の水位が浅くなり、池の岸近くはアシか湿性のイネ科植物が多くなったと思われる。南側下層・最下層は砂礫の多くまだ流量が多かったことがわかる。これらのことは上層・中層と下層・最下層の間に環境変化があったことを示している。

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク点数	Cランク点数
江戸時代	陶磁器, 瓦, 金属製品			1箱	8箱
合計		9箱	0点(0箱)		

4. まとめ

今回の調査で内高嶋の桂川沿いの様相が明らかとなった。なかでも、享保8年(1723)以降の淀城を描いたとする「山州淀御府内之図」(図版36)や「洛外図屏風淀部分」の内容と一致したことは特筆される⁵⁾。池は桂川の支流もしくは旧河川を取り込むことによって水量を確保していたと考えられる。断割り1の北面の石垣底が、その他の石垣底より検出標高が高いことや、石垣の積み方がやや雑になっているのは、旧河川による水流によって、石垣が乱されたためと推測できる。埋土分析の結果、池の埋土の上層・中層にはマツやスギ、雑草の種子が多く含まれていること明らかとなった(表6)。上層は淀城廃城後に堆積したと考えられる。一方、中層は評価は以下の2通りに想定できる。

- ①上層と同様に池が管理されなくなってから堆積したと考える。
- ②池が機能している間に徐々に堆積したと考える。

このように中層の評価は、池の機能時期を検討する上で重要となることから、今後の調査における課題である。淀城下の様相を詳細に記録した『淀古今真砂子』『嶋崎露路の趣永井春斎老作之』に

表4 淀城築城以前の遺構検出標高

調査次数	調査区	遺構検出標高	遺構	備考
13		10.0m	平安時代から鎌倉時代の遺構面	東曲輪
14		10.3 ~ 11.0 m	中世整地	
17	2区	10.3 ~ 10.94 m	淀城築城以前の町屋	
		10.3 ~ 11.0 m	中世整地層	
19	1区	9.9 ~ 10.5 m	淀城以前の石垣	
		9.0 ~ 9.5 m	室町時代遺物包含層(湿地)	
		8.2 ~ 8.5 m	平安時代末期~鎌倉時代遺物包含層(湿地)	
21		10.5 m	淀城築城以前の石列, 瓦列	
		10.3 ~ 10.5 m	大坂街道路面	
23	C 1区	10.8 m	地業2(淀城築城以前の町屋)	
		10.7 ~ 10.8 m	路面31・溝27(淀城築城直前)	
	C 2区	10.25 m	路面69	
		10.0 m	路面34	
		9.8 m	柱穴30・32・61	
		9.8 m	路面68	
		9.75 m	空閑地68(桃山時代末期の信仰施設か?)	
C s 2	10.8 ~ 10.9 m	礎石1・2		
	10.6 m	井戸3		
24		10.4 m	路面18(大坂街道江戸時代初頭)	
		10.8 m	敷地境界石列19	
		10.5 ~ 10.8 m	集石列20	
		10.2 ~ 10.5 m	礎石	
26	C 1区	11.0 m	地業53	
		約10.5m	路面41(大坂街道)	
		9.7 ~ 10.1 m	建物80	
	C 2区	約11.0 m	路面29	
		10.45 m	町屋67	

*調査次数は表1と同じ。

は桂川沿いの内高嶋の池について「此池へ丸ど、號て丸くくずやぶき、ぐしすり躰ある也」と記録している⁶⁾。今回検出した池跡がこれに該当する可能性が高く、池には「丸ど」で呼ばれた中島があったことが判明する。断割り2で方位の異なる石垣を確認しており、中島に関連する遺構の可能性もある。ただし、池を作り替えてとも考えることが出来、今後の課題である。さらに、「池の南ばた左右杉生か

表5 淀城築城後の遺構検出標高

調査 回数	調査区	遺構検出標高	遺構	備考
12	1区	10.35 m	土坑	南曲輪
	2区	10.7 m	石垣(建物)	内高嶋枇杷木御門
	3区	9.0 m	(堀)石垣	中堀南岸
	4区	10.0 m	(堀)石垣	内堀南岸
13	2次	12.6 m	淀城造成土(土蔵)	東曲輪
14		12.3 m	土蔵布基礎	
17	1区	12.6 m	布基礎(調査13と同じ遺構)	
	2区	11.4 m	淀城期整地(屋敷内)	
19	2区	10.9 m	石垣(外堀)	内高嶋
22	A1区	11.3 m	外堀肩部	
	A2区	11.5 m	柱列1	
		11.1~11.5 m	武家屋敷の石垣・柱列・建物跡	
B1区	11.3 m	集石・土坑・礎石	南曲輪	
	10.1 m	石垣7(中堀)	本丸南側中堀	
	9.5 m	石垣8(中堀)		
B2区	8.2 m	石垣9(中堀)	南曲輪	
	10.9~11.1 m	布基礎4(蔵跡)		
	10.8~11.2 m	布基礎5(蔵跡)		
B3区	10.7~11.2 m	石列6	本丸南側中堀	
	9.0~9.9 m	石垣17		
B4区	10.3 m	石垣9・堀10(内堀改修か?)	本丸東側曲輪	
	10.95 m	柱列11	大手門南側建物	
23	A1区	11.0 m	外堀, 土手	内高嶋
	A2区	11.2~11.4 m	淀城築造礎石	
	A3区	11.0~11.1 m	礎石, 柱穴	
	B1区	11.2~11.3 m	淀城整地, 堀, 杭列, 集石	南曲輪
	B2区	11.1~11.3 m	土坑, 建物A	
		11.0~11.2 m	土坑, 建物B	
	B3区	9.5~10.3 m	石垣1・堀	
	B4区	10.8~10.9 m	石列6	
	B5区	9.2~9.7 m	石垣2, 堀	
	C1区	10.9~11.2 m	石垣13・堀1(中堀)	東曲輪
C2区		10.9 m	淀城大手門前路面	
		10.7~10.9 m	石垣4	
24		11.3m	石垣(角櫓基礎)	
		11.4~11.5 m	石垣2	
		11.3m	石垣16(外堀南側)	東曲輪
		11.5 m	堀6	
		11.0 m	土坑8~10(門礎石基礎)	
26	A1区	11.2 m	外堀	内高嶋
	A2区	11.1m	礎石列	
		9.3~10.3 m	盛土内石塁	
	B1区	11.1m	中堀	南曲輪
	B2区	11.3m	建物18	
	B3区	10.1 m	北面石垣(堀埋土の掘削時に検出)	
		10.7 m	内堀	
	B4区	9.9 m	西面石垣	曲輪
		10.6 m	堀2	
	B5区	9.3 m	堀22(中堀)	
		10.5 m	石垣27(陸橋南辺)	
		9.6~9.8 m	石垣28(東曲輪東辺)	
		9.2~9.4 m	石垣29(東曲輪東辺)	
	C1区	11.15 m	階段状石列52	東曲輪
		10.9m	堀1(中堀)	
C2区	11.5 m	石垣1~3		
	11.95 m	石垣4		

*調査回数は表1と同じ。

き角にはさみて有之、内じやり此先ふじ柵の下へ出る、左の方ちこうふ大松など有、石どうろ有る」と記されており⁷⁾、池の周囲には植栽があったことが分かる。瓦組遺構はこれら植栽に関連する生垣の可能性もある。このように、桂川沿いに庭園的な空間が広がっていたことが明らかとなる。ただし、池が鑑賞などを楽しむための園池として意識されていたのかは、今後の課題である。また、本調査では建物跡に関連する遺構を検出することが出来なかった。しかし、「山州淀御府内之図」には池の北側に水車小屋が描かれており、その様相は『淀古今真砂子』で確認することが出来る。記録によると、「右の方車の茶屋、右の方かうし、西の方より南のほうへをしまはして竹糸ん也、西の糸んまい(前)手水ばちある、そこにせん(栓)ある、せんをぬきて取れば地より水はき出る、此水水車よりとる也」とあり⁷⁾、茶屋には手水鉢が置かれていた事が分かる。今回検出した木樋2と木製枡は検出位置から、水車小屋の手水鉢に関

連する遺構の可能性が高い。木樋は暗渠で桂川と池を結ぶように設置されており、水車小屋の下を通っていたと推測できる。また、木製桁の上部構造は明らかではないが、手水鉢の可能性があり、「地より水はきでる」とあることから、建物内部に露出していた可能性が高い。また、水は桂川に設置された水車から木樋を通して供給され、最終的に池へと排出されたと考えられる。

今回の調査では南壁断面において数時期の造成土を確認したが、調査区では造成土の削平が著しいことから、全ての遺構を同一遺構面で検出した。そこで周辺調査事例での遺構検出標高と比較し、遺構成立面の見直し述べておく。

淀城築城以前（表4） 淀城築城以前の遺構は大坂街道関連する路面や町屋跡を確認している。主な遺構の検出標高は約9.75m～11.0mである。なかでも、調査23では、淀城築城直前の大坂街道路面の標高が10.7～10.8mであったことを明らかにしている。また、標高10.3～10.94mで町屋跡を確認し、江戸時代初頭（淀城築城）までの遺構面はおおよそ10.0～11.0mで成立しているものと推測できる。

淀城築城後（表5） 既に述べた通り、淀城築城にあたって大規模な造成工事が行われた。淀城築城以前の大坂街道を確認した東曲輪では12.2m以上（調査14）、南曲輪で11.2m以上（調査23）まで盛土がなされている。内高嶋においても武家屋敷跡を11.1～11.5mで確認しており、南曲輪とほぼ同じ高さまで造成されたと推測することが出来る。このように、淀城築城以前は9.5m前後であったが、築城に際して11.0m前後まで造成したことが分かる。

本調査で確認した遺構の中で最も低い位置で検出したのは池底の河川（流路）である。検出標高は10.0m前後であり、淀城築城以前の遺構成立面の標高と近似する。したがって、河川（流路）は内高嶋が造成される以前の桂川の分流と考えられる。また、本調区では、この時期の遺構面を確認出来ていないが、内高嶋造成土の下層に遺存しているものと推測できる。

また、淀城築城時の内高嶋を築造するにあたって、少なくとも基本層序の第4層～6層（標高11.5m）まで造成したと考えられる。池跡や瓦組遺構・木樋などは標高11.0m前後で検出したことから、多くの造成土は削平されていることが分かるとともに、池に関連する施設は建物に対して低い位置で成立していたことが判明する。池跡は旧桂川の河川を一部利用して築造されていることから、淀城築城時には計画されていたと推測できる。したがって、池に関連する木樋1・2や瓦組遺構は淀城築城時に成立したと考えられる。また、石垣も内高嶋の護岸の役割を担っており、築城期に成立したものと推測できる。集積遺構2は木津川の付け替え後の外堀の護岸と考えられることから、寛永10年頃の大規模な改築時に成立したと考えられる。石組桁は成立面の標高も高く、埋土に鳥羽伏見の戦い時に生じたと考えられる焼土も含まれていた。さらに、絵図や文献史料にも記録がないことから、17世紀後半以降に成立した可能性が高い。

今回の調査では、露出遺構の記録を目的としたが、内高嶋の桂川付近の復元のための有益な成果も得ることが出来た。今後は、淀城と桂川との関係を明らかにしつつ城内の景観復元が求められる。

（鈴木 久史）

註

- 1) 西森正晃「128淀城跡」『京都府中世城館跡発掘調査報告書第3冊 山城編1』京都府教育委員会，2014。
- 2) その他に第5層aは，5Y7/2灰白色粗砂や2.5Y5/2暗灰黄色泥砂が認められる。
- 3) 淀城は，宝暦の落雷による大火と鳥羽伏見の戦いの2回の大火の被害にあっている。前者は天守を中心に被害にあっているとされ，後者は城だけではなく，城下町まで被災しているようである。
- 4) 石材の種類については，橋本清一氏に御教示頂いた。記して感謝申し上げます。
- 5) 堀内明博編『伏見の古絵図』伏見城研究会，2011，50・51項。
- 6) 渡邊善右衛門守業「佐倉古今真砂子・淀古今真砂子」原田伴彦・竹内利美・平山敏治郎編『日本庶民生活史料集成』三一書房，1969，810～811頁。
- 7) 註5と同じ。
- 8) 註5と同じ。

表6 池埋土の分析表

本木	和名	部位	科名	南側			中央部			北側					
				上層 (1~4 層)	中層 (6~8 層)	下層 (11~13 層)	最下層 (14層)	上層 (1~4 層)	中層 (5~8 層)	下層 (9~13 層)	最下層 (14層)	上層 (1~5 層)	中層 (6~8 層)	下層 (9・10・ 12層)	最下層 (14層)
草本	1 二葉マツ	種子	マツ	1250ml	2550ml	750ml	920ml	1400ml	1000ml	650ml	850ml	650ml	700ml	500ml	850ml
	2 モミ属	葉	マツ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	3 スギ	葉	スギ	○	○			○	○				○		
	4 ハシノキ属	果実	カハノキ	○	○			○	○				○		
	5 ヒサカキ	種子	ツバキ		1								1		
	6 トゲ														
草本	7 スイハ	果実	タテ												1
	8 ミソソバ	果実	タテ	1											
	9 タテ科(三稜形)	果実	タテ		2		1	1							
	10 サクロソウ	種子	サクロソウ					1							
	11 スベリヒユ	種子	スベリヒユ	2	1										
	12 ノミノフスマ	種子	ナデシコ	5	4										
	13 ツメクサ	種子	ナデシコ	2				4							
	14 ハコベ属	種子	ナデシコ					12	1						
	15 アカサ属	種子	アカサ					1							
	16 ヒユ属	種子	ヒユ	1	2										
	17 タカラン	果実	キンポウゲ					1							
	18 ドクダミ	種子	ドクダミ					1							
	19 アブラナ科	種子	アブラナ	2	1										
	20 キジムシロ属	果実	カタハミ					1							
	21 カタハミ属	種子	カタハミ					1							
	22 エノキグサ	種子	トラダイグサ				2								
	23 スミレ属	種子	スミレ		3										
	24 ヒシ属	果実	ヒシ					2							
	25 ミスユキノシタ	種子	アカハナ					1							
	26 チドメグサ属	果実	セリ	1											
	27 セリ科	果実	セリ					1							
	28 キランソウ属	果実	シソ												
	29 シソ属	果実	シソ												
	30 ナス科	種子	ナス					1							
	31 タカサフロウ	果実	キク	1											
	32 オモダカ属	果実	オモダカ											1	
	33 オモダカ科	種子	オモダカ	2											
34 コナギ	種子	ミスアオイ	2	2											
35 イボクサ	種子	ツククサ											2	4	
36 イネ科	類	イネ		1											
37 スズメノテツボウ	果実	イネ	1												
38 カヤツリグサ科(三稜形)	果実	カヤツリグサ		5				9							
39 カヤツリグサ科(扁平形)	果実	カヤツリグサ		3											
40 カヤツリグサ属(三稜形)	果実	カヤツリグサ											2		
41 カヤツリグサ属(扁平形)	果実	カヤツリグサ													
42 ホタルイ属	果実	カヤツリグサ		1			1								
43 シヤジクモ属	卵胞子	シヤジクモ		1											
44 蕨苔類															
45 昆虫															
46 ミジンコ				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
47 高師小僧(褐鉄鉱)				◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	
備考															

XI 芝古墳

1. 調査の目的と経過 (図1～5)

本件は文化庁国庫補助事業に伴う範囲確認調査である。調査地は西京区大原野石見町632番3に所在し、14基の古墳からなる「芝古墳群」の中の1基、芝古墳(芝1号墳)に該当する。

京都市域では、800基以上にものぼる古墳が確認されている。その古墳の中でも、桂川右岸のいわゆる「乙訓地域」(以下、乙訓と呼称する)に所在する古墳は全国的にも著名であり、古墳時代の政治的動向を知るうえで貴重な資料となっている¹⁾。

近年、京都市・向日市・長岡京市・大山崎町の3市1町が、乙訓で一定の規模を有する首長墓と考えられる古墳に対して発掘調査を実施している。その結果、乙訓に所在する古墳のうち、既に天皇の杜古墳(京都市)、寺戸大塚古墳(京都市・向日市)、恵解山古墳(長岡京市)の3基はそれぞれ国指定史跡となっていたが、2015年度にはそれに新たな8基の古墳を加えて「乙訓古墳群」として史跡に指定されることとなった。しかし、芝古墳は乙訓の首長墓の一つと考えられる前方後円墳でありながら本格的な調査は実施されておらず、その様相は長らく不明であった。そのような状況下において、芝古墳を明確に位置付ける上での基礎資料の収集・整備は急務であった。そのため、京都市では2014年より継続して調査を実施している。本調査は、これまでの全ての調査を含めれば4次調査、発掘調査のみに限れば2次調査となる²⁾。

2014年度に実施した第1次発掘調査では、墳形・規模を確定させるために後円部に3箇所、前方部に1箇所の調査区を設けた(1～4区)。今年度はそれに引き続いて、後円部中央に1箇所、前方部南東隅付近に1箇所の計2箇所の調査区を設けた(5～6区)。調査面積は86㎡で、調査期間は平成27年10月1日～11月20日である。なお、西京区役所と連携した古墳見学会を10月17日、現地説明会を11月7日に実施した。現地説明会には、約240人の参加を得た。



図1 調査地位置図(1:15,000)



図2 調査風景（北西から）



図3 石材調査風景（西から）



図4 現地説明会風景（南西から）



図5 埋戻し作業風景（北から）

2. 遺 構（図6～18，表1）

（1）調査区の配置と経過（図6・7）

今年度は調査区を2箇所設けた。2014年度の第1次発掘調査では1～4区までの調査区を設けているため、通し番号で5区・6区と呼称する（図6）。

5区は後円部中央に設けた調査区である。2014年度に調査を行った2区において、埋葬施設に伴う排水溝と考えられる石組み溝を確認した。この石組み溝の高さから、芝古墳の埋葬施設はそのほとんどが破壊されているものと推察された。保存・整備を実施する上で、埋葬施設やその周辺がどのような状況にあるかを確認する必要があると判断したため、今年度の調査では昨年度の2区と一部重複させ、調査区を後円部中央に設定した。

なお、5区では調査の進展状況に合わせて随時セクションの位置を変更している。まず、表土掘削の段階までは墳丘の主軸を利用して十字形のセクションを設けた（図7-1）。その後、後円部中央で土坑の輪郭を検出した段階でその主軸に合わせてT字形のセクションを設定した（図7-2）。この

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
古墳時代	古墳(墳丘, 石組み溝, 横穴式石室, 掘方1・2)	
古墳時代以降	土坑・溝・落込み	

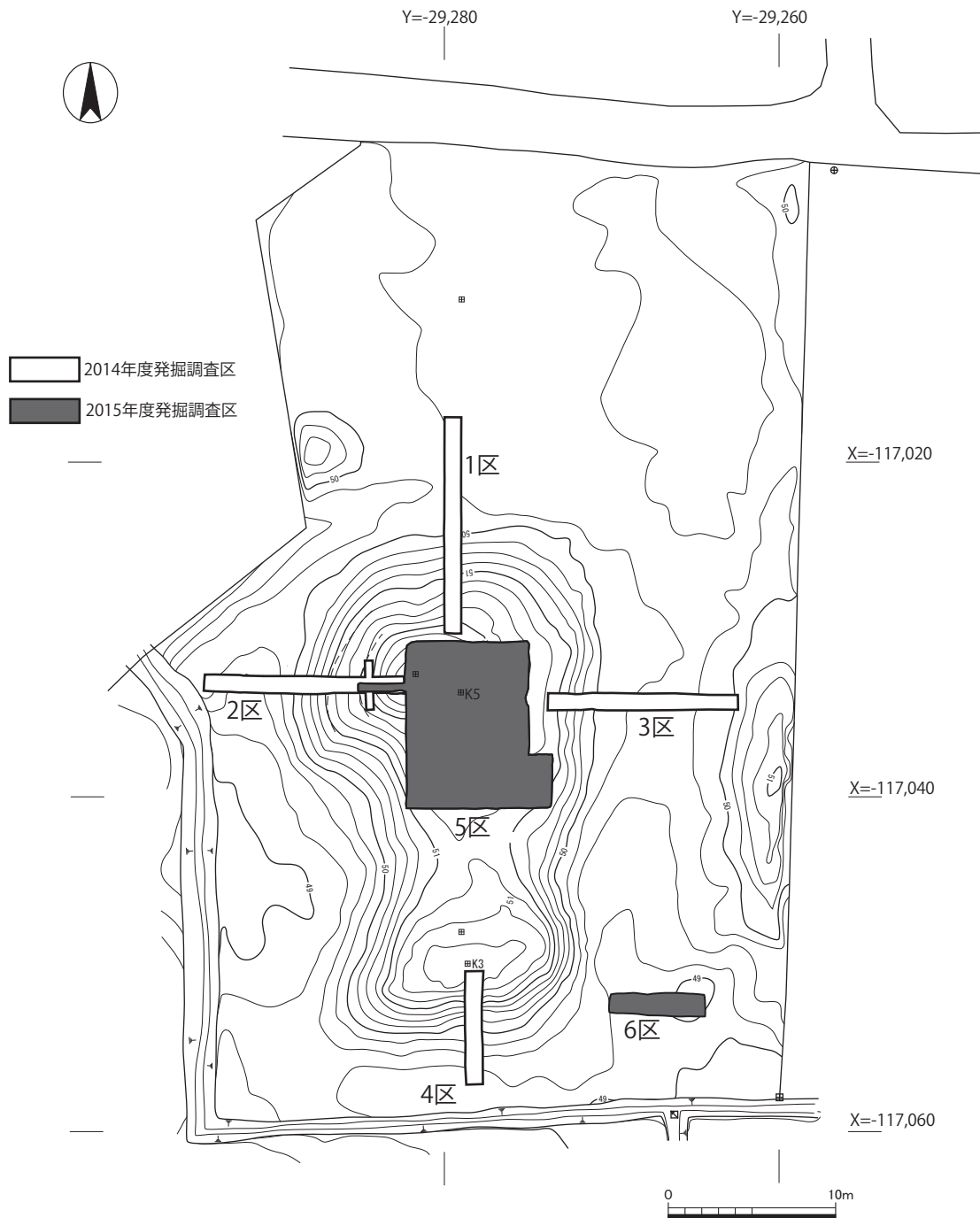


図6 調査区配置図 (1 : 400)

土坑埋土を掘削していくと、予想外に深い位置で横穴式石室を検出した。この横穴式石室は、後世に石材が抜き取られており、特に玄室部の遺存状況は悪かった。しかし、土坑埋土をある程度まで掘削した段階で石室床面に礫敷きが遺存していることが判明したため、玄室床面から0.2~0.4mほど上まで面的に掘り下げた後、玄室床面を6分割するセクションを設定して遺物および床面の検出を行った(図7-3)。玄室床面を検出し記録作業を終えた後、L字形の断割りを2箇所設けて床面の下層の確認をおこなった(図7-4)。なお、各セクションの位置は可能な限り重複するように設定している。

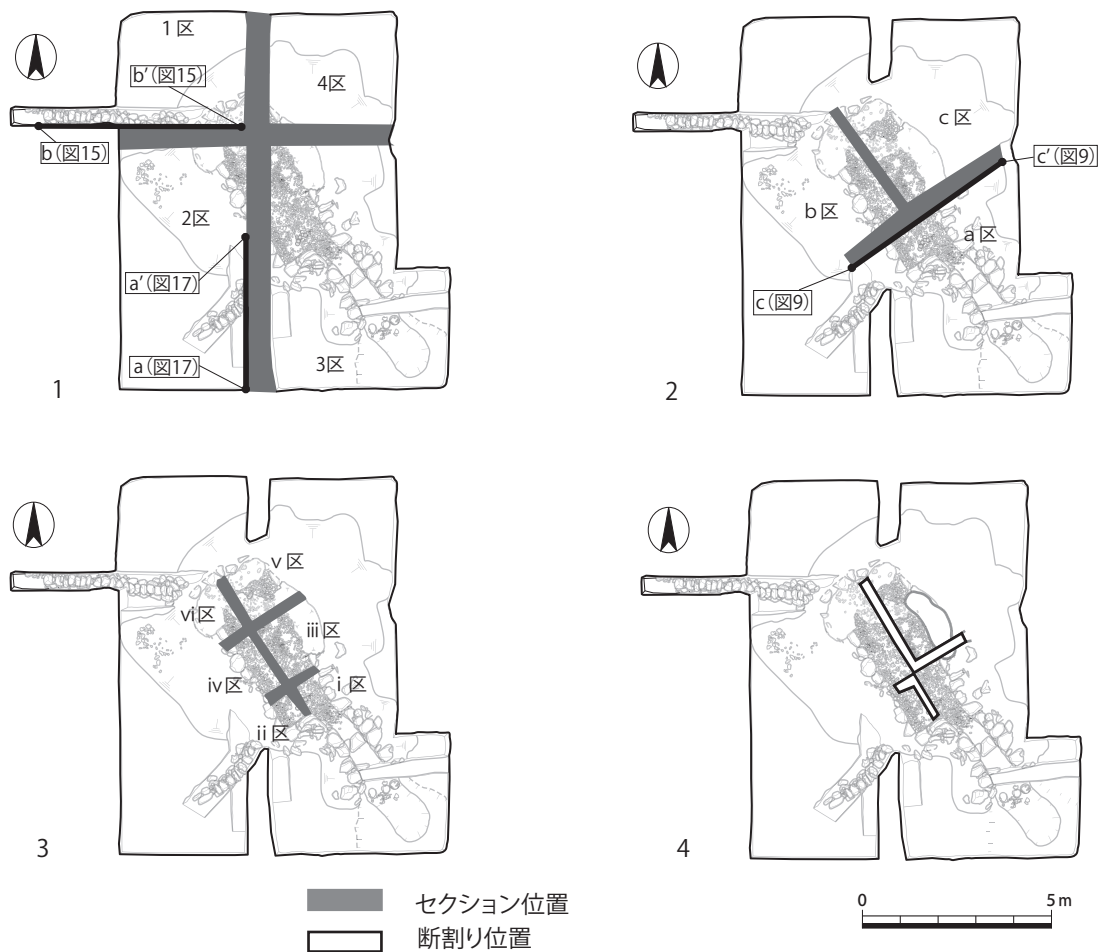


図7 5区セクションおよび断割り実施位置図（1：200）

6区は、前方部南東隅付近に設けた調査区である。2014年度の調査成果から、芝古墳の東側面は、江戸～明治時代にかけて墓域として利用されていたことが分かっている。それに伴い、芝古墳の墳丘も削平を受けている。そのため、等高線や現地観察によって西側墳丘裾の位置を推定し、それを墳丘主軸を基点に反転して平面プランの復元を行い調査区を設定した。2014年度の3区では周溝を確認できていることから、本調査区でも同様の情報が得られることが期待された。以下、各調査区の成果について概要を述べる。

(2) 5区（図8）

この調査区では、土坑と横穴式石室、石組み溝1・2、埴輪群、掘方1・2を検出した。以下、各項目について概要を述べていく。

土坑 表土を掘削した段階で、5区の中央で巨大な土坑を確認した。この土坑の下に横穴式石室が遺存する。石材の残存状況から、この土坑は石室石材の抜き取りを目的としたものと推察される。土坑は東西約7m×南北約8mの規模を有しており、横穴式石室を囲むような位置関係にある。図9は土坑の断面を図化したものである。埋土は全部で22層に分層できるが、堆積状況から大きく三つのまとまりに分けられる。それぞれ上層（1～8層）、中層（9～20層）、下層（21～22層）とする。芝古墳に伴うと考えられる埴輪や須恵器が各層から出土しているが、それらを除くと上層

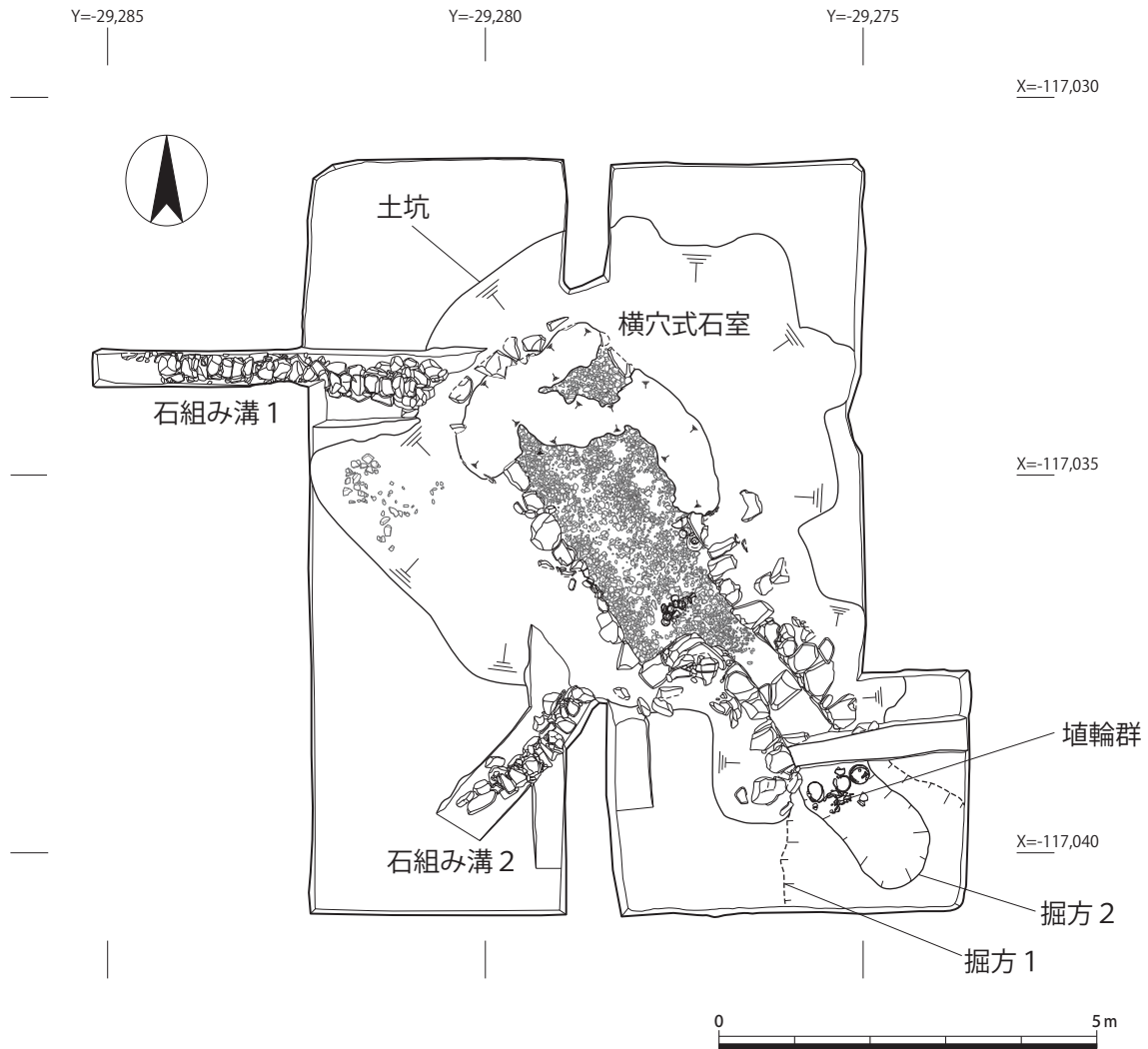


図8 5区平面図 (1:100)

には江戸～明治時代の土師器，中層には瓦器，下層には長岡京期の須恵器が認められる。芝古墳の所在する敷地の東辺が現在想定されている長岡京の京域の西限にあたることや下層より出土した遺物の年代から，長岡京の造営に際して石室の石材が抜き取られた可能性が想定される。

横穴式石室 この土坑埋土を除去し，横穴式石室を検出した。5区のほぼ中央に位置しており，芝古墳の中心埋葬と考えられる。石室の石材は，大半が抜き取られており，現在では天井石は1石も認められない。玄室部についても石材がほとんど遺存していないが，袖部から羨道にかけては比較的良好に石積みが認められる。なお，石室の石積みは天井石を失い内側にむかってはらみ，それによって生じた石材と石材の隙間には土が流れ込んでいる。今回は，石室の保存を第一に考えて崩壊を招く可能性のある部分に関しては，それ以上の掘削を行っていない。石室の実測図において石材と石材の間が離れていたり，基底石が図化されていない箇所があるのはそのためである。この横穴式石室は奥壁側から羨道を見て右片袖式の横穴式石室で，南東に向かって開口する。玄室の北西隅付近が復元した後円部の中心となる。石室の床面は地表面より約1.4m，墳丘頂部より2.9mほど下に位置する。この床面には拳大の河原石を敷きつめて礫床を形成している。礫床は横穴式石室の

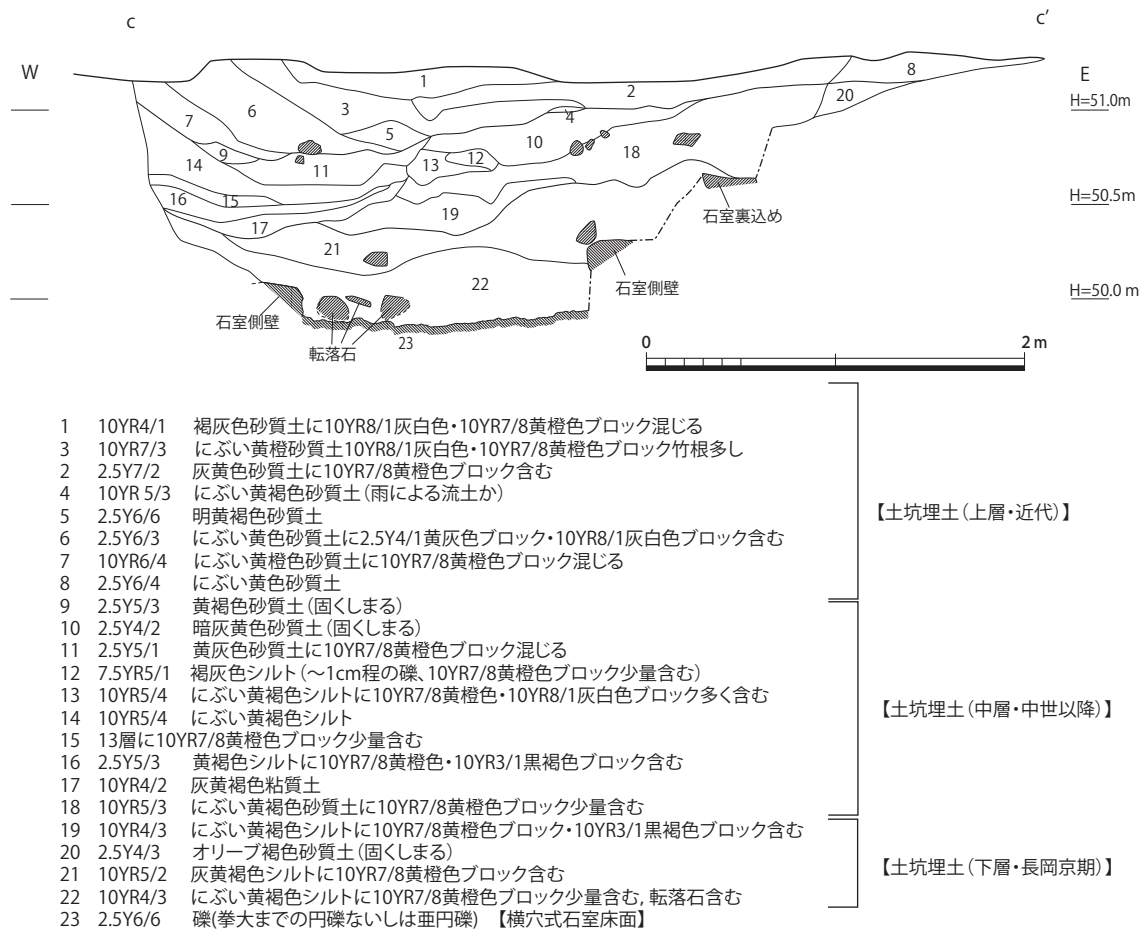


図9 c～c'セクション断面図(1:40)

ほぼ全域で確認できるが、玄室の北側のみ礫と土が混ざった状態の箇所が見受けられた。床面の断面割りをを行った結果、これは攪乱を受けた結果であることが判明した。

玄室の奥壁と東側壁の北半分に関しては、1石を除いて基底石すら残っておらず遺存状況は最も悪い。西側壁では、北端以外の箇所でも基底石ないしは2段目の石材まで確認できる。0.1～0.5m程の大きさの石材を使用し、個々の石材の平滑な面を石室内面に向けている。基本的に石材の長辺を石室主軸と並行になるように据えている。

袖部は比較的良好に遺存しており、7段以上積み上げて構築しているのが確認できる。最下段のみ0.7m程の大きな石材1石で築いているが、それより上部は各段2石で構築している。1～2段目までは玄室側に石材の長辺が向くように据えられているのに対して、それより上段では玄室と羨道側に石材の長辺が交互に向くよう積まれている。これは、石室の持送りに伴い積み方を変化させている可能性がある。

部分的にしか遺存しないため、はっきりとしない箇所もあるが、東側壁北端の基底石や礫床の残存範囲から玄室幅1.55m・玄室長3.8m程の規模に復元できる。

羨道についても、石積みが比較的良好に遺存している。ただし、基底石より上部の石材は内側にむかって0.2m以上もせり出している不安定な状況にあることから、基底石付近の土は除去してい



図10 横穴式石室平面図 (1:30)

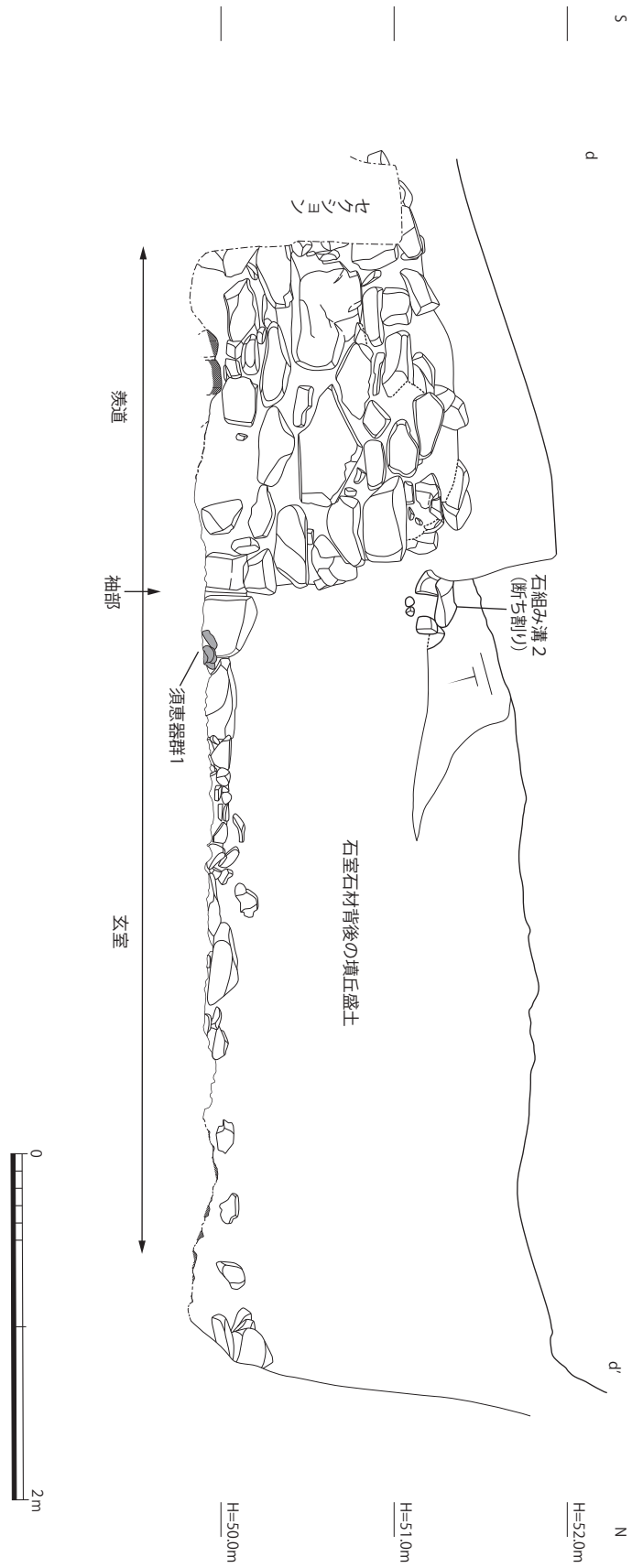


図11 横穴式石室西壁見通し図 (1:40)

ない。したがって、基底石の様相が不明な部分もあるが西壁では7段ないしは8段目まで確認できる(図11)。0.1m～0.7m程度の石材を使用して羨道を構築している。確認できる中で最も大きな石材を4段目に配している。袖部より1.1mほど南の床面には、2つの石材を組み合わせで構築された梱石が確認できる。袖部より0.5mほど南から梱石に向かって上がる緩い傾斜が認められ、梱石の1mほど手前では礫床が途切れる。羨道幅は約0.6mで、羨道長は2m以上となる。

横穴式石室からは、副葬品として土師器、須恵器、白玉、鉄器、馬具などが出土した。しかしながら、原位置もしくはそれに近い状態と考えられるものは、玄室で検出した須恵器群のみである。この須恵器群は出土位置から2つのまとまりに分けられる。以下、須恵器群1・2と呼称する(図10・12)。

須恵器群1は、袖部の0.5mほど北に配された須恵器群である。転落した石室石材の下敷きになって出土した。有蓋高坏が5組、無蓋高坏が1個体からなる。無蓋高坏(須恵器1)が最も東側に単独であり、そこから0.2mほど西に5組の有蓋高坏(須恵器2～10)がまとまって配されていたものと想定される。出土位置から、須恵器2・3、須恵器4、須恵器5・6、須恵器7・8、須恵器9・10が副葬された際にセット関係にあったものと考えられる。

須恵器群2は、玄室東壁に沿うよう配された3個体の須恵器からなる。南から須恵器11(横瓶)、須恵器12(壺)、須恵器13(甕)の順に並べられている。

埴輪群・掘方1・掘方2 これらは横穴式石室の羨道延長部で検出した。羨道を横断するように設定したセクション以南は検出を実施したのみであり、来年度以降に確認する予定である。従って、埴輪群と掘方1、掘方2と横穴式石室との関係性については今後の課題としたい。ここでは現段階での所見を述べるに留める。

掘方1は、セクションのある場所から南東に向かって「ハ」字形に広がる平面形を有する。調査区外にのびていくため正確な大きさは不明だが、幅2.7m以上・長さ2.5m以上の規模を有する。横穴式石室との位置関係から素掘りの墓道である可能性もあり注目される。しかし、現場で精査を複数回実施したが、掘方2に比べて輪郭が判然としない。従って、今回確認した輪郭は、掘方ではなく盛土の境である可能性も否定はできない。

掘方2は、掘方1を切って成立する。セクションから南東に向かって舌状にのびる。幅1m・長さ2mの規模を有しており、輪郭を明確に確認できた。この掘方2も、横穴式石室との位置関係から素掘りの墓道の可能性を有する。

埴輪群は、掘方2の中に据えられている。確認できるのは4本のみである。埴輪を個別に据えた掘方は確認できないため、おそらくは掘方2を埋め戻す際に埴輪も一緒に据えたものと考えられる。円筒埴輪ないし朝顔形埴輪と推察される。芝古墳では、赤色の土師質の埴輪と黒褐色～青灰色の須恵質の埴輪が確認されているが、ここではすべて前者のみが使用されている。

東西に4本並ぶが、西から2本目のみ南に突出して置かれており、若干歪な配置となる。墳丘平坦面に埴輪を樹立していた場合、この付近はくびれ部に該当するためその屈曲点を検出している可能性が考えられる。しかし、周辺で他に埴輪が認められないことから、むしろ掘方2の幅に規制

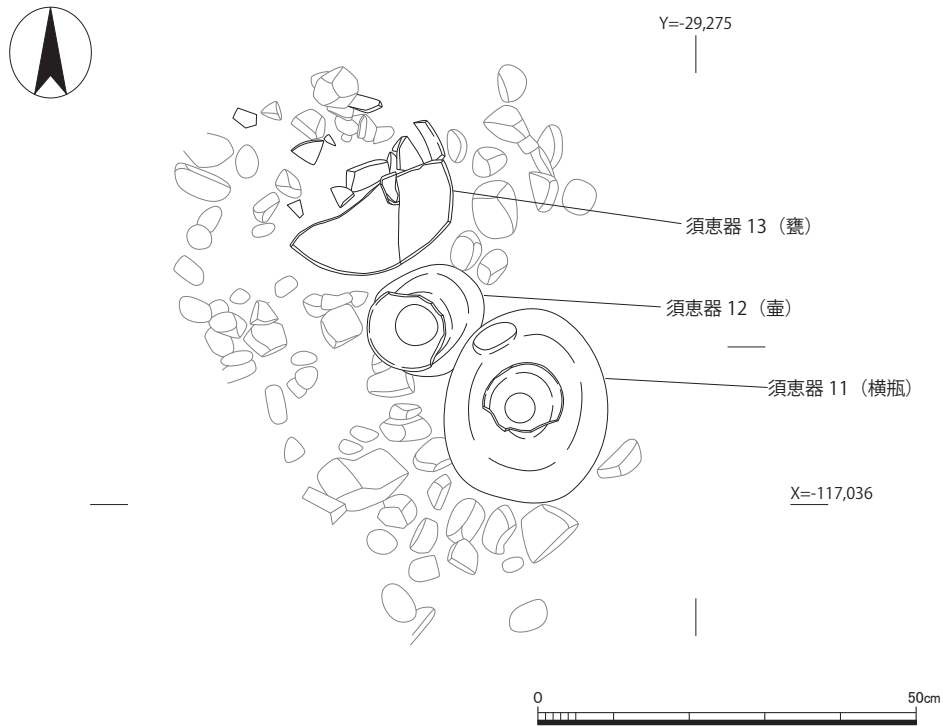
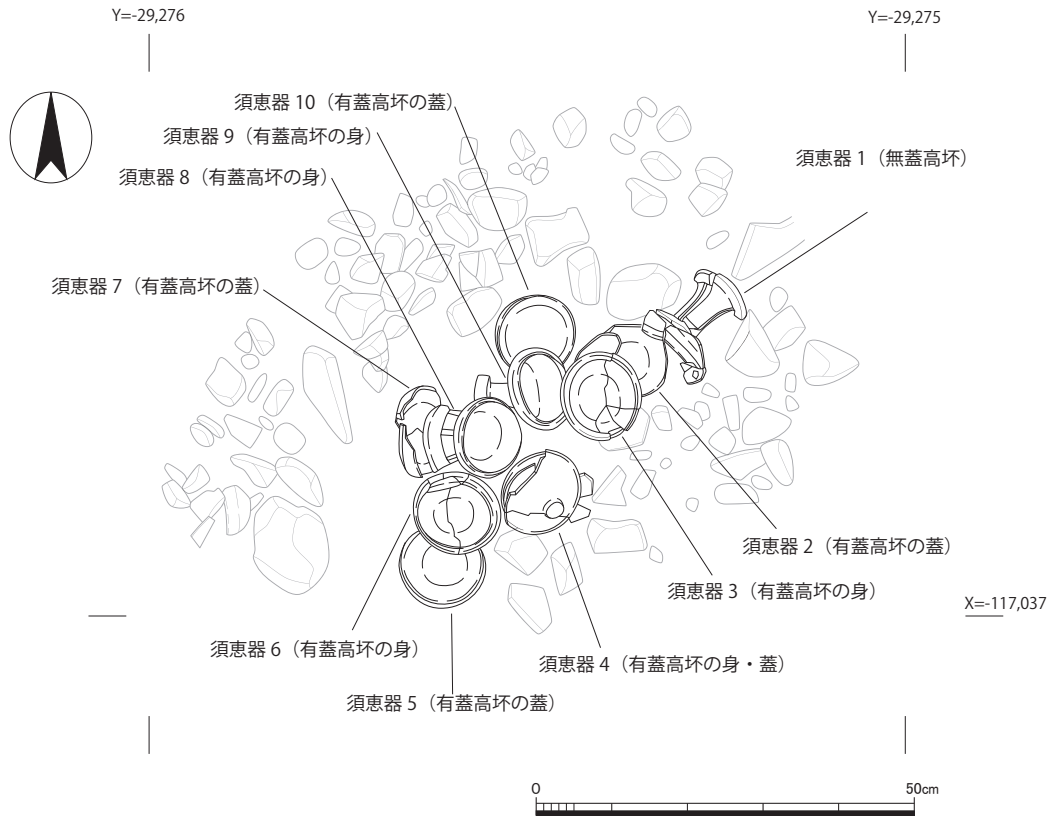


図12 玄室出土須恵器群出土状況図(上:須恵器群1・下:須恵器群2)(1:10)

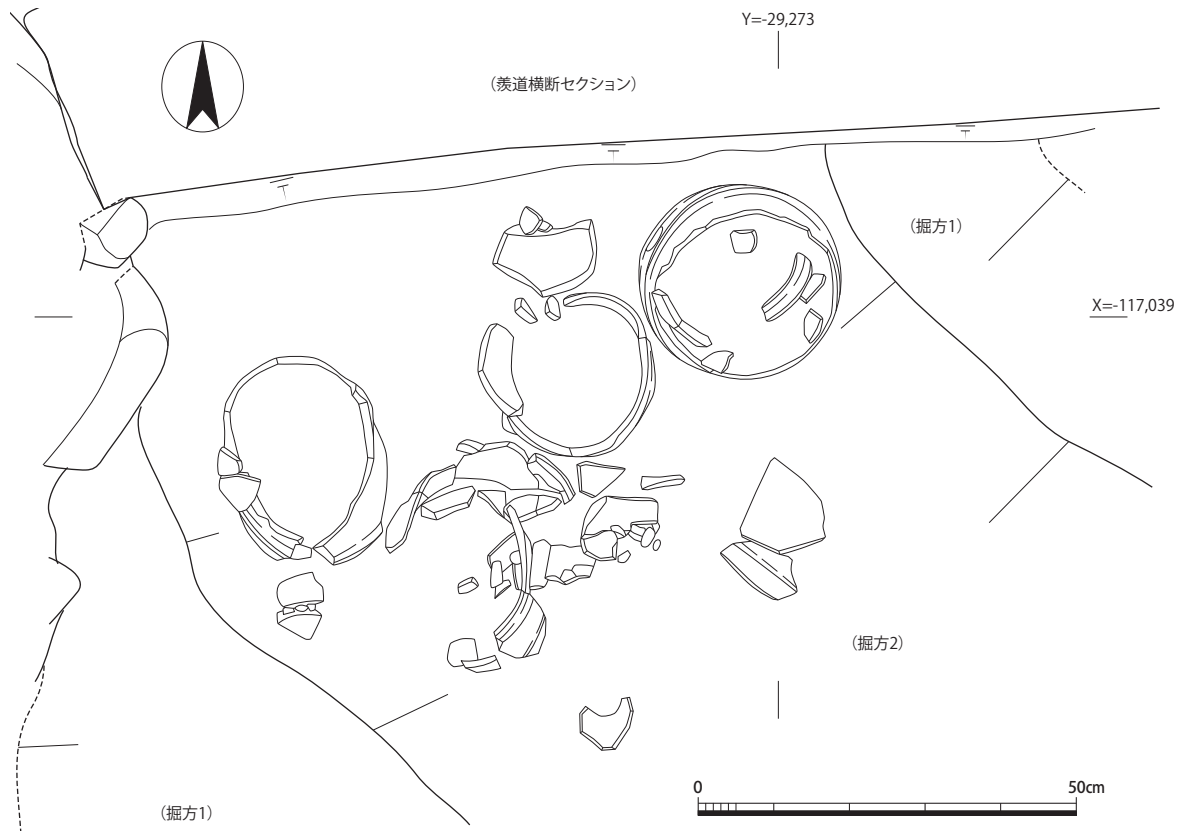


図13 羨道延長部埴輪群出土状況図（1：10）

を受けたために歪な配置をとっていると考えたほうが自然であろう。掘方2の幅は1m程で、埴輪の径は個体差があるが0.25～0.3mである。1mの幅に埴輪4本を樹立するのは困難であり、1本のみ南側に突出して配置したものと考えられる。その場合、なぜ埴輪が樹立されたかを考える必要があるが、掘方2を墓道と考えるならば、埋め戻した後に墓道の位置を示すための目印として埴輪を利用した可能性が想定される。

石組み溝1(図14・15) 石組み溝1は、2014年度の調査でその存在が明らかになった遺構である。横穴式石室を検出する以前の段階において埋葬施設に伴う排水溝と考えていたが、調査が進展するにつれてこの石組み溝は芝古墳に伴う遺構ではあるが構造的に排水溝とは考えられないことが判明した。

この石組み溝は、後円部中央からほぼ西に向かってのびる。西端は既に遺存しておらず、東端についても後世の土坑によって破壊され、横穴式石室とどのような関係にあったかは不明であるが、位置関係から横穴式石室の北西隅に向かって伸びていると考えられる。長さ4.4m以上で幅0.5mほどの規模を有しており、蓋石の数では19石目まで確認出来る。横穴式石室の床面より1.6m程の高い位置にある。底石を両側石で挟みこみ、その上に蓋石を配する。各石材の平坦な面を内側にむけるように構築しており、断面は「口」字形を呈する。

蓋石の高さを見ると、西から1石目と19石目では0.5mほどの高低差がある。墳丘の中心に向かって低くなっており、構造的に排水溝とは考えられない。2014年度の調査時に西から数えて2・6・9石目の蓋石を取り上げ内側の構造の確認を行っているが、蓋石の下面から数cmで底石の上面

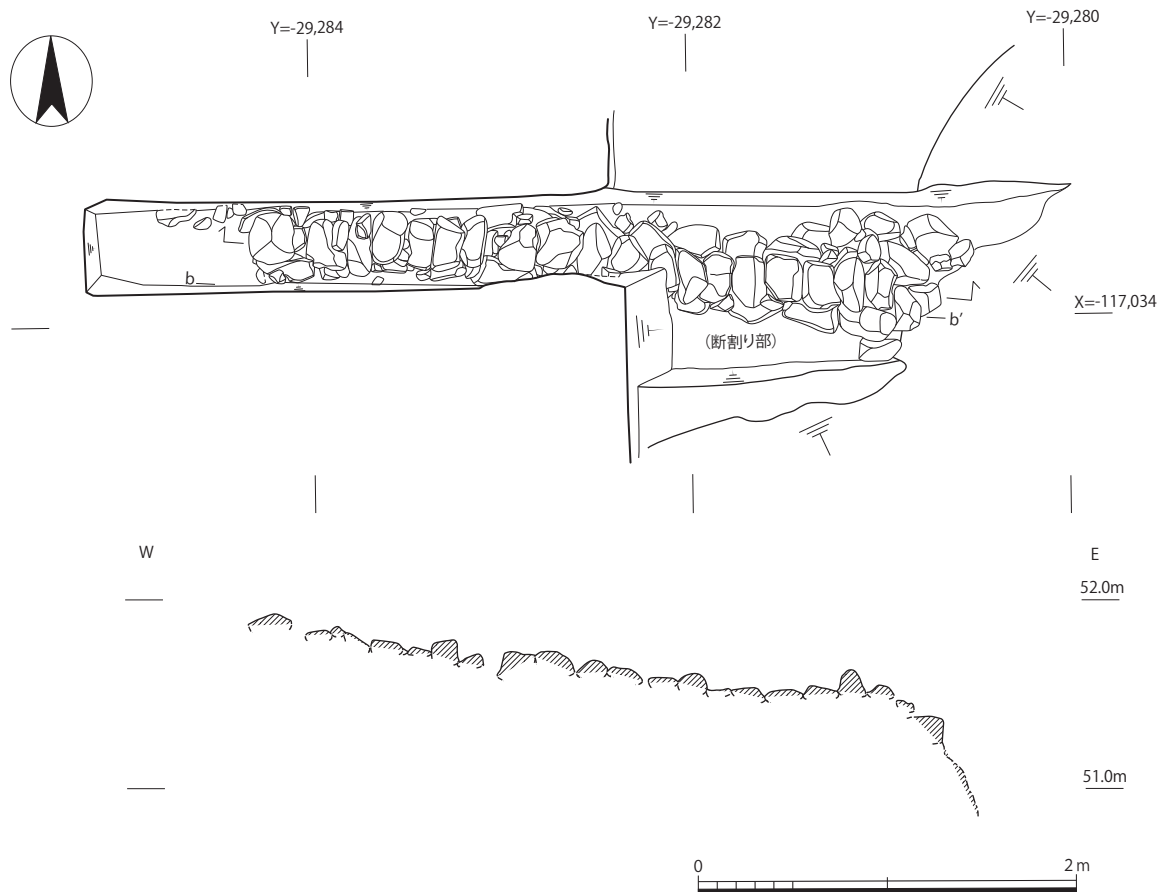


図14 石組み溝1実測図(1:40)

に至るのを確認している。

石組み溝は墳丘盛土の下に位置しており、埋め殺される性格のものであったと考えられる。7石目と12石目にそれぞれ傾斜の変化が認められるが、これは上部の墳丘盛土と対応している。石組み溝1の上部の墳丘盛土の断面を図化したものが図15である。この図によると盛土は大きく5つのまとまりに分かれる。ここでは盛土1(50～53層)、盛土2(38～49層)、盛土3(33～37層)、盛土4(5～32層)、盛土5(4層)と呼称する。この断面図からは、墳丘の中心から外側に向かって盛土を施して墳丘を築いていることが分かる。このうち、西から7石目までは盛土3、8石目～12石目までは盛土2、13石目以西は盛土1と対応する位置関係にある。盛土の単位と傾斜変換点の存在から考えると、この石組み溝は東端から西端まで一気に造られたのではなく、少なくとも3段階に分けて構築されたものと推察される。おそらくは石組み溝を西から12石目まで構築した段階で盛土1を施し、その後に再び石組み溝を7石目まで築き盛土2を施す。そして7石目以西を築いて盛土3を積む。このような行程を繰り返すことによってこの石組み溝は構築されたと考えられる。構造的には横穴式石室の床面にみられる排水溝と類似するものの、位置関係をみ限り性格を異にする遺構と考えられる。管見の限りにおいて他に類例もなく不明な点が多いが、この石組み溝が墳丘盛土の単位と相関関係にあることを考えるならば、墳丘の構築と関係する遺構と推察される。

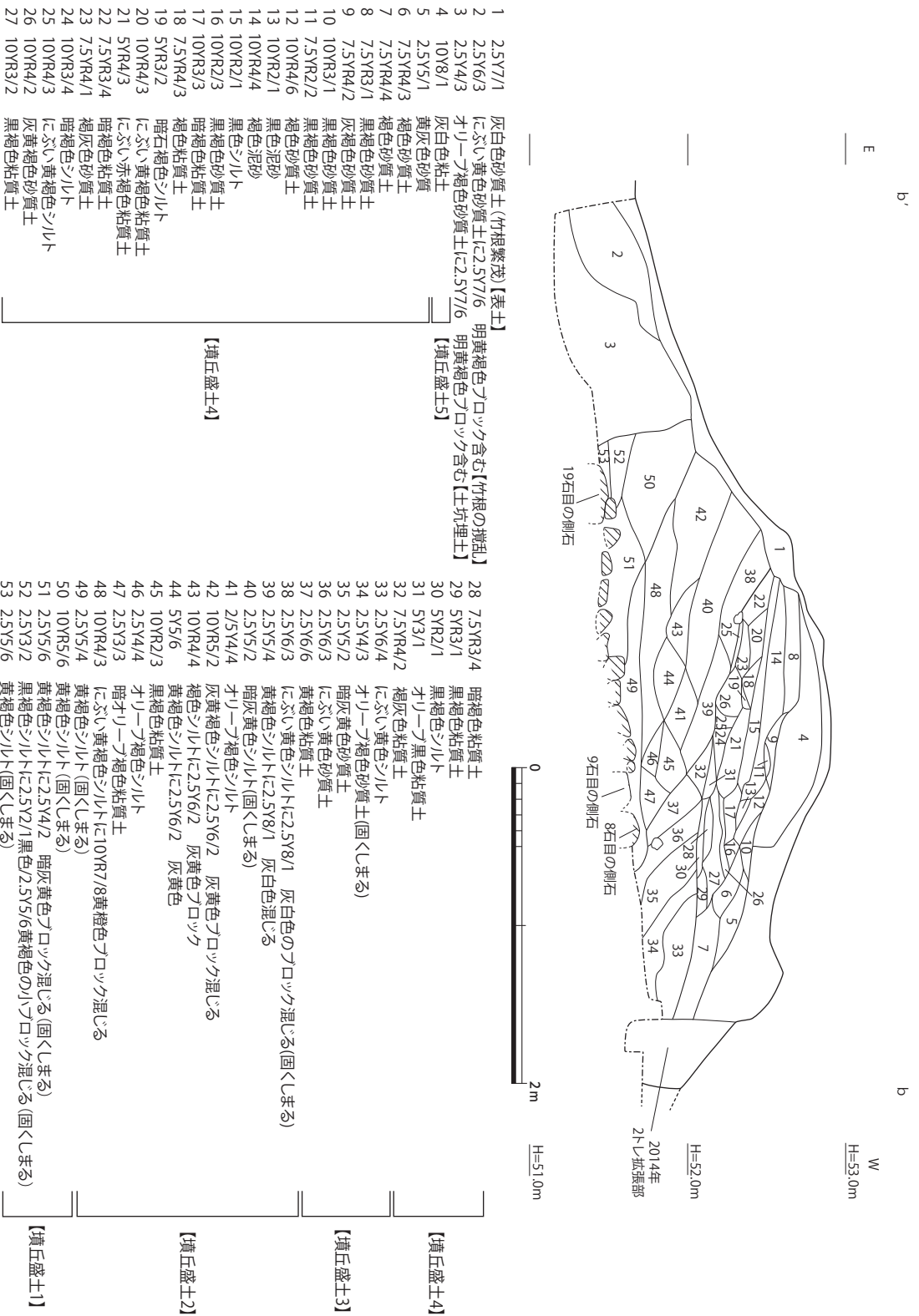


図 15 b-b'セクション断面図 (1:40)

石組み溝2 (図16・17) 後円部中央から南西にむかってのびる石組み溝である。横穴式石室の床面より1.35mほど高い位置にある。長さ2.35m以上で幅0.5mほどの規模を有する。蓋石は9石目まで確認できる。南端は既に遺存しておらず、北端についても横穴式石室の石材抜き取りにともなう土坑によって破壊されているが、石室の南西隅にむかってのびる可能性がある。底石を両側石で挟みこみ、その上に蓋石を配する構造をとる。各石材の平坦な面を内側にむけて構築している。南端部は既に蓋石が遺存せず底石が露出しているが、そこで蓋石と底石の間は数cmしかないことを確認している。蓋石の高さはほぼ水平だが、北から5石目付近で主軸が若干西に振れる。この石組み溝の上部にはほとんど盛土が遺存していなかったが、断割りの断面からこの地点に関しても大きな盛土の単位の境に当たることが判明した。この石組み溝2についても、埋め殺される性格のものであったと考えられる。構築方法・構造・横穴式石室との位置関係において石組み溝1と非常に良く似る。

(2) 6区 (図18)

6区は前方部の南東角付近に設けた調査区である。芝古墳の墳丘東側は後世の改変を受けている。そのため、等高線や地形観察から西側墳丘裾の位置を推定し、それを墳丘主軸を基点に反転して平面プランの復元を行い調査区を設定した。

この調査区では土坑1基と溝1条、落ち込みを1基確認した。いずれも古墳に伴う遺構ではないと考えられる。以下、各遺構に関して述べる。

土坑 調査区の西端部で検出した。竹チップからなる層の直下で成立する。径は約1.3m、深さは1.1m程である。遺物等は認められない。遺構の形態や埋土の状況が、2014年に調査を実施した3区で確認している近世墓と非常によく似ていることから、この土坑に関しても近世墓である可能性が高い。

溝 調査区の東半部で検出した。南北方向の素掘りの溝で、調査区外に続く。幅は0.6mで、深さは0.55mある。最下層より須恵器片と埴輪片が1片ずつ出土したのみである。竹根の攪乱がひどく平面検出は困難であったが、調査区北半の断割り断面で検討を行った結果、後述する落ち込みを切って成立していると考えられる。

落ち込み 調査区の東端部で検出した。土坑ないし溝の西肩口と考えられる。深さは0.6mである。7層より須恵器片と埴輪片が1片ずつ出土したのみである。6層には炭化した木材を多く含むが、この木材は腐敗がそれほど進んでおらず新しいものである。芝古墳の周辺では筍栽培が活発であり、それに伴う大きな土坑が所々で見受けられる。この落ち込みも筍栽培に伴う土坑の可能性が想定できる。

以上、6区の様相について述べたが、ここでは古墳に伴うと考えられる遺構は確認できなかった。特に2014年度に調査を実施した3・4区では周溝を確認していたが、本調査地ではその跡を全く確認することが出来なかった点は注目される。地山の高さから考えると、6区付近には当初から周溝が巡っていなかった可能性が高く、墳丘の復元を行う上で非常に興味深い。

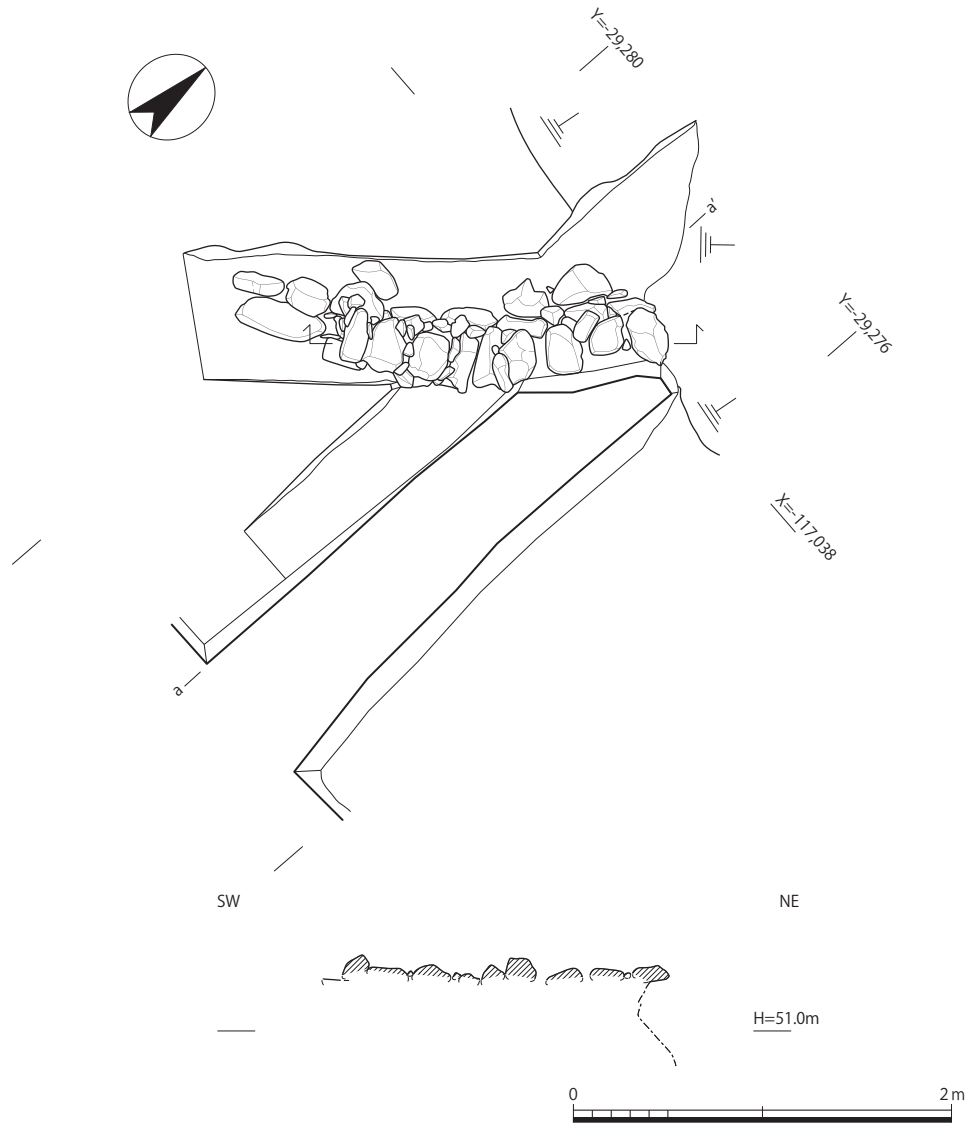
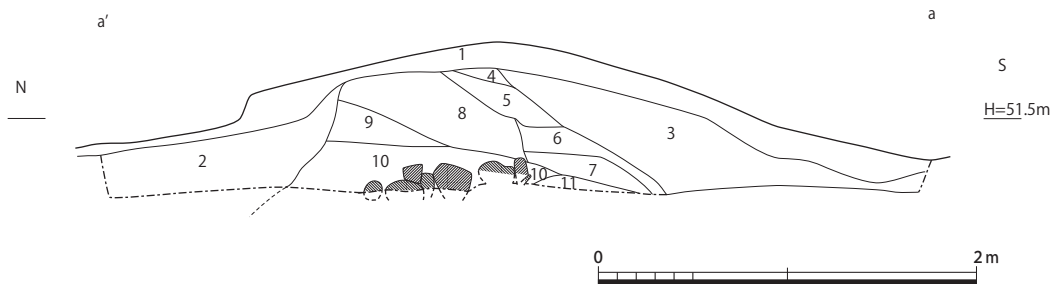


図16 石組み溝2実測図 (1:40)



- | | | | |
|----|---------|---------------------------|------------------------|
| 1 | 5Y8/1 | 灰白色砂質土(竹根が多く入る) | 【表土】
【土坑埋土】
【流土】 |
| 2 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色砂質土 | |
| 3 | 10YR6/3 | にぶい黄橙色砂質土(固く締まる) | |
| 4 | 2.5Y3/1 | 黒褐色シルト | 【墳丘盛土】 |
| 5 | 2.5Y7/6 | 黄褐色シルトに2.5Y8/1灰白色ブロック混じる | |
| 6 | 7.5Y3/1 | 黒褐色粘質土 | |
| 7 | 2.5Y6/6 | 明黄褐色粘質土 | |
| 8 | 2.5Y3/1 | 黒褐色粘質土 | |
| 9 | 2.5Y5/3 | 黄褐色シルトに7.5Y8/1褐灰白色ブロック混じる | |
| 10 | 10YR5/8 | 黄褐色シルト | |
| 11 | 5Y2/1 | 黒色粘質土 | |

図17 a~a'セクション断面図 (1:40)

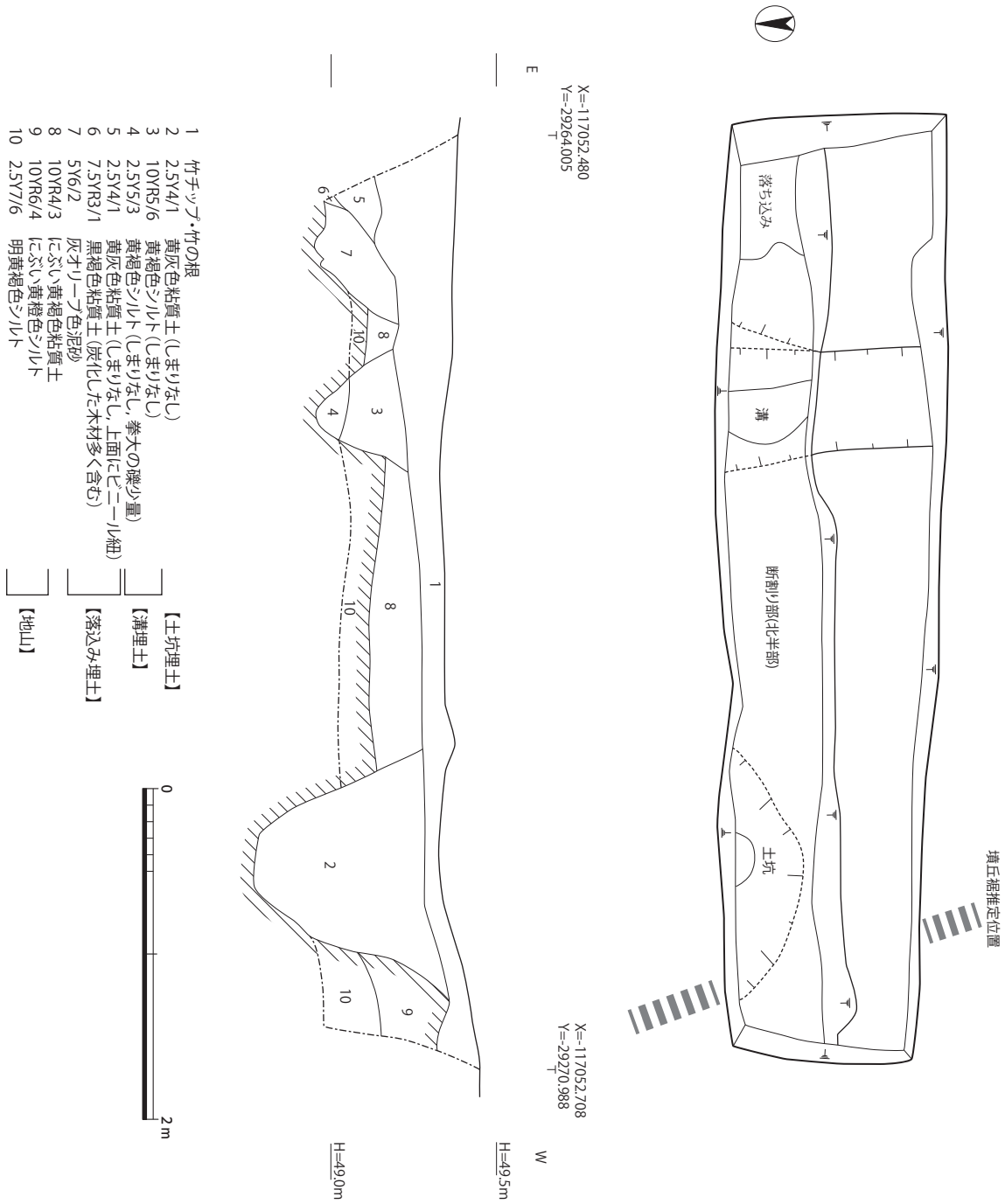


図18 6区平面および北壁断面図(1:40)

3. 遺物（図19，表2）

今年度の調査ではコンテナ8箱分の遺物が出土した。種類としては埴輪・土師器・須恵器・瓦器・鉄器・馬具などである。6区では須恵器と埴輪がごく少量出土したのみであり、遺物のほとんどは5区より出土した。

5区で出土した遺物のうち、古墳に伴う遺物としては埴輪・土師器・須恵器・鉄器・馬具がある。このうち、原位置もしくはそれに近い状態を保っていると考えられるのは前述の須恵器群のみである（図10・12）。

須恵器群1のうち、有蓋高坏と無蓋高坏を図化した（図12の須恵器1と5・6）。1は有蓋高坏の蓋である。口径は11.3cmで器高は5.9cmとなる。天井部に頂部が凹んだつまみがついており、このつまみを中心に櫛描列点文が施される。体部と天井部の間には凹線が巡り、口縁端部には面を有する。

2は有蓋高坏の身である。器高は9.6cmで、口径は9.0cmと非常に小ぶりである。1段3方向の長方形の透かしを有し、受け部の先端を丸くおさめている。体部に「×」形のヘラ記号が認められる。1と2は副葬時にセット関係にあったものと考えられる。

3は須恵器群1で唯一の無蓋高坏である。器高は11.7cmで、口径11.0cmとなる。脚部は細く長い。裾部はラッパ状に広がり、1段3方向の長方形の透かしを有する。杯部はやや深く、外面にはつまみ出した凸帯と沈線を巡らし、その間に櫛描波状文を施す。脚部に「×」形のヘラ記号が認められる。

これらの須恵器はMT15型式に位置付けられる。無蓋高坏はMT15型式の特徴を色濃く持つが、有蓋高坏に関しては受け部先端のつくりや口径などの点において当該期の標準的なものとは異なった様相を示す。今回、5組の有蓋高坏が出土しているが、そのすべてに①受け部先端に面を持たない②径が小さい③杯部に「×」形のヘラ記号を有するという共通点が認められる。これに対して無蓋高坏はMT15型式の標準的な特徴を有するが、有蓋高坏と同様の「×」形のヘラ記号を脚部に有する。同じヘラ記号＝同一工房ないしは同一工人による製品と考えるならば、生産体制を考える上でも非常に興味深い。なお、今報告で掲載できなかった遺物については総括報告書において報告する予定である。

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代	円筒・朝顔形埴輪・土師器 須恵器・鉄器など		3点(本報告書掲載分)		
古墳時代以降	須恵器・土師器・瓦器など		0点(本報告書掲載分)		
合計		11箱	3点(計8箱)	1箱	2箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より3箱多くなっている。

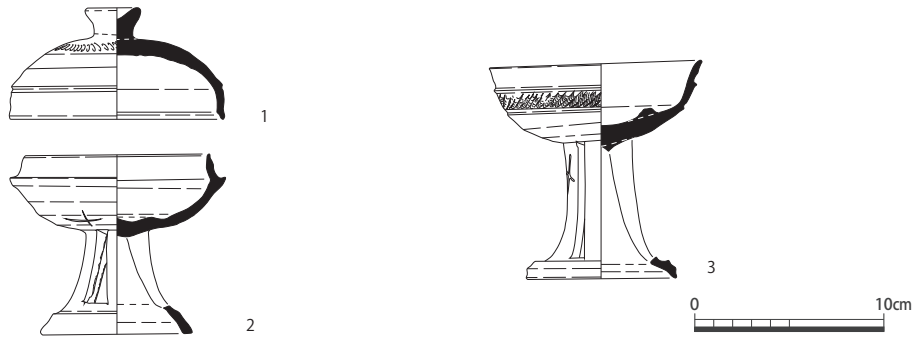


図19 玄室出土須恵器実測図（1：4）

4. まとめ（図20）

以上、2015年度の発掘調査についての概要を報告した。成果をまとめると、以下の5点となる。

まずは、芝古墳の埋葬施設として横穴式石室を確認した点である。これは現時点で乙訓最古の横穴式石室と考えられ、芝古墳の評価のみに留まらず乙訓における横穴式石室の導入を考える上で貴重な資料となろう。次に、横穴式石室から須恵器が出土した点である。これまで埴輪からおおよその年代を想定していたが、今調査で須恵器が出土した事で芝古墳の時期を明確に押さえることが可能になった（MT15型式）。3点目は、古墳に伴う石組み溝を2条確認した事である。現時点で他に類例はなく不明な点も多いが、埴丘の構築や横穴式石室との関係性を考えると非常に興味深い。4点目は、樹立された可能性を有する埴輪を検出した点である。これまで、芝古墳では樹立されている状態の埴輪は確認出来ておらず、埴丘を復元する上で新たな知見となる可能性がある。最後は、前方部の南東角付近には周溝が存在しない可能性が高まった点である。これは埴丘の様相を復元する上で非常に重要な成果である。また、芝古墳に後続する首長墓と考えられる井ノ内車塚古墳でも前方部南東隅で周溝が途切れることが判明しており、同一首長系譜における埴丘の様相を考える上でも興味深い³⁾。

これまでの一連の調査により芝古墳を乙訓の中で明確に位置づけることが可能になった。今後も調査を継続して芝古墳の実態に更に迫っていききたい。その際、これまでの調査で明らかになっている石組み溝・掘方と横穴式石室の関係性や、周溝の在り方は今後の課題となろう。（熊井 亮介）

註

- 1) ここでいう「乙訓」という地域は、旧制の乙訓郡を中心として、隣接する葛野郡南部の一部の地域を含めた地域の総称として使用している。
- 2) 1次調査（測量）：京都府教育委員会「向日丘陵地周辺遺跡分布調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概要（1968）』1968。
2次調査（測量）：宇野隆志「芝1号墳」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成25年度』京都市文化市民局，2014。
3次調査（発掘）：熊井亮介「芝古墳」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成26年度』京都市文化市民局，2015。
- 3) 長岡京市教育委員会「井ノ内車塚古墳第4次発掘調査概要-長岡京跡右京第1028次調査-」『長岡京市文化財調査報告書』第61冊，2012。

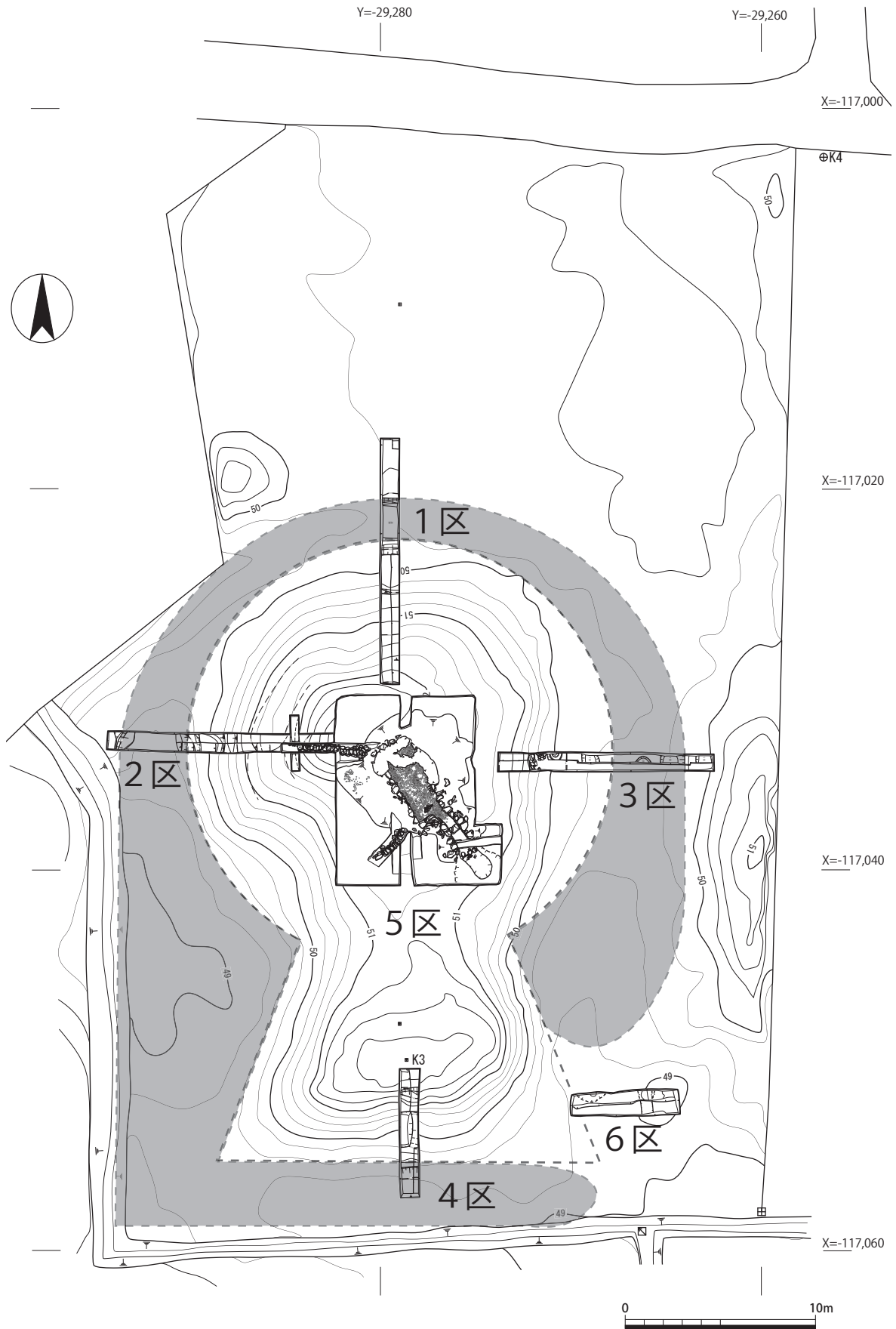


図20 墳丘復元図 (1 : 300)

報 告 書 抄 録

ふりがな	きょうとしないいせきはつくつちょうさほうこく へいせい27ねんど							
書名	京都市内遺跡発掘調査報告 平成27年度							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	馬瀬智光・家原圭太・西森正晃・鈴木久史・奥井智子・赤松佳奈・新田和央・熊井亮介・熊谷舞子・黒須亜希子							
編集機関	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課							
所在地	〒604-8006 京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町394 Y・J・Kビル2階							
発行所	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課							
発行年月日	西暦2016年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきゆうだいでくてんあじ 平安宮大極殿跡・ じゅうらいせき 聚楽遺跡	きょうとしなかみやうくじゅうらく 京都市上京区千本 しもたちうりさが ちやまちよう 下立売下る小山町 873	26100	2 237	35度 01分 46秒	135度 45分 23秒	2014年12月 8日～2014 年12月18日	33㎡	個人住宅
へいあんきゆうだいでくてんあじ 平安宮大極殿跡・ じゅうらいせき 聚楽遺跡	きょうとしなかみやうくじゅうらく 京都市中京区聚楽 まわりひがしまち 廻東町32-5	26100	2 237	35度 01分 06秒	135度 44分 32秒	2015年2月 9日～2015 年2月20日	27.5㎡	個人住宅
へいあんきゆうちようどういんあじ 平安宮朝堂院跡・ じゅうらいせき 聚楽遺跡	きょうとしなかみやうくじゅうらく 京都市中京区聚楽 まわりひがしまち 廻東町25	26100	2 237	35度 00分 57秒	135度 44分 30秒	2015年2月 12日～2015 年3月20日	191㎡	範囲確認
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安宮大極殿跡・ 聚楽遺跡	宮殿跡 集落跡	江戸時代	土坑	土器 瓦				
平安宮大極殿跡・ 聚楽遺跡	宮殿跡 集落跡	江戸時代	土坑	土器 瓦				
平安宮朝堂院跡・ 聚楽遺跡	宮殿跡 集落跡	平安時代 古墳時代	基壇盛土 溝・瓦溜り	土器 瓦		延祿堂基壇 階段・西回廊 東西落溝		

報告書抄録

ふりがな	きょうとしなしいせきはつちつちょうさほうこく へいせい27ねんど							
書名	京都市内遺跡発掘調査報告 平成27年度							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	馬瀬智光・家原圭太・西森正晃・鈴木久史・奥井智子・赤松佳奈・新田和央・熊井亮介・熊谷舞子・黒須亜希子							
編集機関	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課							
所在地	〒604-8006 京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町394 Y・J・Kビル2階							
発行所	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課							
発行年月日	西暦2016年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきゆうぶらくでんあと 平安宮豊楽殿跡・ 鳳瑞遺跡	きょうとしなかながきょうくじゅうらく 京都市中京区聚楽 まわりにしまち 廻西町86-3, 87	26100	2 236	35度 01分 04秒	135度 44分 24秒	2015年9月 1日～2015 年10月2日	117㎡	範囲確認
へいあんきょうさきょうごじょう 平安京左京五条 さんぼうじゅうちやうあと 三坊十町跡・ からすまあやのこうじいせき 烏丸綾小路遺跡	きょうとししもぎょうく 京都市下京区 あやのこうじとおりからすまに 綾小路通り烏丸西入 童侍者町160.161	26100	1 712	34度 59分 15秒	135度 45分 19秒	2015年7月 15日～2015 年8月31日	90㎡	個人住宅
ぞんしょうじあと 尊勝寺跡・ おかざきいせき 岡崎遺跡	きょうとしさきまうくおかざき 京都市左京区岡崎 ざいしょうじちやう 最勝寺町6-4	26100	417-2 418	35度 00分 49秒	135度 46分 46秒	2015年6月 15日～2015 年7月17日	72㎡	個人住宅
やましなほんがんにんでんあと 山科本願寺南殿跡	きょうとしやましくおとわ 京都市山科区音羽 いせじゅうちやう 伊勢宿町32-102	26100	629	34度 59分 05秒	135度 49分 15秒	2015年1月 26日～2015 年2月20日	49.5㎡	個人住宅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
平安宮豊楽殿跡・ 鳳瑞遺跡	宮殿跡 集落跡	平安時代	基壇盛土 礎石根固め跡		瓦 凝灰岩少量		豊楽殿の建物規模が 確定	
平安京左京五条 三坊十町跡・ 烏丸綾小路遺跡	都城跡 集落跡	弥生時代 古墳時代 平安時代 鎌倉～室町時代	竪穴建物 井戸 土坑 地業		山陰系土師器甕 土師器, 須恵器, 黒色土器 瓦器, 焼締陶器, 輸入陶磁器		綾小路に面した下京の 土地利用の変遷が判明	
尊勝寺跡・ 岡崎遺跡	寺院跡 集落跡	弥生～古墳時代 平安時代	溝 ピット 木組遺構		瓦 土師器		尊勝寺の造営に伴う 整地層を検出	
山科本願寺南殿跡	邸宅跡	室町～江戸時代	溝(堀)		土師器 焼締陶器		南殿の土塁にともなう 堀を検出	

報告書抄録

ふりがな	きょうとしないいせきはつかつちようさほうこく へいせい27ねんど							
書名	京都市内遺跡発掘調査報告 平成27年度							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	馬瀬智光・家原圭太・西森正晃・鈴木久史・奥井智子・赤松佳奈・新田和央・熊井亮介・熊谷舞子・黒須亜希子							
編集機関	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課							
所在地	〒604-8006 京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町394 Y・J・Kビル 2階							
発行所	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課							
発行年月日	西暦2016年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とぼりきゆうあと 鳥羽離宮跡	きょうとしふしみくなかじま 京都市伏見区中島 まえやまちよう 前山町22	26100	1166	34度 56分 53秒	135度 44分 39秒	2015年2月 23日～2015 年3月13日	73㎡	個人住宅
ふしみじょうあと 伏見城跡	きょうとしふしみくももやま 京都市伏見区桃山 ちくせんたいちちよう 筑前台町27-4他	26100	1172	34度 56分 03秒	135度 42分 13秒	2015年4月 16日～2015 年6月19日	295㎡	個人住宅
ながおかきょうあと 長岡京跡・ よどじょうあと 淀城跡	きょうとしふしみく 京都市伏見区 よどきづちよう ほか 淀木津町他	26100	3 1191	34度 54分 17秒	135度 42分 49秒	2015年8月 24日～2015 年9月24日	2470㎡	自然崩壊に 伴う緊急 調査
しばこふん 芝古墳	きょうとしにしきようく 京都市西京区 おおはらのいのみちよう 大原野岩見町 632-3	26100	1048	34度 58分 09秒	135度 40分 46秒	2015年10月 1日～2015 年11月20日	86㎡	範囲確認
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
鳥羽離宮跡	離宮跡	平安時代	汀線・景石抜き取り穴	瓦・土師器・須恵器		従来、池の中に復元 されていた場所で汀を 確認		
伏見城	城跡	安土桃山～ 江戸時代	壺堀地業・土坑 柱穴など	土師器・陶器・陶磁器・瓦		推定 前田屋敷地内の調査		
長岡京跡・ 淀城跡	都城跡 城跡	江戸時代	池・石垣・石組枅 集石遺構	陶磁器・瓦		淀城内高嶋に築かれた 池などを確認した		
芝古墳	古墳	古墳時代	横穴式石室 石組み溝2条	土師器・須恵器・埴輪 鉄製品		芝古墳の埋葬施設を 確認		

圖 版



1 調査区全景(東から)



2 断割調査中央部北壁(南東から)

図版2 平安宮大極殿跡・聚楽遺跡（2） 遺構



1 調査区全景（南から）



2 断割調査区1東壁（西から）



1 東半全景（西から）

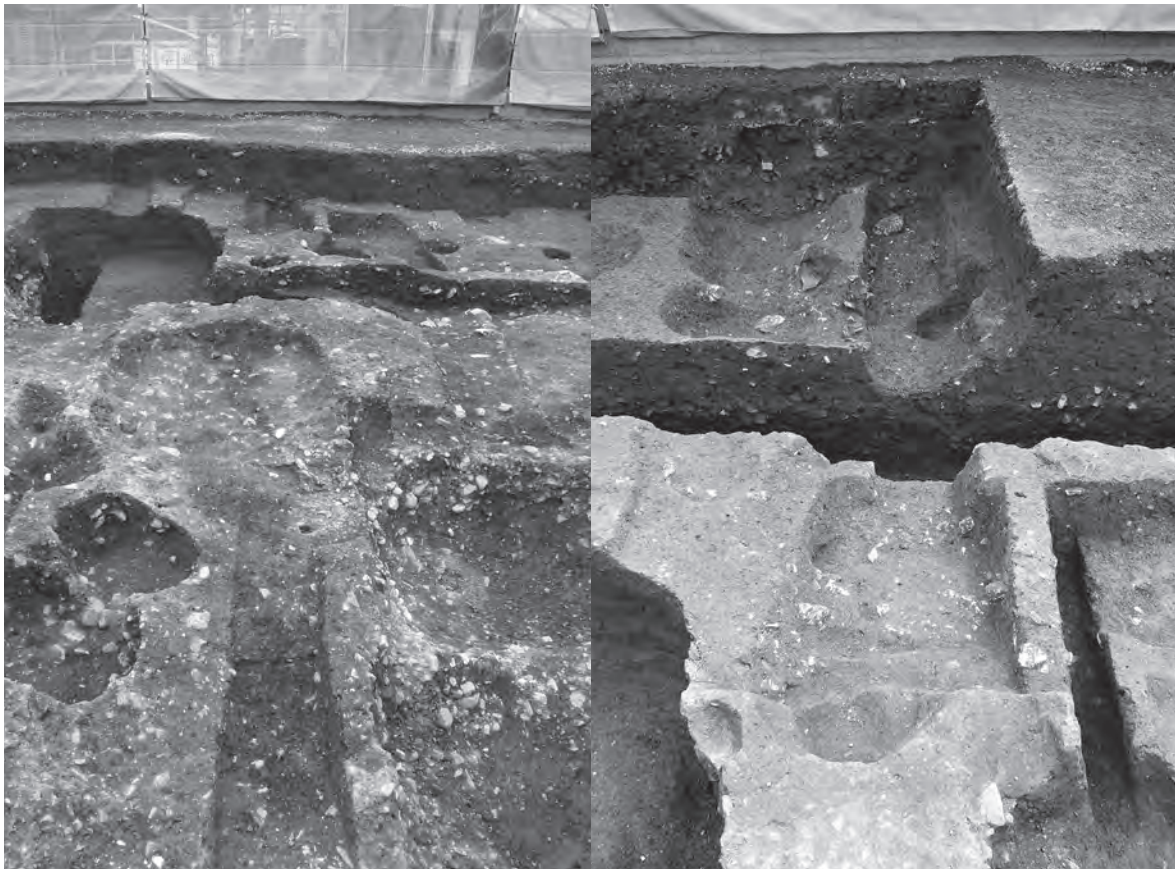


2 階段と延祿堂基壇（南西から）

図版4 平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡 遺構



1 階段全景（北西から）



2 延祿堂西縁（溝 25）と階段（北から）

3 階段以南の溝 25（北から）



1 再拡張区全景（北から）



2 溝63断面（北西から）

図版6 平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡 遺構



1 西半全景（東から）



2 瓦溜り34（東から）



3 溝38（北から）



出土瓦類





54



63



61



69



62



72



71



1

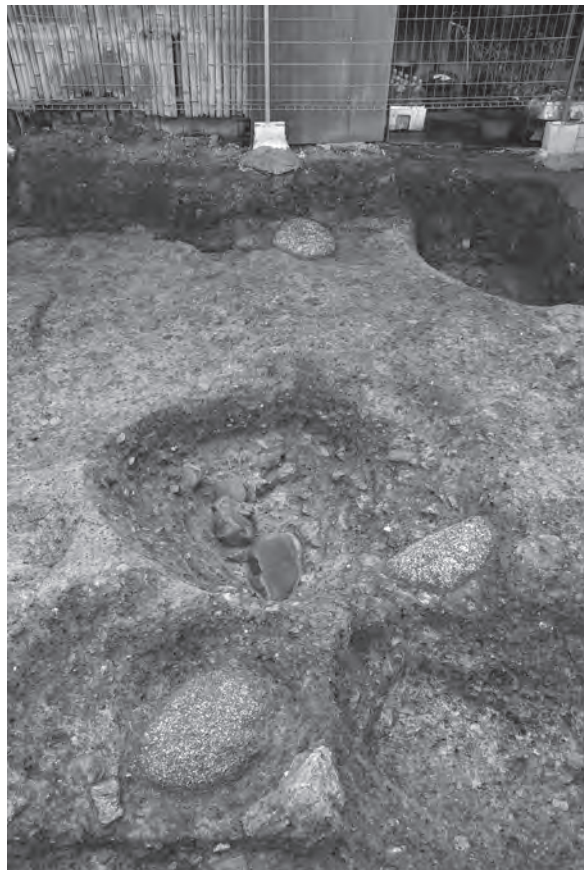


13

図版10 平安宮豊楽殿跡・鳳瑞遺跡 遺構



1 東区全景（西から）



2 根固め2・5検出状況（西から）



3 根固め3（南西から）



1 根固め2断面（南東から）



1 根固め1 (南東から)



2 攪乱3北壁・根固め4 (南西から)



1 西区全景（東から）



2 根固め（壺掘地業）6（南東から）

図版14 平安宮豊楽殿跡・鳳瑞遺跡 遺構



1 根固め（壺掘地業）7（南から）



2 根固め（壺掘地業）9（南東から）



3 根固め（壺掘地業）8（南東から）



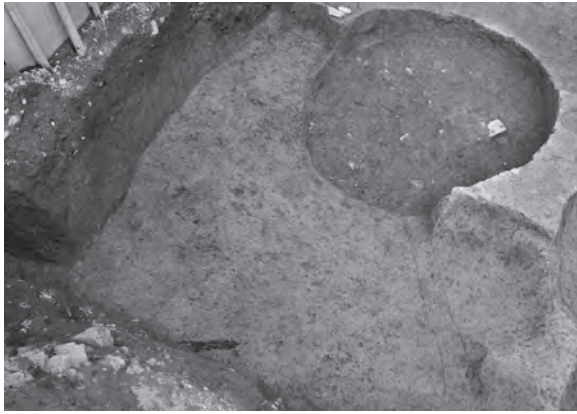
1 第6面全景（北東から）



2 竪穴建物1218完掘状況（北東から）



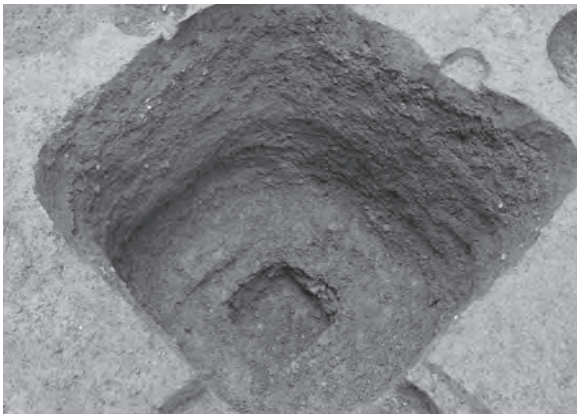
3 土坑1220遺物出土状況（東から）



1 竪穴建物1218検出状況（北東から）



2 井戸1200断面（南から）



3 井戸1200完掘状況（北東から）



4 井戸1200断面（南から）



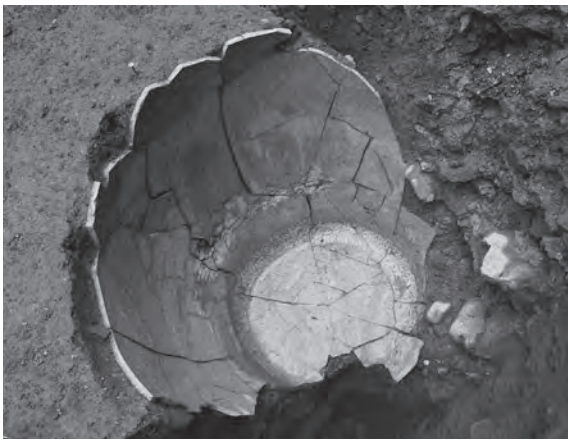
5 第5面全景（北東から）



1 土坑1081遺物出土状況（北西から）



2 土坑1100遺物出土状況（東から）



3 土坑1081完掘状況（北西から）



4 土坑1100断面（東から）



5 土坑1172検出状況（南東から）



6 土坑1160遺物出土状況（北西から）



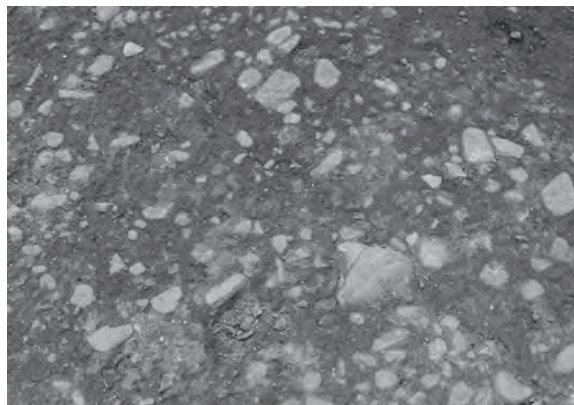
1 第4面全景（北東から）



2 地業5検出状況（北から）



3 土坑1072断面（南東から）



4 路面3近接風景（北東から）



1 第3面全景（南から）



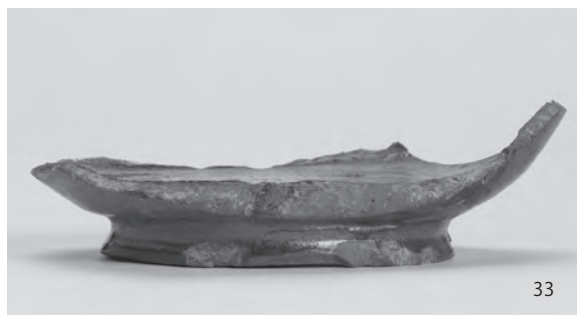
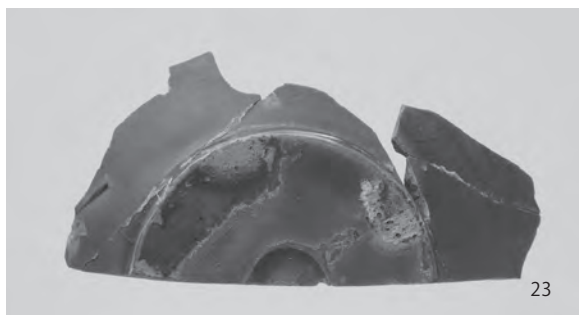
2 第2面全景（北東から）



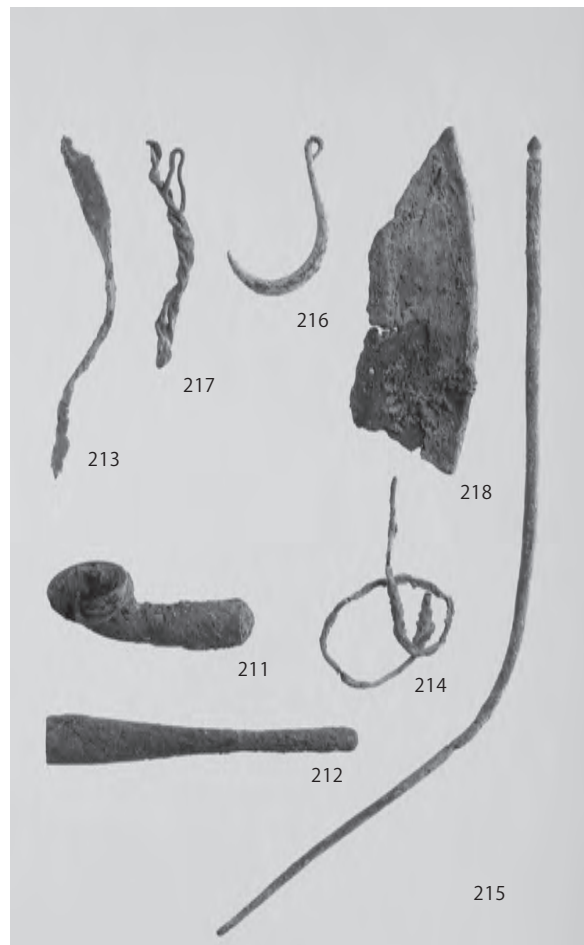
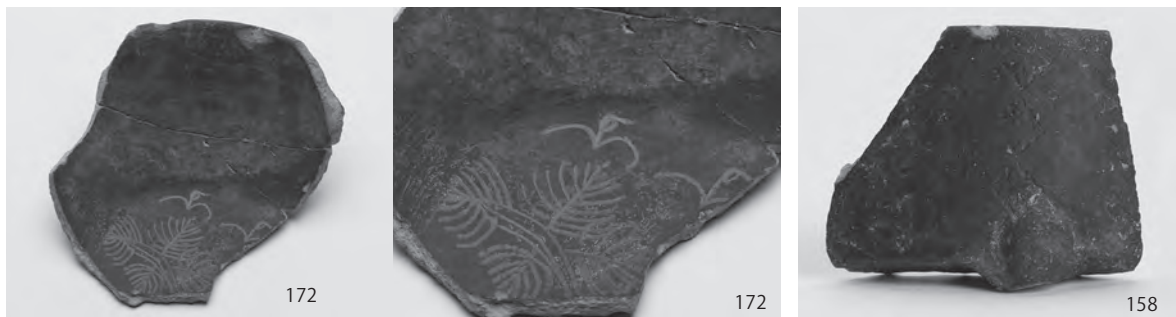
3 土坑1062断面（北東から）



4 第1面全景（北東から）







出土遺物 3



1 1区全景（北から）



2 2区全景（北から）



1 断割調査区1 (西から)



2 断割調査区1 木組遺構 (北から)



3 2区 溝1 (東から)



1 1区第2面全景（北から）



2 1区溝1断面（北から）



1 2区 第2面全景（西から）



2 2区瓦溜りA検出状況（南東から）



1 2区北壁トレンチ断面(南西から)



2 2区瓦溜りA検出状況(南から)



3 2区礎石4検出状況(南から)



4 試掘調査2Tr.全景(東から)

図版28 鳥羽離宮跡 遺構



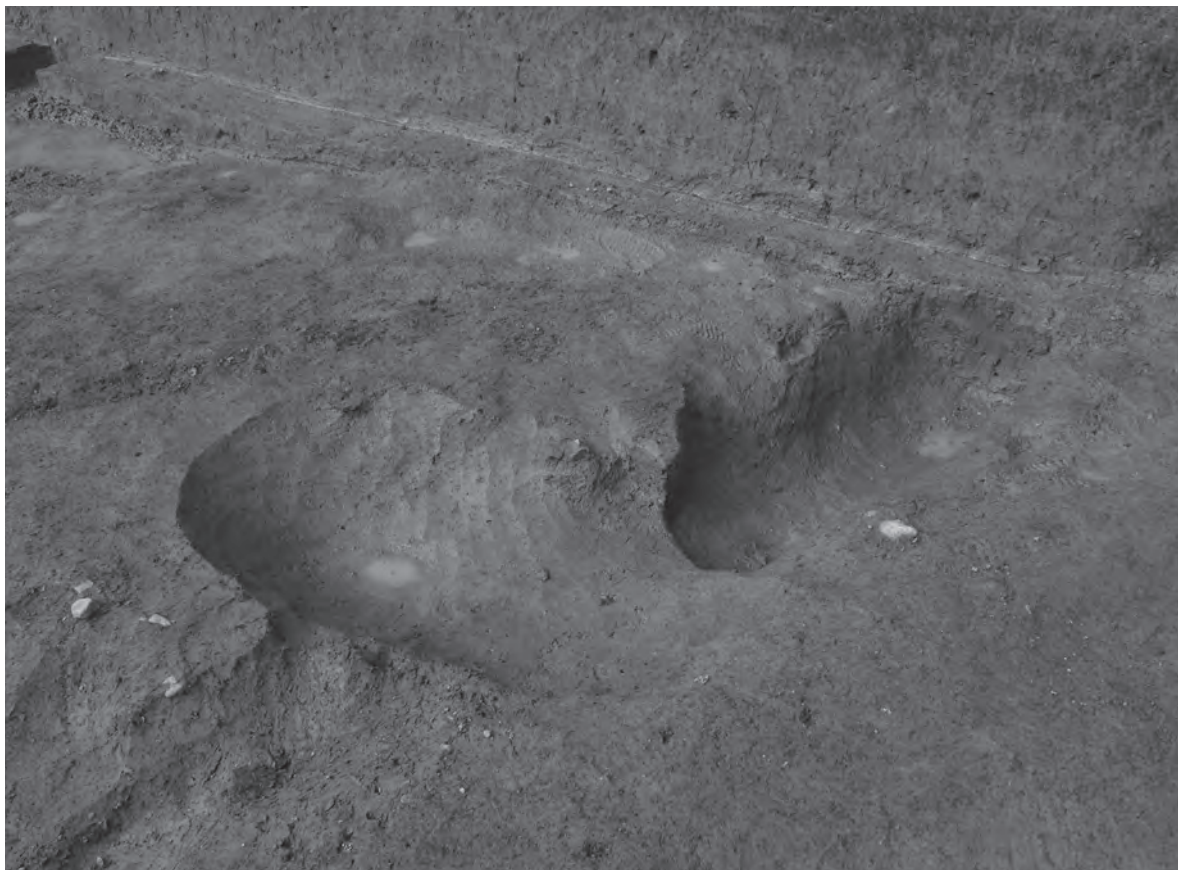
1 検出状況（南西から）



2 洲浜（南東から）



1 洲浜の礫敷き（南西から）



2 景石抜き取り穴（北東から）

図版30 伏見城跡 遺構



1 北側調査区全景（北から）



2 南側調査区全景（西から）



1 南側調査区東半検出（北西から）



2 壺地業81及び77検出（北から）



3 壺地業81抜き取り穴断面（西から）



4 壺地業81据付石検出（西から）



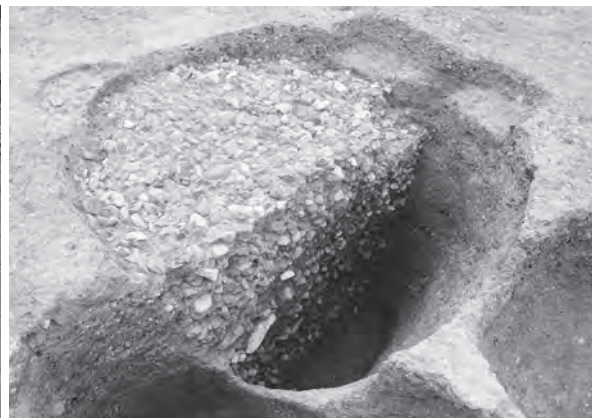
5 壺地業81断面（西から）



6 壺地業30断面（南東から）



7 壺地業10検出（南から）



8 壺地業10断面（北東から）

図版32 伏見城跡 遺構



1 壺地業80断面（南から）



2 壺地業76断面（南から）



3 調査区西壁北半造成土断面（北東から）



4 調査区西壁南半造成土断面（北東から）



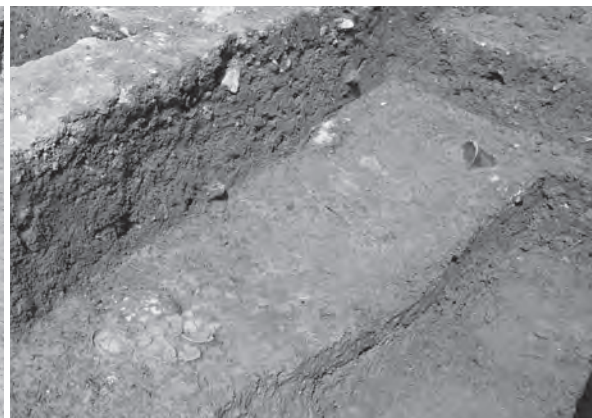
5 造成土断面（東から）



6 壺地業10及び造成土断面（東から）



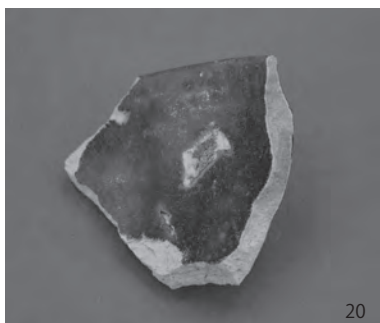
7 土坑56（南西から）



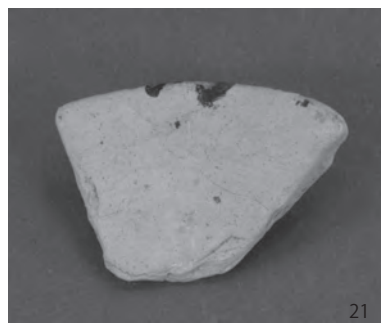
8 土坑56中層遺物出土状況（南西から）



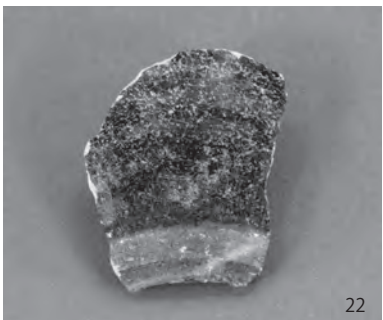
19



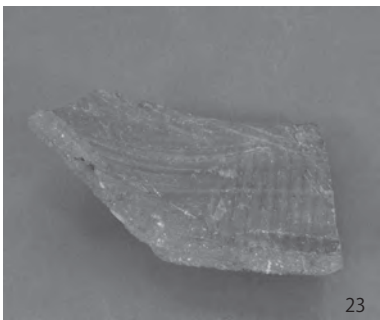
20



21



22



23



25



34-1



34-2

遺物報告No: 出土位置

19・20: S K 56下層

21・22: 壺地業81抜き取り穴

23: 壺地業10

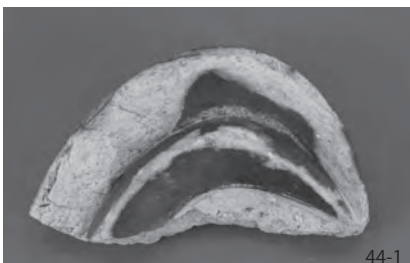
25: 地業122

34: S K 56中層

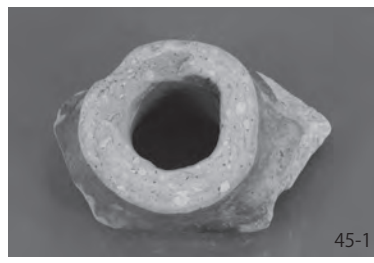
※写真のみで報告分

44: S K 56上層

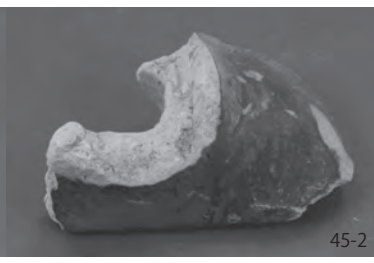
45~47: S K 56下層



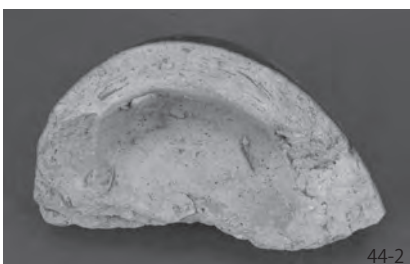
44-1



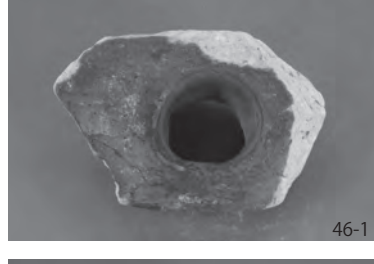
45-1



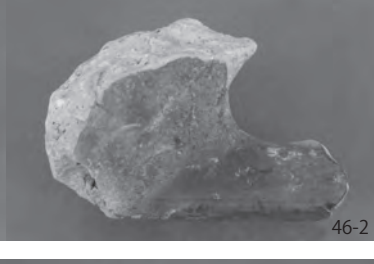
45-2



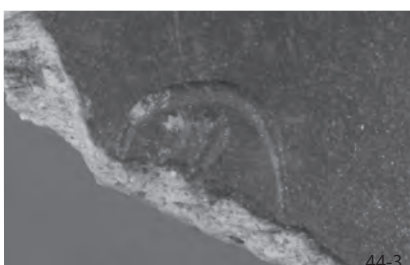
44-2



46-1



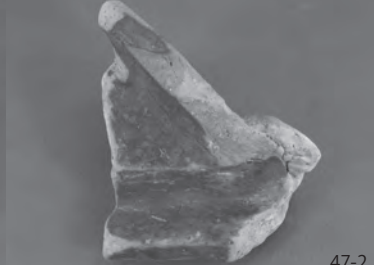
46-2



44-3



47-1



47-2

出土遺物



1 南区第2面全景（北西から）



2 石垣全景（北東から）



1 断割り1 (北西から)



2 断割り1南面石垣 (北から)



3 断割り1北面石垣 (南から)



4 断割り3全景 (南西から)



5 断割り2全景 (南東から)



6 瓦組遺構 (南から)



7 瓦組遺構 (南東から)



1 木樋1 (南から)



2 石組枡全景 (東から)



3 石組枡東側埋土 (南から)



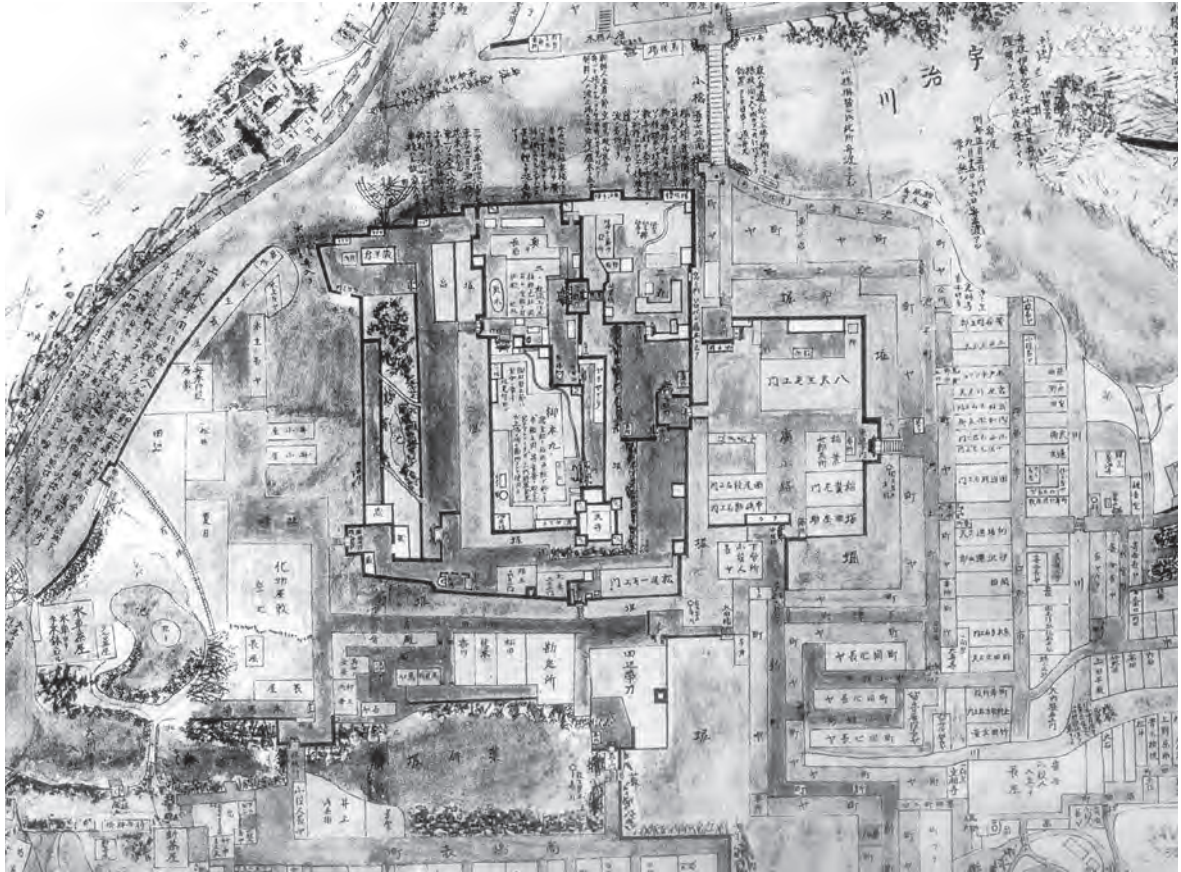
4 石組枡と造成土 (南から)



5 石組枡中央支え石 (東から)



6 石組枡西側完掘 (南西から)



1 『山州淀御城府内之圖』



2 『山州淀御城府内之圖』 発掘調査付近



1 5区全景（南東から）



1 5区遠景（北東から）



2 石組み溝2（南西から）



1 横穴式石室（北から）



2 羨道西側壁（東から）



1 横穴式石室出土須恵器（出土状況・北から）

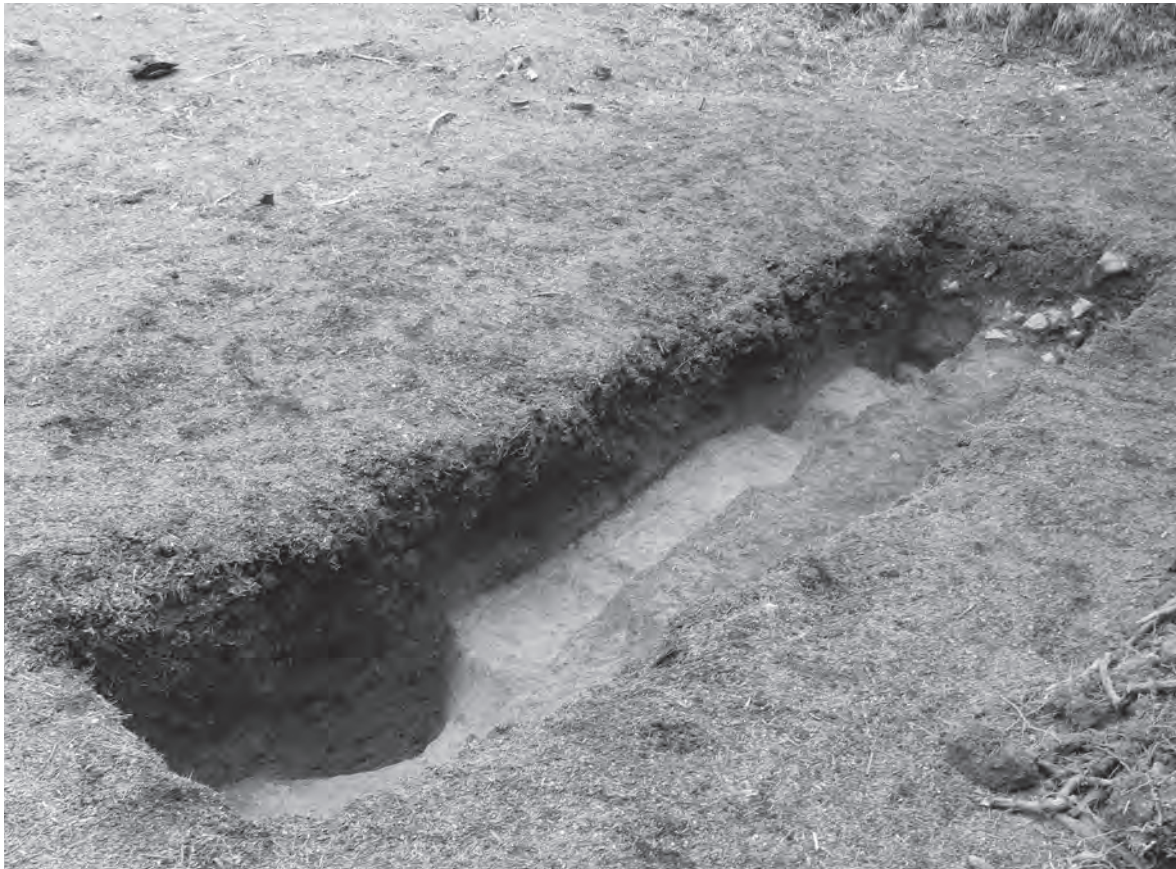


2 横穴式石室出土須恵器（配置復元・北から）

図版42 芝古墳 遺構



1 横穴式石室羨道延長部の埴輪群（南西から）



2 6区全景（南西から）

京都市内遺跡発掘調査報告

平成27年度

発行日 2016年3月31日
発行 京都市文化市民局
編集 京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課
住所 京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町394番地
Y・J・Kビル2階
TEL:(075)-366-1498
印刷 株式会社 昭英社
TEL:(075)-351-1811